

大阪市住吉区

山之内遺跡発掘調査報告

Ⅱ

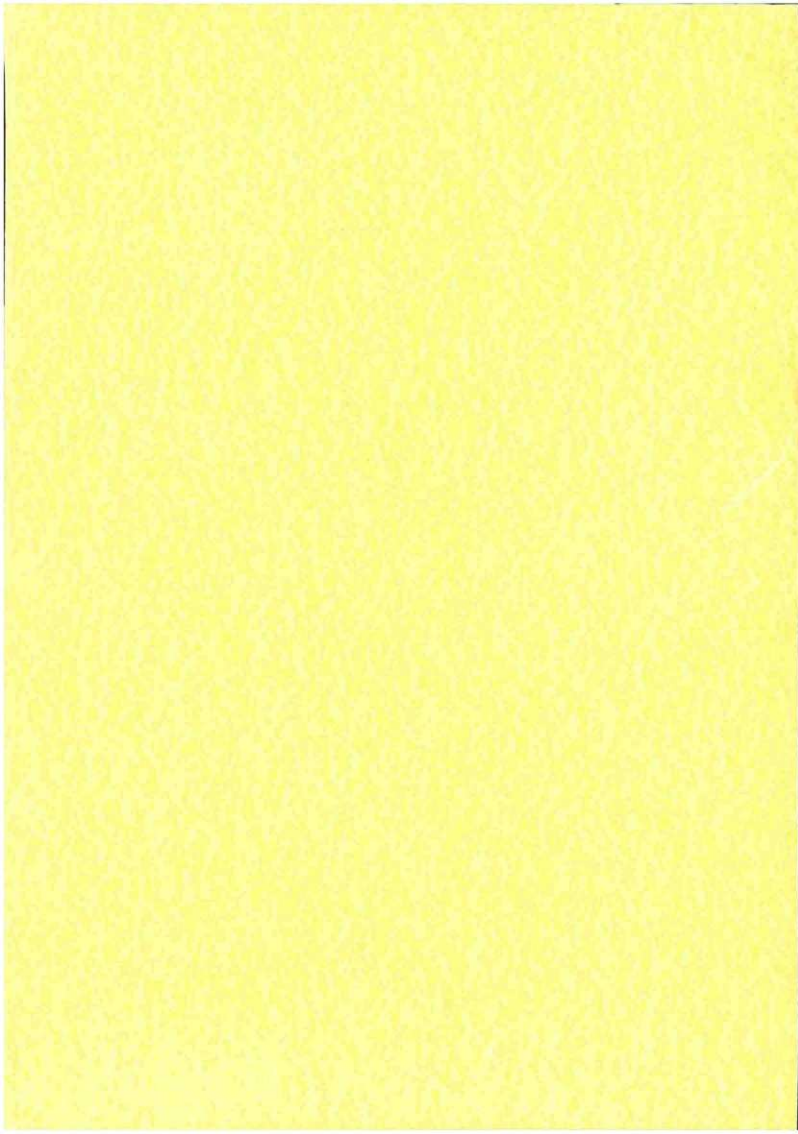
付篇 遠里小野遺跡

市営住宅建設工事に伴う発掘調査報告書

その2

1999.10

財団法人 大阪市文化財協会



大阪市住吉区

山之内遺跡発掘調査報告

Ⅱ

付篇 遠里小野遺跡

市営住宅建設工事に伴う発掘調査報告書

その2

1999.10

財団法人 大阪市文化財協会

『山之内遺跡発掘調査報告』Ⅱ 正誤表

頁	行	誤	正
目次i	第Ⅲ章第3節6)	その他の出土遺物	その他の <u>遺構</u> 出土遺物
目次i	第Ⅳ章第2節	古墳～奈良時代集落	古墳～奈良時代 <u>以降</u> の集落
2	7	掘割り状の溝	掘割り状の溝
16	図18	8:褐色含砂礫シルト(SK117埋土)	8:褐色含砂礫シルト
54	9	159は壺弁八葉蓮華文軒丸瓦	159は <u>單</u> 弁八葉蓮華文軒丸瓦
57	26	TK209型式の特徴をもつ。	TK209型式を下限とするものである。
91	図77	図中のSK14	SK15
101	1	飛鳥時代Ⅱ壺	飛鳥時代 <u>中葉</u> 壺
101	10	須恵器杯C蓋359	須恵器杯B蓋359
115	24	柱穴は	<u>掘形</u> は
119	1	SD14～20	SD14～21
122	図109	b-b'のSD18	SD19
123	図111	右下SD19	SD21
135	5	I型	I型
143	21	5棟	6棟





山之内遺跡方形周溝墓2出土土器

大阪市住吉区

山之内遺跡発掘調査報告

Ⅱ

付篇 遠里小野遺跡

市営住宅建設工事に伴う発掘調査報告書

その2

1999.10

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

住吉区山之内・遠里小野遺跡は、市内を南北に貫く上町台地の上にある。洪水の懸念がなく安定した居住地であるこの一帯は、大昔から人が住んできた場所である。

また、この付近は海が近く、埋め立てられる前は西に数百mも歩けば大阪湾の砂浜にでられた場所でもあった。

二つの遺跡を残した人々が、地の利を活かしていたことは想像に難くない。弥生時代から古代にかけて各種の漁業が盛んであった証が見つかっている。また、飛鳥時代には、古代の港との係わりが注目される宮殿と見紛うような壮大な建物が建てられた。両遺跡が早くから海と深く結びついて形成されたことを示している。

大阪市の今日の発展を語るうえで、大阪湾がもたらした豊かな恵みを欠かすことはできない。本書を上梓することで、その意義がより詳らかにされ、広く市民に周知されることを心から祈念する次第である。

最後に、発掘調査から本書の作成までご協力を頂いた大阪市都市整備局をはじめ、各関係機関に深謝の意を表する。

1999年10月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 佐 治 敬 三

例 言

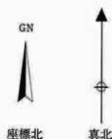
- 一、本書は大阪市住吉区に所在する山之内遺跡の発掘調査報告である。1988年度に行った市営山之内住宅建設(第5期)に伴う調査(YM88-36・37次)を報告する。また、付篇として1988-89年度に行った市営遠里小野住宅建設に伴う遠里小野遺跡発掘調査(OR88-11・89-16次)報告を収録する。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市都市整備局の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長永島輝臣(現調査部長)の指揮のもと、各担当調査員が行った。山之内遺跡はYM88-36次調査を調査課京嶋寛(現調査課長)、同37次調査を同課伊藤純(現大阪市教育委員会文化財保護課)・金村浩一(現財団法人東大阪市文化財協会)が、遠里小野遺跡はOR88-11次調査を同課積山洋(現調査課長代理)・清水和明が、同89-16次調査を清水が行った。
- 一、本書の編集は、報告書作成室長代行田中清美の指揮のもと、同作成室清水・平田洋司が行った。執筆は、主として山之内遺跡を平田が、遠里小野遺跡を清水が担当した。なお、遠里小野遺跡の井戸から出土した銅板に対する年輪年代測定を奈良国立文化財研究所光谷拓実氏に依頼してその結果を寄稿していただいた(第Ⅲ章第6節)。龍に関しては調査課伊藤幸司・佐賀和美が取上げ作業を行い、奈良国立文化財研究所澤田正昭・肥塚隆保氏のご指導のもと、伊藤が保存処理作業を行った。種子に関しては大阪文化財センター(現大阪府文化財調査研究センター)山口誠治氏にご教示をいただいた。巻末の英文要旨はRobert Condon氏が作成し、調査課宮本康治がこれを助けた。
- 一、遺構写真は担当調査員が撮影し、遺物写真の撮影は内田真紀子氏に委託した。
- 一、基準点測量および航空写真測量は、山之内遺跡についてはアジア航測株式会社、遠里小野遺跡については株式会社関西航測(現株式会社かんこう)に委託した。
- 一、遠里小野遺跡の上記井戸から出土した銅板は、財団法人元興寺文化財研究所に保存処理を委託した。
- 一、本書の編集に当っては、調査終了後に納品された遺構平面図(マイラーフィルム)をラスタースキャン変換し、デジタルデータ化する作業を株式会社かんこうに委託した。本書に掲載された遺構平面図は、すべてこのデジタルデータを利用している。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 遺構名の表記は、掘立柱建物(SB)、横列(SA)、井戸(SE)、溝(SD)、土壇(SK)、柱穴(SP)の分類記号の後に、山之内・遠里小野遺跡でそれぞれ固有の番号を付している。方形周溝墓には分類記号を与えず、それを明記した。山之内遺跡では、弥生時代に200番台を、古墳時代以降に300番台を付した。遠里小野遺跡ではすべてに通し番号を付した。

また、遺物番号は1～200番台を山之内遺跡に、301～400番台を遠里小野遺跡に付した。

2. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では「TP±〇m」と記した。挿図中の方位は、座標北・真北を下図のように区別して用いた。
3. 石器遺物に関しては、本書での通し番号のほかに、当協会で石器遺物を個別管理するための登録番号を別に付した。用語は[大阪市文化財協会1997]に従った。
4. 本書で頻繁に用いた土器編年や器種分類は次の文献に拠った。本文中では煩雑を避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することは割愛した。弥生土器：[佐原眞1968]、古墳時代の須恵器(TK209型式まで)：[田辺昭三1966]、飛鳥～平安時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976・1978]・[古代の土器研究会編1992～1994]



本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	2

第Ⅱ章 山之内遺跡の概要とこれまでの調査

第1節 山之内遺跡の概要	3
第2節 市営住宅におけるこれまでの調査	5

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 層序	7
第2節 弥生時代の遺構と遺物	8
1) 竪穴住居	8
2) 方形周溝墓	10
3) 土壌	18
4) その他の出土遺物	24
5) 小結	27
第3節 古墳時代以降の遺構と遺物	29
1) 竪穴住居	29
2) 掘立柱建物	32
3) 溝	49
4) 溝	52
5) 土壌	58
6) その他の出土遺物	65
7) 古墳～奈良時代の建物群について	66
i) 建物群の時期推定	66
ii) 建物群の構成	69
8) 小結	70

第Ⅳ章 調査成果のまとめ

第1節 山之内遺跡の弥生時代集落	71
第2節 山之内遺跡の古墳～奈良時代集落	74

付 篇 遠里小野遺跡発掘調査報告

第Ⅰ章 調査の経緯と経過	79
--------------	----

第Ⅱ章 遺跡の立地と既往の調査

第1節 遺跡の立地	81
第2節 既往の調査	83

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 調査地の層序	85
第2節 旧石器～弥生時代の調査	86
1) 旧石器時代	86
2) 縄文時代	89
3) 弥生時代	89
第3節 古墳～奈良時代の調査	91
1) 古墳時代	91
2) 古墳時代後期末葉～奈良時代	92
i) I期の遺構と遺物	92
ii) II期の遺構と遺物	101
iii) III期の遺構と遺物	108
iv) 時期不詳の遺構	125
第4節 平安時代の調査	128
第5節 土鍾と蛸壺	131
1) 土鍾	132
2) 蛸壺	137
3) まとめ	137
第6節 井戸欄材の年輪年代測定	138
1) 試料と方法	138
2) 結果	138

第Ⅳ章 遠里小野遺跡の検討

第1節 古代以前の遺構と遺物	139
1) 旧石器～弥生時代	139
2) 古墳時代	140
第2節 古代の建物群の変遷と性格	141
1) 建物群の変遷	141
2) SB02を中心とする施設の性格	144

引用・参考文献

あとがき・索引

英文目次・要旨

報告書抄録

原色図版目次

山之内遺跡の遺構・遠里小野遺跡の遺物
上：山之内遺跡方形周溝墓・竪穴住居
下：遠里小野遺跡土甕・飯蛸壺

図版目次

山之内遺跡

- 1 山之内遺跡の遺構(一)調査地透視
上：北より調査地を望む
下：東より調査地を望む
- 2 山之内遺跡の遺構(二)調査区全景
上：Ⅰ区全景
中：Ⅱ区全景
下：Ⅲ区全景
- 3 山之内遺跡の遺構(三)弥生時代の遺構
上：Ⅳ区方形周溝墓1・2
中：Ⅲ区方形周溝墓3・4
下：Ⅳ区方形周溝墓2埋葬施設2
- 4 山之内遺跡の遺構(四)弥生時代の遺構
上：Ⅳ区方形周溝墓2遺物出土状況(1)
下：Ⅳ区方形周溝墓2遺物出土状況(2)
- 5 山之内遺跡の遺構(五)弥生時代の遺構
上：Ⅳ区方形周溝墓2遺物出土状況(3)
中：Ⅳ区方形周溝墓2遺物出土状況(4)
下：Ⅲ区方形周溝墓3遺物出土状況
- 6 山之内遺跡の遺構(六)弥生時代の遺構
上：Ⅰ区SK103
中：Ⅰ区SK104
下：Ⅱ区SK111
- 7 山之内遺跡の遺構(七)古墳時代以降の遺構
上：Ⅳ区SB201・202
中：Ⅳ区SB201竪穴周
下：Ⅳ区SB201竪穴中に転用された土器

遠里小野遺跡

- 21 遠里小野遺跡の遺構(一)調査地・調査区全景
上：調査地から大阪湾を望む
中：Ⅰ区遺構検出状況
下：Ⅲ区完掘状況
- 22 遠里小野遺跡の遺構(二)調査区全景・Ⅰ期の遺構
上：Ⅳ区北部完掘状況
中：Ⅳ区南部完掘状況
下：Ⅰ区SB10完掘状況
- 23 遠里小野遺跡の遺構(三)Ⅰ期の遺構
上：Ⅰ区南東部完掘状況
中：Ⅰ区中央部完掘状況
下：Ⅰ区SK05土器出土状況
- 24 遠里小野遺跡の遺構(四)Ⅱ期の遺構
上：Ⅰ区SB02検出状況
中：SB02柱穴断面
下：Ⅰ区SB01完掘状況
- 25 遠里小野遺跡の遺構(五)Ⅲ期の遺構
上：Ⅰ区SA03完掘状況
中：Ⅲ区SP07とその周辺
下：Ⅰ区SD05土器出土状況

- 8 山之内遺跡の遺構(八)古墳時代以降の遺構
上：Ⅰ区SB209
中：Ⅱ区SB210
下：Ⅱ区SB213
- 9 山之内遺跡の遺構(九)古墳時代以降の遺構
上：Ⅱ区SB214
中：Ⅱ区SB215
下：Ⅱ区SB218
- 10 山之内遺跡の遺構(一〇)古墳時代以降の遺構
上：Ⅱ区SB222
中：Ⅱ区SB223
下：Ⅱ区SB224
- 11 山之内遺跡の遺構(一一)古墳時代以降の遺構
上：Ⅲ区SB230
中：Ⅲ区SB232
下：Ⅲ区SB233～235
- 12 山之内遺跡の遺構(一二)古墳時代以降の遺構
上：Ⅱ区SA202と周辺の遺構
下：Ⅱ区SA206
- 13 山之内遺跡の遺構(一三)古墳時代以降の遺構
上：Ⅱ区SK214
下：Ⅱ区SK216
- 14 山之内遺跡の遺物(一)
- 15 山之内遺跡の遺物(二)
- 16 山之内遺跡の遺物(三)
- 17 山之内遺跡の遺物(四)
- 18 山之内遺跡の遺物(五)
- 19 山之内遺跡の遺物(六)
- 20 山之内遺跡の遺物(七)
- 26 遠里小野遺跡の遺構(六)Ⅲ期の遺構
上：Ⅰ区SB20周辺検出状況
中：Ⅳ区SB26・27周辺完掘状況
下：Ⅲ区SE02上部断面
- 27 遠里小野遺跡の遺構(七)Ⅲ期の遺構
上：SE02水溜み・龍検出状況
中：SE02基底の板の結合状況
下：SE02基底の銅板を巻く縄出土状況
- 28 遠里小野遺跡の遺構(八)Ⅲ期の遺構
上：SE02龍取上げ状況
中：Ⅳ区SB22・23・SD12完掘状況
下：Ⅰ区SK09完掘状況
- 29 遠里小野遺跡の遺構(九)Ⅰ～Ⅲ期・平安時代の遺構
上：Ⅳ区SB28完掘状況
中：Ⅰ区SE01断面
下：Ⅱ区SD23完掘状況
- 30 遠里小野遺跡の遺物(一)
- 31 遠里小野遺跡の遺物(二)
- 32 遠里小野遺跡の遺物(三)
- 33 遠里小野遺跡の遺物(四)
- 34 遠里小野遺跡の遺物(五)

挿 図 目 次

山之内遺跡

図1	山之内遺跡の位置	1
図2	調査地位置図	1
図3	山之内遺跡におけるこれまでの調査	3
図4	市営住宅敷地内における弥生～奈良時代の遺構	6
図5	断面模式図	7
図6	SB101実測図	8
図7	SB102実測図	8
図8	I・II区弥生時代の遺構分布図	9
図9	Ⅲ・Ⅳ区弥生時代の遺構分布図	10
図10	SB103実測図	10
図11	SB103出土土器	10
図12	方形周溝墓1実測図	11
図13	方形周溝墓1出土石鏃	12
図14	方形周溝墓2埋葬施設実測図	12
図15	方形周溝墓2実測図	13
図16	方形周溝墓2出土土器	14
図17	方形周溝墓2出土土器・石器	15
図18	方形周溝墓3・4実測図	16
図19	方形周溝墓3出土土器	17
図20	I区弥生時代の土壌出土土器	19
図21	II区弥生時代の土壌出土土器	20
図22	Ⅲ・Ⅳ区弥生時代の土壌出土土器	22
図23	弥生時代の石器(1)	25
図24	弥生時代の石器(2)	26
図25	SB201・202実測図	29
図26	I・II区古墳時代以降の遺構分布図	30
図27	SB201・202出土土器・石器	31
図28	Ⅲ・Ⅳ区古墳時代以降の遺構分布図	31
図29	SB203・204実測図	32
図30	SB205実測図	33
図31	SB206実測図	34
図32	SB207実測図	34
図33	SB208・209実測図	35
図34	SB210・211実測図	36

遠里小野遺跡

図69	遠里小野遺跡位置図	79
図70	調査区位置図	79
図71	遠里小野遺跡周辺の地形と古代の想定海岸線図	81
図72	既往の調査位置図	83
図73	I区南西部の地層断面模式図	85
図74	旧石器～弥生時代の石器	87
図75	全調査区の遺構配置図	90

図35	SB212～214実測図	37
図36	SB215実測図	38
図37	SB216実測図	39
図38	SB217・218実測図	39
図39	SB219・220実測図	40
図40	I・II区掘立柱建物出土土器	40
図41	SB221実測図	41
図42	SB222～225実測図	42
図43	SB226実測図	43
図44	SB227～229実測図	44
図45	SB230実測図	45
図46	Ⅲ・Ⅳ区掘立柱建物出土土器	45
図47	SB231・232実測図	46
図48	SB233～236実測図	47
図49	SB237～240実測図	48
図50	SB241実測図	49
図51	SA201実測図	50
図52	横出土土器	50
図53	SA202～206実測図	51
図54	溝出土土器・瓦(1)	53
図55	SA202と溝群の関係	55
図56	溝出土土器・瓦(2)	56
図57	SD221出土土器	58
図58	古墳時代以降の土壌出土土器	59
図59	SK211出土土器	60
図60	SK214実測図	61
図61	SK214出土土器	62
図62	SK216実測図	63
図63	SK216出土土器	64
図64	その他の出土土器	65
図65	建物群の方位	66
図66	建物群の変遷	68
図67	弥生時代の遺構分布図	72
図68	古墳～奈良時代の遺構分布図	75

図76	古墳時代の出土土物	91
図77	SK15実測図	91
図78	I区全体図	93
図79	Ⅳ区全体図	94
図80	I期の掘立柱建物実測図(1)	95
図81	I期の掘立柱建物実測図(2)	96
図82	I期の掘立柱建物出土土器	96
図83	I期の溝実測図(1)	98

図84	I期の溝実測図(2)	99
図85	I期の溝・土壇出土土器	99
図86	I期の溝実測図(3)	100
図87	I期の柱穴・包含層出土遺物	100
図88	II期の遺構平面図	102
図89	SB02柱列断面図	103
図90	II期の掘立柱建物実測図	103
図91	SB01・SA03出土土器	104
図92	SP01・07断面図・SA01・02実測図	104
図93	SA03・04実測図	106
図94	SD05・包含層出土土器	106
図95	II期の敷地推定復元図	107
図96	III期の掘立柱建物実測図(1)	109
図97	III期の掘立柱建物実測図(2)	110
図98	III期の掘立柱建物実測図(3)	111
図99	III期の掘立柱建物出土土器	112
図100	III期の掘立柱建物実測図(4)	113
図101	III期の掘立柱建物実測図(5)	114
図102	SE02実測図	116
図103	SE02側板	117
図104	SE02出土土器	118

図105	龍の形状と口縁部の作り方模式図	118
図106	龍の編み方模式図	119
図107	III期の溝実測図	120
図108	III期の溝平面図	121
図109	III期の溝断面図	122
図110	III期の溝出土土器	122
図111	I・III期の土壇実測図	123
図112	III期の土壇・包含層出土土器	124
図113	時期不詳の掘立柱建物実測図(1)	126
図114	時期不詳の掘立柱建物実測図(2)	127
図115	SB21・SE01実測図	128
図116	平安時代の遺構出土遺物	128
図117	SD22実測図	129
図118	SD23実測図	129
図119	土鍾・飯蛸壺	131
図120	I型土鍾の形態別法量統計と重量比較	135
図121	側板4点の年輪パターングラフ(平均化されたもの) と暦年標準パターングラフ	138
図122	I・II期の遺構配置図	142
図123	掘立柱建物の棟方位	142
図124	III期の遺構配置図	143

表 目 次

山之内遺跡

表1	山之内市営住宅における調査のおもな遺構・遺物 一覧表	5
----	-------------------------------	---

表2	掘立柱建物一覧表	33
表3	山之内遺跡の掘立柱建物一覧	76

遠里小野遺跡

表4	既往の調査一覧表	84
表5	石器遺物一覧表	88
表6	I期の掘立柱建物一覧表	92
表7	II期の掘立柱建物・備一覧表	101
表8	III期の掘立柱建物一覧表	108

表9	時期不詳の掘立柱建物一覧表	126
表10	土鍾一覧表(1)	132
表11	土鍾一覧表(2)	133
表12	飯蛸壺一覧表	136

写 真 目 次

山之内遺跡

写真1	調査風景	2
-----	------	---

写真2	現地説明会風景	2
-----	---------	---

遠里小野遺跡

写真3	現地説明会風景	80
写真4	側板を巻いた縄	117

写真5	各種の土鍾	134
写真6	飯蛸壺と土鍾に再利用したもの	136

第Ⅰ章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査の経緯

住吉区山之内4丁目に所在する山之内市営住宅はかつては低層の建物であった。築後約30年が経過し、老朽化が進んだため、大阪市建築局(現大阪市都市整備局)によって鉄筋高層住宅へと順次、建替えられることになった。第1期工事においては埋蔵文化財の発掘調査は実施されなかったものの、建築局と大阪市教育委員会による協議によって、1981年からの第2期工事以降は建替工事に先立って発掘調査を行う運びとなった。その結果、縄文時代から江戸時代にわたる各時期の遺構・遺物を検出することができた。これら第2～4期工事に伴う発掘調査の成果についてはすでに報告済みである[大阪市文化財協会1998]。

今回報告の対象とするのは住宅の最北部である。第5期工事に先立つもので、市営住宅建替事業の最後にあたると。試掘調査を行った結果、良好に遺構・遺物が認められたことにより、1988年度に予定地全域において調査を実施することとなった。

調査地は道路を挟んで大きく東西2街区に分かれていることから東側の街区をYM88-36次調査、西側の街区をYM88-37次調査として調査を実施した。また、それぞれの調査地はさらに2分されたことから今回の報告では記述の都合上、YM88-37次調査の北部をⅠ区、南部をⅡ区、YM88-36次調査の西部をⅢ区、東部をⅣ区と呼称する。

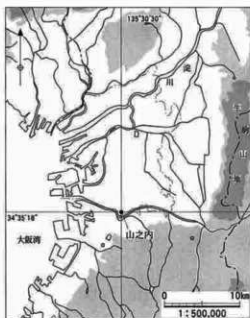


図1 山之内遺跡の位置

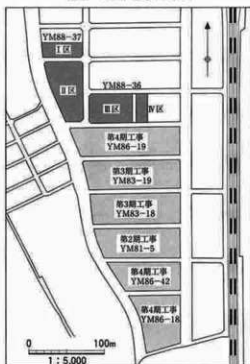


図2 調査位置図

第2節 調査の経過

現地における調査は両調査地ともに1988年12月26日から翌1989年5月12日まで行った。調査の対象とした面積はYM88-36次調査(Ⅲ・Ⅳ区)が約2,000㎡、YM88-37次調査(Ⅰ・Ⅱ区)が約3,200㎡の計5,200㎡である。まず、年内に周辺の整備や機材の搬入などの調査の準備を行い、翌年1月より重機による掘削を開始した。重機による掘削は表土層および近世以降に相当する地層のみとしたが、古代の遺物を含む包含層はおもにⅠ・Ⅱ区西部にしか遺存しておらず、結果的に多くの地域において地山層上面まで行うことになった。また、Ⅲ区南部からⅣ区南部にかけては江戸時代以降に推定される大規模な掘削り状の溝によって遺構面が失われていたため、実質的な調査面積はやや狭まることになった。

その後の掘削はすべて人力により、途中、写真撮影・実測作業を適宜行いながら調査を進めた。実測にあたっては航空測量も併用した。また、調査地が広範囲に及ぶため、各調査区ともに国土座標第Ⅵ系に基づいた5m四方のグリッドを設定して、各グリッドごとに遺構に番号を付し、遺物の採集を行った。

調査が進むにつれて、いずれの調査区でも古墳～奈良時代の多数の掘立柱建物が発出され始めた。また、弥生～奈良時代の土壇や弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代の堅穴住居などさまざまな時期にわたる重要な遺構が調査地全域に分布していることがわかってきた。重要な遺構が確認された地点では、可能な範囲で拡張を行い、遺構の拡がりや性格の把握に努めた。また、これらの調査成果をいち早く市民に公開すべく、4月5日に各報道機関への発表を行い、4月9日に現地における説明会を実施したところ、多くの人びとの参加を得るところとなった。

現地説明会終了後は、掘立柱建物の柱穴の断割り作業、実測などの補完調査を行い、5月12日に器材の撤収なども含めた現地における調査を完了した。



写真1 調査風景



写真2 現地説明会風景

第Ⅱ章 山之内遺跡の概要とこれまでの調査

第1節 山之内遺跡の概要

山之内遺跡は大阪市の中央を南北に貫く上町台地の基部付近に位置している。南を旧狭間川、北を細江川が開析した谷地形によって挟まれており、標高はTP+11～12m前後である。遺跡の範囲は南北1.5km、東西1.3kmで、西は遠里小野遺跡と接している。

山之内遺跡で見つかっているもっとも古い遺物は、東地区で検出されたサヌカイト剥片で、平安神宮火山灰層より下位から出土した。後期旧石器時代の資料である。遺構は未検出である。また、遺跡の東部で行った調査では中期旧石器時代に位置づけられるナウマンゾウやオオツノシカなどの足跡が検出されており、今後、それらを狩猟の対象とした旧人類の痕跡が発見される可能性もある。

縄文時代の遺物としては、爪形文を施した土器など前期にさかのぼるものがある。また、石鏃を始めとする石器遺物も散見されている。晩期になると土器の出土は若干増加するものの、分布は希薄で

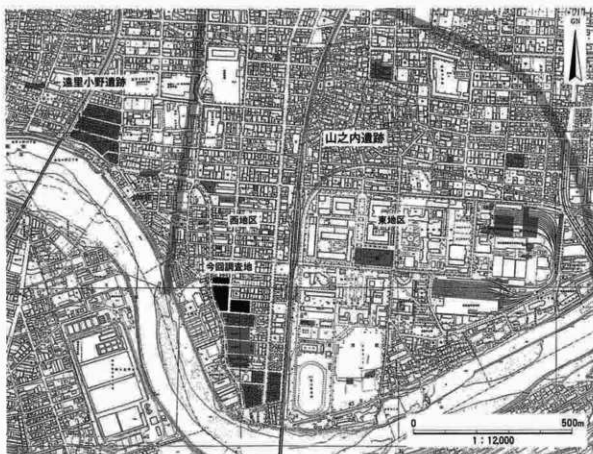


図3 山之内遺跡におけるこれまでの調査

ある。

山之内遺跡において遺構・遺物が集中して見られるのは弥生時代前期末葉からのことである。遺構は土壌が主体であるが、竪穴住居跡にも前期にさかのぼる可能性があるものが存在する。中期に入ると遺構・遺物が格段に増加して、遺跡南部を中心に住居跡や方形周溝墓が確認されている。また、方形周溝墓は現JR阪和線を挟んで2つの微高地にそれぞれ営まれている。中期後半に入ると遺構・遺物ともに減少しており、集落が衰退したようである。後期には遺構・遺物はごく少量しか見られないことから、この時期の集落は存在しないようである。また、土鍾や蛸壺の存在から、従来、漁業集落としての見解もあったが、石廬丁などの農具も出土しており、これまで水田は未検出であるが、水田耕作を行っていたことはまちがいない。

山之内遺跡で再び集落が営まれるようになるのは古墳時代中期以降になってからのことである。竪穴住居や掘立柱建物、土壌などの遺構が検出されている。古墳は確認されていないが、埴輪片が出土する地点もあり、すでに失われた古墳が遺跡内に存在する可能性がある。古墳時代後期以降は多数の掘立柱建物群が検出されている。また、注目すべきものとして鵜羽口や鉄滓など鍛冶関係の遺物やこれらを含む遺構も多い。飛鳥～奈良時代には掘立柱建物を中心とする遺構が広範囲に分布しており、西接する遠里小野遺跡の方面にも分布している。また、白鳳期と推定される瓦片がこれまで両遺跡で確認されている。近隣に同時期の寺院などが存在していたことをうかがわせる資料であり、『摂津名所図絵』などに見られる「榎津寺」と結びつける見解もある〔積山洋1982〕。

平安時代以降にも掘立柱建物や溝などが見つかっているが、遺構・遺物ともに減少している。室町時代以降には遺跡一帯は耕作地として利用されていたらしく、多くの地点で作土層や耕作に伴う小溝群などが確認されている。また、遺跡北部では14世紀以降、17世紀にいたるまでの鋤物関連の遺構・遺物が集中して認められ、鋤物師集団の存在を予測させるものがある。江戸時代、1704(宝永元)年の大和川の付け替え工事以降は、遺跡全域が可耕地となり、水田・畠地としてその多くが利用されている。

第2節 市営住宅におけるこれまでの調査

山之内遺跡の発見は1954年より始まる山之内市営住宅の造成による。この際の遺構面の削平によって多量の土器・石器類が採集されたのである[藤井直正1956]・[瀬川芳則1959]。

その後、市営住宅における本格的な調査は、この際建てられた住宅が再度建替えられる1981年を待たねばならなかった。山之内市営住宅における調査件数は今回報告する2件を含めるとこれまで8件を数える。件数としては少ないが、面積にすれば山之内遺跡における調査のおよそ半分を占めている。位置は、もっとも遺構・遺物が密に検出されている地区である遺跡の南西部に当り、山之内遺跡の調査成果の代表的なものを網羅しているといつてよいであろう。特に弥生時代の遺構については、西地区で検出されたもののほとんどが含まれている。以下、時期ごとに当地域におけるこれまでの調査成果を記すこととする。

旧石器時代の遺物としては遊離資料であるがナイフ形石器が1点見つかった。

縄文時代では同じく遊離資料であるが本遺跡で最古の土器である縄文時代前期の爪形文土器が出土している。また、晩期中葉にあたる滋賀里Ⅲa式の土器片のほか、石鏃などの石器遺物も確認されているが、遺構は未検出である。

遺構・遺物が多く検出されはじめるのは弥生時代に入ってからである。弥生時代の竪穴住居は44棟確認されている。前期後半から中期後半までのものがあり、分布は全域にわたっている。方形周溝墓

表1 山之内市営住宅における調査のおもな遺構・遺物一覧表([大阪市文化財協会1998]より作成)

次 数	81-5	83-18	83-19	86-18	86-19	86-42	88-36	88-37
旧石器 遺構			ナイフ形石器1					
縄文 遺構								
遺物 縄文土器			縄文土器・石鏃			石鏃	石鏃	石鏃
弥生 遺構	竪穴住居1・土壇7・ピット	竪穴住居2・土壇14・ピット	竪穴住居17・方形周溝墓1・土壇58・ピット	竪穴住居10・土壇41・ピット	竪穴住居11・土壇50・ピット	竪穴住居3・土壇2・土壇16	竪穴住居1・方形周溝墓4・土壇10	竪穴住居2・土壇20基以上
遺物	弥生土器・石器遺物	弥生土器・石器遺物	弥生土器・石器遺物	弥生土器・石器遺物	弥生土器・石器遺物	弥生土器・石器遺物	弥生土器・石器遺物	弥生土器・石器遺物
古墳 遺構	竪立柱建物13・溝1・溝5・土壇10・車馬状遺構2	竪立柱建物9・井戸2・溝6・土壇9	竪立柱建物4・溝2・土壇9	竪穴住居4・竪立柱建物13・溝1・土壇34	竪立柱建物1・土壇5	竪穴住居2・竪立柱建物10・溝1・溝10	竪穴住居2・竪立柱建物14・溝1・土壇	竪立柱建物26・溝6・溝20・土壇10
遺物	土師器・須恵器・製塩土器・埴輪・土鏃・結晶・魚骨	土師器・須恵器・製塩土器・埴輪・土師器・結晶・子持	土師器・須恵器・製塩土器・鉄滓	土師器・須恵器・製塩土器・埴輪・鉄滓		土師器・須恵器・製塩土器・土鏃・砥石・滑石製品	土師器・須恵器・製塩土器・埴輪・土鏃・結晶・砥石	土師器・須恵器・製塩土器・埴輪・土鏃・結晶・瓦
飛鳥 遺構		勾玉・玉佩・輪郭口・鉄滓・鉄製刀子・瓦						
遺物			土壇1		溝1			
奈良 遺構					土師器・須恵器			土師器・黒色土器・瓦器
平安 遺構		土壇1・溝2					土師器・黒色土器・瓦器	
遺物		土師器・瓦器						
鎌倉 遺構								
遺物								
室町 遺構								
遺物								
江戸 遺構					掘削状遺構		掘削状遺構	
遺物					陶磁器・瓦		陶磁器・瓦	

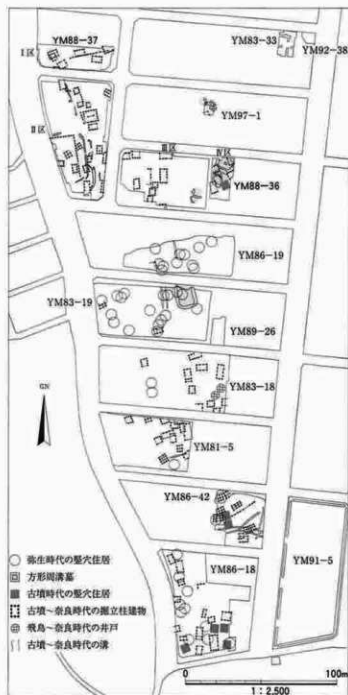


図4 市営住宅敷地内における弥生～奈良時代の遺構

はYM83-19次調査で中期中葉に属するものが1基検出されている。墳丘部での規模が9.7m×14.2mと山之内遺跡で最大規模のものであるとともに、集落域に位置し、単独で存在していることから注目される資料である。

古墳時代の遺構は土壌のほか、竪穴住居が南部を中心に6棟検出されている。5世紀後葉～6世紀末葉にかけての竪穴住居であり、造付けの竈をもつ例が多い。

古墳～飛鳥時代に属すると考えられる掘立柱建物は57棟以上が確認されている。時期が特定できる例は少ないが、なかには奈良時代に降る可能性が高い建物も含まれている。また、古墳～飛鳥時代のものでして鍛冶活動に係わる遺構・遺物をはじめ、製塩土器などが多くの地点で見つかっている。

今回報告する調査地は市営住宅の北端に位置することから、遺跡南部の調査成果と遺跡中・北部における調査成果とを関連づけるうえで重要な地点である。おもな成果としては、縄文時代に属する石器遺物、弥生時代前期末葉～中期初頭を中心として中期後半にかけての竪穴住居・土壌などの集落遺構、弥生時代中期中～後葉の方形周溝墓4基、古墳時代後

期前葉の竪穴住居2棟、古墳時代中期末葉～奈良時代にかけての掘立柱建物約40棟や、それらに伴う溝・溝・土壌など多量の遺構・遺物がある。

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 層序

調査地における現地表面はTP+10.7m前後とほぼ平坦である。層序は以下のとおりである。

第1層：表土層および近現代に相当する地層である。層厚10～30cmを測る。

第2層：灰黄褐色含礫中～粗粒砂層で、重機によって掘削を行ったため正確な時期は不明であるが、近世以降の地層と思われる。層厚15cm以下で部分的に遺存するにすぎないが、Ⅲ・Ⅳ区の南部に位置する江戸時代以降の掘削り状の大溝の埋土として層厚3m以上ある。大溝の埋土は下部が水成層で上部は人為的な埋戻し層である。途中には作土層と推定される層厚も認められる。

第3層：弥生土器のほか古墳～奈良時代の土師器・須恵器などを多く含む包含層である。調査地東部のⅢ・Ⅳ区では部分的に遺存するのみであるが、西部に当るⅠ・Ⅱ区ではもっとも厚いところで層厚40cm遺存していた。本層は黒褐色細粒砂～シルトを主体とする上層の第3a層と黒褐色粘土を主体とする下層の第3b層の2層に細分できるが、掘削は一括して行ったため、両層に含まれる遺物の差は明らかでない。本文中では両者を合わせて包含層と記述する。

第4層：黄～黄褐色の粘土および砂礫からなる地山層である。その上面はⅡ区南東部からⅢ区西半ではTP+10.5mと高く、Ⅱ区西部およびⅣ区ではTP+10.0mと東から西へ向うほど下がっている。また、Ⅰ区の北東部もTP+10.5mと高くなっている。

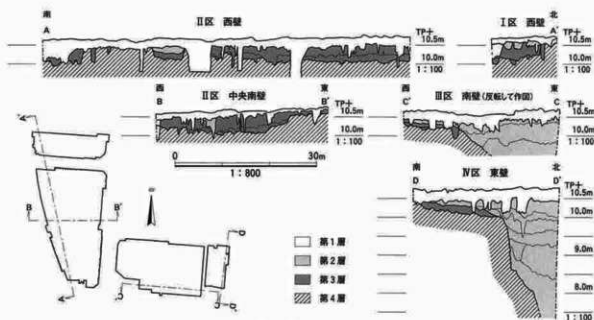


図5 層序模式図

第2節 弥生時代の遺構と遺物

調査地全域において弥生時代前期末葉から中期後葉の遺構を検出した。竪穴住居3棟、方形周溝墓4基、および多数の土壌がある。遺構検出面は古墳時代以降の遺構と同じく地山上面で、埋土には顕著な差がない。時期の区分は出土遺物によったが、出土遺物の少ない遺構は古墳時代以降の遺構である可能性も否定できない。

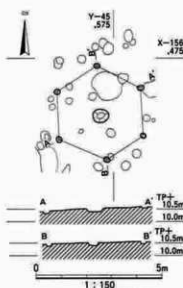


図6 SB101実測図

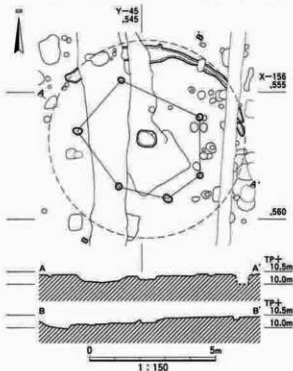


図7 SB102実測図

1) 竪穴住居

I～III区でそれぞれ1棟、計3棟を確認した。

SB101(図6) I区西部に位置する竪穴住居である。中央穴を中心として6本の柱を配する。床面が遺存していないため規模は不明であるが、中央穴を挟んだ柱穴間の距離は3.8～3.9mである。中央穴は最大長0.60m、深さ0.22mの楕円形で、埋土には炭が多く含まれていた。柱穴は直径0.2～0.3mの円形で、深さは約0.1mある。1.8～2.0mの距離で配置されるが、南西部に当る部分のみは2.2mとやや広がっている。

中央穴より同一個体と考えられる弥生土器の壺または甕の体部片が数点出土したが、磨滅が著しく時期は明らかでない。器壁が厚く砂粒を多く含むことから畿内第I様式にさかのぼる可能性がある。

SB102(図7) II区南部に位置する竪穴住居である。中央穴を中心にして6本の柱を配する。北半には幅0.3m、深さ0.1mの周壁溝が遺存していたことから、直径約7.6mの竪穴住居に復元される。柱穴は直径0.3～0.4mの円形で、1.6～3.4mおきに配置されている。北西部では柱間の距離が長く、不揃いであるため、すでに失われた柱穴がある可能性がある。中央穴は長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形で、深さは0.2mある。埋土には炭を多く含む。遺物は弥生土器の細片があるのみで時期は不明である。また、周壁溝には須恵器片が含まれていたが、混入と考えられる。

SB103(図10・11) III区南部に位置する。中央穴を中心にして10本の柱を配したと推定される。柱穴のうち東側の2つは攪乱で失われている。床面は

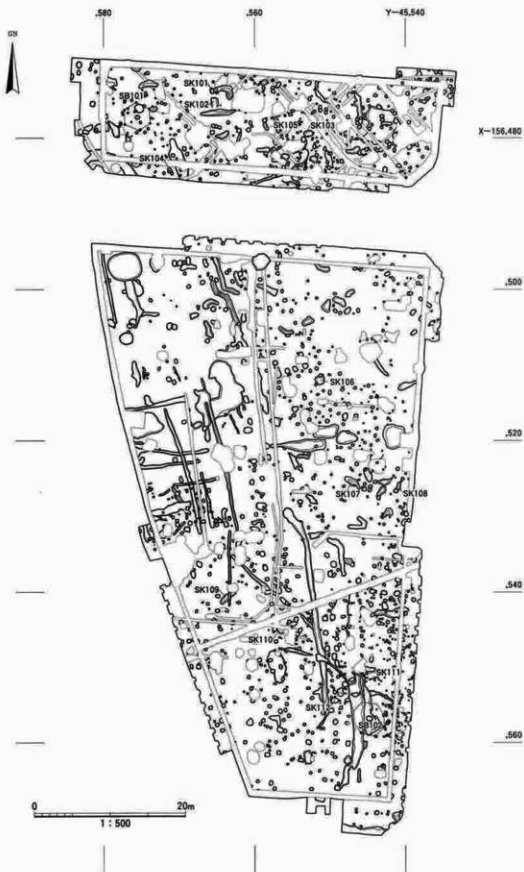


図8 I・II区弥生時代の遺構分布図

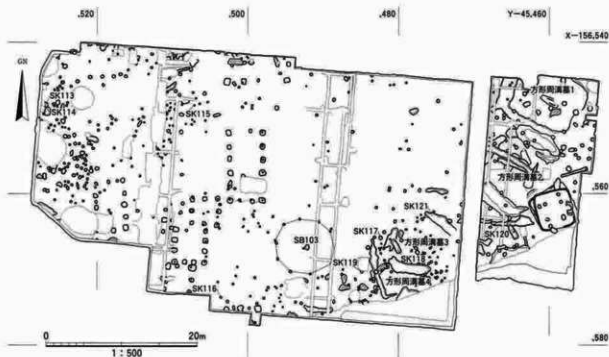


図9 III・IV区弥生時代の遺構分布図

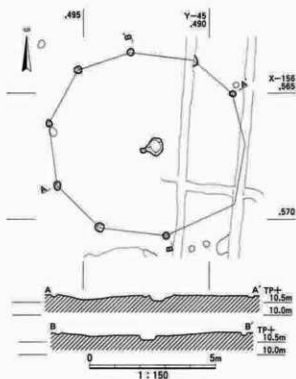


図10 SB103実測図

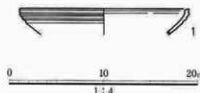


図11 SB103出土土器

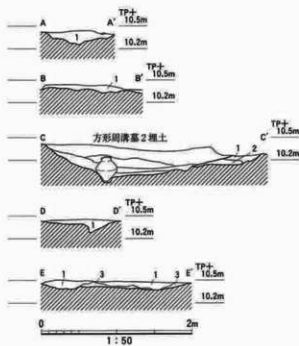
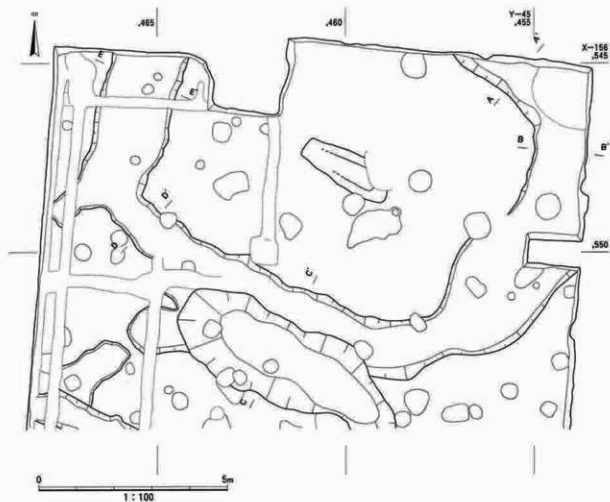
遺存していないため正確な規模は不明であるが、中央穴を挟む柱穴間の距離が7.5～8.0mであることから大型の住居に復元できる。中央穴は最大長0.8mで深さは0.15mである。埋土は2層にわかれ、上層には炭を多く含む。柱穴は深さ0.05mほどで、2.2～2.7mの距離で配置されている。

遺物は中央穴および柱穴より出土した。いずれも弥生土器の細片であるが、中央穴より出土した1は鉢あるいは高杯の口縁部と考えられる。口縁部は上方に屈曲し、端部は肥厚して内傾する面をもつ。口縁部直下には2条の凹線文が巡る。畿内第IV様式に属するものであろう。

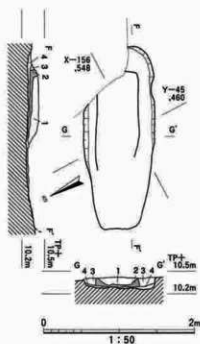
調査区内には弥生土器のみを出土した柱穴がほかにもあり、なかには堅穴住居あるいは掘立柱建物に伴うものもあると考えられるが、遺存状況が悪く、3棟を推定するにとどめたい。

2) 方形周溝墓

Ⅲ区東部～Ⅳ区で4基を検出した。いずれも大きく削平を受けており、墳丘の盛土は失われているため、実際の規模は記述



- 1: 暗褐色含砂礫シルト
 2: 黒褐色含砂礫シルト
 3: 暗褐色含砂礫シルト(上層より砂礫多い)



- 1: 暗褐色含砂礫シルト
 2: 黒褐色含砂礫シルト(炭化物含む)
 3: 黒褐色含砂礫シルト
 4: 暗赤褐色含砂礫粘土

図12 方形周溝墓1実測図

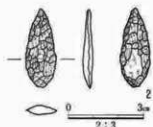


図13 方形周溝墓1出土石鉄

したものよりも墳丘部分で小さくなる。

方形周溝墓1(図12・13、図版3) IV区北東部に位置し、北端部分は調査区外に当る。墳丘は長辺で8.0~9.5m、短辺で7.0mを測る。周溝の規模は場所によって異なるが、幅1.0~2.0mで、深さは0.2m前後である。

南側の周溝は方形周溝墓2によって切られている。周溝からの出土遺物は少なくいずれも細片であり、墓に伴うものかどうか不明である。時期のわかるものおよび図化可能なものは出土していない。

墳丘の中心では長軸に平行して1基の埋葬施設が確認された。埋葬施設は削平を受けており、東側では深さ約0.15m、西側では数cmしか遺存していなかった。墓墳は長さ2.23m、幅は東側のもっとも残りのよい所で0.95m、西側で0.55mと東側の方が広い。また墓墳底のレベルも東側がやや高いことから頭位は東であった可能性がある。棺は遺存していなかったものの炭化物を多く含む層が観察されたことから木棺であったと思われる。また、痕跡が底面および側面ともに直線的であったことから組合せ式の木棺であった可能性が高い。棺の痕跡は長さ1.0m以上、幅は0.55mである。墓墳底を平坦に均したのちに据えられており、礫を多く含む土で周囲が埋められている。

棺内の土壌を洗浄したところサヌカイト製の石鉄2が補集された。埋葬施設に伴うものかどうかは不明である。2は凸基無茎式の石鉄で、重量は1.4gである。整った形状をしており、細部の調整もていねいである。

方形周溝墓2(図14~17、図版3~5・14・15) 方形周溝墓1に南接して位置する。北側の周溝は方形周溝墓1の南側の周溝を切っている。墳丘は長辺で7.5m、短辺で7.0mを測る。周溝は幅1.3~2.0mで、深さは0.2~0.5mである。周溝内からは比較的多くの土器が出土しており、特に北側の周溝に集中する。土器には完形に近いものが多く含まれていたことから、周溝内に据え置かれたもの

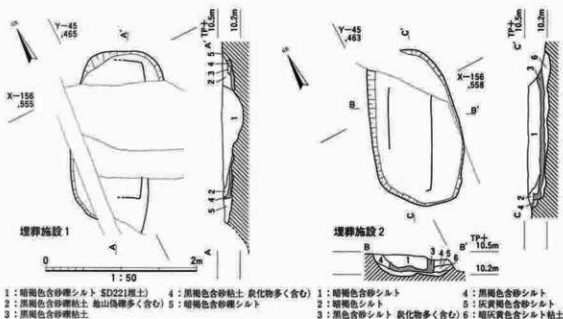


図14 方形周溝墓2埋葬施設実測図

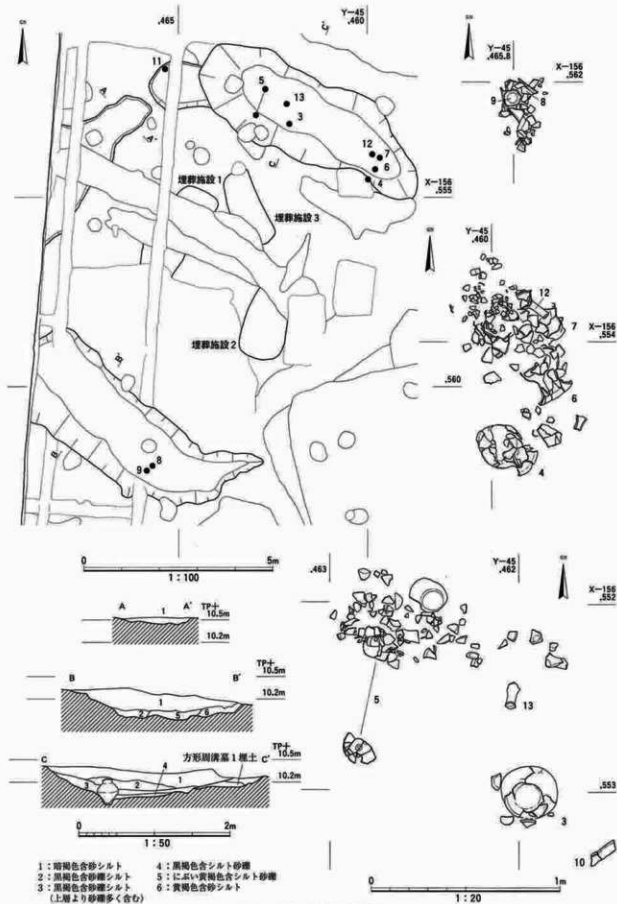


図15 方形周溝墓2実測図

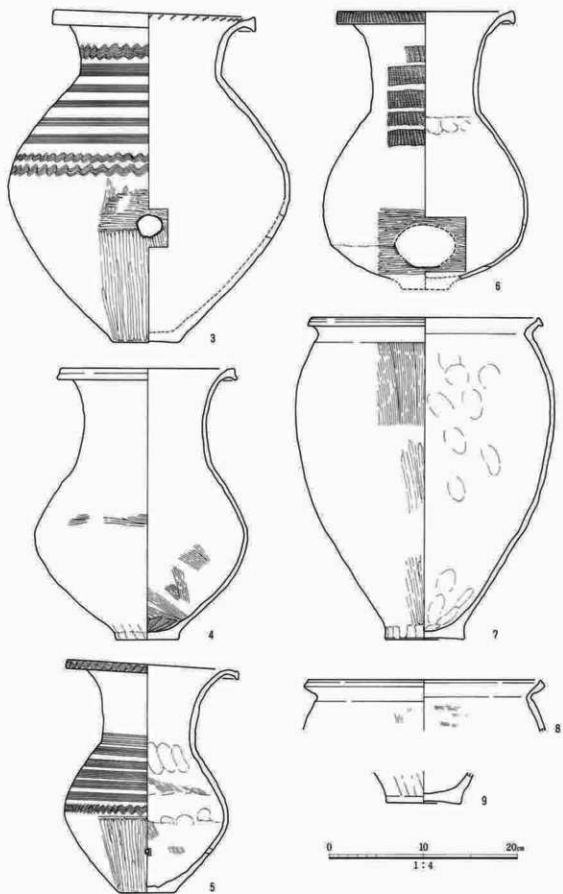


图16 方形周溝墓2出土土器

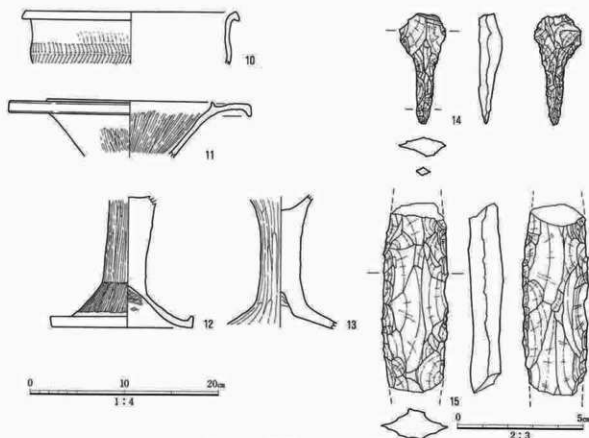


図17 方形周溝墓2出土土器・石器

もあったと思われる。3は周溝底を浅く掘り凹めた内部に正置した状態で出土した。周溝埋土は下層ほど砂礫を多く含む黒色シルトであるが、常時滞水していたか否かは確認できなかった。

墳丘では埋葬施設が3基確認された。埋葬施設1・2は墳丘中央に並列して、埋葬施設3は偏った位置にこれらとは異なる方位で存在する。埋葬施設1は中央部を古墳時代のSD221に、南西部を攪乱によってそれぞれ失われている。長さ2.30m、幅1.10mが遺存していた。深さはもっとも深い部分で0.17mである。棺は遺存していなかったが、炭化物を多く含む層が観察されたことから木棺であったと推測される。棺の痕跡は長さ1.83mで、幅は不明である。底にはレベル差はないが平面形がやや北の方が広いことから頭位は北向きであった可能性が高い。

埋葬施設2は埋葬施設1に並列するが、やや南によっている。墓壇の長さは2.05m、幅はもっとも広いところで1.2mである。深さは0.28mであった。棺は埋葬施設1と同じく木棺であった可能性が高い。棺の痕跡は長さ1.74m以上で、幅は0.60mである。頭位は不明である。

埋葬施設3は墓壇の長さ2.20m、幅0.85mである。深さは数cmしか遺存していないため、棺の構造や大きさなどは不明である。

なお、いずれの埋葬施設からも遺体や副葬品などは出土しなかった。

周溝より出土した遺物を記す。出土位置は北側の周溝に偏っており、甕8・9のみが南側の周溝から出土した。3～6は弥生土器である。3～5は体部の中程に最大径のある広口壺である。3の口縁端部は上下に拡張しており、口縁部内面には櫛状工具による列点文が認められる。頸部に1条、体部の中

程には2条の櫛描波状文、これらの間には5条の櫛描直線文が巡る。体部外面下半の調整はヘラミガキである。体部の中程からやや下がった位置に直径2.5cmの焼成後の穿孔がある。4の口縁端部は下方に拡張している。磨滅のため文様や器面の調整は不明であるが、体部の中程には部分的に横方向の粗いハケメが認められる。5は口縁端部を上下にわずかに拡張し、口縁部の端面には櫛描波状文を施している。体部の上半には6条の櫛描直線文、体部の中程には1条の櫛描波状文を施している。体部の外面の調整はヘラミガキで、体部の下半には直径0.5cmの小さな穿孔が焼成後になされている。壺6は体部が下膨れで、胎土は角閃石を多く含む生駒西麓産のものである。口縁端部は下方に拡張している。磨滅のため文様は明瞭ではないが、口縁部および頸部から体部の上半には櫛描波状文が施されている。体部の下半の調整はヘラミガキで、直径は不明であるが焼成後の穿孔がある。

7~9は甕である。7の口縁部は短く外方に屈曲しており、端部は上下に拡張している。体部の上半はハケ調整、下半はヘラミガキ調整を施している。内面の調整は磨滅のため不明である。8・9は出土

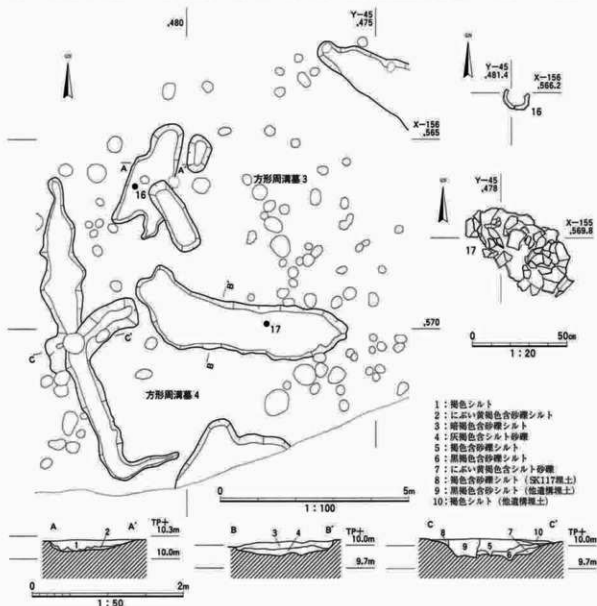


図18 方形周溝墓3・4 実面図

位置や胎土から同一個体と考えられる。8の口縁端部は肥厚し、わずかにつまみ上げられている。

10は鉢である。口縁端部は外方に肥厚している。磨滅のため調整は明瞭でないが、外面には櫛状工具による矢羽模様の刺突文が施されている。

11～13は高杯である。11は水平な口縁部をもつ杯部である。体部から口縁部への移行は比較的緩やかで、口縁端部はわずかに垂下している。杯部は内外面ともヘラミガキ調整である。12は脚部である。柱状部は中実の筒状で、脚端部は上方に拡張している。外面はヘラミガキ調整である。胎土は11に類似するが同一個体かどうかは不明である。13も柱状部であるが裾部内面の屈曲は11より大きい。

14はサヌカイト製の石錐で基部に自然面を残す。基部・錐部ともに比較的肉厚で、粗雑なつくりである。使用した痕跡は特に認められない。15はサヌカイト製の石槍で、刃部先端および基部を欠損する。全体に粗雑なつくりである。ほかに周溝からはサヌカイトの剥片が出土しているが墓に伴うものかどうかは明らかでない。

これらの出土遺物のうち土器類は畿内第Ⅲ様式でも新しい段階に位置づけられる。

方形周溝墓3(図18・19、図版3・5・15) 北側および東側の周溝は削平のため遺存していないが、一辺5.0～6.0mの方形周溝墓と思われる。周溝の幅は1.3～1.5mで深さは0.2mである。埋土は大きく2層にわかれ、下層は周溝掘削時の再堆積土と推定される地山に由来する偽礫を含む層、上層は炭を含んだ黒色のシルト層である。埋葬施設などは確認できなかった。

16は西側の周溝から出土した無頸壺で、胎土は生駒西麓産である。口縁部は短く外反し、直下には一対の穿孔がある。17は

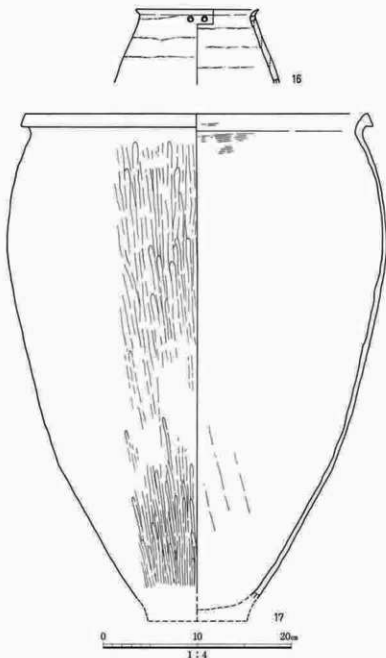


図19 方形周溝墓3出土土器

大型の甕で、南側の周溝より横倒しになった状態で出土した。胎土は生駒西麓産である。器高に比して口径や体部の張りはいずれも小さい。口縁部は短く屈曲しており、端部は上下に肥厚する。体部の外面には縦方向のヘラミガキが施されている。

これらの土器は畿内第Ⅳ様式に位置づけられる。なお、周溝からはほかにも広口壺・鉢・高杯などが出土しているが、図化したもの以外はいずれも細片である。また前期に属する破片があるなど時期も一定しないため、細片のものは周溝に伴っていた可能性は低い。

方形周溝墓4(図18、図版3) 方形周溝墓3の南西に位置する。周溝の東半分は遺存していないため、方形周溝墓3との先後関係は不明である。墳丘は南北3.5mで、周溝は幅0.6～0.8m、深さ0.25mである。埋土は方形周溝墓3と同様に大きく2層に分かれる。出土遺物は少ないが、弥生時代中期に推定される壺・甕などの細片が出土している。

3) 土壌

調査地全域において弥生時代前期末葉～中期後葉の土壌を検出した。ただし、遺物の出土量の少ないものは古墳時代以降の土壌である可能性もあるため、遺物が比較的多く出土した土壌についてのみ報告することにする。

SK101(図20・図版15) I区中央部のやや西よりで検出した土壌である。東部は古墳時代以降の土器片を含む土壌によって切られている。長軸長1.15m、短軸長0.73m、深さは0.50mである。炭化物を多く含む埋土の上層部より多数の弥生土器が出土した。

18～23は壺である。18の口縁部は緩く外反する。19は頸部から肩部の破片で、12条のヘラ描沈線文を施している。20は頸部片で11条のヘラ描沈線文が巡る。21は体部片で4条のヘラ描沈線文が施されている。同一個体と思われる別の体部片には外面にヘラミガキ調整が施されている。22・23は底部で、22の外面はタテハケ調整である。

24～27は甕で、24は口縁部直下に6条のヘラ描沈線文を施している。25の口縁部は短く外反しており、口縁端部にはキザミメがある。外面はタテハケ調整である。26・27は底部片で、27の底部はやや突出している。ともに外面にはタテハケ調整が施されている。

SK101からはこれらのほかにも多くの個体が出土している。組成では壺の占める割合が高い。胎土はいずれも砂粒を多く含み、生駒西麓産の胎土をもつ個体は出土していない。

これらの土器はいずれも畿内第Ⅰ様式新段階に属するものであろう。

SK102(図20) SK101の南に位置する土壌である。南北1.40m、東西0.92mの隅丸方形で、深さはもっとも深い部分で0.20mある。弥生土器の細片が出土している。

28は壺の頸部片で、6条のヘラ描沈線文が巡る。生駒西麓産の胎土である。ほかに図化していないが鉢・甕の口縁部片が出土している。これらの土器は畿内第Ⅰ様式新段階に属する。

SK103(図20・図版6・15) I区中央部のやや東よりに位置する土壌である。東西1.23m、南北0.75mの隅丸方形で、深さは0.30mである。埋土は炭化物の薄層を挟んで2層に分けることができ、上部に集中して弥生土器が多く出土している。

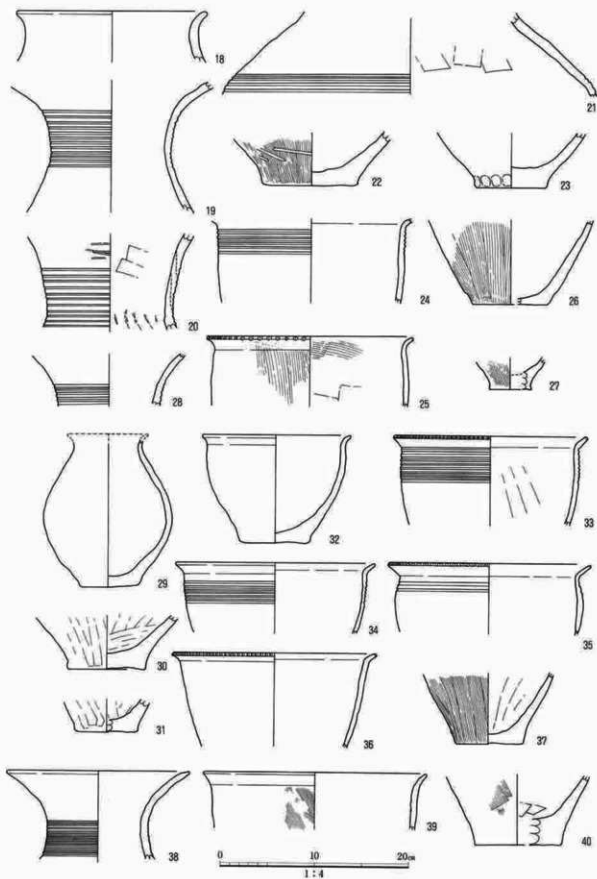


図20 I 区弥生時代の土壇出土土器
SK101(18~27)、SK102(28)、SK103(29~37)、SK104(38~40)

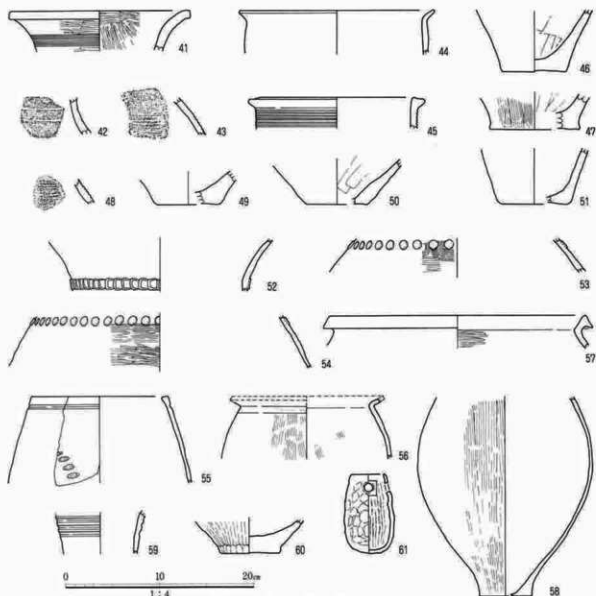


図21 II区弥生時代の土壌出土土器

SK106(41~47)、SK107(48~50)、SK108(51)、SK109(52・53)、SK110(54~56)、SK111(57・58)、SK112(59~61)

29~31は壺である。29は口縁部以上が失われているが、口縁部は短いものと思われる。磨滅のため調整は明らかでないが、外面はヘラミガキ、内面は板ナデのようである。底部30・31のうち30は大型の壺であろう。外面はヘラミガキ調整である。また、キザミメが施された突帯が巡る壺の体部片も出土している。

32は口縁部が外反する鉢である。調整は外面がヘラミガキ、内面が板ナデである。

33~37は甕である。33~35は頸部にヘラ描沈線文が施されており、34を除いて口縁端部にキザミメがある。器面の調整はいずれも不明である。37は底部で、外面はハケ調整である。

これらの土器はいずれも畿内第I様式新段階に属するものである。生駒西麓産の胎土は認められなかった。なお、最大長6.6cmほどの被熱した砂岩も出土した。土壌の機能は炭を多く含むこと、土器の破片が多いことから廃棄用と考えられる。

SK104(図20・図版6) I区南西部に位置する土壌である。南西部をほかの土壌によって切られて

いる。長径0.68m、短径0.48mの楕円形で、深さは0.15mである。埋土は地山の偽礫を含む人為的な埋戻し土である。弥生土器片が比較的多く出土している。

38は広口壺で、頸部には12条のヘラ描沈線文が施されている。39・40は甕である。39の口縁部は緩やかに外反し、外面の調整は縦方向のハケである。底部40の外面にはハケ調整が施されている。

これらの土器は畿内第Ⅰ様式新段階に属する。また、胎土はいずれも砂礫を多く含み、生駒西麓産の胎土をもつものは認められない。

SK105 SK103の西に位置する直径0.12m、深さ0.15m前後の小土壇である。畿内第Ⅰ様式に属する甕の底部が出土した。

SK106(図21) Ⅱ区北部で検出した一辺1.15mの隅丸方形の土壇である。深さは0.35mで、埋土は2層に分かれ、おもに上層より弥生土器が出土した。

41～43は壺である。41は広口壺で、口縁部はわずかに肥厚する。頸部には10本1単位の櫛描直線文が施されている。42・43はヘラ描沈線文が施された体部片である。42の沈線の間隔は広い。

44～47は甕である。44の口縁部は短く外反している。45の口縁部は逆「L」字状で、口縁部直下にヘラ描沈線文を施している。東部瀬戸内地域の影響を受けたものであろう。46・47は底部で、47の外面はタテハケ調整である。47は生駒西麓産の胎土である。

壺あるいは甕の破片はほかにも出土しているが、文様のわかるものではヘラ描沈線文を施したものが多く、櫛描直線文の見られるものは41のみである。これらの土器は畿内第Ⅰ様式新段階～第Ⅱ様式に属するものである。

SK107(図21) SK106の南部に位置する。長さ2.5mの不整形の土壇で、深さは0.45mである。SB216に切られている。出土遺物は弥生土器のみであるが、規模に比して出土量は多くない。

48～50は壺である。48は体部片で、8条以上のヘラ描沈線文が施されている。生駒西麓産の胎土である。49・50は底部である。

ほかの土器片も時期が確定できるものは少ないが、畿内第Ⅰ様式にさかのぼる可能性がある。

SK108(図21) SK107の東に位置する長軸1.10m、短軸0.45mの土壇である。深さは0.36mである。生駒西麓産の胎土をもつ甕底部51が出土した。

SK109(図21) Ⅱ区南西部で検出した。南西～北東方向に長軸をもつ土壇である。長軸2.55m、短軸0.85mで、深さはもっとも深いところで0.15mである。弥生土器の細片が出土している。

52・53は壺である。52は頸部に押捺突帯をもつ。53は円形浮文が貼付けられた体部片である。磨減しており文様構成は不明であるが、櫛描流水文が施されている。ほかに生駒西麓産の胎土の土器もあるが、数は少ない。

これらの土器は畿内第Ⅳ様式に属するものであろう。

SK110(図21) SK109の南東に位置する土壇で、北部および東部が攪乱で失われている。残存長は0.9mで、深さは0.5mである。埋土には少量の炭が混る。弥生土器が出土した。

54は壺の体部片で、上半には円形浮文が貼付られている。55は無頸壺である。口縁部は平坦な面をなし、口縁部下には1条の凹線が施されている。体部の上半には楕円形の押圧痕が弧状に連続して

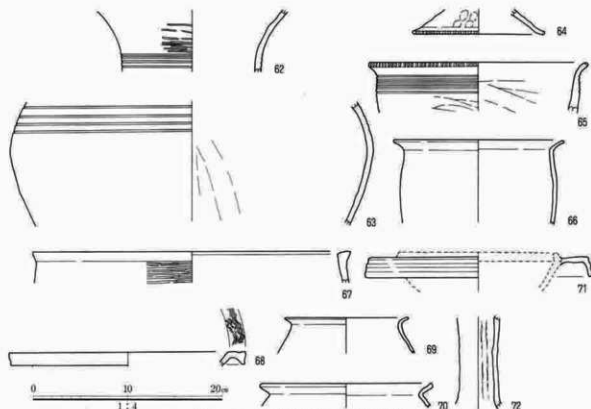


図22 Ⅲ・Ⅳ区弥生時代の土壇出土土器

SK113(72)、SK115(66)、SK116(71)、SK117(67)、SK118(62~64)、SK120(65)、SK121(68~70)

認められる。これ自体が文様であるのか、把手などの付属物が剥落したものかは不明である。56は甕で、口縁端部は欠損している。体部の内外面ともにハケ調整がなされている。

ほかに鉢、水差あるいは鉢の把手部分などが出土しており、これらは畿内第Ⅳ様式に属するものであろう。また、生駒西麓産の胎土の個体もある。ほかに長さ13cm前後で部分的に被熱した砂岩が出土している。

SK111(図21・図版6) Ⅱ区南東部に位置する直径0.3mの円形の土壇である。底部付近が遺存するのみであった。弥生土器57・58などが出土した。

57は胎土が生駒西麓産の甕である。口縁部は折り返され、下方に垂下する。調整は内外面ともにヘラミガキである。ほかに生駒西麓産の胎土としては簾状文を施した甕の体部片がある。58は甕の体部から底部である。最大径は体部の中程にある。磨滅しており器壁は薄くなっているが、外面にはタテハケ調整の痕跡が認められる。これらの土器は畿内第Ⅳ様式に属する。

SK112(図21・図版15) SK111の南西に位置する最大長1.1mの不整形な土壇である。土壇の一方の壁面は深さ0.45mで急激に落込んでいる。

59は直口壺の口頸部で、4条以上の凹線文が施されている。60は壺の底部で、生駒西麓産の胎土である。61は飯蛸壺で完形である。胎土はあまり砂粒を含まず、白っぽい色調を呈する。口縁部は体部から緩やかに内傾している。器壁は比較的薄く、外面をユビオサエで整えている。

これらの土器は畿内第Ⅳ様式に属するものである。

SK113(図22) Ⅲ区北西で検出した土壇である。直径0.65mの円形を呈し、深さは0.2mである。

埋土には焼土・炭が含まれる。

72は高杯の柱状部で生駒西麓産の胎土である。ほかに畿内第Ⅳ様式に属する壺あるいは甕の破片が出土している。

SK114 SK113の南東に位置する土壌である。長径1.1m、短径0.8mの楕円形で、深さは0.2mである。埋土には焼土・炭を比較的多く含んでいた。図化できなかったが弥生時代中期の土器片が出土した。

SK113・114は埋土に焼土・炭が含まれること、これらを中心とする半径約3m以内で弥生土器のみを出土する小柱穴が存在することから堅穴住居の中央穴の可能性がある。

SK115(図22) Ⅲ区北部に位置する直径0.2m、深さ0.07mの小土壌で、弥生土器壺が出土した。66は胎土が生駒西麓産の甕である。口縁部は短く外反している。内外面の調整は磨減しており不明である。畿内第Ⅱ様式であろう。

SK116(図22) Ⅲ区南部に位置する直径0.3m、深さ0.05mの小土壌で、弥生土器高杯が出土した。71は高杯の口縁部である。口縁端部は垂下し、広い面をもつ。胎土は精緻である。

SK117(図22) Ⅲ区南東部に位置する直径0.5mの円形の土で土壌深さは0.05mである。弥生土器鉢・甕などが出土した。

67は鉢の口縁部片である。口縁部は断面三角形を呈し、上端には平坦な面をもつ。畿内第Ⅲ～Ⅳ様式に属するものである。

SK118(図22) SK117の南東で検出した長さ2.0m、幅0.65mの長方形の土壌である。深さは0.3mである。切合い関係から方形周溝墓3に先行する。壁面の傾斜は短辺側が緩やかであるのに対し、長辺側は急である。底面は比較的平坦で、埋土が地山に由来する偽礫を含む人為的な埋戻し土であることを考慮すると土壌墓の可能性もある。埋土から弥生土器が出土した。

62・63は広口壺である。62の頸部および63の体部片には4条以上のヘラ描沈線文を施している。62の外面の調整はヘラミガキである。

64は傾きから蓋と判断した。胎土は比較的精良である。口縁部は緩やかに外反しており、端部にはキザミメが施されている。体部はユビオサエで整えている。これらの土器は畿内第Ⅰ様式新段階に属する。

SK119 Ⅲ区南東部に位置する直径0.4m、深さ0.05mの小型の土壌である。図化していないが畿内第Ⅲ～Ⅳ様式に比定できる弥生土器壺の底部が出土した。

SK120(図22) Ⅳ区南部に位置する長さ2.2m以上、幅0.5mの溝状の土壌である。深さは0.05mあるにすぎない。

65は甕である。口縁部は緩やかに外反しており、端部にはキザミメ、頸部には6条のヘラ描沈線文が施されている。体部の外面はていねいな板ナデ調整である。ほかにヘラ描沈線文を施した壺・甕片も出土しており、これらは畿内第Ⅰ様式新段階に属する。

西に近接して同様な形状の土壌があるが、深さや埋土が異なり土師器・須恵器を含むことから両者は別の遺構である。

SK121(図22) IV区南東部、方形周溝墓2と方形周溝墓3の間に位置する北西-南東方向の土壌である。長さ9.5mにわたって遺存しており、幅は1.1~1.5mで、深さは0.14mある。弥生土器細片が出土している。

68は広口壺である。口縁端部を上下に拡張しており、内面には櫛描波状文が施されている。磨滅しており明瞭でないが、口縁部には簾状文が施されていた可能性がある。生駒西麓産の胎土である。

69・70は甕である。69の口縁部は短く外方に屈曲している。70の口縁部は屈曲しており、端部はわずかに肥厚してつまみ上げている。いずれも生駒西麓産の胎土である。これらの土器は畿内第IV様式に位置づけられよう。

SK121は埋土が方形周溝墓と類似することから方形周溝墓の周溝の一部の可能性もある。しかし、対応する周溝が見受けられないこと、遺物はいずれも細片であり、確実に伴うとはいえないこと、中期後葉の方形周溝墓3と重なって同じく中期後葉の土器を出土する小土壌が多く認められることから、方形周溝墓3に先立つ集落と関係した土壌であろう。また、混入の可能性が高いが、須恵器片2点と少量の土師器片が出土している。近接する古墳時代末葉のSD221とも同じ方位であり、古墳時代以降に降る可能性も否定できない。このばあい、位置からすれば出土した弥生土器は方形周溝墓3の北側周溝に伴っていた可能性がある。

以上のほか、調査区全域で弥生時代前期末葉~中期後葉の土器が出土した土壌を検出した。しかし、古墳時代以降の土壌と埋土に大きな差は見い出せず、出土量の少ないものについては弥生時代のものかどうか明らかでない。

4) その他の出土遺物(図23・24、図版16)

弥生時代の土器・石器遺物は前項で記述した以外の遺構や古墳時代以降の遺構、包含層からも多数出土している。土器については前項までで触れたものと大きく隔たった特徴は認められないため、本稿では石器についてのみ記述する(註1)。

73~87は石鏃でいずれもサメカイト製である。73~79は凹基無茎式石鏃で、73は基部の挟りが深く全体に整った形状を呈する。作用部は緩く外湾する。裏面の調整は粗く、素材の平坦面を残している。3.1gである。74は扁平で粗雑なつくりである。表裏ともに素材の平坦面を残す。0.8gである。75は先端と基部の一方を欠損する。肉厚で裏面の一部にのみ素材の面を残す。1.1gである。74・75の作用部は直線的である。76は基部の挟りが比較的浅い。肉厚で表裏ともに素材の面を残していない。1.3gである。77は粗雑なつくりで裏面には素材の平坦面を強く残している。1.2gである。78は表裏ともに素材の面を残し、側縁部だけにのみ調整を施している。現状で1.4gである。79は両逆刺部を欠損する。平面形が五角形を呈しており、逆刺の長く伸びる縄文時代の石鏃の可能性もある。現状で1.2gである。80~86は凸基無茎式石鏃である。このうち80・81の基部は平坦に近い。80は肉厚で裏面は側縁にのみ調整を施している。1.6gである。81は小型で基部を欠損する。0.8gである。82は基部の一方を欠損する。表裏ともに素材の面を残さないが調整は粗雑である。現状で1.5gである。83は粗雑なつくりで肉厚である。先端をわずかに欠損する。1.2gである。84は比較的整った形状を呈

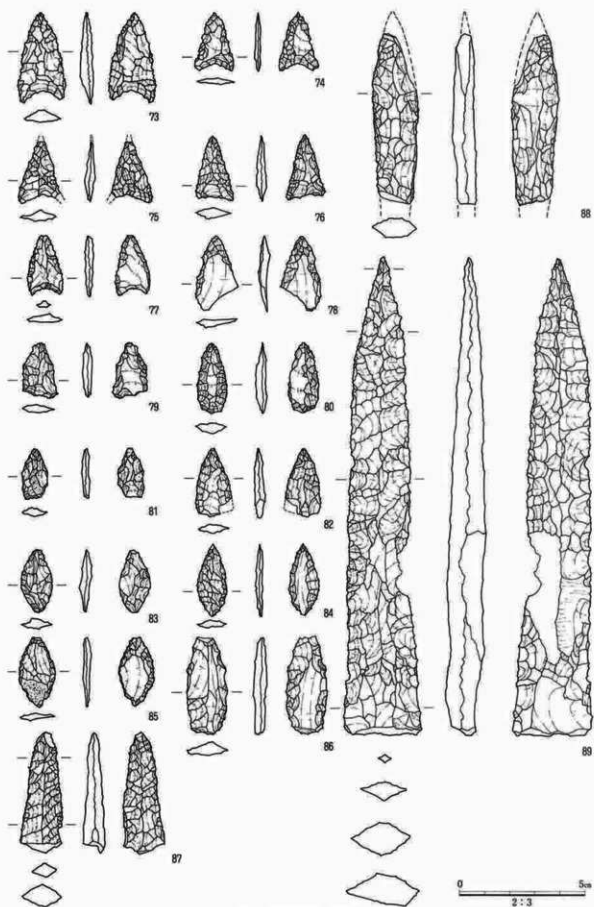


図23 弥生時代の石器(1)

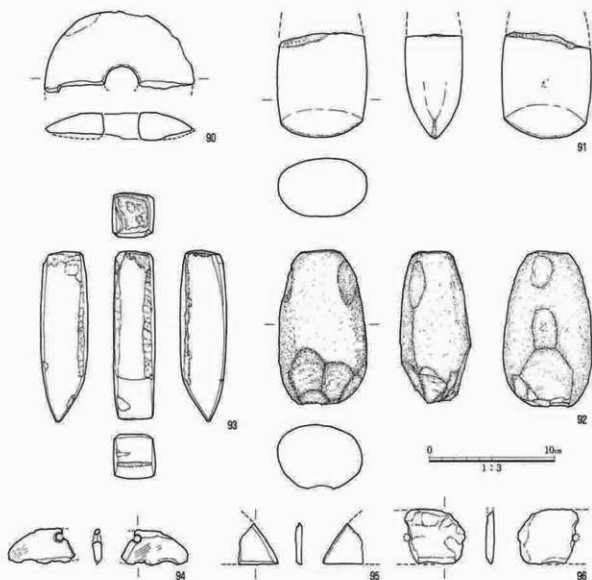


図24 弥生時代の石器(2)

する。裏面には素材の平坦面を残し、側縁部にのみ調整を施している。1.1gである。85は先端部を欠損する。先端部が基部よりも肉厚である。両面に素材の面を残し、調整はおもに側縁部にのみ行っている。1.2gである。86は大型の石鏃で先端と基部を欠損する。肉厚で裏面には素材の平坦面を残し、断面は三角形を呈する。側縁の調整も粗雑で未製品の可能性もある。3.7gである。87も大型の石鏃で基部を欠損する。肉厚で断面は菱形を呈する。作用部は直線的で先端で急に細くなる。加工はていねいで中央の稜は両面ともに明瞭につくり出されている。ほかの石器遺物に比べて風化が進んでいるように見受けられることから、やや厚みがあるものの有茎尖頭器の可能性も否定できない。現状で6.8gである。

88・89は石槍でいずれもサヌカイト製である。88は先端部および基部を欠損する。基部から直線的に外方に幅を増し、刃部付近で先が細くなる。断面形は丸みをもった菱形である。残存長6.8cmである。89は一部を新しい割れで失うほかは完形である。Ⅳ区の方形岡溝墓2の南東部周辺を精査中に出土した。長さは19.1cm、基部の幅は3.1cmである。基部には自然面を残している。側縁は直線的で

先端部付近で細くなる。断面は菱形で、両面ともに中央の稜は比較的明瞭につくり出されている。基部の付近は平坦でやや薄くなるように削取られている。

90は環状石斧である。Ⅱ区南端の古墳時代の遺構より出土した。閃緑岩製で半分を欠損する。直径12.0cmで中央には直径2.5cmの穿孔がなされている。両面ともに研磨されているが、一方の面はやや粗く、またわずかに平坦になっている。

91・92は太型蛤刃石斧である。91はⅢ区、92はⅡ区の包含層から出土した。91は砂岩製で、基部を欠損する。断面は楕円形である。表面の研磨はていねいで、基部から刃部へは緩やかに移行する。刃部先端には使用による細かな割れが多数認められる。92は砂岩製である。断面は楕円形で残存する部分では側縁に刃部が認められないことから、先端に近い部分にのみ刃が付けられていたと考えられる。表面の研磨はていねいである。基部は平坦である。刃部付近には使用による大きな割れが認められ、特に先端部は度重なる敲打によって各割れ面がつぶれた状態になっている。また、基部や表面にも敲打痕が残ることから石斧として使用後、叩き石として再利用された可能性がある。

93はほぼ完形の柱状片刃石斧である。Ⅲ区の包含層より出土した。閃緑岩製である。断面はほぼ正方形を呈し、各面の形状は整っている。刃部は明瞭につくり出され、先端部には使用による磨減が認められる。刃部には縦およびやや右に傾く擦痕が認められる。背面側はほかの面に比べるとやや曲線的で刃部先端では弧状を描く。基部の全体と前面から側面にかけては細かな割れが多数認められ、柄の装着方法に関係すると思われる。復元される柄の着装部は基部全体を受ける形状で、刃先に近い所までであったと推定できる。

94～96は磨製石庖丁で、一部が遺存するにすぎない。94は緑泥片岩製である。左右に細長い形状を呈する。穿孔は両面よりなされ、刃部は直線的である。95は結晶片岩製である。刃部は鈍い。96は緑泥片岩製で、刃部は一部が遺存するにすぎないが、直線的な刃部をもつと思われる。

石器遺物はほかに、サヌカイト剥片やチップが多数出土している。

5) 小結

今回の調査地では弥生時代前期末葉～中期後葉の遺構を検出することができた。これらは山之内遺跡で検出された弥生時代の遺構としては北端に位置している。

前期末葉～中期前葉の遺構には多数の土壌および堅穴住居と思われるものがある。土壌は調査地全域で認められ、特にⅠ区において多数検出された。このことから前期における集落は調査区外のさらに北側へと広がっていた可能性が高い。ただし、北側約50m付近で行われたいくつかの調査ではこれまで弥生時代の遺構が検出されていないことから、今回の調査地より大きく北には伸びないと思われる。

中期の遺構には堅穴住居・土壌・方形周溝墓などがある。中期中葉以降の遺構は北部では認められず、南部にいくにつれて分布するようになる。遺物の量についても同様な傾向を示している。Ⅰ区で前期の遺構・遺物が多く検出されたのとは対照的であり、中期になると集落が南へと移動したと考えられる。

また、調査地東部では近接して中期中葉～後葉の方形周溝墓4基を検出した。遺物が少なく時期の確定ができないものもあるが、北東から南西へと順次築造されていた可能性がある。方形周溝墓は調査地の東部にのみ分布しており、周辺の調査結果とも合わせると、西側に居住域、東側に墓域という関係がおおむね復元できる。しかし、中期後葉に位置づけられる方形周溝墓3・4は同じく中期後葉の土器を出土する土壌や柱穴などと重複しており、居住域から墓域の変化が想定されるものの、時期的にも位置的にも近接していることから、居住域と墓域へとの明確な区分はされていなかった可能性がある。

弥生時代後期の遺構・遺物は検出できなかった。これまでの推定どおり後期には集落は廃絶するものと思われる。

註)

- (1) 石器遺物に関して大阪市文化財協会では、遺跡・調査地間での比較・検討を行うために個々の遺物に個有の番号(登録番号)を付している。今回報告した石器については報告番号の前に88MLを付したものを登録番号とした。例えば環状石斧90の登録番号は「88ML90」である。

第3節 古墳時代以降の遺構と遺物

各調査区において遺構・遺物が確認された。時期的には5世紀後葉から8世紀前葉にかけての遺構・遺物が多い。遺構には6世紀前葉の竪穴住居2棟、5～8世紀前葉の掘立柱建物40棟、5世紀中葉～12世紀代の多数の土壌がある。

1) 竪穴住居

SB201・202(図25・27、図版7・17) IV区南東部で検出した方形の竪穴住居である。両者は重複して検出され、構造も類似することから、ほぼ同一位置で建替が行われたものと推定できる。切合い関係からはSB201の方が新しい。

SB201は東西4.8m、南北5.2mである。地面を掘り凹めたのちに地山に由来する偽礫を多く含む土で平坦に均し、床面としている。床面までの深さは検出面より0.1m残っていた。主柱穴は4本で、壁面に沿って、深さ約0.10mの周壁溝が巡る。柱穴は直径0.35～0.50mの円形もしくは楕円形で、深さ0.4～0.5mある。柱痕跡が観察できたものはなかったが、2.0～2.1mの間隔で割付けられていたようである。東壁面中央には竈が造り付けられていた。竈は直径0.9～1.1mの範囲を0.03～0.10mほど掘り凹め、周囲に黄白色の粘土を盛り上げて築いている。黄白色の粘土はもっとも幅の広いところで1.6m、高さは0.10m遺存していた。竈内には焼けた面があり、炭・焼土が見られた。また、土師器甕97が倒立して出土した(図版7)が、支脚として使用されたものと思われる。焚口の前面には完形の須恵器杯壺100、杯身101が置かれていた。

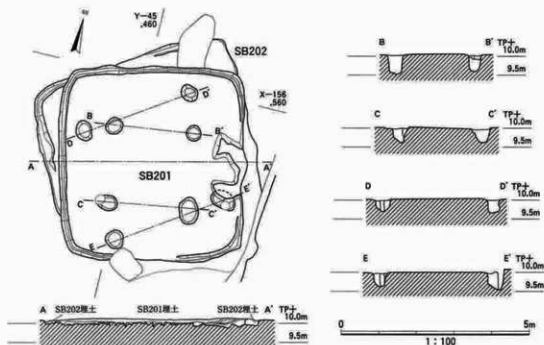


図25 SB201・202実測図

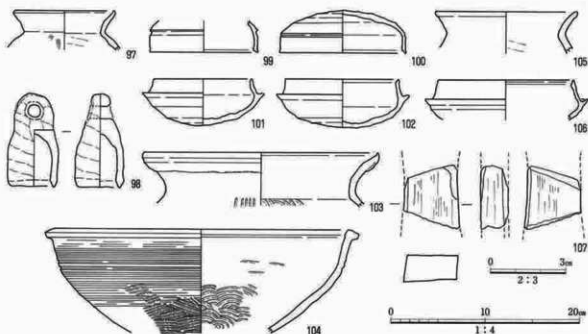


図27 SB201・202出土土器・石器
SB201(97~104)、SB202(105~107)

97は土師器甕である。口縁端部を上方につまみ上げている。体部外面はハケ調整、内面はケズリに近い強いナデ調整を施している。98は土師質の飯蛸壺である。吊手に比して体部が小さい特徴をもつ。土師器にはほかに甕・瓶などの体部片があり、特に瓶の破片が多い。

99~104は須恵器である。99・100は杯蓋で、99が天井部と口縁部との境に稜があるのに対して、100は凹線によって区分している。100の天井部には緑色を呈する自然釉および別個体との焙着痕が

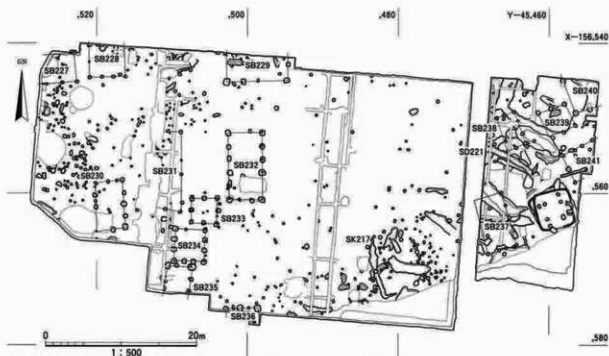


図28 Ⅲ・Ⅳ区古墳時代以降の遺構分布図

見られる。101・102は杯身で102は口縁端部に内傾する段を有する。103は甕で、口縁端部を上方につまみ上げており、外面は面をつくる。口縁部には粘土粧の接合痕が顕著に認められる。焼成は不良である。104は器台で、断面「L」字状の口縁部をもつ。口縁部よりやや下がった位置に2条の凹線が巡る。須恵器はほかにも杯身・甕などが出土している。

これらの遺物のうち、須恵器はMT15～TK10型式に相当することから、SB201は6世紀前半に位置づけられる。

SB202は東西5.6m、南北5.0mである。SB201と同じく掘削後に平坦に均して床面とする。床面までの深さは0.02m遺存するのみである。柱穴は4本で周囲に深さ0.10m前後の周壁溝が巡る。柱穴は直径0.45～0.70mの平面円形もしくは楕円形で、深さは0.30～0.55mある。柱痕跡の認められたものは直径0.12mあった。柱間寸法は3.5～3.8mでほぼ均等である。東壁面の中央には黄白色の粘土が分布していたことからSB201と同様に竈が造り付けられていたようである。

105は土師器甕である。口縁端部はわずかに肥厚し、丸くおさめる。胎土中に砂粒を多く含む。106は須恵器杯身で、立上がりは長く、端部は段をなす。受部は細く外上方へ長く伸びる。107は砂岩製の砥石で4面ともに使用痕が見られる。

これらの遺物のうち、須恵器はTK208型式に属すが、SB201との関係からすると時期がさかのぼりすぎるため、直接SB202に伴うものとは考えられない。

2) 掘立柱建物

I区で8棟、II区で17棟、III区で10棟、IV区で5棟の計40棟を確認した。出土遺物などから推定される時期は5～8世紀代で、長期にわたっている。しかし、建物の柱穴の残りはいずれも悪いうえ、出土遺物も少なく、しかも細片が多いため所属時期を判断することは困難である。遺物にはなるべく図

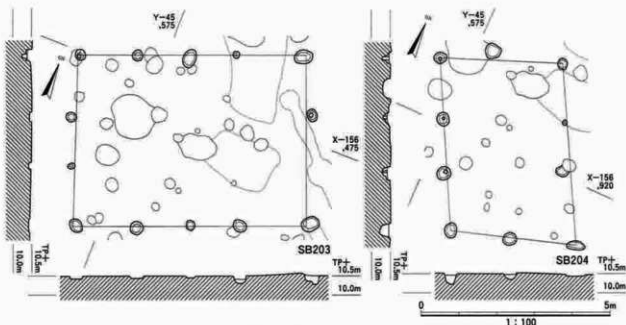


図29 SB203・204実測図

表2 掘立柱建物一覧表

遺構名	桁×梁	構造	桁長	梁長	面積	柱方位	型式・時期	掲載遺物	備考
SB203	4×3		6.1	4.5	27.5	N68°E	?		
SB204	3×2		4.5	3.3	14.9	N27°W	?		
SB205	3×1		3.4	?	?	N 6°E	?		
SB206	3×2		5.3	4.2	22.3	N62°E	?		
SB207	4×2		6.8	3.9	26.5	N81°E	?		
SB208	3×2		6.5	3.7	24.1	N87°W	TK10以降	119	
SB209	*6×*4		*6.2	*4.3	?	N70°E	?		層の可能性あり
SB210	3×2		5.4	3.6	19.4	N10°W	MT15~TK10		
SB211	3×3		3.8	3.6	13.7	N17°W	?		
SB212	3×2		3.6	3.0	10.8	N75°E	TK47~MT15	117・118・128	
SB213	2×2		3.2	2.6	8.3	N 4°W	?		
SB214	3×2	能柱	4.3	3.8	16.3	N58°W	TK10以降		
SB215	5×5	内部棟持柱	8.6	7.4	63.6	N80°E	6世紀以降		
SB216	4×2		5.4	3.4	18.4	N82°E	?		
SB217	2×2	能柱	3.2	3.2	10.2	N29°W	5世紀代?		
SB218	2×2	能柱	3.8	4.0	15.2	N30°W	?		
SB219	3×3	内部棟持柱?	3.2	3.3	10.7	N88°E	飛鳥Ⅲ~Ⅳ	110・113~115	能柱の可能性あり
SB220	2×2	能柱	5.1	3.3	16.8	N 3°E	TK47	112・125	
SB221	4×*2		7.1	*1.7	?	N 3°E	TK23	111・126	
SB222	2×2		4.0	2.3	9.2	N 3°W	飛鳥Ⅲ以降	120・124	
SB223	3×2		4.5	3.2	14.4	N17°W	6世紀後半?	109・129	
SB224	3×2		5.2	3.2	16.6	N 6°W	平城Ⅱ	108・116・121・127	
SB225	3×2		6.2	3.6	22.3	N 3°W	飛鳥Ⅱ	122・123	
SB226	4×*2		7.9	*1.5	?	N 7°E	?		
SB227	2×2		4.0	3.7	14.8	N87°E	6世紀後半以降		
SB228	3×2		4.8	4.3	20.6	N 2°W	?		
SB229	4×*1		8.0	2.0	16.0	N88°E	?		
SB230	4×2		6.5	3.7	24.1	N 4°W	飛鳥Ⅳ~Ⅴ	130・132・133・137・140	
SB231	5×1		9.5	2.0	19.0	N 0°	平城Ⅰ?		
SB232	5×2		9.0	4.5	40.5	N 0°	平城Ⅰ	131・139	
SB233	2×2		3.3	3.3	10.9	N 0°	飛鳥Ⅰ~Ⅱ	134・135	
SB234	3×3		4.2	4.0	16.8	N 0°	飛鳥Ⅰ	136	
SB235	2×2		3.4	3.0	10.2	N 4°E	?		
SB236	*2×*2		*4.3	*4.3	?	N 1°W	?		
SB237	4×3		7.2	5.2	37.4	N16°W	TK23?	141	
SB238	3×3		4.5	4.0	18.0	N20°W	TK23		
SB239	2×1		3.5	3.5	12.3	N69°E	?		
SB240	*2×*2		*4.8	*2.0	?	N20°W	TK209	138	
SB241	*3×2		*4.5	4.0	—	N64°E	?		

化を試みたが、量の少ない遺構については必ずしも建物の時期を示すとは限らない。

建物群は方位や柱穴の大きさなどからいくつかのグループに分けることが可能である。ただし、推定の部分が多いことから、記述にあたってはⅠ~Ⅳ区と各調査区ごとに報告することにして、グループおよび時期については別項に記述する。また、柱穴の残りが悪かったためか、柱痕跡が確認できなかった柱穴も多く、これらが組み合う建物についての規模や柱間寸法はおおむね柱穴の中心で測定した数値を記している。各建物の規模および方位などは表2に示した。

SB203(図29) Ⅰ区西部に位置する掘立柱建物で、方位はN68°Eである。桁行4間(6.1m)、梁行3間(4.5m)である。柱間寸法は桁行で1.3~1.9m、梁行で1.3~1.5mとバラツキが大きい。柱穴の形状は直径0.25~0.40mの円形もしくは楕円形で、柱痕跡は確認できたもので直径0.13mであった。土師器・須恵器の細片が出土したのみで時期は不明で

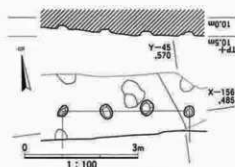


図30 SB205実測図

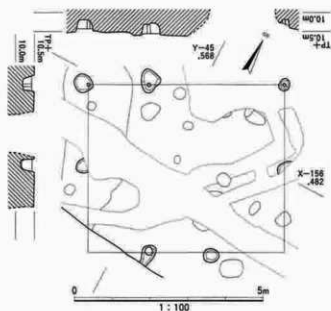


図31 SB206実測図

列3間(3.4m)分を確認したのみであり、南は調査地外に続くと思われる。東西3間の短い槽になる可能性も否定できない。西端の柱穴の南に柱穴が1個あるが、両者は近接しすぎており、無関係であろう。遺物が出土しなかったため、所属時期は不明である。

SB206(図31) SB203の南東に位置しており、方位はN62°Eである。桁行3間(5.3m)、梁行2間(4.2m)である。柱間寸法は桁行で1.8m、梁行で2.1mである。柱穴の形状は直径0.35～0.45mの円形もしくは楕円形のものが多く、柱痕跡は確認できたもので直径0.08mであった。土師器・須恵器の細片が出土したのみで、時期は不明である。

SB207(図32) I区北部に位置する掘立柱建物である。南側の柱列は東西方向のSA201の柱穴と一

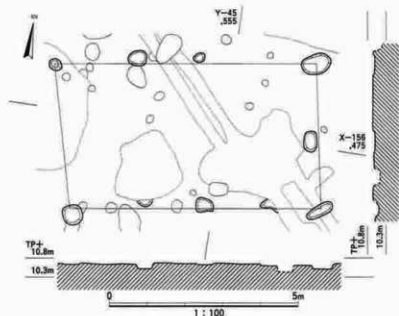


図32 SB207実測図

ある。

SB204(図29) SB203と重なり、ほぼ直交する方位をもつ掘立柱建物である。方位はN27°Wである。桁行3間(4.5m)、梁行2間(3.3m)である。柱間寸法は1.2～1.7mある。柱穴の形状は直径0.25～0.35mの円形で、柱痕跡は直径0.07～0.10mであった。出土遺物は少量の土師器・須恵器片があるにすぎないため、時期を決することはできない。また、SB203との先後関係も不明である。

SB205(図30) I区南部に位置する掘立柱建物で、方位はN6°Eである。北側の柱

部重複しているが先後関係はわからなかった。方位はN81°Eで、SA201と変わらない。桁行4間(6.8m)、梁行2間(3.9m)であるが、もう2間分東に伸びる可能性がある。柱間寸法は桁行で1.7m、梁行で1.9mである。柱穴は底が残っていたにすぎないが、形状は直径0.35～0.50mの円形もしくは楕円形で、柱痕跡は直径0.08～0.12mである。遺物は出土しなかったが、方位からみてSA201に近接した時期と思われる。

SB208(図33・40) 長軸をほぼ正東西の方位に取る掘立柱建物で、方位はN87°Wである。桁行3間(6.5m)、梁行2間(3.7m)である。柱間寸法は1.6~2.4mと一定していない。柱穴の形状は直径0.40~0.50mの円形あるいは隅丸方形のものが多く、柱痕跡の確認されたものは直径0.08mである。出土遺物には土師器甕、須恵器杯・甕などがある。

119は須恵器杯身である。立上りの端部は丸くおさめる。受部には杯蓋の一部が熔着している。TK10型式に属するものであるが、ほかの遺物は細片で時期が不明であるため、建物の時期を示すとは限らない。

SB209(図33、図版8) I区北東部に位置する掘立柱建物である。調査区外へと続くため部分的に拡張を試みたが、規模を押さえることはできなかった。南北3間(4.3m)、東西5間(6.2m)分を確認したことから南北4間以上、東西6間以上の大規模な建物と考えら

れる。方位は東西方向で、N70°Eである。柱間寸法は南北方向で1.3~1.5m、東西方向で1.1~1.4mと今回検出したほかの建物に比べて短いのが特徴である。建物にすると規模が大きいこと、および柱間寸法が短いことから櫓の可能性もある。柱穴の形状は直径0.40~0.50mの円形あるいは楕円形で、柱痕跡は直径0.10~0.12mである。出土遺物には土師器・須恵器の細片があるのみで、時期は不明である。

SB210(図34、図版8) II区北西部に位置する掘立柱建物で、北端は調査区外へと続く。桁行3間(5.4m)、梁行2間(3.6m)を確認した。方位はN10°Wで、SA202と同じである。柱間寸法は桁行が1.7~2.4m、梁行は1.8mあり、桁行方向でばらつきが大きい。柱穴の形状は直径0.35~0.55mの円形もしくは隅丸方形で、柱痕跡は遺存するもので直径0.15mであった。出土遺物には土師器甕、須恵

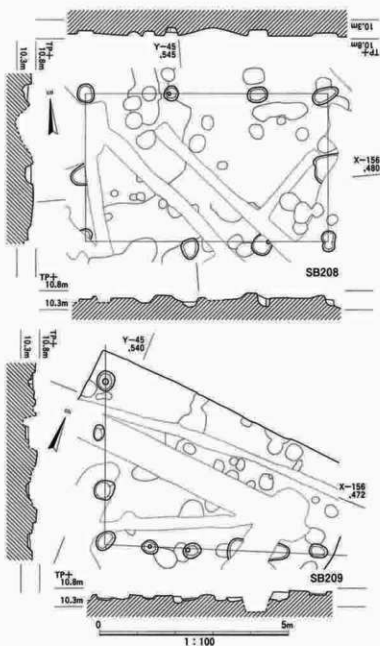


図33 SB208・209実測図

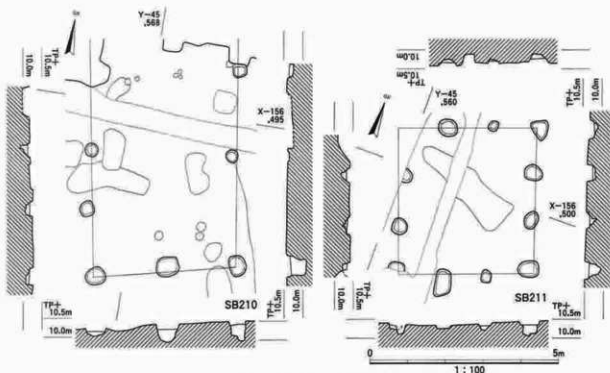


図34 SB210・211実測図

器杯・甕などがあるがいずれも細片で時期を特定できるものは少ない。これらの中にはMT15～TK10型式ごろに属する須恵器杯身の小片がある。

SB211(図34) SB210の南東に位置する掘立柱建物である。桁行3間(3.8m)、梁行3間(3.6m)でほぼ正方形である。北西隅の柱穴は攪乱によって失われている。方位はN17°Wである、柱筋はSB212およびSA204・205とほぼ共通する。柱間寸法は桁行が1.2～1.3m、梁行は1.2mで、柱間寸法はほぼ一定である。柱穴の形状は直径0.35～0.55mの円形あるいは楕円形であるが、整ったものではない。柱痕跡を確認することができなかった。出土遺物には土師器甕・須恵器甕の細片があるのみで、時期は不明である。

SB212(図35・40) SB211の南に位置する掘立柱建物である。桁行3間(3.6m)、梁行2間(3.0m)で、方位はSB211と同じくN75°Eを示す。柱間寸法は桁行で1.3m、梁行で1.5mである。柱穴の形状は一辺0.60～0.70mの隅丸方形で、ほかの建物の柱穴に比べてやや大きい。柱痕跡の直径は0.10～0.12mである。出土遺物はいずれも小片であるが須恵器杯・甕などがある。

117は須恵器有蓋高杯の蓋で、つまみの中央は凹んでいる。118は須恵器杯で、口縁端部は丸くおさめる。128は須恵器甕で、口縁端部をつまみ上げており、口縁部の直下には1条の突帯が巡る。これらはTK47～MT15型式に属するものである。

SB213(図35・図版8) 調査地北部、SB212の東に位置する掘立柱建物である。桁行2間(3.2m)、梁行2間(2.6m)である。北東の柱穴は攪乱によって失われていた。方位はN4°Wである。柱間寸法は桁行が1.6m、梁行で1.1～1.4mでほぼ一定している。柱穴の形状は直径0.35～0.40mの平面円形のものが多い。柱痕跡は確認できなかった。出土遺物は土師器・須恵器の細片があるのみで、時期は不明である。

SB214(図35、図版9) 調査地北東部に位置する総柱の掘立柱建物である。桁行3間(4.3m)、梁行2間(3.8m)を確認したことから、桁行3間以上、梁行2間の建物と考えられる。方位はN58°Wである。柱間寸法は桁行が1.5m、梁行は1.7mで梁行の方が長い。柱穴の形状は直径0.45～0.80mの円形もしくは隅丸方形で側柱、東柱ともに大きさ、深さともに大きな差異は認められない。柱痕跡は確認できたもので直径0.12mあった。出土遺物は土師器・須恵器片が少量あるのみで、時期は決しがたいが、そのなかにTK10型式以降に属する須恵器杯蓋があったことから、建物の時期は6世紀中葉以降と推定される。

SB215(図36・図版9) II区中央やや北寄りに位置する桁行5間(8.6m)、梁行5間(7.4m)の掘立柱建物で、今回検出した建物の中では面積がもっとも広い。南西部の柱穴は攪乱によって失われている。方位はN80°Eで、北西の建物群に近く、SA202よりはいくぶん西に振っている。建物内には2個の柱穴があり、棟持柱と考えられる。こうした構造は妻柱筋やその外側に棟持柱を配するのに比べ、屋根荷重を軽減させ、無理なく大規模な平面の建物を構築するためと考えられている[植木久1991]。柱穴の形状は側柱では直径0.35～0.50mの円形あるいは楕円形を呈するものが多く、柱痕跡は直径0.10～0.13mの円形である。内部の棟持柱は直径0.50mの円形あるいは一辺0.5mの方形で側柱より一回り大きく、やや深く掘られている。柱痕跡は確認することができなかった。柱間寸法は桁行で1.5～1.8m、梁行で1.4～1.5mである。棟持柱の間隔は柱穴の中央で3.8mである。出土遺物は土師器甕、須恵器杯・甕などがある。いずれ

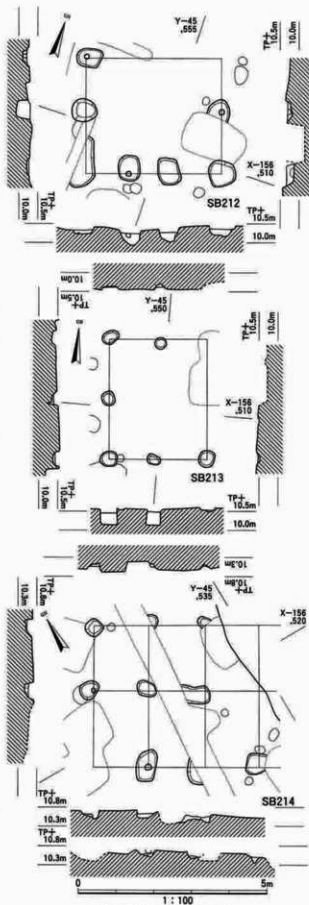


図35 SB212～214実測図

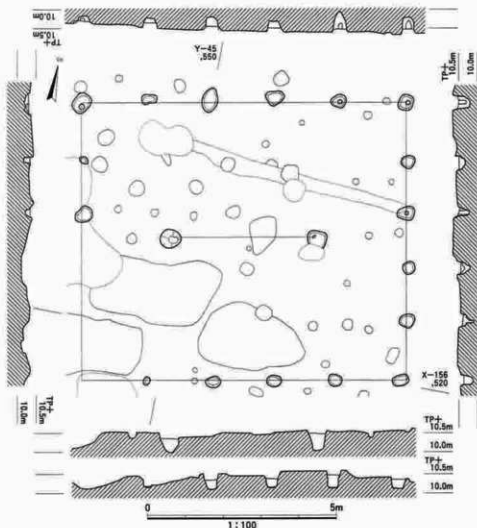


図36 SB215実測図

も細片で詳しい時期はあきらかでないが、6世紀以降の特徴をもつ。

SB216(図37) SB215の南に位置する桁行4間(5.4m)、梁行2間(3.4m)の掘立柱建物である。弥生時代前期のSK107を切る。方位はN82°Eで、SB210、SA201とはほぼ同方位である。柱穴の形状は直径0.25～0.45mの円形あるいは楕円形が多く、柱痕跡は直径0.10～0.12mの円形である。柱間寸法は桁行で1.3～1.4m、梁行で1.5～1.9mと梁行の方が長い。出土遺物は土師器・須恵器細片があるのみで、時期は不明である。

SB217(図38) II区のほぼ中央に位置しており、方位はN29°Wの総柱の掘立柱建物である。2間×2間で、一辺約3.2mとほぼ正方形である。切合い関係からSA201より古い。柱穴の形状は直径0.20～0.40mの円形もしくは隅丸方形で、柱痕跡は確認できなかった。柱間寸法は1.5～1.6mである。土師器甕、須恵器杯・甕のほか鉄滓が出土したがいずれも細片で、時期は不明である。なかには口縁端部が大きく内傾して面をもつ須恵器杯身片や体部の内面をナデ消した須恵器甕片があることから5世紀代にさかのぼる可能性がある。

SB218(図38、図版9) SB217の南西に位置する総柱の掘立柱建物である。方位はN30°Wで、SB217と同じであることから同時期、あるいは近接した時期の建物と考えられる。2間×2間で、一

辺3.8～4.0mとほぼ正方形である。SB217に比べると規模はいくぶん大きい。柱穴の形状は直径0.35～0.50mの円形もしくは楕円形で、柱痕跡は直径0.08～0.15mであった。柱間寸法は1.8～2.0mを測る。出土遺物は土師器甕・須恵器杯がある。いずれも細片のため正確な時期は不明であるが、SB217と同様、5世紀代にさかのぼる可能性がある。

SB219(図39・40) 調査地南西部に位置する方位がN88°Eの掘立柱建物である。桁行3間(3.2m)、梁行3間(3.3m)を確認した。また、建物内部に柱穴が2

個認められ、建物規模は小さいが、SB216と同じく棟持柱であったとすれば桁行は4間と推定される。柱穴の形状は一辺0.40～0.55mの方形で、柱痕跡は直径0.12～0.14mである。柱間寸法は桁行で0.9～1.0m、梁行で0.9～1.2mとほかの建物に比して、短いのが特徴である。これらのことから柱筋は不揃いであるものの3間四方の総柱建物として考えた方が妥当かもしれない。棟持柱の可能性がある柱穴の間隔は1.7m前後ある。土師器、須恵器杯・甕などが出土した。

110は土師器甕である。口縁部内面にはナデ調整により内傾する面をもつ。113は須恵器杯G蓋である。天井部から口縁部にかけて大きく屈曲し、口縁端部は丸く肥厚する。114・115は須恵器杯B

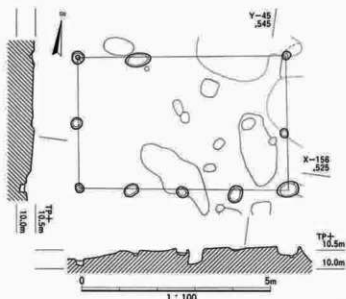


図37 SB216実測図

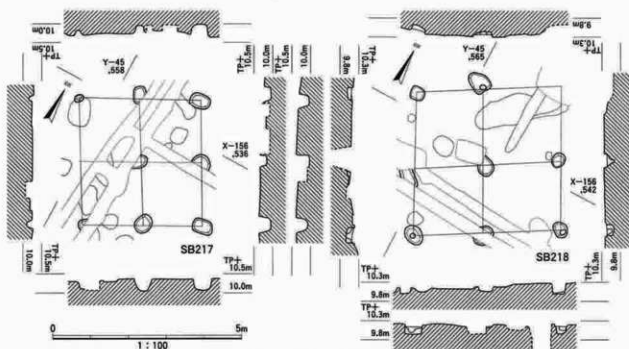


図38 SB217・218実測図

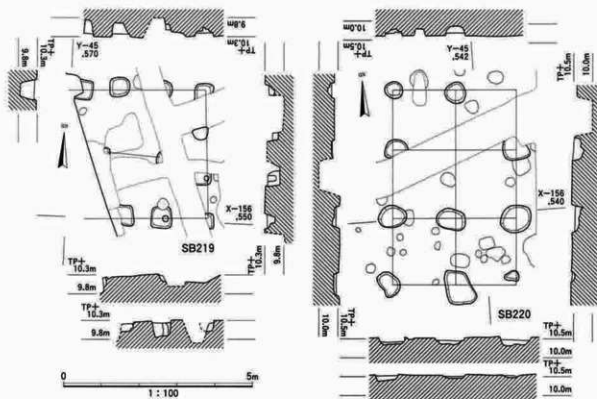


図39 SB219・220実測図

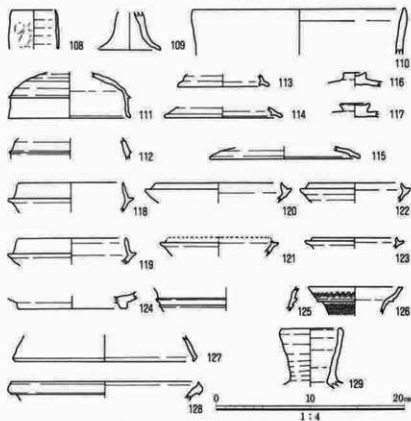


図40 I・II区掘立柱建物出土土器

SB208(119)、SB212(117・118・128)、SB219(110・113～115)、SB220(112・125)、SB221(111・126)、SB222(120・124)、SB223(109・129)、SB224(108・116・121・127)、SB225(122・123)

蓋である。115は天井部から口縁部へなだらかに移行し、かえりもごく小さい。これらの土器は飛鳥Ⅲ～Ⅳに位置づけられる。

SB220(図39・40) SB218の東に位置する桁行3間(5.1m)、梁行2間(3.3m)の総柱建物である。方位はN3°Eである。北東隅の柱穴は遺構検出時には認められたが、ごく浅くしか遺存しておらず、精査中に消滅したため図化できなかった。柱穴の形状は直径0.45～0.85mの円形ないしは隅丸方形で、柱痕跡は確認できなかった。ほかの建物に比して柱穴の規模は大きい特徴をもつ。柱間寸法は桁行・梁

行ともに1.6~1.7mであろう。土師器甕、須恵器杯・甕などが出土した。

112・125はいずれも須恵器である。112は須恵器杯蓋で、天井部と口縁部の境界の稜は鈍い。125は須恵器無蓋高杯で、杯部には2条の突帯が巡る。これらはTK47型式に属するものと思われる。

SB221(図40・41) 調査地東部に位置する方位がN3°Eの掘立柱建物である。南北4間(7.1m)、東西1間(1.7m)を確認した。南北4間、東西2間以上の建物と思われる。柱穴の形状は一边0.50~0.70mの方形または隅丸方形で、ほかの建物に比べて、大型で比較的整った形状のものである。柱痕跡は直径0.12~0.15mで、柱間寸法は南北方向で1.5~2.0mである。土師器甕、須恵器杯・甕などが出土したが細片が多い。

111は須恵器杯蓋で天井部は丸く、天井部と口縁部との間の稜は鋭い。口縁端部は内傾している。126は須恵器甕で口縁端部は内傾して、「M」字状に凹む。口縁部および頸部には描波状文が施されている。ほかに出土した須恵器片もこれらと同じくTK23型式に属するが、柱穴の形状や建物方位から考えると、建物の年代は飛鳥時代以降の可能性が高い。

SB222(図40・42、図版10) SB221の西に位置する。桁行2間(4.0m)、梁行2間(2.3m)の掘立柱建物である。方位はN3°Wである。南東隅の柱穴は攪乱のため遺存していない。柱穴の形状は一边0.50~0.70mの整った方形で、比較的大型である。柱痕跡は確認できたもので直径0.15mの円形で、南西隅とその北側の柱穴には根石と考えられる石が据えられていた。柱間寸法は桁行が1.5~2.5m、梁行は1.1~1.4mとバラツキが大きく、また梁行の方が短い。出土遺物は土師器甕、須恵器杯・甕などがある。

120は須恵器杯身で、立上がりは短く、肉厚である。124は高台のある底部片で、須恵器杯Bまたは壺と考えられる。焼成不良で磨滅している。120は飛鳥Ⅰに属するもので、図化できない遺物もおおむねこれを下限としているが、124は飛鳥Ⅲ以降と考えられることから、建物の時期は7世紀後半以降と考えられる。

SB223(図40・42、図版10) SB222の南西にて検出した。桁行3間(4.5m)、梁行2間(3.2m)の掘立柱建物である。方位はN17°Wである。7世紀中葉のSD216・220によって切られる。柱穴の形状は直径0.35~0.50mの円形もしくは楕円形で、柱痕跡は直径0.15mである。柱間寸法は桁行で1.5m、梁行で1.6mで、バラツキは小さい。土師器高杯・甕、須恵器甕・平瓶などが出土している。

109は土師器高杯である。脚部はいくぶん外方に膨れている。調整は磨滅しており不明である。129は須恵器平瓶の口縁部であろう。口縁部は内傾しており、端部は丸い。これらの遺物からは時期を決

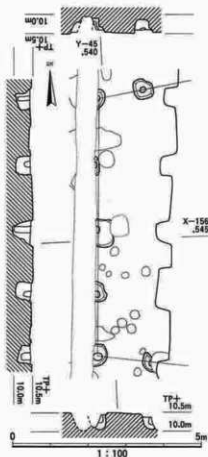


図41 SB221実測図

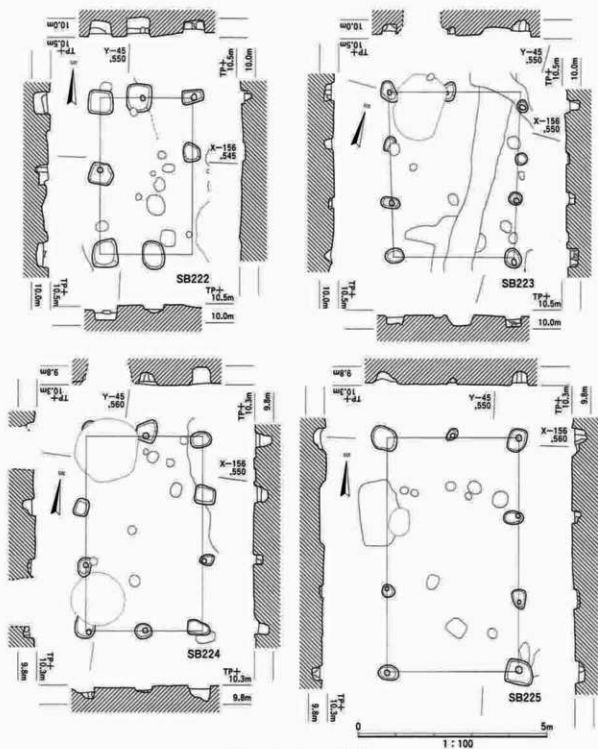


図42 SB222～225実測図

しがたいが、切合い関係を合わせて考えれば、建物の時期は6世紀後半ごろに比定できよう。

SB224(図40・42、図版10) SB223の西に位置する建物である。方位はN6°Wである。桁行3間(5.2m)、梁行2間(3.2m)である。柱穴の形状は一辺0.40～0.60mで、隅丸方形のものが多く、柱痕跡は確認できたもので直径0.10～0.15mであった。柱間寸法は桁行で1.3～2.0m、梁行で1.4～1.6mとバラツキが認められる。土師器甕、須恵器杯・甕などが比較的多く出土した。

116は須恵器杯B蓋である。つまみは外方に拡がらず、頂部は凹んでいる。121は須恵器杯Hである。立上がり端部を欠損するが、厚みが薄いことからあまり長く延びないであろう。127は須恵器壺蓋と考えられるもので、遺存する口縁部から天井部にかけては大きく屈曲すると推定される。口縁部は外方に開き、端部は内側に屈曲する。108は製埴土器である。砲弾形の形状をもち、外面にはユビナデ、内面には横方向のナデ調整が施されている。下位にあるSK216に伴うものであろう。これらの遺物のうち、121は飛鳥Ⅱ～Ⅲに属するものであるが、127は平城宮土器Ⅱを前後する時期と考えられることから、建物の時期は8世紀前半に位置づけられる。

SB225(図40・42) SB223の南に位置する建物で、方位はN3°Wである。桁行3間(6.2m)、梁行2間(3.6m)分を確認した。南の妻柱が調査区内で確認できなかったことから桁行は4間以上あった可能性もあるが、隅柱が深く掘られていることを考慮すれば、南の妻柱は削平によって失われたのかもしれない。柱穴の形状は遺存状況のよいもので、一辺0.50～0.70mの隅丸方形あるいは方形であり、柱痕跡は直径0.10～0.12mである。柱間寸法は桁行で2.0～2.2m、梁行で1.8mを測る。土師器甕、須恵器杯・甕などが出土した。

122・123は須恵器杯Hである。立上がりは短く内傾する。123は杯G蓋の可能性もある。これらの遺物は飛鳥Ⅱに属する。

SB226(図43) SB225の東に位置する建物で、方位はN7°Eである。南北4間(7.9m)、東西1間(1.5m)を確認した。南北4間、東西2間以上の建物と推定される。柱穴の形状は一辺0.60～0.70mの隅丸方形あるいは方形で、北側のSB221と類似しており、ほかの建物に比べて整っている。柱痕跡は0.15mで、柱間寸法は1.8～2.0mである。土師器片が多数出土したが、須恵器片は甕など少量あるのみであった。土師器は甕・高杯などがあるがいずれも細片で、時期がわかるものはなかった。

SB227(図44) Ⅲ区北西部に位置する掘立柱建物で、桁行2間(4.0m)、梁行2間(3.7m)分を確認した。東側柱列の妻柱は削平されており遺存していなかった。西側の柱列は調査区外へ続く。方位はN87°Eである。柱穴の形状は一辺0.45～0.50mの隅丸方形で、柱痕跡は直径0.08～0.15mである。柱間寸法は桁行で2.0mであった。土師器甕片のほか須恵器杯身の小片が一片出土したのみであり、時期を決することはできない。ただ、須恵器杯身についてはヘラケズリの範囲からみて、6世紀後半以降と考えられる。

SB228(図44) SB227の東に位置する。桁行3間(4.8m)、梁行2間(4.3m)で、方位はN2°Wの建物である。東柱列の中央の柱穴は失われていた。柱穴は浅く残っていたにすぎないが、残

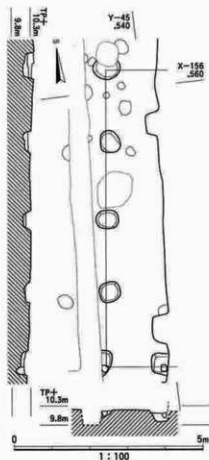


図43 SB226実測図

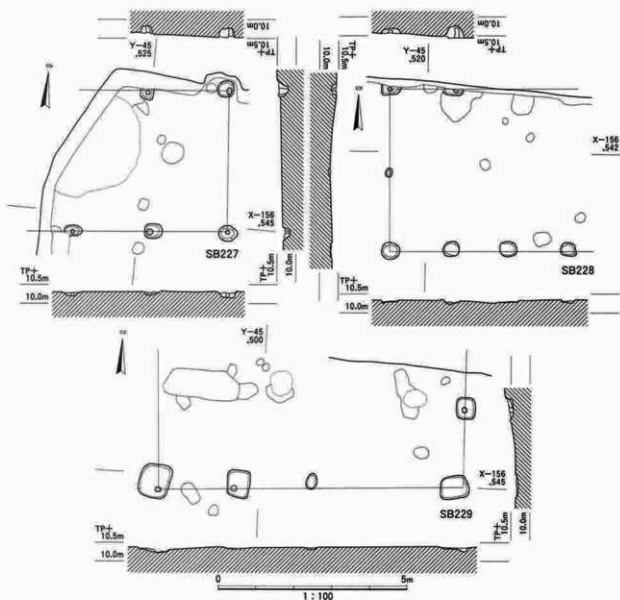


図44 SB227～229実測図

りのよいものは一辺0.5mの方である。柱痕跡は直径0.08～0.10mである。柱間寸法は桁行で1.6m、梁行で2.1～2.2mである。出土遺物は土師器・須恵器の細片があるのみで時期は不明である。

SB229(図44・46) SB228の東に位置する。遺存状況は悪いが、桁行4間(8.0m)、梁行1間(2.0m)を確認した。梁行方向は調査区外へと続くと考えられる。方位はN88°Eである。柱穴の形状は一辺0.60～0.80mの整った方形で、柱痕跡は直径0.10～0.13mである。柱間寸法は桁行で、2.0m前後である。遺物は土師器細片がわずかに出土したのみで、時期は不明である。

SB230(図44・46、図版11) Ⅲ区南西部に位置する建物で、方位はN4°Wである。桁行4間(6.5m)、梁行2間(3.7m)である。柱穴の深さは0.05～0.30mで、残りのよいものは一辺0.6～0.8mの整った方形であった。柱痕跡は確認できたもので直径0.13mである。柱間寸法は桁行で1.6m前後であろう。遺物は土師器杯・碗・甕、須恵器杯・壺・甕などの細片が出土した。

130・132・133は土師器である。130は土師器碗で、内外面ともにナデている。133は土師器甕で、

口縁端部をつまみ上げられている。132は土師器甕Bの把手部分である。平面形は三角形で肉厚である。137は須恵器杯B蓋で、かえりは鈍い。140は須恵器杯Bであるが、焼成は悪く、土師器のような色調を呈している。これらの須恵器はおおむね飛鳥Ⅳ～平城宮土器Ⅰに属するものであることから、建物の時期は7世紀後半～8世紀初頭と考えられる。

SB231(図47) SB230の北東に位置する正方位の建物であるが、柱穴の遺存状況は悪い。桁行5間(9.5m)、梁行1間(2.0m)分を確認した。東に位置するSB232と同じく梁行3間の可能性がある。柱痕跡は確認できなかった。柱間寸法は桁行で1.9m、梁行で2.0mであろう。出土遺物には土師器・須恵器の細片があるのみであるが、東のSB232との位置関係からみて、8世紀前半まで降ると思われる。

SB232(図47、図版11・17) SB231の東に位置する桁行5間(9.0m)、梁行2間(4.5m)の正方位の建物である。柱穴の形状は一辺0.5～0.8mの隅丸方形から方形のものが多。柱痕跡は直径0.14～0.18mである。柱間寸法は桁行で1.8m、梁行で1.3～1.6mある。出土遺物は細片が多いが土師器杯・甕、須恵器杯・甕などがある。

131は土師器杯Cである。口縁端部は内傾し、杯部内面には暗文が施される。外面の調整は磨減のため明らかでないがヘラミギ調整と思われる。139は須恵器杯Aあるいは杯Bである。これらの土器は平城宮土器Ⅰを前後するようで、建物の時期は8世紀初頭と考えられる。なお、建物の柱穴を切る柱穴からは内黒の黒色土器椀142・143が出土している。

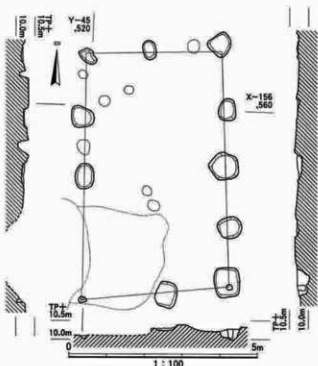


図45 SB230実測図

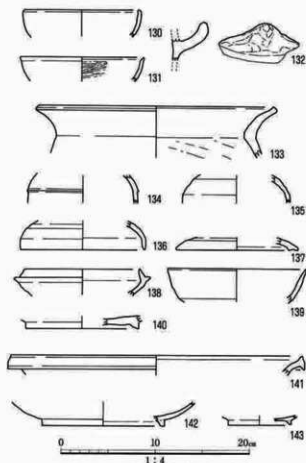


図46 Ⅲ・Ⅳ区掘立柱建物出土土器

SB230(130・132・133・137・140)、SB232(131・139)、SB233(134・135)、SB234(136)、SB237(141)、SB240(138)、SB232を切る柱穴(142・143)

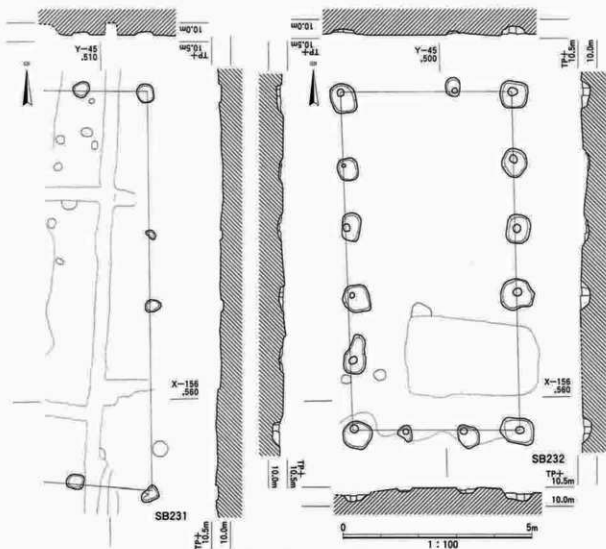


図47 SB231・232実測図

SB233(図46・48) SB232の南西に位置する正方位の建物で、南北2間(3.3m)、東西2間(3.3m)の正方形である。東柱は確認できなかった。柱穴の形状は一辺0.50~0.65mの方形で、柱痕跡は直径0.16mである。図示していないが東柱列の中央の柱穴底部には礫の集石が認められた。出土遺物には土師器・須恵器がある。

134・135は須恵器杯H蓋である。134は天井部と口縁部との間に鈍い稜をもつ。135には稜は見られず、口径は小さい。天井部には灰色の自然釉がかかる。134はTK23・47型式であるが、135は飛鳥Ⅰ~Ⅱであることから建物の時期は7世紀前半以降であろう。

SB234(図46・48、図版11) SB233の南に位置する。南北3間(4.2m)、東西3間(4.0m)で、正方位の建物である。柱穴の形状は一辺0.6~0.7mの方形で、柱痕跡は直径0.10~0.13mである。柱間寸法は南北方向で1.4m、東西方向で1.3~1.4mである。出土遺物は土師器甕、須恵器杯・甕などがある。

136は須恵器杯H蓋である。天井部から口縁部にかけてわずかに屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。飛鳥Ⅰに位置づけられる。同様な形態の杯蓋がほかにも出土している。

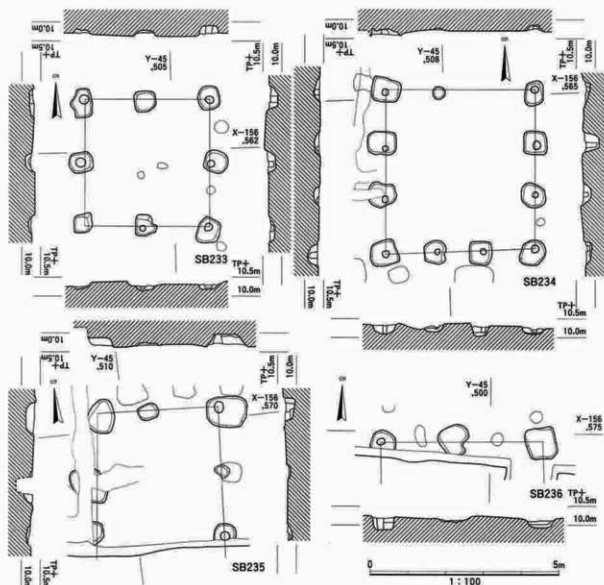


図48 SB233～236実測図

SB235(図48、図版11) SB234の南に位置する建物で、方位はN4°Eである。桁行2間(3.4m)、梁行2間(3.0m)を確認した。桁行方向の柱列は調査区外南側へと続く。柱穴の形状は一辺0.5～0.8mの方形のものが多く、柱痕跡は直径0.15mである。柱間寸法は桁行方向で1.7mであるが、梁行の中央の柱穴は一方にかたよっており、バラツキが認められる。出土遺物は土師器・須恵器の細片があるのみで、時期は不明である。

SB236(図48) SB232の南に位置する建物で、方位はN1°Wである。東西2間(4.3m)を確認したのみで、南調査区外へと延びる。柱穴の形状は一辺0.7～0.8mの方形であり、柱痕跡は確認できたもので直径0.15mである。出土遺物は土師器・須恵器細片があるのみで、時期は不明である。

SB237(図46・49) Ⅲ区南東部に位置する建物で、方位はN16°Wである。桁行4間(7.2m)、梁行3間(5.2m)である。柱穴の形状は直径0.3～0.4mの円形で、柱痕跡は0.10～0.12mである。柱間寸法は桁行で1.7～2.0m、梁行はバラツキが大きく1.5～2.5mである。出土遺物は土師器・須恵器の細片がある。

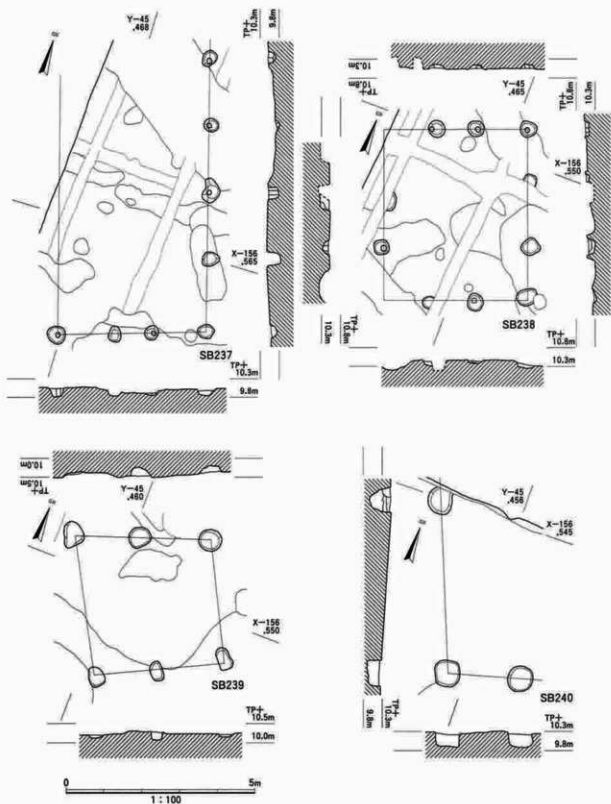


図49 SB237～240実測図

141は須恵器甕の口縁部である。口縁端部は上下に拡張する。TK23型式を前後する型式のものであろうが、ほかの出土遺物は時期不明であり、建物の時期を示さない可能性がある。

SB238(図49) SB237の北側に位置する建物で、方位はSB237とほぼ同じくN20°Wである。桁行

3間(4.5m)、梁行3間(4.0m)である。柱穴の形状は直径0.35～0.40mの円形のものが多く、柱痕跡は直径0.10～0.13mである。柱間寸法は桁行で1.5m、梁行で1.3～1.4mである。出土遺物は土師器・須恵器の細片があるのみであるが、6世紀末葉～7世紀初頭のSD219に切られている。

SB239(図49) SB238・240に挟まれる位置にある建物である。桁行2間(3.5m)、梁行1間(3.5m)で、方位はN69°Wである。梁行方向の柱間寸法が長いことから妻柱が失われた可能性が高い。また、平面形は正方形に近いことから総柱の建物で床東も失われたと考えることもできよう。方位はN69°Eである。柱穴の形状は直径

0.40mの円形あるいは楕円形のもの多く、柱痕跡は確認できたもので直径0.15mであった。土師器・須恵器細片が出土したのみで時期は不明である。

SB240(図46・49) IV区北東部に位置する建物で、方位はN20°Wである。南北4.8m、東西2.0mを確認したが調査区外に続くため規模は不明である。柱穴の形状は一辺0.65mの方形あるいは円形で、柱痕跡は確認できなかった。出土遺物は土師器甕・甕片、須恵器杯・甕片などがある。

138は須恵器杯身である。立上りは短く、口縁端部は丸くおさめる。TK209型式に属するものであろう。

SB241(図50) SB240の南に位置する桁行3間(4.5m)以上、梁行2間(4.0m)の建物である。方位はN64°Eである。柱穴の形状は直径0.40mの円形あるいは楕円形、一辺0.60mの方形などがある。柱痕跡は直径0.13mで、柱間寸法は桁行が1.5m、梁行は2.0mである。出土遺物は土師器細片があるのみで、時期は不明である。

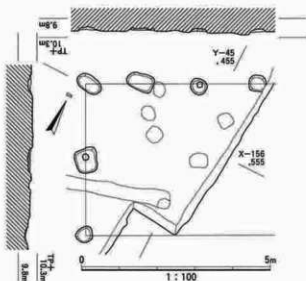


図50 SB241実測図

3) 櫓

調査地全域でさまざまな櫓を検出した。

SA201(図51) I区で検出した東で北に振る方位をもつ櫓である。東西32mにわたって柱穴14個がほぼ一直線に並び、東は調査区外へと続く。西には攪乱が位置するがそれより西には対応する柱穴は見られない。うち2個はSB207およびSB209の柱穴と重なるが、新旧は明らかにすることはできなかった。柱穴間の距離はおおむね2.0mあるいは2.5mを示すものが多い。遺存状況が悪く、柱穴の間隔が3mを越す西端の部分は間の柱穴が失われた可能性がある。柱痕跡は確認できたもので0.08mである。II区のSA202にはほぼ直交するがやや東で北への振れが大きい。また、検出した西端の柱穴が櫓の端であったとすれば、SA202の南北延長線上に位置する。出土遺物には土師器・須恵器細片があるのみで時期は不明である。

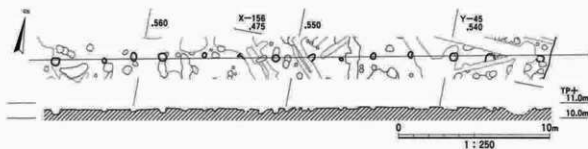


図51 SA201実測図

SA202(図52・53・55、図版12・17) II区南西部で検出した北東にコーナーをもつ櫓である。南北方向で16間(27.5m)分、東西方向で9間(15.7m)分を確認した。西はさらに調査区外へ続くが、南には対応する柱穴が認められず途切れている。この部分が櫓の南限となるのか入口のような開口部であるのかはわからない。柱穴の形状は一辺0.45～0.65mの隅丸方形あるいは円形を呈するものが多く、柱痕跡は直径0.12～0.15mである。柱間寸法は1.6～1.8mでほぼ均等に割付けられているようである。TK208型式の須恵器が出土したSK216を切り、出土遺物には土師器甕、須恵器杯・甕などがある。

144～147は須恵器である。144・145は杯身で、ともに立上がり端部は内傾するが、144はやや短い。146は無蓋高杯である。口縁部は外反し、口縁部からやや下がった位置に断面三角形の2条の突帯を有する。器壁は薄い。147は甕の口縁部である。口縁部は上方に拡張しており、端部は丸くおさめる。端部外面はヨコナデにより凹線状に凹む。

149は製塩土器である。口縁部は内傾し、内外面にはナデ調整が施されている。

これらの遺物のうち、須恵器145・146はTK23型式に属する。図化できなかった甕の体部片も多くが内面の当て具痕を消されており、出土遺物の大半がこの時期に属している。ただし、147はMT15型式に降るものであり、図化できなかった須恵器杯蓋で、天井部と口縁部との間の稜が鈍いものも含まれる。また、1点ながら底部へラ切り後未調整の須恵器杯身片と推定されるものが出土しており、混入でないとすれば時期は7世紀代まで降ることになり、SA202を囲むように位置する溝群と近接した時期となる。

SA203(図52・53・55、図版17) SA202の南に位置する東西方向の弧状の櫓である。柱穴6個か

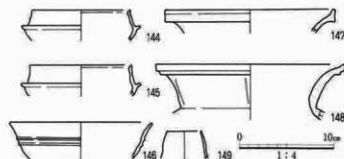


図52 櫓出土器

SA202(144～147・149)、SA203(148)

らなり、全長5.6mである。西には擾乱があるためもう1間延びる余地がある。柱穴の形状は直径0.4mの円形で、柱痕跡は直径0.10mである。柱間寸法はおおむね1.2mであるが、1箇所のみ0.9mと狭い。SA202の途切れた部分に位置することから両者は一連のものかもしれない。出土遺物は土師器・須恵器の細片が多いが、東より2個目の柱より須恵器

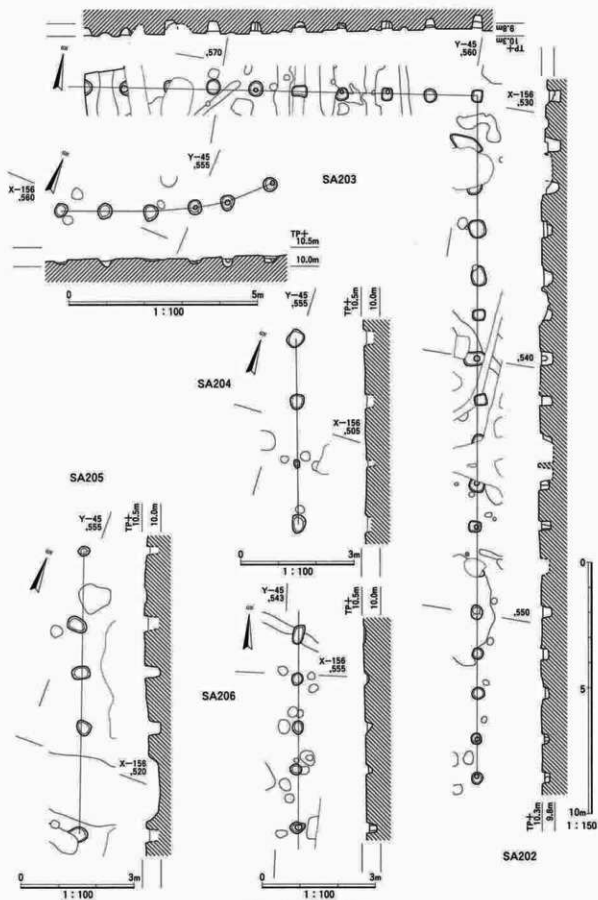


图53 SA202~206实测图

堯148が出土した。

148は頸部以上がほぼ残存している。口縁外面には平坦な面があり、直下には突帯が巡る。頸部に2箇所縦方向のヘラ記号がある。MT15型式に属するものである。時期のわかる遺物はほかには出土していない。

SA204(図53) II区SB212とSB213の間に位置する南北方向の構である。3間(5.0m)分を検出した。方位は北で西に振っており、これらとはほぼ同方位である。柱穴の形状は直径0.4mの円形もしくは隅丸方形で、柱痕跡は確認できなかった。柱間寸法は1.7mであろう。出土遺物には土師器・須恵器の細片があるのみで時期は不明である。

SA205(図53) SB216の西に位置する南北方向の構である。方位は北で西に振っており、SB216よりさらに西に振る。南北5間分(7.5m)を確認した。南より2個目の柱穴は攪乱のため失われていた。北方向は攪乱のため不明であるが、もう2間分延びる可能性がある。柱穴の形状は直径0.25~0.45mの円形あるいは楕円形で、柱痕跡は確認できなかった。柱間寸法は1.3~2.0mとバラツキがあるようである。出土遺物には土師器細片、須恵器片があるのみで、時期は不明である。北延長線上にはSB212の西柱筋が位置している。

SA206(図53、図版12) II区南東端に位置する。方位が北でわずかに西に振る南北方向の構である。南北4間(5.2m)分を確認した。柱穴の形状は直径0.25~0.30mの円形が多く、柱痕跡は確認できなかった。柱間寸法は1.0~1.5mである。出土遺物には土師器・須恵器の細片があるのみで、時期は不明である。

以上の構のうちSA204~206は長さも短く、遺存状況も悪いことから建物の柱列の可能性も否定できない。

4) 溝

各調査区でさまざまな溝を検出した。ここでは時期のわかるものおよび特徴的なものについて報告することにする。

SD201(図54) I区南西に位置する弧状の溝である。最大幅1.2mで、深さはもっとも深いところで0.2mを測る。出土遺物は多くないが、土師器・須恵器片のほか格子タタキが施された瓦片が出土している。

151は土師器甕である。体部の調整はユビオサエで、口縁部にのみナデ調整を施している。156は須恵器杯Bである。高台は底部の端からやや内側に位置し、外方に開く。157は須恵器壺の高台部と考えられる。高台径に比して高さがある。高台端部は水平な面をもち、外方に拡張する。162は平瓦片で、赤褐色を呈している。凸面には格子状のタタキが施されており、凹面には布目痕を残す。端部にはいいないなケズリ調整が行われている。

これらの出土遺物には時期幅が認められ、156は8世紀代、162も7~8世紀代と推定されるが、151は平安京Ⅱ期新段階に属することから遺構の時期は10世紀前半以降であろう。

SD202 I区南部に位置する幅0.30~0.35m、もっとも深いところで深さ0.15mの溝である。方位

はSB203・204・206などにはほぼ一致する。遺物には土師器・須恵器の細片があるので、時期を決することはできない。

SD203 II区北西部に位置する幅0.4m、深さ0.10mの溝である。方位は北で西に振り、9.5m分を確認した。遺物は土師器・須恵器片があるので時期は不明である。

SD204(図54) SD203の東に位置し、方位は北で西に振る溝である。南端はやや西へ屈曲しており、形状はSD216・217と似ている。幅はもっとも広いところで1.1m、深さは0.2mである。北側は黒色土器片を出土した土壌によって切られている。遺物には土師器・須恵器がある。

150は土師器杯で口縁部から体部にかけての屈曲は大きい。体部以下の外面の調整はユビオサエで、口縁部は幅の広いヨコナデ調整を施している。口縁端部は丸くおさめ、内面には沈線が巡る。沈線状の凹みは端部からやや下がった位置にも認められる。154は須恵器杯B蓋である。かえりの端部は受部とほぼ同じ高さにある。これらはおおむね飛鳥Ⅲ～Ⅳに属するものであろう。

SD205 II区北西部に位置する溝で、方位は東で北に振る。幅0.3～0.6mで、深さは0.08mである。遺存状況が悪く東側は明らかでない。出土遺物には土師器甕、須恵器杯・甕などがある。細片が多く

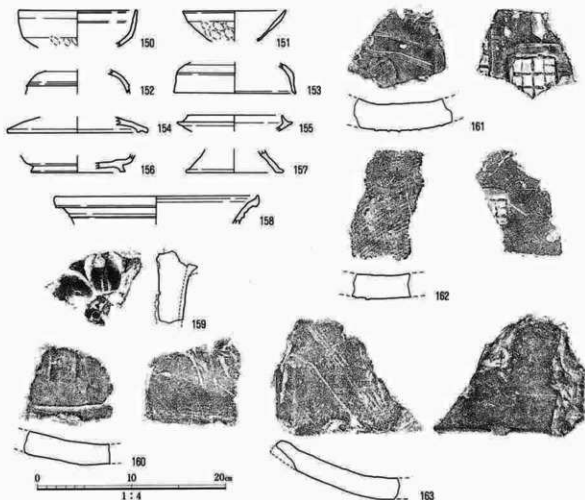


図54 溝出土土器・瓦(1)

SD201(151・156・157・162)、SD204(150・154)、SD206(161)、SD208(153・159・160・163)、SD213(155)、SD214(152・158)

図化していないが、TK43型式を前後するものであろう。

SD206～208(図54、図版20) 方位は北で西に振っており、おおむね平行する3条の溝である。いずれも幅0.5m前後、もっとも深い部分で深さ0.2mである。SD206は17m、SD207は7.5m、SD208は一部途切れるものの20.7mを確認した。SD208の北部は別の南北方向の溝と重複しているが、先後関係は明らかでない。出土遺物は少ない。

161はSD206出土の平瓦片である。須恵質に焼き上がっており、凸面には格子状のタタキが施されている。凹面はていねいなケズリ調整が施されており、布目痕は部分的に凹んだ場所のみ残っている。153・159・160・163はSD208から出土した。153は須恵器杯蓋で、天井部と口縁部との間には凹線が巡る。TK10型式であろう。159は素弁八葉蓮華文軒丸瓦である。須恵質に焼成されており、胎土は緻密である。丸瓦部との接合面で剥離しており、接合面には丸瓦凹面にあった布目痕が残る。160・163は平瓦で、ともに土師質である。凸面はていねいなケズリ調整が行われており、内面には布目痕が残る。このほかに須恵質の焼成で、凸面に161と同様のタタキが施されたものも出土している。また、土師器には挽があるが、磨滅しており調整などは不明である。

SD206～208は瓦からみて7世紀後半以降に位置づけられるものであろう。

SD209・210 II区西部にある東西方向の溝で、西側は調査区外へ続く。SD209はやや蛇行している。ともに幅は0.40mで、深さは約0.10mである。SD209からは遺物が出土せず、また、SD210も土師器・須恵器の細片が出土したのみで時期は不明であるが、SD206に切られることから7世紀代と考えられる。

SD211 II区西部で検出した南北方向の溝である。幅0.3m、深さ0.1mで、10.2mにわたって確認した。土師器・須恵器片のほか瓦器の細片が出土した。

SD212・213(図54) II区北部に位置する方位が北で西に振る溝である。両者は同一直線上に位置するが、結合する部分ではともに向きを変えており、連結していない。幅は0.6mで深さは0.3～0.4mあり、今回検出した溝の中では深いものである。途切れる部分の幅は0.6mあり、遺構の削平を考慮するとごく狭いことから、通路とは考えがたい。なお、SD213の南の延長線上にはSD214が位置しており、出土した土器の時期は異なるものの、元来は同一遺構であった可能性がある。出土遺物には土師器・須恵器があるが量は多くない。そのうち155は須恵器杯身で立上がりは短い。飛鳥Ⅱに属するものであろう。

SD214(図54) SD213の南に位置しており、方位はSD213と同じである。幅は広いところで0.9m、深さは0.05m未満と浅い。土師器・須恵器片が出土した。

152は須恵器杯蓋で、天井部はやや丸みを帯びている。158は須恵器甕である。口縁端部をつまみ上げており、頸部には断面三角形の低い突帯が巡る。これらの須恵器はTK23～47型式に属するものである。

SD214のさらに南にはSD217がある。途中には溝の残欠らしい凹みも認められることから、一連の遺構かもしれない。

SD215(図55・56) III区西部のSA202の北側に平行する溝である。幅1.2mで、深さは0.08mある。

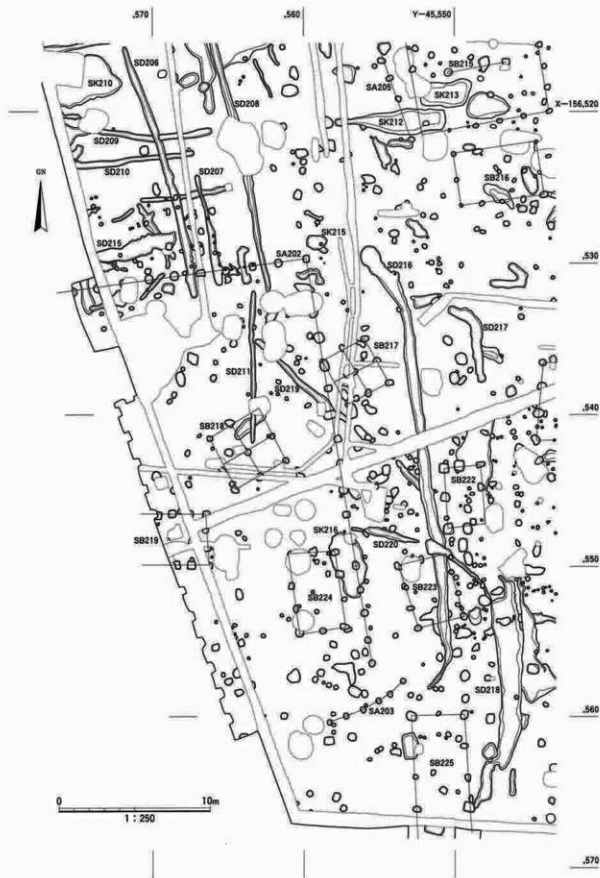


図55 SA202と溝群の関係

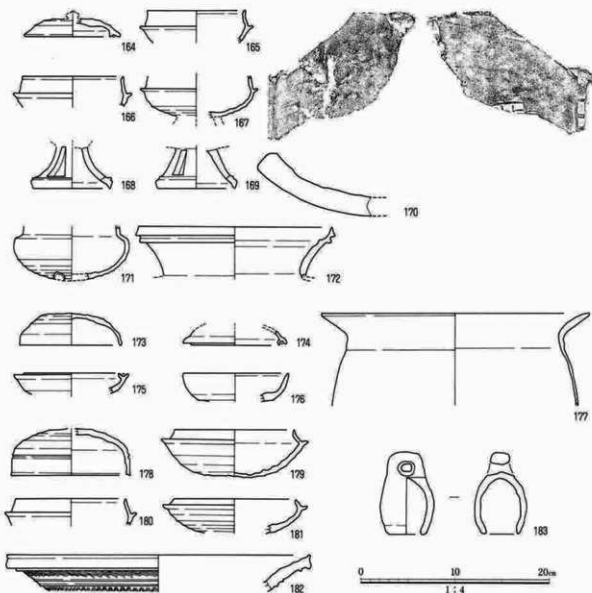


図56 溝出土土器・瓦(2)

SD215(164~172)、SD216(173~176)、SD217(177)、SD218(178~183)

位置関係からSD216やSA202と関連した区画に伴う溝の可能性がある。土師器・須恵器が比較的多く出土した。

164は須恵器杯G蓋である。器壁は厚く、かえりの断面にはい三角形である。165・166は須恵器杯身で、立上がりは長く、端部は内傾した面をもつ。体部は丸みがあると推定される。167~169は須恵器有蓋高杯で、脚部168・169には長方形のスカシ孔を穿つ。171は小型の須恵器壺である。口径に比して体部の張りは小さく、最大径は体部上端に近い位置にある。172は須恵器甕で口縁端部を上下に拡張しており、外方には面をもつ。端部直下には丸みを帯びた1条の突帯が巡る。

170は須恵質の平瓦片である。凸面には格子状のタタキが施されており、凹面には布目痕が残る。端部はていねいなヘラケズリが施されている。

出土した須恵器のうち164・170を除いてTK23~47型式に相当し、出土遺物の多くはこの時期のものである。ただし、164・170は飛鳥Ⅱ~Ⅲに属するものであり、遺構の時期は7世紀中~後葉で

あると考えられる。平瓦片は7世紀後半以降のものであろうが、溝という性格から考えると埋没時期の下限を示すのであろう。

SD216(図55・56) SA202の東に位置し、同方位をもつ溝である。南北端ではSA202のコーナーおよび南で途切れる部分に沿うように西側に緩く屈曲する。幅0.8m前後で、深さはもっとも深い部分で0.3mある。埋土は細粒砂～シルトである。遺物には土師器・須恵器がある。

173は須恵器杯H蓋で、口縁端部は丸くおさめる。外面には緑色の自然釉が附着している。174は須恵器杯G蓋でかえりは外方に湾曲し、端部は鋭く受部より下位に位置する。175は須恵器杯Hで立上がりは短く器高も低い。176は須恵器杯Gで、底部はヘラ切り後未調整である。体部から口縁部へはなだらかに移行する。

これらの須恵器は飛鳥Ⅱに属するものである。

SD217(図55・56) SD216の東に位置し、同様な形状であるが方位の振れはやや小さい。幅はおおむね0.6mで、南部では2.1mと広くなる。深さは0.15mである。土師器・須恵器片が多く出土したが、時期のわかるものは少ない。

177は土師器甕で、口縁部は直線的に大きく外方に開く。全体に磨滅しているが口縁部に比べて体部の器壁は薄い。須恵器には図化していないがTK209型式に属する高杯がある。また、1点のみであるが須恵器杯Bとみられる底部の小片が出土しており、遺構の時期は飛鳥Ⅲで、7世紀後葉まで降る可能性がある。

SD218(図55・56) SD217の南に位置する溝で、SD216に類似している。幅は広いところで0.8m、深さは0.3mである。出土遺物には土師器・須恵器がある。

178は須恵器杯蓋である。天井部は丸く、口縁部との間の稜は低く鈍い。179～181は須恵器杯身である。179の立上りの端部は丸く、180の端部内面には浅い沈線が巡る。181は立上りが短く内傾する。焼成は不良である。182は須恵器甕で、口縁端部は上下に拡がる。口縁部直下に1条、やや下がった位置に2条の突帯が巡り、突帯を挟んで櫛描き波状文が施されている。また、図示していないが、有蓋高杯の蓋があり、つまみは扁平で、中央部が凹む。183は土師質の飯蛸壺である。吊手の形状は幅広で、頂部は平坦である。

これらの遺物は178がTK47型式にさかのぼるほかはTK209型式の特徴をもつ。図化できなかった遺物にもこれより新しいものは認められない。ただ、SD216・217との関係からみて遺構の時期は飛鳥Ⅱ以降に降ると思われる。

SD219 II区南部に位置する北西～南東方向の溝である。SD216およびSA202に切られている。幅は0.4mで、深さは0.1m未満である。一部途切れるが、7.5m分を確認した。土師器・須恵器片が出土したが時期のわかるものは少ない。

土師器には甕がある。図化していないが、口縁部は小さく外反しており、上端は水平な面をもつ。内面には縦方向の粗い板ナデ調整が施されている。また、TK10型式と推定される須恵器杯蓋がある。焼成はやや不良で、口縁端部は内傾する。天井部と口縁部との境の稜はごく小さく、ナデによって区別される。

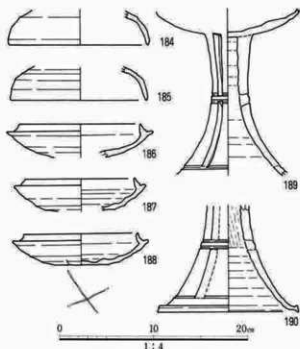


図57 SD221出土土器

184・185は須恵器杯蓋、186～188は須恵器杯身である。188の焼成は不良である。188の底部には「+」のヘラ記号が認められる。189・190は長脚2段の須恵器高杯である。脚部の中程には2条の凹線が巡り、それを境として上下2段、三方向に長方形のスカシ孔を穿つ。脚端部は上下に拡張しており、外側には面をもつ。SD221からはほかに須恵器甕などが出土しており、須恵器はTK209型式に属する。

5) 土壌

いずれの調査区でも大小さまざまな土壌を検出した。ここでは、時期の推定できる遺構および比較規模の大きな土壌について記述することとする。

SK201(図58) I区西部に位置する土壌である。最大長2.4m、深さ0.18mである。土師器・須恵器片が少量出土した。

205は須恵器壺の底部であろう。脚端部は外方に開き、上下に大きく拡張する。

SK202 I区中央北部に位置しており、弥生時代のSK101を切る。幅約0.7mで「L」字状に屈曲する土壌である。屈曲部付近がもっとも深く0.6mを測る。壁面にはオーバーハングする部分が認められる。遺物は少量の弥生土師・土師器が出土したのみである。形状や埋土のようすから風倒木痕の可能性はある。I区では類似した形状の土壌がほかにも検出されている。

SK203 SK202の南に位置する土壌で、長軸方向の方位は東でわずかに北に振り、ほぼSK204に直行している。長さ4.8m、幅は最大で0.85mであるが、深さは0.15mと浅い。遺物には土師器・須恵器小片があるのみで時期は不明である。

SK204(図58) I区東部に位置する南北方向の土壌である。北部ではやや西に振れる方位をとる。

SD219の方位はほかの遺構に比べて異質である。建物で似た方位のものにSB214があり、推定される時期もほぼ似通っている。

SD220 SD219の南に位置する弧状の溝で、SD216を切る。幅0.2～0.5mで、深さはもっとも深い部分で0.2mである。遺物には土師器甕、須恵器杯・甕などがあるが時期のわからないものはない。SD216との関係から飛鳥時代以降であろう。

SD221(図57・図版20) IV区で検出した北西～南東方向の溝である。方形周溝墓2を横断して掘削されている。幅0.8～1.3mで、深さは0.3mである。埋土は暗褐色の含礫シルトである。東方では2条の溝がつながった形状を示す。土師器・須恵器が比較的多く出土した。

長さ4.3m、幅0.6mで、深さは0.2mある。土師器細片、須恵器杯・甕などが出土した。

201は須恵器杯Hで焼成は不良である。立上がりは短く内傾する。飛鳥Iに位置づけられる。

SK205(図58) II区北西端に位置する土壌である。東部を擾乱によって失われるが、南北長約1.5mの楕円形であったと思われる。深さは0.2mある。瓦器碗191が出土した。

191は外面にていねいな横方向のヘラミガキ調整を施した瓦器碗である。内面の暗文は内底面が一定方向、体部は横方向である。高台は直径が大きく、断面台形で、外方へ開く。平安京IV期新段階、11世紀中頃～後半に相当するものであろう。

SK206(図58) II区北端、SD212の東に位置する土壌である。長さ1.9m、幅0.6mの長方形を呈し、

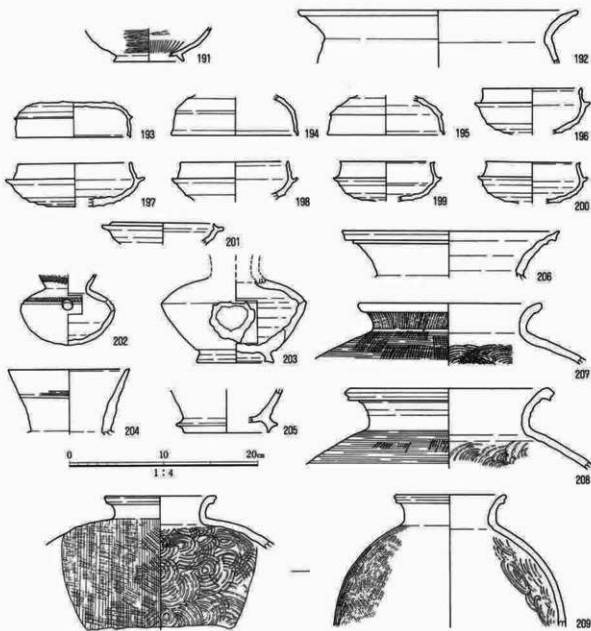


図58 古墳時代以降の土壌出土土器

SK201(205)、SK204(201)、SK205(191)、SK206(207)、SK207(208)、SK208(198)、SK209(193・202)、SK210(195・196)、SK212(197・200・206)、SK213(192・194・199・204)、SK215(209)、SK217(203)

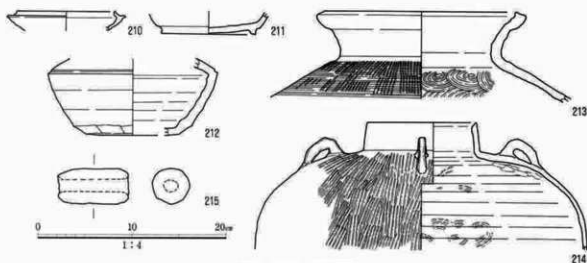


図59 SK211出土土器

深さは0.2mである。土師器・須恵器片が出土した。

207は須恵器甕である。口縁部は外反しており、端部はわずかに肥厚して丸くおさめる。口縁部直下までタタキ整形のあとが残る。7世紀代のものであろう。

SK207(図58) SK206の南に位置する長径約1.0mの楕円形の土壌である。深さは0.2mである。須恵器甕208が出土した。

208は口縁端部が外方に肥厚しており、断面は方形である。外面はタタキ整形のあとカキメ調整を施している。6世紀後半に属すると思われる。

SK208(図58) II区北西部に位置する南北に細長い土壌である。南北3.5m、東西0.8mで、深さは0.10mある。土師器・須恵器片が少量出土した。

198は須恵器杯身である。立上りは長く、端部は内傾する段をなす。体部は丸い。TK23型式に属する。

SK209(図58) SK208の南に位置し、SD205に切られる。長さ1.5m以上の不整形な土壌で、深さは0.08mある。須恵器杯蓋・甕のほか製塩土器の細片が出土した。

193は須恵器杯蓋である。天井部は平坦で、口縁端部は内傾して面をなす。202は須恵器甕である。体部の最大径は上半部に位置し、最大径よりやや上に沈線と櫛描波状文が施される。これらの須恵器はTK208型式に属する。

SK210(図58) II区北西部に位置する土壌である。長さ4.3m以上で、西は調査区外へと続いている。深さはもっとも深いところで0.28mである。出土遺物には土師器甕、須恵器杯・高杯・甕などがある。

195は須恵器杯蓋で、口縁部は外方に拡がり、端部は内傾する。天井部は丸い。196は須恵器杯身で体部は丸い。受部の上端は水平で、口縁端部は内傾する。

これらの須恵器はTK23型式に属する。図示しなかったほかの遺物も同型式であり、5世紀後葉の土壌といえる。

SK211(図59) SK210の東に位置する不整形な土壌である。見掛け上は幅2.5mの「L」字状を呈す

る。南北方向での全長は約7mであるが、深さは0.3mと規模のわりに浅い。土師器・須恵器が多く出土したが、量的には須恵器の方が多く、甕や壺などの大型品が多数を占める傾向がある。

210～214は須恵器である。210は杯Hで立上がりは短く内傾する。211は杯Bで、高台の端部は内傾する。212は壺あるいは平瓶の体部である。体部上半から下半へは明瞭な屈曲をもって移行し、境には1条の沈線が走る。底部は未調整で、体部との境には手持ちヘラケズリを施している。213は甕で、口縁端部をつまみ上げられており、外方には平坦な面がある。214は四耳壺で、体部は大きく張る。半環状の耳の断面は長方形である。口縁部は直線的に立上がり、端部は内傾する。体部内面の当て具痕はていねいにナデ消されている。体部上半には緑色の自然釉が付着している。

215は土師質の管状土鍾である。長さ7.5cm、孔径は10mmで、重さ137gである。

これらの遺物は210が飛鳥時代にさかのぼるものの、おおむね平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属する。

SK212(図58) SK211の南東に位置する土壌である。東西7.3m、南北1.7mである。西端は浅い溝状を呈する。深さは0.25mである。遺物はおもに東側よりまとまって出土した。

197・200は須恵器杯身である。197は口径11.7cmで、立上りの端部を丸くおさめる。200は口径9.8cmと小さく、立上りの端部は内傾する。体部は丸い。206は須恵器甕で、口縁端部を上下に拡張し、口縁部直下には断面三角形の突帯が1条走る。

これらの須恵器は200・206がTK23型式にさかのぼるが、197はTK10型式に属するものであることから、遺構の時期は6世紀中葉以降であろう。

SK213(図58) SK212に隣接する土壌である。北西部を擾乱によって失うが、東西約3.0m、南北1.5mの楕円形で、深さは0.3mある。土師器・須恵器片が出土した。

192は土師器甕である。外反する口縁端部は丸くおさめる。調整は磨滅しており不明である。194は須恵器杯蓋である。口縁部は外方に開き、端部は内傾する。199は須恵器杯身である。立上りの端部は内傾し、体部は丸い。204は須恵器平瓶の口縁部であろう。口縁部中程には不明瞭な沈線が1～3条走る。口縁端部は丸くおさめる。内面には自然釉が付着する。

これらの遺物のうち194・199はTK23～47型式に比定できるが、204は飛鳥時代に降るものであることから、遺構の時期は7世紀以降と考えたい。

SK214(図60・61、図版13・18) SK213の東に位置する円形の土壌で、直径3.2m、深さは0.45mある。土師器・須恵器が多く出土した。

216～226は土師器である。216～220は甕で、大小バラエティに富む。216～218は口縁端部がわずかに肥厚し、端部は面をもつ。磨滅しており、明瞭でないものもあるが内外面ともにハケ調整を施している。217の内面にはユビオサエが施される。219は内外面ともハケ調整で、口縁端部は丸くおさめる。220は小型の甕で、扁球状の体部に端部が肥厚する口縁部をもつ。外面はハケ調整、内面は体部にユビオサエが残

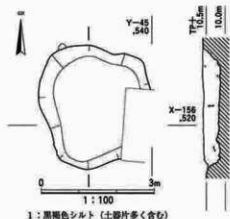


図60 SK214実測図

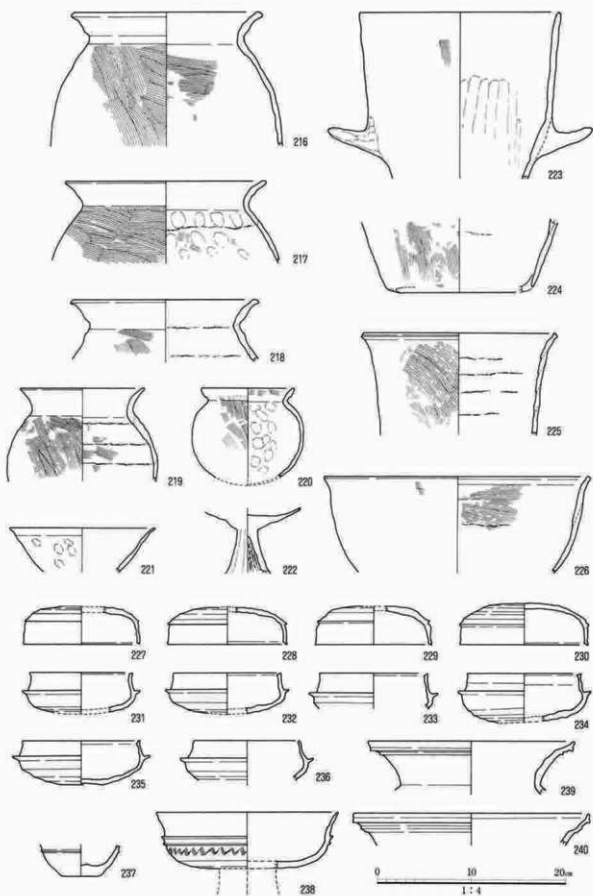


图61 SK214出土土器

り、口縁部にはハケ調整を行っている。221・222は高杯である。221はわずかに内湾する体部に外反する口縁部を有する。器面にはユビオサエが残る。222は脚部から杯部にかけての個体であるが全体にひずみが多い。脚部内面にはシボリ痕が顕著に認められる。223～225は瓶である。223は口縁部が直線的に伸びるものである。把手の形状は舌状である。磨減が著しいが体部外面はタテハケ調整、内面は縦方向の強いナデ調整が施されている。224は体部下端から底部の破片である。蒸気孔の一部が遺存しているが形状や数は不明である。225は体部上半から口縁部の破片である。復元される口径は小さい。口縁部は外反し、上端は断面「M」字状に凹む。外面はハケ調整で、内面には粘土の接合痕が顕著に残る。瓶片はほかにも出土している。226は鉢である。口縁部は緩く外方に開き、端部は丸くおさめる。内外面ともにハケ調整が施されている。

227～240は須恵器である。227～230は杯蓋で、いずれも天井部は低い。天井部と口縁部との間の稜は鋭く、口縁端部は内傾する。231～236は杯身である。いずれも立上りが長く伸びる。口縁端部は丸くおさめる236を除いて内傾する。237は把手付碗の底部であろうか。平底で、体部には1条の突線が巡る。238は無蓋高杯である。杯部口縁は外反し、底部は平坦である。2条の突帯が巡り、突帯下には櫛掻波状文が施されている。239・240は甕である。いずれも口縁端部は上下に拡張しており、外端面は凹む。口縁部直下には断面三角形の突帯が巡るが、240はやや幅広である。甕はほかに図化できなかったが体部片が多くあり、すべて内面の当て具痕はていねいにナデ消されている。

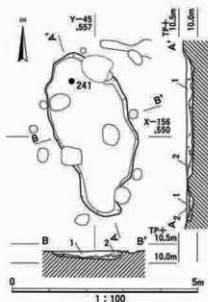
これらの須恵器は一部降る要素は認められるもののおおむねTK208型式に属するものであり、5世紀中葉の土壌と考えられる。

SK215(図58) SA202の北東コーナー付近に位置する直径0.6m、深さ0.2mの土壌である。須恵器横瓶209が出土した。短く外反する口縁端部は肥厚しており、外面はナデによってわずかに凹む。整形は体部上半以上が縦方向、体部下半から底部は不定方向のタタキを施しており、体部以上はカキメ調整がなされている。6世紀代のものであろう。

SK216(図62・63、図版13・19) II区南西部に位置する土壌で、SA202によって切られる。南北3.8m、東西2.0mで平面形は南北に長い楕円形である。深さは0.40mで、埋土には炭を多く含む。土師器・須恵器のほか製塩土器、輪羽口、鉄滓などが多量に出土したことから、鍛冶活動に係わる遺構の可能性が高い。

241・242は土師器甕である。241の口縁部は外反する。口縁部内面と体部外面はハケ調整が施され、体部内面は強い板ナデ調整と思われる。242の口縁部は内湾し、端部は肥厚し内傾する面をもつ。内外面ともにハケ調整が施されている。布留式甕の系統を引くものであろう。

243～245は須恵器である。243は杯身で、立上りの端部は丸くおさめる。杯部は深い。244は有蓋高杯で、杯部は浅い。



1: 黒褐色シルト (土器片・鉄滓・炭など多く含む)
2: 黒褐色シルト～粘土 (堆山角礫多く含む)

図62 SK216実測図

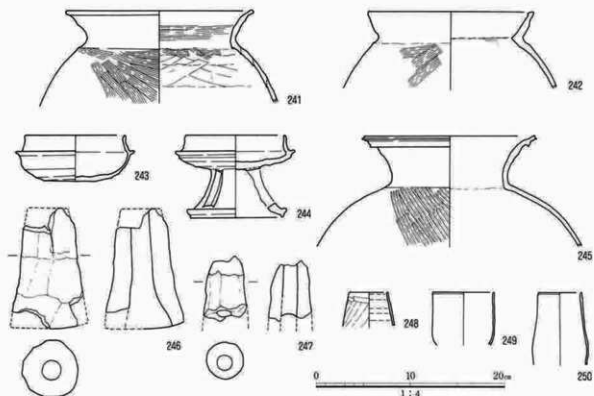


図63 SK216出土土器

立上がりは長く上方に伸びる。脚部には三方向に長方形のスカン孔があり、脚端部は上下に拡張し、外面はナデによって凹む。245は甕である。口縁端部は断面「M」字状に凹み、直下には断面三角形の突帯が1条巡る。体部内面の当て具痕はていねいにナデ消されている。

246・247は轆羽口である。246はほぼ全体のわかる個体で、全長は12.8cmある。先端から基部へ拡がる。孔は先端から3分の2まではほぼ同じ径であるが、そこから基部に向って拡がっている。先端3分の1ほどは変色しており、炉中にあったものと推測できる。胎土は砂礫を多く含む。轆羽口はほかにも多数出土している。

248～254は製塩土器である。口径が体部径より小さい砲弾形を呈するものである。図示したものは体部の調整がユビオサエあるいはナデ調整によるもので、出土した製塩土器のほとんどはこの手法によっている。ただ、253・254のように少量ながらタタキ整形のものもある(図版19)。胎土は精緻で、灰白～ピンク色のものが多いが、雲母片を含み暗褐色を呈するものも含まれる。

これらの出土遺物のうち、須恵器はTK208～23型式に属することから、土壌の年代は5世紀中～後葉と考えられる。

SK217(図58・図版19) Ⅲ区東部に位置する南北4.0m、東西1.2mの細長い土壌である。深さは0.3mある。土師器・須恵器片が出土した。

203は須恵器壺で、頸部以上を欠損する。肩部に明瞭な稜をもつ。体部下半には焼成後の穿孔が認められる。平城宮土器Ⅱに属するものであろう。

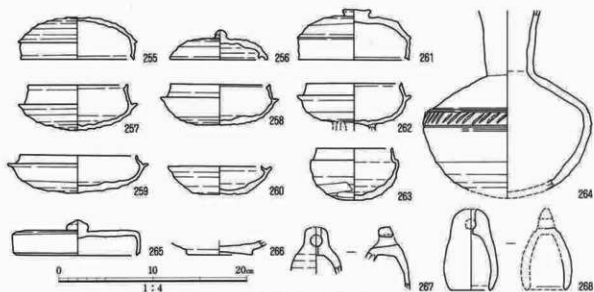


図64 その他の出土土器

6) その他の遺構出土遺物(図64、図版20)

ここでは前項で記した遺構以外から出土した遺物および包含層から出土した遺物のうち特徴的なものを記す。

255は須恵器杯蓋である。天井部は丸く、口縁部はわずかに内傾する。TK208型式であろう。256は須恵器杯G蓋である。小さな宝珠つまみがつく。飛鳥Ⅱに属するものである。

257・258は須恵器杯身である。高杯蓋261とともにⅡ区中央西端部において、SA202を挟むような範囲で包含層より出土した。257は丸い体部で立上がりは長く伸び、立上がり端部は大きく内傾する。258は257に比べて底部がやや平らで立上がりも短い。高杯蓋261は扁平で中央がいくぶん凹んだつまみが付けられている。天井部は丸く、口縁部との間には明瞭な稜がある。これらの須恵器はTK23型式に属する。図化していないがほかにも完形に近い須恵器が数個体出土したことから、調査時には認識できなかったものの、この付近に5世紀後葉の遺構があった可能性が高い。

259は須恵器杯Hで立上がりは短く内傾する。口径は11.8cmで、飛鳥Ⅰに属するものであろう。260も須恵器杯Hで立上がりは短く内傾する。底部は平坦である。飛鳥Ⅱ～Ⅲに属するものであろう。262は須恵器有蓋高杯で、脚部を欠損する。TK23～47型式であろう。263は須恵器碗である。体部は半球形で口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。底部には手持ちヘラケズリが施されている。いわゆる初期須恵器に属するものであろう。264は須恵器細頸壺である。体部の中程に最大径があり、2条の凹線文とその間に櫛描刺突文を配している。飛鳥Ⅳを前後する時期のものであろうか。265は須恵器壺A蓋である。天井部は平坦で、口縁端部は段状に外傾する。緑色を呈する自然釉が付着している。平城宮土器Ⅲ前後に属するものであろう。266は緑釉陶器碗の底部で、Ⅰ区の包含層より出土した。須恵質の胎土で、全面に黄緑色の釉が施されている。9世紀代に属するものであろう。267・268は飯蛸壺で267は須恵質、268は土師質である。268は吊手が体部に比して大きく、吊手から体部へは緩やかに移行している。

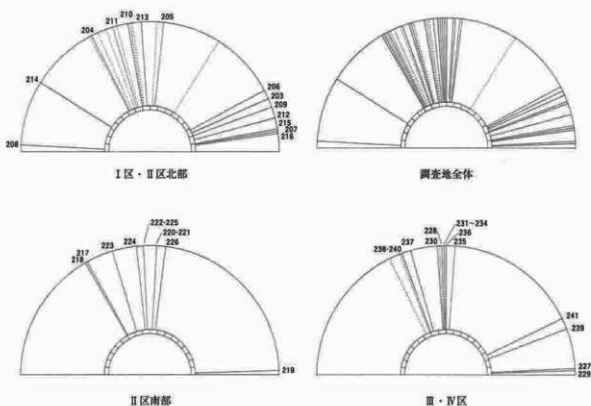


図65 建物群の方位(数字は建物番号を示す)

7) 古墳～奈良時代の建物群について

前項までに記したように今回の調査地では多数の掘立柱建物を始めとして、櫓・溝・土壇などの古墳～奈良時代に位置づけられる遺構を多数検出した。しかしながら、ほとんどの遺構において時期を決定するだけの遺物が出土しておらず、遺構単独では時期を確定しがたい。本項ではこれらの遺構相互の関連をみながら建物群の時期の推定を試みたい。

i) 建物群の時期推定

今回検出した建物方位を示したものが図65である。Ⅱ区は南北に分けて図示したが、これはⅡ区が南北に細長いこと、およびさまざまな方位をもつ多数の建物が検出されたためである。また、一連の溝であった可能性がある南北方向のSD213・214・217などの方位がⅡ区の中央部で変化していることによる。なお、点線で示したものは北より45°以上方位の振るものを90°北方向に回転したものである。これは直交する方位の建物は同方位が基準になったと考えられることによる。図示したように建物群は正方位から10°以内に集中するものと、北で西に振るものの大きく2グループに分けることができる。ただしSB214はこれから大きく外れている。

Ⅲ・Ⅳ区ではほぼすべての建物が正方位に近い。方位の振れる建物はすべてⅣ区に分布しており、Ⅲ区には存在しない。Ⅲ区の建物では方位が正方位に近く、柱穴の形状は大型で整った方形を示すという共通性がみられ、建物形状も桁行方向に長大なものが多い。さらにSB231・232のように梁行方向の柱筋がほぼ揃う例がいくつかある。これらのことからⅢ区の建物群は同時期あるいは近接した時

期に建てられたと考えることができよう。このうちSB232は平城宮土器Ⅰに属する土器が出土したことから、8世紀初頭に推定できる。SB230からは飛鳥Ⅳ～平城宮土器Ⅰの土器が出土している。なお、SB231とSB232、SB233とSB234、SB227とSB228の各建物は近接した位置にあり、形状も類似することから建替えが十分考えられる。また、Ⅱ区に位置する南北方向のSB224からは平城宮土器Ⅱの時期の土器が出土している。これらのことからⅢ区に位置する正方位に近い方位の建物群の時期をまず7世紀末葉～8世紀前半と考えておきたい。

正方位の建物はⅡ区においても認められる。SB213・219～222・224～226などである。このうちもっとも方位が振れるのは北で6°西に振るSB224である。これらの建物群もⅢ区の建物群と同様、柱穴の形状は大きく、比較的整った方形を呈している。柱穴出土の遺物はSB219から飛鳥Ⅲ～Ⅳ、SB224から平城宮土器Ⅱに属する土器が出土した以外は、飛鳥時代前葉以前に属する遺物である。遺物のみからは、Ⅲ区より古い様相を示しており、正方位の建物群がそれ以前にさかのぼる可能性は否定できない。しかしながら、Ⅱ区で検出した大規模なSA202とそれを囲むように位置するSD215～218は注目される。SA202からは飛鳥時代の遺物は確認されなかったが、周囲の溝より飛鳥Ⅱ～Ⅲに属する遺物が出土していることから、その年代は7世紀中～後葉に求められる。これらの遺構群の方位は北で10°西に振っている。規模も大きく、一定の計画のもとで造られた、集落の中でも核となる施設と推定され、正方位の建物群との併存は考えがたい。したがって、Ⅱ区においても正方位を指向する建物群の出現はこれらの施設が廃絶した以降、つまり7世紀後半以降を推定しておきたい。

次に、SA202に係わる遺構群について考えたい。SA202に関連する遺構には溝を取巻くように位置するSD215～218があり、いずれも同方位である。また、SD216・217の北に位置するSD212・213もつながりや出土遺物から同時併存の可能性がある。同時期であるとすれば、基準となる方位がⅡ区の南北で異なっていたものと推定される。これは微地形にあわせてものであろうか。SD212・213と同方位の建物には正方形に近い建物であるSB211・212があり、SA204・205も同方位である。SA204はSB211・212の間に位置しており、東側柱筋とはほぼ一致する。SA205はSB212の西側柱筋と一致することからこれらが同時期であった可能性は高い。さらにⅠ区にはSD212を北に延長した部分に溝状の浅い凹みがある。Ⅰ区のSA201はこの凹みまで延びており、SA201まで含めて一群と考えることもできるが、溝群との角度が地形の傾斜とは逆に鋭角となることから別の時期としておきたい。

これらよりもさかのぼる6世紀代の遺物を出土した遺構には6世紀後葉のSB223および6世紀末葉のSB240がある。これらの方位は、SA202やそれを取巻く溝群について北に近いものである。また、大型の掘立柱建物であるSB215の方位も近い。なお、SB215の方位はSA202や周辺の溝群とも同じであるが、これらの施設が方位を変える変換部分に位置しており、SA205と近接しているにもかかわらず、大きく方位が異なることから別と考えられる。また、建物に近接した位置に5世紀中葉の土壌および飛鳥時代の土壌があることから時期は6世紀代と覚えておきたい。柱穴から出土した遺物の時期も矛盾しない。SB215の南に位置するSB216も同時期であろう。なお、SA201はSB215と同方位であり、時期も同じ可能性がある。また、Ⅳ区南部のSB240も出土遺物から同時期とみられるもので、近接する建物群についても同時期かもしれない。

これらの建物群の時期は、後述する方位がさらに西に振れる建物から6世紀前半～中葉の遺物が出土したことと合わせると、6世紀後葉～末葉に求められるであろう。

以上よりさかのぼる時期のものとして、SB210からは、6世紀前半～中葉の土器が出土している。Ⅱ区南部のSB223も同方位である。また、堅穴住居SB201・202も出土遺物から同時期といえる。既述したⅣ区南部の建物群SB237・238・241も同方位であることから、この一群に含まれるものかもしれない。1棟だけ方位が大きく異なるSB214の時期も出土遺物からはこの時期と思われる。

以上のように考えると方位がさらに西に振るSB217・218などは5世紀までさかのぼる可能性があらう。今回の調査ではSK214・216など5世紀代の遺構のほか、当該期の遺物も全域で多く見つかり、それらの時期に相当する建物として位置づけられる。

以上、出土遺物と建物方位から建物群の時期を推定した。正方位から振れる建物は自然地形に応じた立地によるものとすれば、同一時期の建物が必ずしも同方位をとるとは限らないかもしれない。ただし、近接した位置でも異なる方位をとったり、離れた位置でも同方位をとるものがあるなど、自然地形のみの影響で個々に建物を建てたとは考えられず、時期ごとにある程度のまとまりはあったといえる。上記の推定は遺物からみても大きな矛盾はなく、個別の建物については若干の修正が必要なものもあるだろうが、おおよその傾向としては指摘できるのではないと思われる。以上を仮にⅠ～Ⅴ期に分け、変遷を示したのが図66である。

これからいえることは建物群は時期を経るに従ってしだいに正方位を指向していくということである。7世紀末葉には一様に正方位をとるものの、その変化は漸移的で急激な変化ととらえることはできない。また、遺跡東部に当るYM84-46次調査で検出された8世紀中葉の掘立柱建物が正方位から大きく振れている[大阪市文化財協会1998]ことから、正方位を指向する建物をただちに条里制などと結び付けることは困難であらう。少なくとも今回の調査地では自然地形に徐々に手を加えていった結果とすることができよう。

ii) 建物群の構成

今回検出した建物には平面長方形のものと正方形に近いものとの両者が見られる。正方形に近いもののうち、東柱をもつものは倉庫として考えることができる。また、東柱が検出されなかったものでも柱間寸法は概して狭く、倉庫として考えるのが妥当であらう。仮にこれらの両者を倉庫として各期ごとの遺構の構成をみていくこととする。

Ⅰ期(5世紀代) 倉庫SB217・218がある。5世紀代に位置づけられる土壌には鍛冶関係の遺物を多く出土したSK216およびSK214などがある。

Ⅱ期(6世紀前～中葉) SB203・204・206・209・223および堅穴住居のSB201・202がある。Ⅳ区南部の建物群もこの時期の可能性がある。

Ⅲ期(6世紀後葉～7世紀初頭) 大型の建物SB215とその中軸線上に位置するSB207およびSA201がある。また、SB223のほかⅣ区北東のSB240も同時期であり、Ⅳ区南部の建物群も伴う可能性がある。SA201の区画する方向については不明であるが、SB215の建物規模から考えて、SB215に関連するものと思われる。

Ⅳ期(7世紀前～後葉) 大規模なSA202とそれらを取巻く溝群、およびSD212・213の東に位置する倉庫SB211・212、倉庫に伴うSA204・205がある。SA202は溝群との位置関係から西側の敷地を囲む可能性がある。

Ⅴ期(7世紀末葉～8世紀中葉) 調査地南部に集中しており、建物は桁行方向に長大化する傾向がある。建物10棟と倉庫数棟からなる。見かけ上は類似した形状の建物が2棟ずつ近接して見られることから、建替えが行われた可能性が高い。なかには建物間で柱筋が通るものも認められ、建物群の配置に当っては計画性がうかがえる。

以上のことから、建物群は途中断絶することなく営まれており、ⅠからⅤ期まで順次発展していったことが指摘できる。時期を経るに従って建物数が増加し、計画的な配置をとり、Ⅲ期以降は核となるような施設や区画が見られる。Ⅴ期には建物方位が南北方向を指向するとともに建物が集中する場所と希薄な地点が認められる。また、ⅠからⅤ期への変化として、建物群の方位は漸移的に正方位に向い、柱穴の形状も小型で円形のものから大型で整った方形へと変化している。

8) 小結

今回の調査地では古墳から平安時代にかけての多くの遺構・遺物を確認した。特に5世紀中葉から8世紀前葉にかけて集中している。検出した約40棟の掘立柱建物群の時期については出土遺物が少なく、確定するだけの資料はないが、おおむね変遷をたどることができた。それによれば、古墳時代中期に建物群の建設が始まり、奈良時代まで途切れることなく営まれている。飛鳥時代までの建物群は地形に応じた方位に建てられており、奈良時代には正方位を指向するようになる。また、古墳時代後葉から飛鳥時代後葉にかけての建物群は大規模な建物が建てられたり、櫓や溝で区画する施設が築かれるなど計画的に施工されており、建物の数も多く、集落がもっとも栄えた時期であったと推定されよう。

第Ⅳ章 調査成果のまとめ

第1節 山之内遺跡の弥生時代集落

今回の調査では、弥生時代前期末葉の多数の土壇と中期中～後葉の方形周溝墓および、堅穴住居などが検出された。弥生時代の山之内遺跡の概略は前報告で記されている[小田木富慈美1998]ため、ここでは今回の調査のまとめを行いながら補足と今後の課題について若干触れることにする。なお、前報告に従い、JR阪和線を境に東地区、西地区と呼びわけることとする。

今回の調査で検出した前期末葉の遺構は多数の土壇がある。また、堅穴住居のうち前期末葉にさかのぼる可能性がある例がある。土壇は調査地全域にあり、特にⅠ区では多数検出された。このことから前期末葉における集落はさらに北側へと広がっていた可能性は高い。ただし、北側約50m付近においていくつかの調査がなされているが、弥生時代の遺構は検出されていないことから、今回の調査地は北端に近いところであるといえる。

中期の遺構には堅穴住居・土壇・方形周溝墓がある。中期の遺構はⅡ区以北では認められず、南へいくほど分布するようになる。遺物の量も同様であることから、前報告で指摘されたとおり、前期の段階より南へと集落が移動している。方形周溝墓は調査地東部においてのみ確認された。中期中～後葉に属する。方形周溝墓は南約70mのYM83-19次調査、北約40mのYM97-1次調査でも見つっている。これらをみると西地区では集落の北東から東にかけて墓域が分布しているといえる。ただし、中期後葉に位置づけられる方形周溝墓3・4は同じく中期後葉の土器を出土する土壇などと重複しており、変化の順序としては居住域から墓域の変化が想定されるものの、時間的にも地理的にも近接しているため、墓域と居住域との間は厳密な区分はされていなかった可能性もある。同様の事実はYM83-19次調査の方形周溝墓でも認められる。これは東地区の墓域が独立して存在するのとは対照的であり、西地区の特徴であるといえる。

墓域は東400mの東地区でも認められるが、東地区から西地区にかけて全域に方形周溝墓が分布しているとは考えられず、異なった墓域と考えるのが妥当であろう。東地区の墓域を形成した集団は近隣では同時期の集落が見つからないことから西地区の集落であると考えざるをえない。つまり、山之内遺跡の集落は墓域を複数有していたこととなる。異なった墓域を形成した理由には、集落内における集団の差、あるいは時期による差などが考えられる。東地区の墓域がⅡ～Ⅲ様式新段階、西地区の墓域がⅢ様式古段階～Ⅳ様式と重複する時期が認められながらも、大きく見れば時期に違いがあることは注目を要するであろう。つまり、基本的には東側の墓域から西側の墓域へという動きがあるものの、それまで東側において埋葬を行っていたものは引き続き東側の墓域を使用し、あらたに集落の構成員となったものなど過去の墓域にあまり関係のないものは西側に墓域を定めたと推定すること

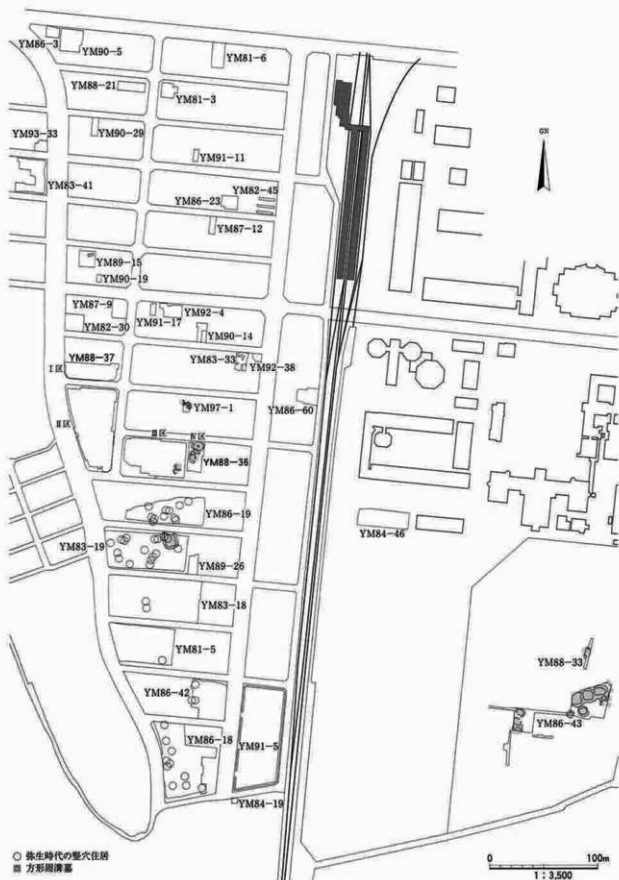


図67 弥生時代の遺構分布図

もできよう。ただし、この際にはなぜⅡ様式の段階に集落より離れたところに墓域をつくり、Ⅲ様式になって集落に近接した場所に墓域を定めるようになったのかの理由が必要であろう。両調査区間には未調査の部分が拡がっており、現状で判断することは困難である。課題として両墓域のうち同時期のものの土器の組成などを調べることによって解明の糸口となる可能性もある。また、西地区の中では一辺13mと山之内遺跡で最大規模を測る方形周溝墓がもっとも古く、この墓の築造が墓域の新設の契機であったのかもしれない。

弥生時代後期に位置づけられる遺構・遺物は今回検出できなかった。これまでの推定どおり中期末葉で集落は衰退するものと想定できる。周辺の調査でも中期末葉の遺構・遺物は少なくほかの拠点集落に比べると廃絶時期はやや早いといえよう。

なお、山之内遺跡では石廬丁の出土が少ないといわれているがそれについて少し考えてみたい。今回もわずか3点の出土であり、他遺跡に比べると少ないといえる。ただしそれはあくまで見かけの出土量であり、当遺跡においては遺構面が大きく削平を受けていることを考慮する必要がある。検出した遺構の数も決して多くなく、また、弥生時代の包含層もほとんど遺存していない。さらに、これまで検出した遺構はその多くが方形周溝墓であることも無視できないであろう。単純に他遺跡と数量的な比較を行えるものではないことに注意しておく必要がある。一方、石器遺物内での組成でみても正確な数字は出せていないが石廬丁の占める割合はたしかに他遺跡に比べて低いといえる。こうした組成からは狩猟に生業の中心があったともいえるかもしれない。ただし、少なくとも出土している以上は稲作を行っていたことはまちがいない、稲作に費やされる労働力を考えると稲作を生活の基盤としていたと考えるのが適当であろう。耕作域については現在未検出であるが、遺跡南側の旧扶間川流域が候補となろう。なお、蛸壺・土錘などの漁撈関係の遺物の出土量はその他の土器の組成からみても多いとはいえず、生業の中心とはいえない。石廬丁の組成における少なさは石廬丁が少ないというよりもむしろほかの石器、特に石鏃・石剣・石槍などの打製石器類が多いことが理由であると思われる、山之内遺跡の特徴はここにあるといえよう。各調査地において、未製品・チップ類を含む多量の石器遺物が見られ、集落内において少なくとも小型品の打製石器の製作を多量に行っていたことは確実であろう。山之内遺跡ではこうした石器の製作・流通に係わっていた可能性があり、中期後葉に集落が衰退するのは、畿内全体における新たな流通システムの変化に一因があるのかもしれない。

第2節 山之内遺跡の古墳時代以降の集落

今回の調査では古墳から平安時代にかけての遺構・遺物を検出した。特に遺構がまとまって見られるのは5～8世紀前葉のものである。

古墳時代後期から奈良時代にかけては多数の掘立柱建物が検出された。遺存状況は悪く、遺物に恵まれなかったため、時期については推測の域を出ない。今回の調査では5世紀代、6世紀前葉、6世紀後葉～7世紀初頭、7世紀前～後葉、7世紀末～8世紀前葉の5段階に区分した。建物群の方位は北で西に振るものから次第に正方位を指向するものへと変わっていく。掘立柱建物群は山之内遺跡全体、さらに西接する遠里小野遺跡でも認められるが、時期ごとの変遷については遺物が少ないうえに調査面積も狭く、不明点が多い。また、今回の調査地のように同時期であっても、異なる方位をとるものもあり、単純に建物方位だけでグループ分けはできない。参考までに山之内遺跡で検出された掘立柱建物の一覧を表4に示す。建物の時期については前報告に従ったが、中には再検討が必要なものも含まれている。

今回の調査で検出した古墳時代の遺構でもっとも古いものは5世紀中葉の土壌SK214・216などである。掘立柱建物のいくつかもこの時期のものであろう。古墳時代前期の遺物は今回の調査でも確認できず、弥生時代中期末葉に集落が衰退したのちにこの地に再び集落が築かれるのは古墳時代中期、5世紀中葉のことと考えられる。周辺の調査成果からも同様なことが指摘でき、山之内遺跡では古墳時代中期になって集落がふたたび営まれるようになったといえよう。その分布は、遺跡の南西部にかたより、弥生時代集落の分布に近い。弥生から古墳時代にかけて山之内遺跡の中では遺跡南西部が居住域としてもっとも適していた場所であったのだろう。

古墳時代中期末葉～後期前葉には遺構・遺物は増加する。竪穴住居SB201・202もこの時期に当る。山之内遺跡では表4に認められるように多くの建物が築かれ、弥生時代には遺構の見られなかった北西部でも認められるようになり、集落は北西方向に拡大していく傾向にある。

古墳時代後期にはさらに多くの掘立柱建物が築かれ、飛鳥時代前～中葉には周囲を溝や溝で区画するような建物群が出現する。この建物群には広い範囲を対象とした計画性がうかがえ、屋敷地としてとらえることができるかもしれない。しかし、Ⅱ区で確認されたように建物群の方位は北と南で異なっている。これは、同じ計画のもとに建物群を配置しながらも、微地形の変化に応じて基準を変えていることを示すのであろう。この時期の建物は山之内遺跡全体で認められるほか、西の遠里小野遺跡でも確認されている。今回指摘したような建物の計画的な配置がどの程度まで広がっているのかは今後の課題である。

また、これらの建物群に伴う溝などから瓦片が出土している。いわゆる白鳳期の特徴を示すが、その年代は定かでない。明らかに時期が降る遺構からの出土は除くとして、今回瓦が出土した遺構には飛鳥Ⅲまでの遺物しか含まれなかった。いずれも溝という性格を考えると混入の余地も残るが、数点出土しており、この時期から大きく降ることはないと推定できる。同様の瓦片は西接する遠里小野遺

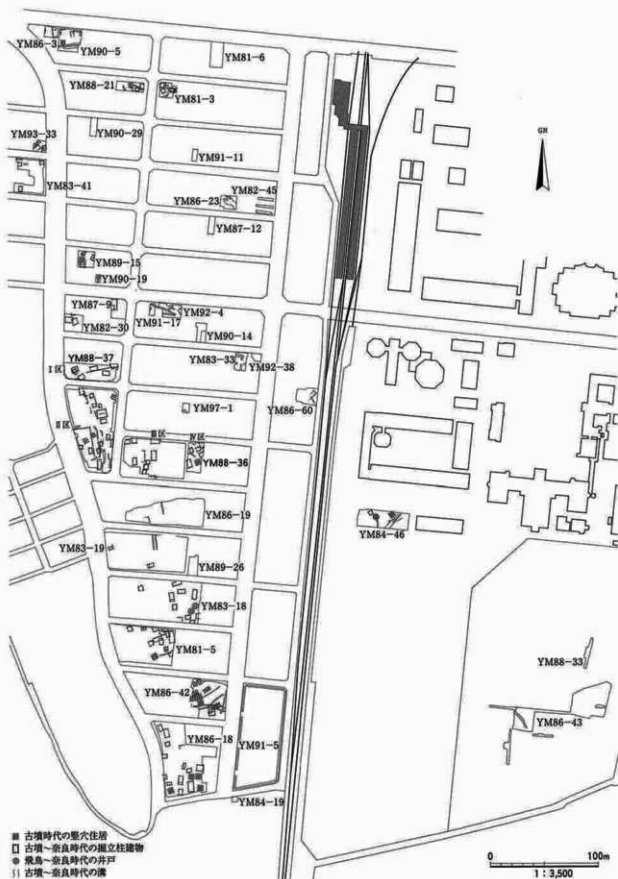


図68 古墳～奈良時代の遺構分布図

表3 山之内遺跡の掘立柱建物一覧

(遺構名は各報告に従う。表中の★は現存値を示す。今回報告した建物の時期は第3章3節にて推定した時期を示す。)

調査次数	遺構番号	種方向	桁×梁(間)	構造	桁長(m)	梁長(m)	面積(m ²)	時期	文献
YM86-3	SB01	N 8°W	*5×2		*8.2	3.85	*31.6	6世紀中葉以降	[大阪市文化財協会1998]
	SB02	N 8°W	*1×1		*1.6	?	?	?	
	SB01	N89°W	*2×1		*5.88	?	?	7世紀以降	
YM90-5	SB02	N 6°W	*1×2		?	*3.76	?	6世紀中葉以降	[大阪市文化財協会1998]
	SB03	N 3°E	2×2	総柱	3.57	3.10	11.1	7世紀以降	
	SB04	N10°W	*3×2?		*4.90	2.70	*13.2	6世紀中葉以降	
	SB05	N 9°W	*2×1		*3.71	?	?	6世紀中葉以降	
	SB06	N14°E	*2×1		*4.00	?	?	?	
	SB01	N10°W	3×1		4.5	*1.8	?	6世紀末～7世紀初頭	
YM88-21	SB02	N10°W	2×2		3.0	3.0	9.0	6世紀末～7世紀初頭	[大阪市文化財協会1988]
	SB03	N12°W	2×2	総柱	3.3	3.2	10.5	6世紀末葉?	
	SB01	N85°E	*3×2		*4.64	3.44	*16.0	飛鳥Ⅱ	
YM81-3	SB02	N 0°	2×2		3.36	3.20	10.8	?	[大阪市文化財協会1998]
	SB03	N 3°E	2×2	総柱?	3.60	3.44	12.4	?	
	SB04	N83°E	2?×1?		5.36	3.04	16.3	飛鳥Ⅱ	
	SB05	N10°E	2×?		3.12	?	?	?	
	SB06	N24°W	2?×2		3.68	3.36	12.4	?	
	SB07	N 5°W	*2×?		3.28	?	?	TK43	
	SB01	N40°W	?×2		?	3.7	?	7世紀以降	
YM93-33	SB02	N50°E	3×1		7.0	*1.5	?	6世紀末～7世紀初頭	[大阪市教育委員会・ 大阪市文化財協会1994]
	SB03	N55°E	*3×2		*5.3	3.2	?	?	
	SB04	N78°E	*1×2		*1.7	2.9	?	?	
	SB05	N82°E	*2×2		*3.1	2.4	?	?	
	SB01	N83°E	2×2		3.5	2.8	9.8	6世紀末～7世紀初頭	
YM83-41	SB02	N 5°E	*2×2		*2.7	2.9	?	7世紀後半?	[大阪市文化財協会1983]
	SB03	N88°E	*2×?		*4.8	?	?	7世紀後半?	
	SB04	N 0°	3×2		4.9	3.2	15.7	8世紀代	
	SB03	N18°E	3×2	総柱	3.6	3.0	10.8	6世紀末～7世紀初	
YM89-15	SB04	N17°E	3×2	総柱	4.15	*2.90	?	6世紀末～7世紀前半	[大阪市文化財協会1998]
	SB05	N 9°W	*3×2		*6.50	4.65	?	7世紀前半以降	
	SB01	N69°E	*2×?		*4.0	?	?	6世紀末葉	
YM82-30	SB02	N23°W	3×2		3.8	3.2	12.2	?	[大阪市文化財協会1982]
	SB03	N89°W	*3×2		*5.1	3.9	?	?	
	SB04	N89°W	?×2		?	3.8	?	?	
	SB01	N 3°W	*5×?		*7.5	?	?	?	
YM87-9	SB02	N 3°E	*1×?		*2.25	?	?	?	[大阪市教育委員会・ 大阪市文化財協会1989]
	SB01	N45°E	*2×1		*3.20	*1.70	?	7世紀前葉	
YM91-17	SB01	N20°W	*3×2		*4.47	*3.72	?	飛鳥Ⅱ	[大阪市文化財協会1998]
YM92-4	SB01	N38°W	*2×2	総柱	*3.2	*2.1	?	?	[大阪市教育委員会・ 大阪市文化財協会1999]
YM97-1	SB02	N38°W	*2×2	総柱	*4.4	*3.3	?	?	
	SB03	N28°W	*2×1		*3.2	*2.8	?	?	
	SB04	N28°W	*2×2		*2.6	*2.0	?	?	
YM86-60	SB01	N33°W	*3×?		*4.6	?	?	?	[大阪市教育委員会・ 大阪市文化財協会1998]
	SB02	N42°E	*2×2?		*3.2	3.7	?	飛鳥	
YM88-37	SB203	N68°E	4×3		6.1	4.5	27.5	6世紀前～中葉	今回報告分
	SB204	N27°W	3×2		4.5	3.3	14.9	6世紀前～中葉	
	SB205	N 6°E	3×1		3.4	—	—	7世紀末～8世紀前葉	
	SB206	N62°E	3×2		5.3	4.2	22.3	6世紀前～中葉	
	SB207	N81°E	4×2		6.8	3.9	26.5	6世紀後葉～7世紀初頭	
	SB208	N87°E	3×2		6.5	3.7	24.1	7世紀末～8世紀前葉	
	SB209	N70°W	*6×4		*6.2	*4.3	—	6世紀前～中葉	
	SB210	N10°W	3×2		5.4	3.6	19.4	6世紀後葉～7世紀初頭	
	SB211	N17°W	3×3		3.8	3.6	3.7	7世紀前～後葉	
	SB212	N75°W	3×2		3.6	3.0	10.8	7世紀前～後葉	
	SB213	N 4°W	2×2		3.2	2.6	8.3	7世紀末～8世紀前葉	
	SB214	N58°W	3×2	総柱	4.3	3.8	16.3	6世紀中葉	
	SB215	N80°E	5×5	隅柱	8.6	7.4	63.6	6世紀後葉～7世紀初頭	
	SB216	N82°E	4×2		5.4	3.4	18.4	6世紀後葉～7世紀初頭	
	SB217	N29°W	2×2	総柱	3.2	3.2	10.2	5世紀	
	SB218	N30°W	2×2	隅柱	3.8	4.0	15.2	5世紀	
	SB219	N88°E	3×3	隅柱	3.2	3.3	10.7	7世紀末～8世紀前葉	
	SB220	N 3°E	3×2	総柱	5.1	3.3	16.8	7世紀末～8世紀前葉	
	SB221	N 3°E	4×2		7.1	*1.7	—	7世紀末～8世紀前葉	
	SB222	N 3°W	2×2		4.0	2.3	9.2	7世紀末～8世紀前葉	
	SB223	N17°W	3×2		4.5	3.2	14.4	6世紀後葉	
	SB224	N 6°W	3×2		5.2	3.2	16.6	8世紀前葉	

調査次数	遺構番号	棟方向	桁×梁(間)	構造	桁長(m)	梁長(m)	面積(m ²)	時期	文献
YM88-36	SB225	N 3°W	3×2		6.2	3.6	22.3	7世紀末～8世紀前半	
	SB226	N 7°E	4×2		7.9	*1.5	—	7世紀末～8世紀前半	
	SB227	N87°E	2×2		4.0	3.7	14.8	7世紀末～8世紀前半	
	SB228	N 2°W	3×2		4.8	4.3	20.6	7世紀末～8世紀前半	
	SB229	N88°E	4×1		8.0	2.0	16.0	7世紀末～8世紀前半	
	SB230	N 4°W	4×2		6.5	3.7	24.1	7世紀末～8世紀初頭	
	SB231	N 0°	5×1		9.5	2.0	19.0	7世紀末～8世紀前半	
	SB232	N 0°	5×2		9.0	4.5	40.5	7世紀末～8世紀初頭	
	SB233	N 0°	2×2		3.3	3.3	10.9	7世紀末～8世紀前半	
	SB234	N 0°	3×3		4.2	4.0	16.8	7世紀末～8世紀前半	
	SB235	N 4°E	2×2		3.4	3.0	10.2	7世紀末～8世紀前半	
	SB236	N 1°W	*2×*2		*4.3	*4.3	—	7世紀末～8世紀前半	
	SB237	N16°W	4×3		7.2	5.2	37.4	6世紀前半～7世紀初頭	
	SB238	N20°W	3×3		4.5	4.0	18.0	6世紀前半～7世紀初頭	
	SB239	N69°E	2×1		3.5	3.5	12.3	6世紀前半～7世紀初頭	
	SB240	N20°W	*2×*2		*4.8	*2.0	—	7世紀初頭	
	SB241	N64°E	*3×*2		*4.5	4.0	—	6世紀前半～7世紀初頭	
YM86-19	SB12	N13°W	*3×*2		*6.05	3.53	?	?	[大阪市文化財協会1998]
YM83-19	SB18	N78°W	3×2		5.65	3.18	19.0	飛鳥Ⅱ～Ⅲ	[大阪市文化財協会1998]
	SB19	N88°E	3×*2		5.93	*4.09	*23.0	飛鳥Ⅱ	
	SB20	N 2°E	3×2?		5.25	3.30	17.3	7世紀末葉	
	SB21	N29°W	2×2	廊柱	3.95	3.60	14.2	古墳中期後葉以降	
YM83-18	SB03	N71°E	5×2		7.55	3.15	23.8	6世紀中葉	[大阪市文化財協会1998]
	SB04	N14°W	3×2		4.40	3.75	16.5	6世紀前～中葉	
	SB05	N 9°W	3×2		6.50	4.10	26.7	?	
	SB06	N 3°W	*2×*2		*3.50	3.95	*13.8	6世紀末～7世紀初頭	
	SB07	N87°E	3×3		4.55	3.70	16.8	?	
	SB08	N 3°W	*1×*2		?	4.40	?	?	
	SB09	N 7°E	4×2		8.50	3.80	32.3	6世紀末～7世紀初頭	
	SB10	N 2°W	3×3	廊柱?	4.75	3.85	18.3	飛鳥Ⅱ	
	SB11	N87°E	3×2		6.65	3.75	24.9	6世紀末～7世紀初頭	
	SB02	N70°E	3×3		4.4	4.1	18.0	?	[大阪市文化財協会1998]
YM81-5	SB03	N16°W	*1×*2	廊柱	*1.9	3.9	*7.4	?	
	SB04	N20°W	*2×*3		*3.8	5.0	*19.0	5世紀末～6世紀前	
	SB05	N16°W	*2×*2	廊柱	*3.6	4.9	*17.6	?	
	SB06	N73°E	3×2		5.8	3.6	20.9	5世紀末～6世紀前	
	SB07	N26°W	3×3		4.2	4.1	17.2	?	
	SB08	N13°W	3×2		4.6	3.2	14.7	?	
	SB09	N34°W	3×3	廊柱	4.4	4.4	19.4	?	
	SB10	N62°E	*3×*2		*4.5	*2.1	*9.5	?	
	SB11	N86°E	4×*1		5.0	*1.8	*9.0	?	
	SB12	N86°E	3×3		4.8	4.1	19.7	?	
	SB13	N 6°W	2×2	廊柱	3.9	3.1	12.1	?	
	SB14	N 6°W	2×2	廊柱	3.6	3.1	11.2	7世紀後半	
YM86-42	SB06	N25°W	*2×*2	廊柱	*3.66	*3.23	*11.8	6世紀中～	[大阪市文化財協会1998]
	SB07	N40°W	*3×*2		*4.00	*3.40	*13.6	6世紀中～	
	SB08	N28°W	*3×*2	廊柱	*4.20	*3.68	*15.4	?	
	SB09	N59°E	4×2?		6.23	2.96	18.4	6世紀前半～	
	SB10	N66°E	3×3	廊柱	5.04	4.75	23.9	7世紀初頭～	
	SB11	N77°E	3×3	廊柱	5.03	4.01	20.2	6世紀後半～	
	SB12	N85°E	4×3		6.02	4.77	28.7	6世紀末～	
	SB13	N76°E	3×2		4.08	3.62	14.8	6世紀中～	
	SB14	N24°E	3×2	廊柱	4.32	3.94	17.0	6世紀前半～	
	SB15	N25°W	3×2	廊柱	4.40	3.82	16.8	6世紀中～	
	SB15	N 6°W	5×3		9.82	5.08	49.9	6世紀前半～	[大阪市文化財協会1998]
	SB16	N 1°E	4×2		7.60	3.66	27.8	6世紀前半～	
	SB17	N 1°E	3×3		5.18	3.70	19.2	6世紀前半～	
	SB18	N78°E	*2×*2		*1.71	3.78	*6.5	?	
YM86-18	SB19	N88°E	*3×*2		*4.20	3.88	*16.3	5世紀後半～	
	SB20	N74°E	3×2		4.20	3.36	14.1	6世紀後半～	
	SB21	N12°W	4×2		8.09	3.97	32.1	7世紀初頭～	
	SB22	N24°W	3×*1		6.01	*3.45	20.7	6世紀中葉～	
	SB23	N82°E	3×1		4.03	2.13	8.6	?	
	SB24	N78°E	4×3		3.97	3.67	14.6	6世紀中葉～	
	SB25	N 8°E	3×1		5.16	2.04	10.5	6世紀前半～	
	SB26	N82°W	5×4		6.27	5.42	34.0	7世紀初頭～	
	SB27	N75°E	*3×*2		*4.32	*2.91	*12.6	?	
	SB01	N50°E	3×3		3.57	3.44	12	?	[大阪市文化財協会1998]
	SB02	N50°W	3×3		4.73	4.15	19	8世紀中葉	

跡でも見つっているが、「榎津寺」であるかどうかは別として、7世紀代に近隣に瓦をもつ施設が存在していた可能性は高い。瓦は山之内遺跡西部から遠里小野遺跡にかけて分布することから、瓦を使用した建物は、今回の調査地よりも北西部に位置するものと思われる。

飛鳥時代末葉～奈良時代になると建物方位は正方位を指向するようになる。建物の柱穴も方形で大きなものとなる。ただし、柱穴の大型化および方形化は前段階にも兆しは認められる。建物規模も桁行方向において4間を越えるような長大化したものが現われるようになる。今回の調査地では南東部に集中する傾向が認められたが、北部・西部でも南北方向の建物は検出されており、分布域は広がる。注目されるのは前段階まで認められた同一グループ内での方位の振れが認められないことである。前段階までは微地形に応じて建物方位を変化させていたが、あたかも微地形を無視して方位を合わせており、より広範囲での計画性がうかがえる。どの程度の広がりをもっていたのかは明らかでないが、図68にみられるように正南北方向を指向する建物は遺跡全域に分布している。それまで希薄であった東地区にも認められる。飛鳥時代末葉～奈良時代前葉の遺物を出土した建物は報告されていないが、柱穴の形状や建物規模が今回検出例と共通するものが多く見られ、遺物こそ出土しなかったものの実際はこの時期の建物は多く含まれているものと推定できる。付篇で記述したように遠里小野遺跡でも奈良時代の建物は正方位に近い方位を指向しており、おそらくは遠里小野遺跡まで含めた広い範囲で同様な現象が認められるのであろう。ただし、今回調査地のⅡ区南部以南のように建物が集中する地域とⅡ区北部以北のように散漫に分布するところがある。

飛鳥時代末葉から奈良時代の正方位建物への変化を条里制の施行に求める考え方もある[木原克司1994]が、遺跡東部のYM84-46次調査で確認された奈良時代の建物の方位は大きく振れており、ただちに結びつけるのは困難であろう。もう少し自発的な要因について考慮する必要がある。この時期には先述した瓦を用いる施設が存在した可能性があり、寺院であったとすればその影響で正方位となったのかもしれない。

平安時代以降には柱穴や土壌は認められるものの顕著な遺構は少なくなる。周辺の調査でも同様の事実が指摘でき、集落が縮小したか、建物群が1個所に集中したものと思われる。

古墳時代以降、奈良時代までの山之内遺跡の特徴は集落が成立してから断絶が認められないという点にある。このことは生活基盤が安定していたことを示すものであろう。基盤となったものが何であるのかは推定に過ぎないが、西の遠里小野遺跡と同じく漁具が多く出土することから、漁業にあった可能性は高いと思われる。古墳時代後期以降、集落が遠里小野遺跡と区分できないことから同一の生業が基盤となっていたのだろう。また、鍛冶活動も可能性としてある。古墳～飛鳥時代を通じて山之内遺跡では輪羽口・鉋澤などの鍛冶活動に関わる痕跡が多く認められる。時期は降るが、遺跡北部において14世紀以降、17世紀中葉にかけて鋳物関連の遺構・遺物が多く出土することから鋳物師集団の工房であったとの推測もある。海上輸送に便利な立地であるなど少なくとも鍛冶活動を基盤とするだけの地理的な要素はあったといえよう。

付 篇

大阪市住吉区

遠里小野遺跡発掘調査報告

第I章 調査の経緯と経過

本報告書の対象となった調査地は大阪市住吉区遠里小野2丁目にあり、調査面積は12,670㎡である。当該地は遠里小野遺跡の範囲内に当る(図69)。本遺跡は、本書で報告する調査が行われる以前から、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明していた。

1988年7月1日に当該地の市営遠里小野住宅建設に伴って、予定地内全域に対し9個所の試掘坑を設けた立会調査が行われた。その結果、薄層ながら古代と思われる遺物包含層とその下面で柱穴・土壌などの遺構が確認され、本調査が行われることになった。

88-11次調査は同年8月6日から開始された。4つの街区に対し、南西区をⅠ区、南東区をⅡ区とし、北へ向ってⅢ区、Ⅳ区とした(図70)。

調査はⅠ・Ⅱ区から始め、その終了後にⅢ区、Ⅳ区へと続けた。

Ⅰ・Ⅱ区の盛土と現代作土の除去を行うため、8月10日から機械掘削を開始し、8月29日に終了した。掘削の終了した範囲から、人力による古代の遺物包含層の掘削と遺構の検出を順次行った。9月8日に基準点測量を行い、Ⅰ・Ⅱ区について5m四方の小区画を設定した。これ以降は各小区画ごとに遺構と遺物の調査を行った。Ⅱ区では遺構の数が少なく、平安時代の溝を調査して10月19日に終了した。10月中旬ごろに、Ⅰ区の遺物包含層を除去し終え、以降は検出された各種の遺構の掘削に入った。また、検出された遺構の状況に応じ、部分的ではあるが調査区を必要範囲だけ拡張した。Ⅰ区では第Ⅲ章で記述する古代の大型掘立柱建物であるSB02をはじめとする建物群や、溝・土壌が多数見つかり、その成果を12月3日に現地説明会

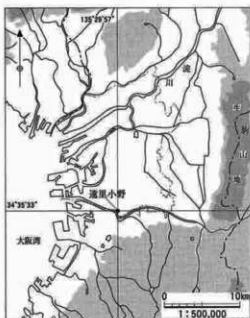


図69 遠里小野遺跡位置図

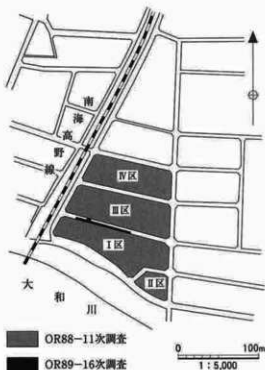


図70 調査区位置図



写真3 現地説明会風景

で公開した(写真3)。なお、SB02の柱穴は砂で埋戻している。Ⅲ区の機械掘削は12月8日から開始した。Ⅰ区の遺構の広がりから、Ⅲ区でも相当数の遺構が分布していると期待されたが、西側2/3程度が最大深度3.5mに達する大規模な擾乱によって、ほとんどの遺構が失われていた。確認された古代の遺構は、奈良時代の井戸と、飛鳥時代の柱穴各1基である。井戸は板を方形に組んで積み上げたもので、基底付近から

出土した籠を取上げ、奈良国立文化財研究所沢田正昭・肥塚隆保両氏の指導のもとに、同研究所遺物処理研究室において、真空凍結乾燥処理を行い、アクリル樹脂(バラロイドB72)を用いて補強した。また、井戸の側板は年輪の状態が良好であったため、同研究所光谷拓実氏に依頼して年輪年代測定を行い、その結果については第Ⅲ章第6節に記述した。その後、財団法人元興寺文化財研究所に委託してPEG含浸処理法による保存処理を行った。

Ⅳ区は1989年1月18日から機械掘削を開始した。Ⅰ区と同様に、表土下に古代の遺物包含層が堆積しており、その下面で同時期の掘立柱建物・溝・土壌などを多数検出することができた。

以上の経過を経て、すべての調査を3月30日に終了した。

翌年度、1990年2月15日から、SB02の北側柱列とそれを囲む横であるSA04の延長部分を確認することを主目的とした89-16次調査をⅠ区北側の道路で行った。調査期間は6日間で、面積は176㎡である。SB02に関しては事前の推定をほぼ裏付ける結果が得られ、SA04のばあいも、横の開口部に関する情報を得ることができた。

第Ⅱ章 遺跡の立地と既往の調査

第1節 遺跡の立地

遠里小野遺跡は大阪市住吉区遠里小野町および沢之町の一部が該当する。上町台地の南西端付近に位置するため、台地脊梁部に近い遺跡東部の標高が高く、遺跡全体は北西に向って低くなっている(図71)。遺跡の東部は山之内遺跡に接しており、現在の標高はTP+10.6m付近である。西側は阿倍野筋

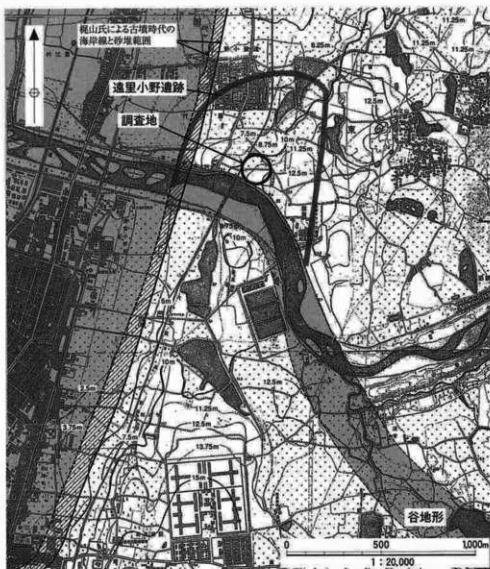


図71 遠里小野遺跡周辺の地形と古代の想定海岸線図

地図は大日本帝國陸地測量部『堺東部』1/1万を引用し、古墳時代の海岸線は嵯山氏の研究〔嵯山彦太郎1986〕を引用した。

付近まで、現在の標高はTP+2.5m程度である。この標高は、近現代の造成によって改変されており、大日本帝国陸地測量部が大正10年に測量した1/1万地形図『堺東部』では、遺跡東部でTP+13.3m、西部でTP+2m前後に記載されている(図71)。今回の調査地の標高はTP+11.25m前後で、約0.7mが削平されていると思われる。古代～中近世の旧地表面の復元は困難であるが、数10cm程度が削平されていたと考えるべきであろう。

また、遺跡の南端には大阪市と堺市を画する現大和川が西流している。現大和川は1704(宝永元)年に付替えられたもので、それ以前は大阪平野を南東から北西に向って流れていた。遠里小野遺跡と東に接する山之内遺跡の付近では、東からは東西に掘削されてきた大和川が南に向って大きく舌状に曲がっており、付替え工事の際に、特に難航した部分として有名である。すなわち、礫を多く含む掘削しにくい地層であったことと一帯の標高が10数m前後に達し、台地の東側よりも数m高くなっているため、水を流すための掘削深度を確保することが容易ではなかったためである。したがって、遺跡の南側は、南西―北東方向に平行する等高線が現大和川によって切断されたような不自然な様相を示している。ただし、大和川を挟んで南側は泉北台地の北端にあたり、現在の堺市浅香山町や今池町では地形が南から北に向って傾斜しており、上町台地と泉北台地の間には、元来、南東から北西に向って開く狭い谷地形があったようである。現大和川の舌状部西側は、この谷地形を拡張することで作られたと考えられている。谷には狭間川という小河川があり、古代からどの程度の水量があったかは不明であるが、遠里小野遺跡は南側をこの谷によって画された上町台地南端部に位置しているといえよう。

遠里小野遺跡を考える上で、もう一つ重要な自然環境の要素として、大阪湾に近い立地があげられる。遺跡として周知されるようになった当初から、土鍾や飯蛸壺などの海産資源を確保するための漁具が注目され、生業形態から漁村集落の様相が想定されてきたからである。遺跡内の調査例が多いため、発掘調査の成果から古代の海岸線を想定することは困難であるが、遺跡西部の遠里小野6丁目に当る調査では、TP+2.5m付近で地山層にあたる。古代の海岸線は、当然これより西側に位置する。その具体的な場所については未確定であるが、梶山彦太郎氏が想定した古墳時代の海岸線を参考にとすると、調査地から西側500m以内に復元できそうである[梶山彦太郎1986]。

第2節 既往の調査

遠里小野遺跡で行われた発掘調査の件数は少ない。しかし、遺跡と認識された経緯は古く、昭和初期にさかのぼる。前田長三郎・清海慶次氏による表探調査をはじめ[前田長三郎1930]、藤岡謙次郎氏も遺物紹介を行っている[藤岡謙次郎1942]。また、1939年には数㎡単位の小規模ながらトレンチ調査が行われ[藤岡1942]、弥生～古墳時代の遺物包含層が確認されている。1958・59年には瀬川芳則氏によって立会調査が行われ、弥生～古墳時代の遺物が採集された[瀬川芳則1959]。これらの調査によって、遠里小野遺跡が弥生時代から古代にかけての複合遺跡であること、土錘・飯蛸壺などの漁具が豊富に出土することなどが明らかとなった(図72・表4)。

大阪市文化財協会による発掘調査は、1981年から行われた。遺跡の名称や範囲の変動のため、山

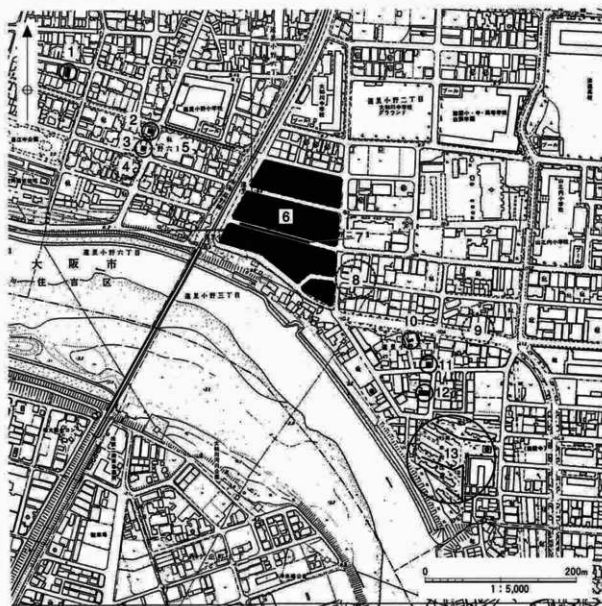


図72 既往の調査位置図

之内遺跡(YM)として調査されたばあいがある。遺跡東部では、OR87-6次・90-4次調査がある。OR87-6次調査では、古墳時代後期後葉の溝・土壌・柱穴などが見つかった。OR90-4次調査は、その南側60m付近で行われ、飛鳥時代初頭ころの掘立柱建物・溝・土壌が見つかった。これらの調査成果は、すぐ東に接する山之内遺跡西部での調査成果と同一である。

遺跡の中央部では本書に掲載するOR88-11次・89-16次調査が行われている。

遺跡の西部ではYM81-2次・82-31次・OR88-18次・92-1次調査が行われた。西部の調査では、古代以前の遺構検出面が、前三者でTP+5.5m付近、その北西140mに位置するOR92-1次調査でTP+2.5mと急激に低くなっており、遺跡が西側に向って低く落込んでいることが確認される。YM82-31次・OR88-18次調査では古墳時代後期後葉の遺構から、鏡状土製品・滑石製品など祭祀に係わる遺物が多量に出土した。勾玉・管玉・白玉などの未成品や加工前の玉材、剥片・チップなども数多く見つかっており、本遺跡内で製作されていたことが確実である。このことは、遠里小野遺跡の性格を考える上で重要な新視点となるであろう。また、関東地方からの搬入品の可能性が高い土師器も注目される。92-1次調査では近世の土壌のみが確認されたが、埋土中に奈良時代の遺物包含層に由来すると思われる偽層が含まれており、近隣に同時代の遺構が分布しているものと考えられる。

ほかに、埴輪と白鳳期の瓦が注目される。埴輪片は本書調査地や図72-11・12地点からも見つっている。現在まで、それ以上の証拠はないが、付近に古墳が存在した可能性は高い。

白鳳期の瓦は遠里小野遺跡と山之内遺跡が接するあたりで出土している。白鳳期の単弁八葉蓮華文軒丸瓦[大阪市立大学考古学研究会1982]をはじめ、山之内遺跡の各調査[大阪市文化財協会1998]や、OR90-4次、本書調査地、図72-11地点などと同じころの瓦が出土している。これらの瓦が使用されていた遺構は見つかっていないが、地誌の研究から、遠里小野3丁目内でかつて「摂津メリヤス会社」が存在していた場所付近(現府営杉本町団地)を寺院跡に推定する考えがある[積山洋1982]。この場所はYM85-40次で小規模な調査が行われ、古代の遺物包含層と瓦片が見つっている。ほかの瓦が出土した地点も、おおむねこの付近を中心にしており、未確定要素が多いながらも白鳳期の寺院(「摂津庵寺」)か、または別の施設が存在が考えられよう。

表4 既往の調査一覧表

番号	調査名	古代以前のおもな出土遺物	参考文献
1	OR92-1	土師器・須恵器・土鐘	[大阪市文化財協会1992]
2	YM82-31	土師器・須恵器・土鐘・飯蛸壺・滑石製品など	[大阪市教育委員会ほか1984]
3	OR88-18	土師器・須恵器・製塩土器・土鐘・飯蛸壺・滑石製品など	[大阪市文化財協会1988b]
4	遠里小野地点	土師器・須恵器・土鐘	[藤岡謙次郎1942]
5	YM81-2	土師器・須恵器・土鐘	[大阪市文化財協会1998]
6	OR88-11	旧石器・縄文石器・弥生石器・弥生土器・土師器・須恵器・土鐘・飯蛸壺・埴輪・瓦	本書
7	OR89-16	土師器・須恵器・土鐘	本書
8	住吉第4号地点	弥生石器・須恵器・土鐘・飯蛸壺・貝	[瀬川芳則1959]
9	住吉第1号地点	弥生石器・須恵器・飯蛸壺	[瀬川芳則1959]
10	OR87-6	土師器・須恵器	[大阪市文化財協会1987]
11	78年立会	埴輪・瓦	[大阪市立大学考古学研究会1982]
12	OR90-4	土師器・須恵器・埴輪・瓦	[大阪市文化財協会1990]
13	YM85-40	須恵器・瓦	[大阪市文化財協会1998]

第三章 調査の結果

第1節 調査地の層序

遠里小野遺跡は上町台地の南端に位置し、中位段丘構成層の上に立地しているとされている[大阪市文化財協会1998]。本調査地では、逆雑資料ながら後期旧石器時代の遺物が散見されたため、実際にはごく薄いながらも低位段丘構成層が堆積していたと推定される。一方、台地上の遺跡のため沖積層は発達せず、本調査地の西部では現代の作土層の下位で、部分的に古代～近世の遺物包含層が見られたが、東部では作土層直下が地山層(中位段丘構成層)となっている個所が多い。

図73に示した地層断面模式図はI区南壁西部の地層堆積状況である。地形が西側に向って低くなっているが、図よりも東側になると第2層の基底面の地形は平坦に近くなる。

第1層：盛土層

第2層：作土層(現代の水田作土)

第3層：にぶい黄～にぶい黄褐色細粒砂(近世の遺物包含層)

第4層：黄褐色含礫細粒砂質シルト(中世の遺物包含層)

第5層：褐色含礫砂質シルト(古代の遺物包含層)

第6層：明褐～黄褐色含砂礫粘土質シルトないし中・粗粒砂(中位段丘構成層)

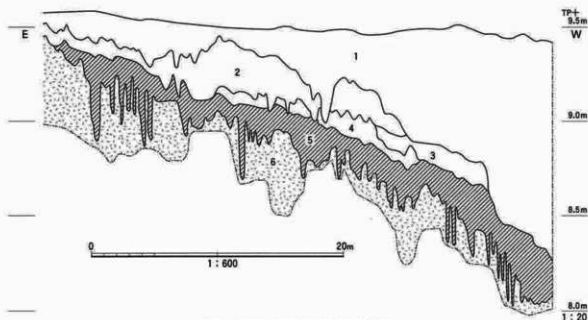


図73 I区南壁西部の地層断面模式図

第2節 旧石器～弥生時代の調査

本調査では、旧石器～弥生時代の遺構は見つかっていないが、それぞれの時代に帰属する遺物が散見された。

1) 旧石器時代

遠里小野遺跡の旧石器時代の様相はまだ明らかにされていない。一方、本遺跡の東に接する山之内遺跡では、旧石器時代の石器遺物がいくつか見ついている。山之内遺跡のばあい、局地的に後期旧石器時代の遺物包含層である低位段丘構成層相当層が遺存し、そこから剥片が数点出土しているほか、ナイフ形石器が2点出土している[大阪市文化財協会1998]。そのうち1点は、横形の有底剥片を素材としたもので、瀬戸内技法と関連のある石器製作技法が存在したことを示唆するものである。

今回、遠里小野遺跡から出土した旧石器時代の遺物はすべて遊離資料で、石材はサヌカイトであった(図74、図版30)。しかし、山之内遺跡と同様に、本調査で見つかったナイフ形石器を含むいくつかの遺物は、瀬戸内技法ないしそれに関連した石器製作が行われていたことを推測させるものであり、以下に、その例を述べる。なお、各石器遺物の計測値などは表5にまとめている。

301は長さ4.75cm、幅1.40cm、厚さ0.49cmのナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、背部全体のほか、刃部の先端にも細部調整が施されている。背面の左側の面はネガティブな剥離面で、広く平坦な剥離面の一部とみられることから、石核は板状の剥片を素材としたものと考えられる。背面の右側中央と下部ある剥離面は、先行する剥片が剥離された時のものである。その上部には自然面が残っており、素材となった剥片が石核の縁辺に位置するものであることがわかる。したがって、先行する剥片は石核の小口面から剥離され、このナイフ形石器のばあいは、石核の側縁から剥離された剥片を素材としているといえよう。細部調整はすべて主要剥離面から背面に向けて行われている。刃部に見られるいくつかの微細な剥離痕は使用痕の可能性はある。

302は長さ4.15cm、幅1.46cm、厚さ0.69cmのナイフ形石器である。横形の有底剥片を素材とし、基部から背部の範囲のみに調整を加えた一側縁調整のものである。底面はポジティブな剥離面で、背面中央には先行する剥片をとった際の剥離がみられるが、その下位の剥離面は小さなもので、石核の小口面の整形を目的としたものであろう。細部調整はすべて主要剥離面から背面に向けて行われ、石器の先端から基部側へ施されている。

303は剥離面打面の縦長剥片を素材として先端に細部調整を施したもので、ここではナイフ形石器として扱っておく。細部調整は背面から主要剥離面へ向けて施され、ナイフ形石器の背部調整の状況と同一である。剥片の先端側を、主軸に対して斜めに除去するような整形を加えた切出し型ナイフと考えられる。側縁の細部調整は行っていない。剥片の一方の側縁が自然面であり、石核の縁辺を利用していることがわかる。対する刃部には不定形の剥離痕が並び、使用痕の可能性はある。

304は細部調整のある剥片である。左図中央下にみられる平坦なポジティブ面が残っていることが

ら、石核は板状の剥片と考えられる。左図左側の剥離面は、このポジティブ面を底面として連続的に行われた先行剥離面であり、目的的な剥片剥離であった可能性がある。左図右側縁の剥離面も主要剥離面の形成以前の可能性が高い。そうすると、石核の両側から向かい合うようにして先のポジティブ面を底面とした剥片剥離が進行したことになる。その後、右図右側縁の打面調整を行い、本剥片が取られているが、やや片ながれしたものとなっている。細部調整とみられる剥離面は左図右側縁中央から下位にかけてあり、後世の剥離によってほとんどが欠失しているが、もとは連続して施されていたものであろう。304は風化の状況から旧石器と判断した。本資料からは、板状剥片を素材とした石核から有底剥片を連続して剥離した状況がうかがえることも、旧石器時代の石器製作技法と考えられる。

305は横形の剥片先端部に連続した細部調整を施したスクレイパーである。素材の剥片は線状打面で主要剥離面のバルブは発達せず、打点付近は平坦であるため、垂直方向の加撃によって剥離されたものである。背面はポジティブ面であるがやはり平坦な剥離面で、剥片の打点側では、剥片内部に生じた潜在割れによって複雑なリングの剥離面が多く生じている。細部調整は弧を描く剥片の先端部に

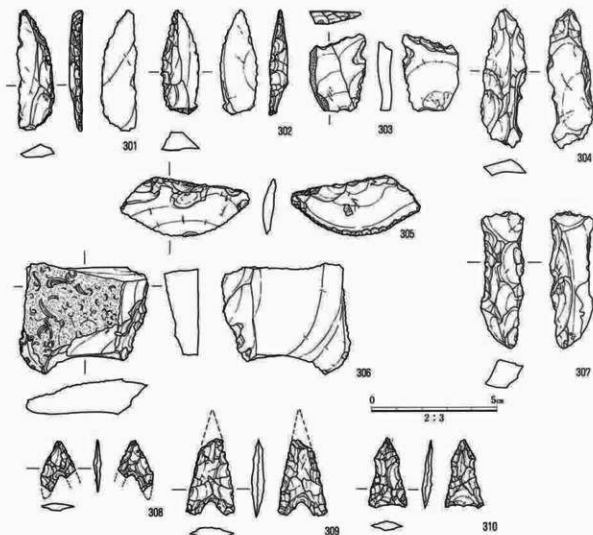


図74 旧石器～弥生時代の石器

ナイフ形石器(301～303)、スクレイパー(305)、細部調整のある剥片(304)、石核(306・307)、石鐮(308～310)

表5 石器遺物一覧表

時代	番号	登録番号	遺構・地層	種類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
旧石器	301	88NA001	包含層	ナイフ形石器	4.75	1.40	0.49	3.6	
旧石器	302	88NA002	包含層	ナイフ形石器	4.15	1.46	0.69	4.2	
旧石器	303	88NA003	古代柱穴	ナイフ形石器	3.13	2.21	0.55	4.9	
旧石器	304	88NA004	古代土壌	細部調整のある剥片	5.50	1.72	0.66	6.5	
旧石器	305	88NA005	攪乱	スクレイパー	2.41	5.15	0.49	5.8	
旧石器	306	88NA006	古代土壌	板状剥片石核	4.96	4.43	1.56	35.9	刃器として再利用
旧石器	307	88NA007	包含層	板状剥片石核	5.47	1.76	1.11	11.4	刃器として再利用
縄文	308	88NA008	攪乱	凹釜無蓋式石鏃	*2.00	*1.38	0.24	0.5	
縄文	309	88NA009	包含層	凹釜無蓋式石鏃	*3.01	1.98	0.47	2.4	
弥生	310	88NA010	古代柱穴	平釜無蓋式石鏃	2.70	1.53	0.38	1.2	

*：現存値を示す。

施され、ごく一部を除き背面から主要剥離面に向けて行われている。剥離面の風化状況から旧石器と判断したが、縄文時代に降る可能性もある。

306は板状剥片を素材とした石核である。右図の大きな剥離面は平坦なポジティブ面で、石核の素材となった板状剥片の主要剥離面である。剥片の背面側は、ほぼ全面が自然面であったと考えられる。主要剥離面の左には、それを底面として横形の有底剥片を剥離した剥離面が残っている。左図右側に並ぶ小さな剥離面は有底剥片を剥離する際の打面調整であろう。小口面から見た石核の左右は、折れにより欠失しているが、有底剥片を剥離する際の打点の位置から勘案して、ほぼ2倍程度であったと推測される。石核の作業面に対する他端(左図左下)に小さな剥離面がある。この剥離面は意図的なものとは考えがたく、偶発的に生じたものであろう。そこに微細な剥離痕が不連続に並んでいる。石核利用の後、その一部を刃器として使用したものと思われる。

307も板状剥片を素材とした石核である。右図右側の大きな剥離面は平坦なポジティブ面で、石核の素材となった板状剥片の主要剥離面である。右図左側には3面の剥離面が並列しており、底面をもつ剥片が剥離されているが、目的剥片としては小さく、その取得に失敗したか、あるいは石核小口面の調整によるものと考えられる。石核としてはほとんど残りがいない状態のため、前者の可能性が妥当であろう。左図右側縁の剥離面は目的剥片に先行する打面調整である。左図左側縁に並ぶ剥離面は、これらの打面調整に先行するもので、石核の作業面に対する他端を整形するために行われたものであろう。石核の下端は折れているが、左図下端に、ごく小さく三角形に残った剥離面は平坦なもので、石核を構成した石核面であると考えられ、この石核の幅はおおよそ現状どおりと思われる。図の上端には、表裏面ともに微細な剥離痕があり、石核としての利用が済んだのち刃器として利用された可能性がある。

307から剥離された目的剥片は、上述したナイフ形石器の素材となる横形の有底剥片と類似したものとなる。306では石核の幅が8cm前後に推定されることから、本調査で見つかったナイフ形石器の素材としては大きすぎるくらいがあるが、今後調査が進めばこのような大型のナイフ形石器も出土する可能性がある。以上の資料は板状の剥片を素材とした石核から、底面を持つ剥片を剥離する点

で、瀬戸内技法ないし、それに関連する石器製作技法に由来するものと考えられる。

2) 縄文時代

石鏃が2点出土した。どちらも無茎凹基式石鏃で、石材はサヌカイトである。

どちらも形態から縄文時代の石鏃と判断した。

308は先端が折れて欠失している。平面でみた刃部は直線的で、逆刺は幅広く丸みを帯びている。右図上部に残る広い剥離面が素材剥片の剥離面である。細部調整は刃部では先端から基部側へ、基部では中央から刃部側へそれぞれ行っている。

309は逆刺の一方が折れている。平面形でみた刃部は、上半が直線的で、下半はやや内側に屈曲する。右図上部中央にあるやや大きな剥離面は、素材剥片の主要剥離面の可能性がある。細部調整は表裏面ともに先端から基部に向けて施されている。おおむね、表面側の細部調整が先行するようである。

なお、縄文土器は出土しなかった。

3) 弥生時代

石鏃1点と土器片がある。

310は上半部に外方に屈曲する張り出しのある五角形の石鏃で、基部は直線となる平基式石鏃である。石材はサヌカイトである。右図上部に素材剥片の剥離面が遺存している。細部調整は先端から基部に向けて施されている。表裏面での先後関係は、左図左側縁では、表面側が先行することが認められる。

弥生土器は細片が多く出土しているが、様式を判断し得るほどのものがない。山之内遺跡では弥生時代前期末葉～中期の遺構・遺物が数多く見つかった[大阪市文化財協会1998]。本調査区では弥生時代と判断しえた遺構はないものの、時期不詳の小穴などの中には当該期のものが含まれている可能性がある。

以上のほかに、時代が確定できない石器遺物(剥片類)が、古代の遺物包含層や遺構から数10点出土している。風化の状況からは旧石器～弥生時代のものが混在していると考えられる。ただし、山之内遺跡に比べ総量は少ないようで、このことは、本遺跡における弥生時代の人間活動の低調さと軌を一にしているのであろう。

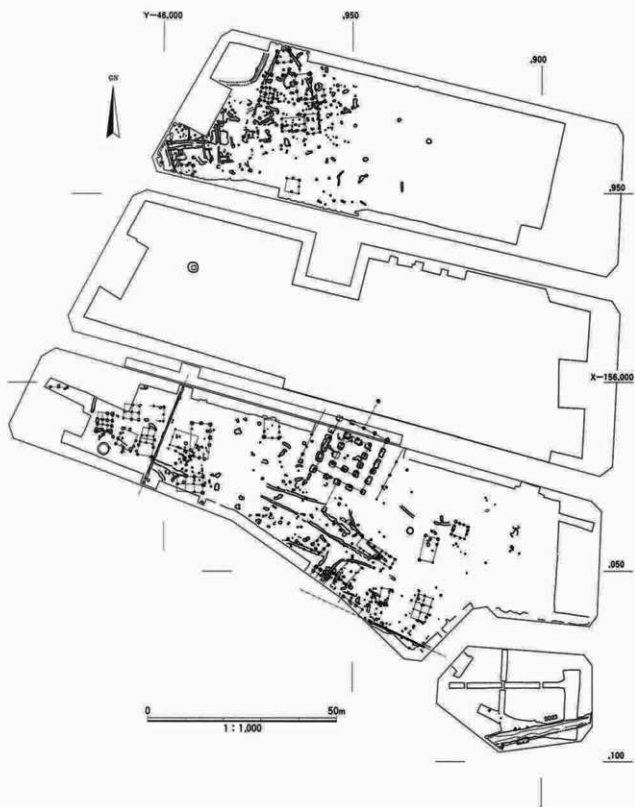


図75 全調査区の遺構配置図

第3節 古墳～奈良時代の調査

1) 古墳時代

時期の判別できた遺構は、IV区西部のSK15で、古墳時代後期のものである。

SK15は平面形が一辺3.5～4.7mの隅丸長方形に近い土壌である(図77)。深さは0.2m以内で底はおおむね平らに近く、埋土は暗褐色砂質シルトである。基底に接して須恵器杯H313・314が出土した(図76、図版30)。どちらもTK10型式に属するものであり、土壌の時期は後期中葉と考えられる。

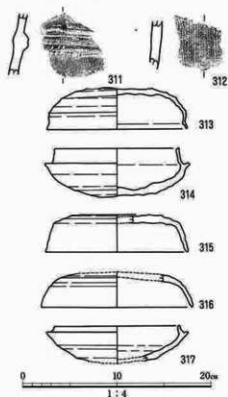


図76 古墳時代の出土遺物

埴輪(311-312)、SK15(313-314)、包含層(315-317)

一方、後の時期の遺構に混入した遺物には古式土師器や埴輪片がある。古式土師器はごく少量が見つかった(SD04出土の328)、山之内遺跡でも攪乱中に投棄されたとみられる多量の古式土師器が出土している[大阪市文化財協会1998]。したがって、山之内・遠里小野遺跡一帯には古墳時代前期の遺構が分布していたものと考えられるが、その詳細は明らかになっていない。

また、細片ながら埴輪片が5点出土していることが注目される。いずれも細片で、表面の摩耗が著しいものが多い(図76、図版30)。311の外面には、タガの上下にタテハケ一次調整が、312も同様の調整が見られる。どちらも焼成は窖窯によっている。こうした特徴は川西宏幸氏によるV期の埴輪に当るが[川西宏幸1978]、大阪市内の長原古墳群を例にとると、古墳時代中期後葉にさかのぼる資料がある。311のタガのように、断面が「M」字形となるものは新しい要素と考えることもできるが、資料が少ないため埴輪の時期については中期後葉～後期中葉ころと考えておく。

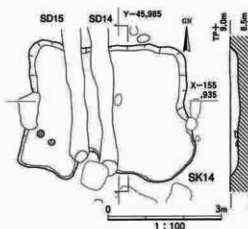


図77 SK15実測図

過去にも、調査地の南東200m付近で行われた立会調査(図72-11)で、中世の井戸から朝顔形円筒埴輪片が出土している[大阪市立大学考古学研究会1982]。外面にヨコハケを施したものであるが、本調査地で出土したものと時期が異なる資料が否かは断定はできない。さらに、『摂津名所図会』に記載された「遠里小野村南三町許田中に塚あり」という一文から、調査地付近に古墳が存在したことを想定する考えもある[積山洋1982]。本調査ではその痕跡は見つからなかったが、付近に中～後期の古墳が単独ないし複数存在していた可能性は高い。

2) 古墳時代後期末葉～奈良時代

本調査地のほとんどの遺構は当該期に属するものと考えられる。詳細な時期が確認しえた遺構の種類と数は、掘立柱建物29棟、柱列2条、溝2条、溝7条、土壇15基、柱穴多数である。

後述するように、飛鳥時代末葉から奈良時代前葉にかけてSB02が建設された時期は、前後の時期に比べて際だった特徴があり、本項ではその前後をあわせた3時期に区分して報告する。

なお、これらの時期の遺構からは各種の土鍾と飯蛸壺が出土している。それらについては本章第5節でまとめて記述する。

I期は古墳時代後期末葉～飛鳥時代後葉である。

II期は飛鳥時代末葉～奈良時代前葉である。その年代観は、I期とIII期の間とした。

III期は奈良時代中～末葉である。

i) I期の遺構と遺物

掘立柱建物5棟、溝9条、土壇9基、小穴5個が見つかった。

a. 掘立柱建物(図80～82、表6、図版22、30)

SB05・07～10が該当する。すべてI期の遺構である。I期の掘立柱建物は棟方位が北から東へ大きく振れるものが多い。中でもSB05・08・09とSB07・10はそれぞれ近接した方位で、位置も近いことから同時期の建物群と考えることができる。

SB05は調査区の中央南東部にあり、桁行6間(10.3m)、梁行2間(2.7m)の細長い建物である。棟方位はN56°Wである。桁行の中央に当る柱列には、間仕切りのためと考えられる東柱があり、それを境に桁行の柱間寸法が異なっている。西側は1.9～2.1mだが、東側は1.4mと狭くなっている。梁行の柱間寸法は1.35mである。柱穴はおおむね円形で、深さは0.2～0.8mである。柱痕跡が認められたものは直径0.2mである。埋土は褐色ないし灰黄褐色砂質シルトで、柱痕跡は褐色シルトを主体とする。切合い関係から、SB05は時期不詳の古代の溝であるSD01より新しく、飛鳥時代末葉ころのSD05よりも古い遺構といえる。出土遺物には土師器・須恵器がある。322は須恵器杯H蓋で、323は同じく杯G蓋で、飛鳥I～IIに属するものである。

SB07はSB09の東に位置する。桁行3間(6.2m)、梁行2間(3.9m)で、棟方位はN45°Eである。柱間寸法は桁行で2.1m、梁行が1.85mである。柱穴は直径0.4mの円形が多い。深さは0.2～0.4mである。柱痕跡は直径0.15m以下のものが多い。埋土は、掘形が黄褐色粘土の偽礫が混入した暗褐色砂質シルトを主体とし、柱痕跡は暗褐～褐色砂質シルトである。柱痕跡で飛鳥IIの須恵器杯H蓋325・

表6 I期の掘立柱建物一覧表

遺構名	桁×梁	構造	桁長	梁長	面積	棟方位	出土遺物	型式・時期	掲載遺物
SB05	6×2		10.3	2.7	27.8	N56°W	土師器・須恵器	飛鳥I～II	322・323
SB07	3×2		6.2	3.9	24.2	N45°E	土師器・須恵器	飛鳥II	325・327
SB08	3×?		6.4	?	?	N55°W	土師器・須恵器・土鍾	TK43	475～477
SB09	3×*1	総柱	4.3	*1.3	?	N57°W	土師器・須恵器	飛鳥I～III	319・320・321・324・326
SB10	2×2	総柱	3.4	3.05	10.4	N48°E	土師器・須恵器・土鍾	飛鳥II	318・479

長さの単位：m、面積の単位：㎡、*は現存値を示す。

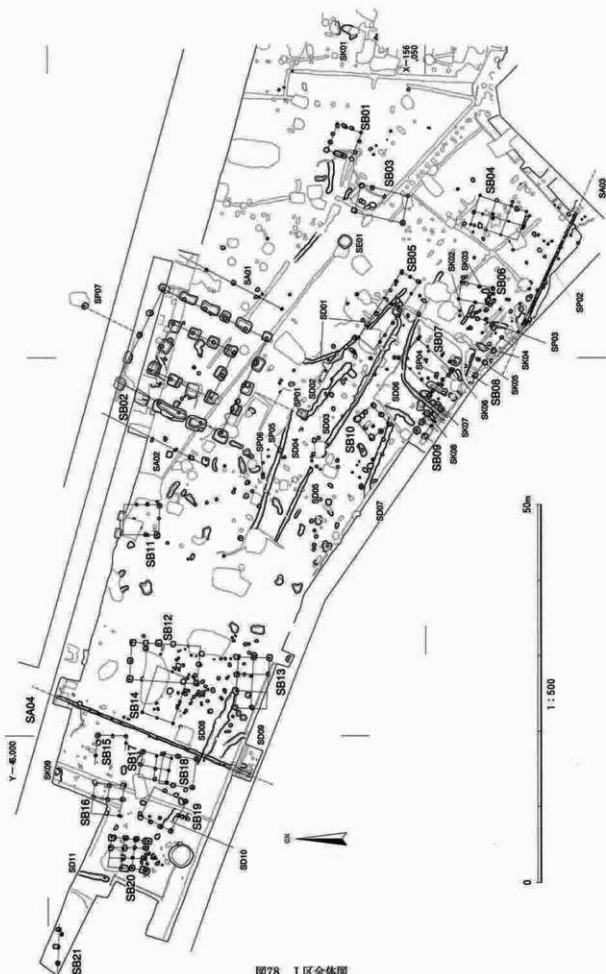


图78 I区全体图

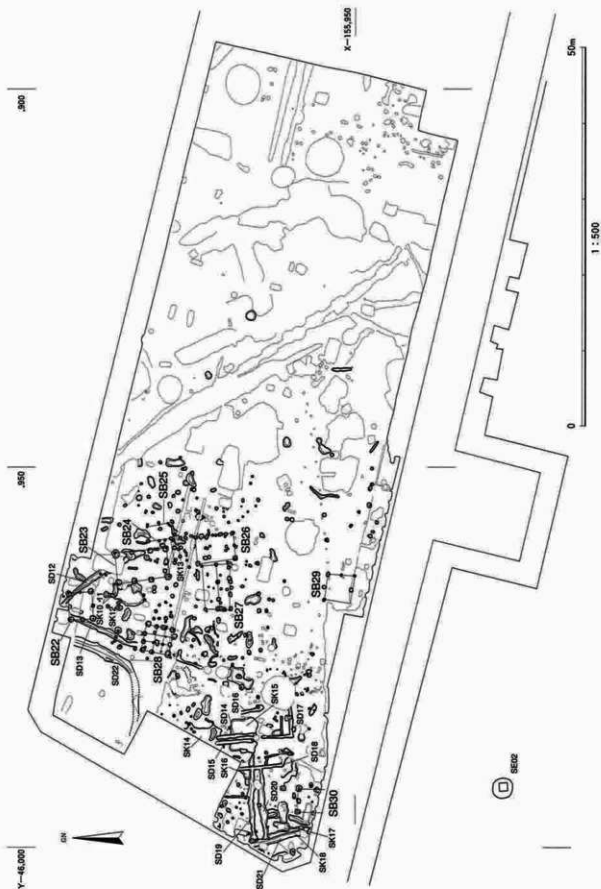


图79 IV区全体图

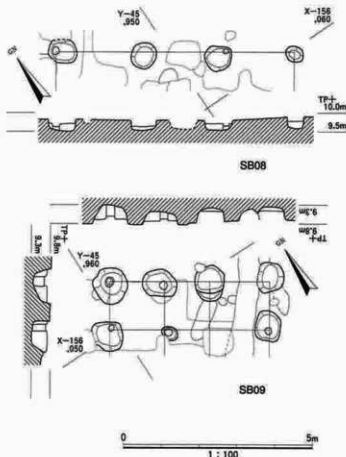


図81 I期の掘立柱建物実測図(2)

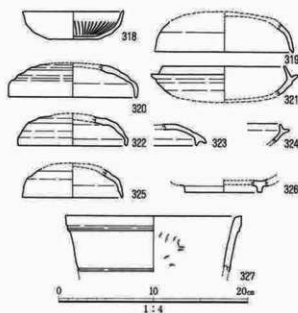


図82 I期の掘立柱建物出土土器

SB05(322・323)、SB07(325・327)、SB09(319～321・324・326)、SB10(318)

SB09は調査区の中央南端に位置し、南西側が調査区外に続いている。棟方位はN57°Wである。北東端の柱列は3間(4.3m)である。その南西に続く柱列は側柱以外の柱が小さく、東柱と考えられるため、総柱建物といえよう。北西-南東の柱間寸法は約1.4mである。柱穴の平面形は楕円形からやや隅丸形状で、長径0.9m以下と大きい。深さは0.6m以下である。柱痕跡が認められたものは直径約0.2mである。埋土は掘形が黒褐色砂質シルトを主体とし、明褐色シルト質粘土の段丘構成層の偽礫を含む。柱痕跡は褐色砂質シルトである。出土遺物には飛鳥Ⅰの須恵器がめだつが、飛鳥Ⅱの遺物が出土したSD06を切る遺構であることから、飛鳥時代中葉以降の時期が想定される。出土した遺物には土師器・須恵器がある。319～321・324・326は須恵器で

ある。319は口径14.6cmの杯口臺で、古墳時代後期中～後葉のものであり、321は同時期の杯身である。320はTK209型式に降り、324も細片ながら同型式のものであろう。326は杯Bで、高台の径に比べ杯底部が広い飛鳥時代後葉以降のものであろう。

SB10はSB08の北にある。桁行2間(3.4m)、梁行2間(3.05m)の正方形に近い建物である。本来は東柱のある総柱建物で、倉庫であった可能性がある。棟方位はN48°Eである。柱穴は直径0.6～0.9mの円形で、深さは0.2m弱である。柱痕跡はすべての柱穴にあり、直径0.20m以内である。埋土は、掘形が褐～暗褐色シルトが主体で、地山である段丘構成層の偽礫を含むものが多い。柱痕跡は暗褐色砂質シルトである。出土遺物には土師器・須恵器・土錘がある。318は

土師器杯Cである。底部は平底気味で、内面に放射状の暗文が1段観察された。飛鳥Ⅱに属するものである。ほかに、棒状土錘479がある。遺物からⅠ期の遺構群に含めておく。

b. 溝(図83～86、図版22・23・31)

Ⅰ区のSD03・04・06、Ⅳ区のSD13が該当する。ほかに、Ⅰ期に該当する可能性のある溝としてSD07・09・10がある。切合い関係から、すべてが同時に存在したとは考えられない。SD03はほぼ同じ方位であるSB05・08・09と同時期に存在していた可能性がある。SD04はその前後の時期のいずれに存在していたか不明である。SD06はSB05・08・09より新しい。溝の多くが北から西の方角に向かって低くなっていることから、集落内の排水を目的としたものと考えられる。

SD03は調査区の中央付近にある溝群中に位置する。長さ9.9m、幅0.3～1.1m、深さ0.2m以下である。溝底の標高はわずかに北西側が低い。方位はN50°Wである。埋土は暗褐色砂質シルトを主体とする。SD03の北西端は、Ⅱ期の大型掘立柱建物SB02に付属するSP01に切られている。出土した遺物には飛鳥Ⅱの須恵器杯H蓋333があり、この時期の遺構と考えられる。

SD04はSD03の北西にあり、両端を攪乱で壊されている。確認された長さ16.5m、幅0.4～0.8m、深さ0.2m以内である。溝底は西側の方が低くなっている。方位はN72°Wである。埋土は暗褐～褐色砂質シルトを主体とする。出土遺物には古式土師器の高杯脚部片328があるが、混入である。遺構の時期を示すものとして飛鳥Ⅱに属する須恵器杯H331がある。

SD06は調査区の南東部南端で見つかった。確認された長さは23.1mだが、南は調査区外に延びている。幅は0.4～0.7m、深さは0.4m以下で南側が深くくなっている。全体に「く」字状に屈曲している。埋土は暗褐色砂質シルトを主体とする。出土遺物にはTK43～209型式の須恵器杯H329・334、飛鳥Ⅱの杯H蓋ないし杯G330、杯H335などのほかに、須恵器平瓶頸部332・土師質飯蛸壺などがある。

SD07は調査区の中央南端に位置する東西方向の溝である。全長14.7mを調査したが、西端は調査区外に延びている。幅は0.4～0.7mで、深さはほぼ0.1mである。方位はN72°Wだが、東側3mほどが屈曲し、その部分の方位はN31°Eである。溝の底は西側に向かって低くなっている。埋土は暗褐色砂質シルトを主体とする。出土遺物には土師器のほか、須恵器壺・甕がある。それらは古代に属するものである以上は詳細な時期が不明である。ただし、切合い関係からはⅠ期に含めたSB10より古い遺構であるので、Ⅰ期に含めてもよからう。

SD09は調査区の西部に位置し、全長4.7mを調査したが、南端は調査区外に続いている。幅は0.7～0.9m、深さはほぼ0.2m以内である。方位はN37°Wであるが、南端付近ではほぼ真南に屈曲している。溝底は、確認した範囲では平らである。埋土は暗褐色砂質シルトを主体とする。出土遺物には暗文のある土師器の皿・須恵器があるが、細片のため図化していない。

SD10は調査区の西部に位置している。全長3.5mを調査した。幅は0.6～1.1m、深さは0.1m以内で、方位はN44°Wである。溝底は北西側が深くくなっている。埋土は暗褐色砂質シルトを主体とする。出土遺物には土師器や須恵器杯があり、TK209型式の須恵器を下隈としている。飛鳥時代末葉には開始するⅡ期の掘立柱建物の可能性があるSB19の柱穴に切られているため、Ⅰ期の溝と考えておく。

SD13はⅣ区の北西部に位置し、全長9.9mを調査した。北端は調査区の外に続いている。幅は0.4



図83 I期の溝実測図(1)

～0.9m、深さは0.25m以内で、方位はN23°Eである。溝底は北側が深くなっている。出土遺物には土師器甕・須恵器杯・壺・甕・銅鍔があり、これらは飛鳥Ⅰ～Ⅱに属する遺物であるが、細片のため図化していない。奈良時代に降るⅢ期と推定したSB24の柱穴に切られることから、それ以前の遺構と考えられる。方位がⅡ期の建物にほぼ一致するため、Ⅱ期に降る可能性もある。

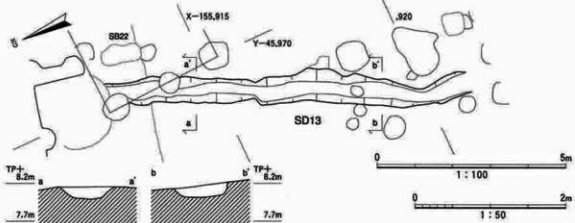


図84 Ⅰ期の溝実測図(2)

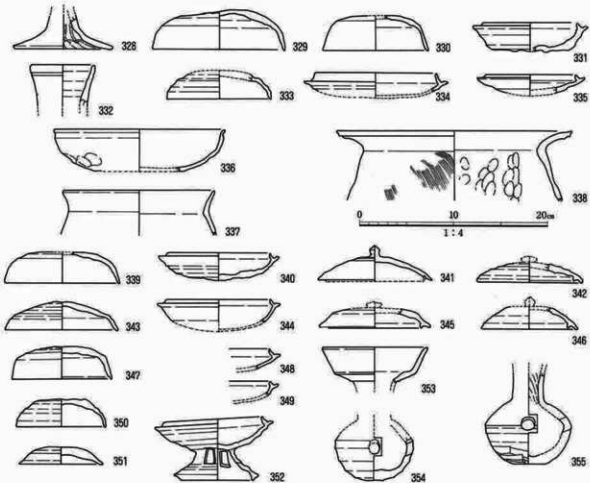


図85 Ⅰ期の溝・土壇出土土器

SD03(333)、SD04(328・331)、SD06(329・330・332・334・335)、SK01(341)、SK03(349・354)、SK05(339・343・347・352)、SK06(340・348)、SK08(344・351・355)、SK10(338)、SK11(342・350・353)、SK12(336・337)、SK17(345・346)

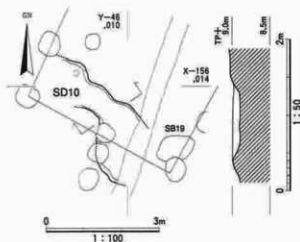


図86 I期の溝実測図(3)

まみがあり、飛鳥Ⅱに属するものである。

SK03はSB06の内にある。平面形は長径約1.1mの楕円形で、埋土は暗褐色含砂シルトである。細片であるが、飛鳥時代前葉に属する須恵器杯H349、恵の体部片354などが出土している。

SK05・06はSB07の南に位置する。SK05は方形ないし長方形に掘削されていたものと思われ、攪乱の北側は浅くなり検出されていない。南辺に沿って、幅0.15mで溝状に約0.05m深くなっている。

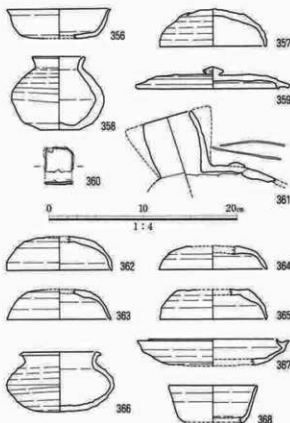


図87 I期の柱穴・包含層出土物

SP04(358・360・361)、SP05(356)、SP08(357・359)
包含層(362～368)

c. 土壇(図85・111、図版23)

I期の土壇は比較的多く、9基を確認することができた。I区ではSK01・03・05・06・08があり、IV区ではSK10～12・17がある。

なお、土壇の図面は奈良時代のⅢ期のものとまとめて後出した(123頁～図111)。

SK01は調査区の東端付近にある。攪乱で南側が破壊されているが、長径1.6mが残存する楕円形の土壇である。埋土は暗褐色砂質シルトである。須恵器杯G蓋341が出土した。宝珠形のつ

堅穴住居の可能性も検討したが、柱穴に当るものはない。飛鳥時代前葉の土器が出土した。

339・343・347は須恵器杯H蓋で、飛鳥Ⅰに属するものである。352は須恵器有蓋高杯で同時期のものである。ほかに、棒状土錘473がある。

SK06は平面形が楕円形で、飛鳥Ⅰに属する須恵器杯H340・348のほか、飯蛸壺2点が出土した。

SK08はSD06を切る土壇である。飛鳥Ⅰに属する須恵器杯H344のほか、須恵器の蓋351や、恵355、飯蛸壺などが出土した。

SK10～12はIV区の北西部に位置する。3基の土壇は切合っているが、SK10がもっとも新しく、SK11・12が順次古いものであるが、すべて飛鳥時代前葉に収まる時期の遺構である。SK10からは土師器甕338が出土した。口縁部を外方に折り曲げており、強くナデで端面を作っている。体部の外面はタテハケ、内面はユビオサエを施している。SK11からは須恵器杯H蓋350、G蓋342、恵口縁部353が出土した。飛鳥Ⅱ～Ⅲ

に属するものである。SK12からは土師器杯C336、甕337、飯蛸壺が出土した。336は飛鳥時代Ⅱ葉に属するもので、調整は、内面は剥落のため不明であるが、外面の下半にはユビオサエがみられる。337は器壁が薄い、長胴甕と考えられる。

SK17はⅣ区南西部に位置し、飛鳥Ⅱ～Ⅲの須恵器杯G蓋の345・346が出土した。

d. その他の出土遺物(図78・87、図版23・31・32)

以上のほかに、柱穴や包含層から出土したⅠ期の遺物がある。Ⅰ区の南東部SB07の範囲内にあるSP04からは須恵器の小型壺358・平瓶361や不明鉄板360が出土した。なお、360はX線撮影により穿孔などがないことを確認した。SP05からは土師器杯C356が出土しており、飛鳥前葉に属すると思われるが、磨耗のため暗文などの調整は不明である。SP08からは飛鳥Ⅰに属する須恵器杯H蓋357、飛鳥Ⅲに属する須恵器杯G蓋359が出土している。また、包含層からは飛鳥Ⅰ～Ⅱに属する須恵器杯H蓋362～365、TK209型式の須恵器杯H367、飛鳥Ⅱに属する須恵器杯Gないし杯A368、須恵器小型壺の366などが出土した。なお、367は細片を復元して実測したが、焼けひずみのため、本来の口径はより小さいものであろう。ほかに、SP06からは土鍾が出土しており、本章第5節に記載した。

ii) Ⅱ期の遺構と遺物

大型の掘立柱建物1棟と同時期と考えられるもの1棟、大型の掘立柱建物に付属する独立した柱穴2個、欄2条、全体を囲む欄2条が見つかった。さらに、掘立柱建物1棟、溝1条がⅡ期に該当する可能性がある。

a. 掘立柱建物(図88～91、表7、図版24・25・32)

Ⅰ区で見つかったSB01・02が該当するほか、その可能性があるものとしてSB19がある。

SB02は調査区の中央に位置するⅡ期の中心建物である。桁行は5間(15.4m)、梁行は4間(13.8m)である。もっとも北側の柱列はOR89-16次調査で確認された。桁行の柱間寸法は約3.1m、梁行の柱間寸法は3.45mである。棟方位はN25°Eである。3間(8.9m)×2間(6.7m)の身舎の四面に廂がつく構造と考えられる。全体の面積は212.5㎡である。柱穴の大きさはばらつきがあるが、約1.5m四方のものが多い。特殊な例であるが、西側側柱では長さ4.5mの長大な掘形に2本の柱が建てられている。深さは現存で0.8～1.2mであるが、段掘りにしているものが多い。埋土は褐～にぶい赤褐色砂質シルトで、掘形によっては暗褐色シルト層を挟んで版築状に突き固めながら埋めた形跡が認められ

表7 Ⅱ期の掘立柱建物・欄一覧表

遺構名	桁×梁	構造	桁長	梁長	面積	棟方位	出土遺物	型式・時期	掲載遺物
SB01	3×3		3.6	3.45	12.4	N23°E	土師器・須恵器・土庫	飛鳥Ⅱ～Ⅲ	369・374・480
SB02	5×4	四面廂	15.4	13.8	212.5	N25°E	土師器・須恵器	?	
SB19	3×2		5.0	4.3	21.5	N24°E	土師器・須恵器	?	
SA01	*3	欄	*11.3	—	—	N27°E	土師器・須恵器	?	
SA02	*3	欄	*7.9	—	—	N27°E	土師器・須恵器	?	
SA03	—	欄	16.5	—	—	N65°W	土師器・須恵器	飛鳥Ⅱ～平城	375
SA04	—	欄	28.0	—	—	N23°E	土師器・須恵器	?	

長さの単位：m、面積の単位：㎡、*は現存値を示す。

る。いずれの柱穴でも抜き取り穴はない。柱痕跡の太さは直径0.4~0.5mで、下の方がやや先細りとなる。埋土にはよい黄褐色シルトを主体に明黄褐~黄褐色粘土質シルトの礫層を多く含む。また、焼土粒・炭化物も多く含んでいる。柱穴内での柱の位置は身舎では柱穴の中央付近に認められるが、周辺ほど一辺に偏って据えられている。これは、強固な掘形の壁を利用して、柱が傾くことを防ぐために行われたものであろう。出土遺物には土師器・須恵器が多くあるが、いずれも細片で時期を判定し得

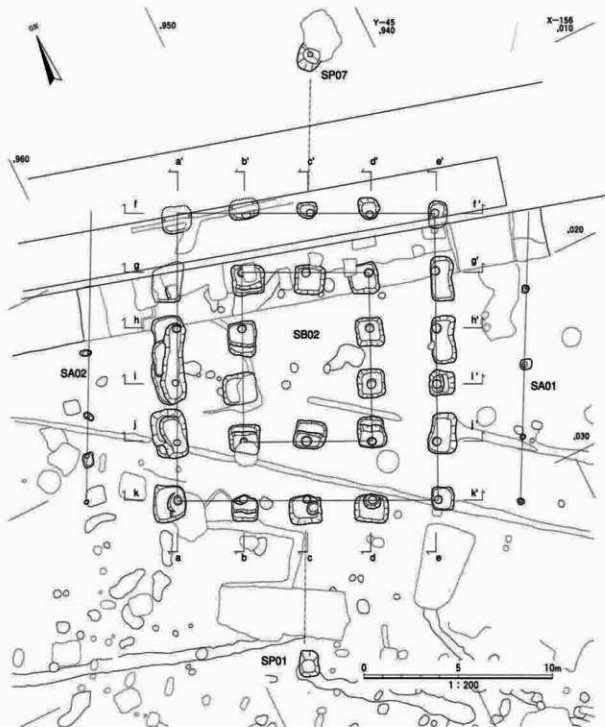


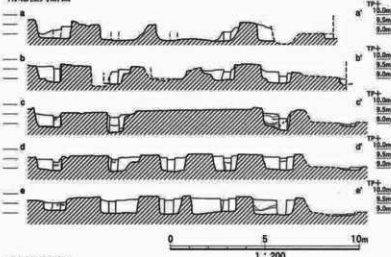
図88 II期の遺構平面図

る資料がない。

なお、本建物に葺かれていた屋根板を転用したと思われる奈良時代中～後葉のSE02が建物の中心から北西70m付近で見つかり、その詳細については115頁に記載している。

SB01はSB02の南辺を南東に延長したラインに南辺をほぼ一致させて建てられているため、同時に建設された建物と考えられる。両者の距離は心で26mである。SB01は桁行3間(3.6m)、梁行3間(3.45m)のほぼ正方形の建物で、柱間寸法は桁行が1.2m、梁行が1.15mである。建物の平面形から倉庫の可能性も考えられるが、束柱の柱穴は未検出である。棟方位はN23°Eである。柱穴は長径0.5～0.8mの隅丸方形から楕円

南北柱列断面



東西柱列断面

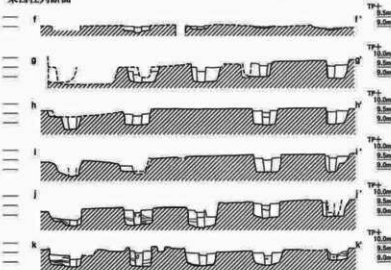


図89 SB02柱列断面図

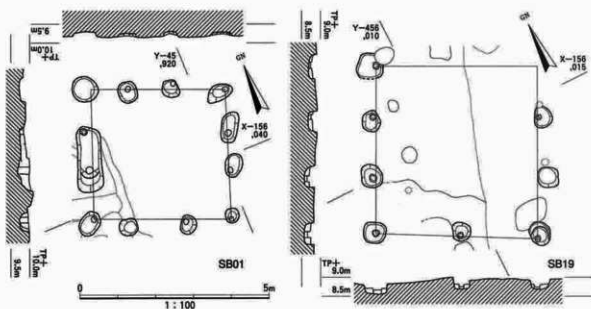


図90 II期の掘立柱建物実測図

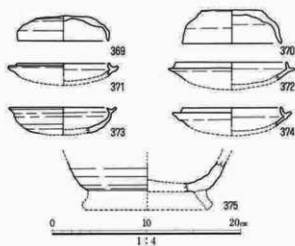


図91 SB01・SA03出土土器
SB01(369~374)、SA03(375)

形で、SB02と同様に西側柱列に2本の柱を据えた長さ1.8mの柱穴がある。柱穴の深さは最大で0.25m、埋土は褐色砂質土である。柱痕跡の直径は0.15~0.2mで、埋土は褐色シルトを主体としている。出土遺物には土師器・須恵器・飯蛸壺・土鏝がある。369~374は須恵器杯Hで、飛鳥Ⅱ~Ⅲに属する。

ほかにも、出土遺物からは時期不詳だが、棟方位からみてSB19がⅡ期に該当する可能性がある。桁行3間(4.5m)、梁行2間(4.3m)で、平面形は正方形に近い。柱間寸法は桁行1.5m、梁行

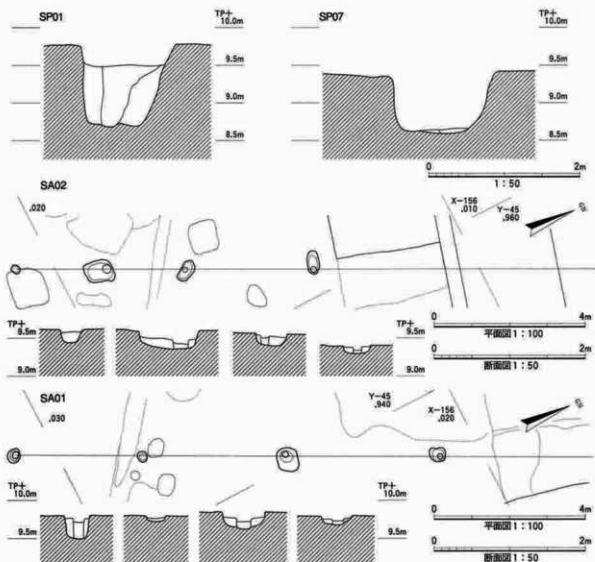


図92 SP01・07断面図・SA01・02実測図

2.15mである。棟方位はN24°Eで、SB01・02とはほぼ一致している。東柱となる柱穴は未検出であるが、形態から倉庫の可能性も考えられる。南側柱中央の柱穴が、TK209型式の土器を出土したSD13を切っているため、切合い関係でも矛盾せず、また、付近には奈良時代後半(Ⅲ期)に降る掘立柱建物が分布しており、それらと大きく棟方位がずれていることもSB19をⅡ期に考える理由となる。そのばあい、櫓によって仕切られた敷地外にも建物が存在したことになる。

b. 付属柱穴(図88・92、図版25)

SB02の南北中軸線上で、南側8.25mの位置にSP01、北側8.85mの位置にSP07が確認された。SP01は柱穴が1.4×1.0mの長方形に近く、深さは1.15mである。柱の抜取り穴が確認された。掘形の埋土は褐色シルトで、抜取り穴の埋土は地山層の偽礫を含む黄褐色シルトを主体とする。底で直径0.2mの柱を据えた痕跡が認められた。位置と柱穴の規模からSB02に附属する施設と考えられるが、周辺に組み合うような柱痕跡はない。さらにSB02との距離を考えると、建物の構造に直接係わるものとも考えにくい。また、SP07もSP01と同様の規模の柱穴で、直径0.2mの柱痕跡が認められた。切合い関係からは飛鳥Ⅱの遺物が出土したⅠ期のSD07より新しいことがわかるが、出土遺物には古代の土師器・サヌカイト剥片があるものの、時期を判定し得る資料がない。

c. 櫓(図88・91～93、表7、図版24・25)

SB02の東と西で、その築行に平行してSA01・02が位置している。また全体を区画するSA03・04が確認されている。

SA01・02はSB02の東西に4.5mほど離れて位置する。両者の柱間寸法はそれぞれ異なるが、4～5間でSB02の桁行に相当する長さにとらえられたと推測される。SB02から離れており、目隠し塀のような機能も考えられるが、柱穴は小さく仮設的な遺構とも考えられる。出土遺物には土師器細片があるが、時期のわかる資料はない。

SA03・04はSB02を中心とする敷地全体を区画する櫓である。方位は東西方向のSA03がN65°Wで、南北方向のSA04がN23°Eで、SB02に対してほぼ直交ないし平行している。SA03は敷地の南側を区画しており、東西の両端は調査区外に続いているものの長さ16.6mを確認した。幅は0.3m、深さ0.4m以上である。溝状の掘形に直径0.2mの柱痕跡が密接した状態で観察された。埋土は掘形が褐色砂質シルトで、柱痕跡が褐色シルトを主体としている。柱痕跡の下端は杭のように尖ってはならず、布掘りした掘形に柱を建て並べて埋戻したものと考えられる。出土遺物には飛鳥時代末葉から奈良時代にかけてのものと思われる須恵器壺底部片375があるが、出土した位置は未確認である。ほかに細片のため図化できなかったが、暗文のある飛鳥時代の土師器細片などが出土している。

SA04は西側を区画する櫓で、長さ27.8mが確認されているが、南北の両端は調査区外に続いている。柱痕跡はSA03ほど良好ではないが、数本の柱が密接して並べられた状況が一部で認められるため、SA03と同様の構造であったと考えられる。これら2条の櫓に対して、敷地の北側と東側を区画した櫓は見られなかった。Ⅱ区では、遺構の検出面がTP+10.2m付近であるが、東端で基底の高さがTP+9.7mであるSA03の続きは検出されていない。また、Ⅲ区およびⅣ区でも敷地の北側を区画する櫓は見つかっていない。Ⅳ区では飛鳥～奈良時代の遺構が多数検出されているため、もし、Ⅳ区に

槽が続いていたばあいは検出可能であったはずである。したがって、矩形となっていたと想定される槽の北辺はⅢ区に、東辺はⅠ区にあったと考えるべきであろう。Ⅰ区東側の遺構検出面の標高はSA03のそれとほぼ同じであるが、本来の地表面はより高くなっていて、削平により槽は失われたと考えられる。Ⅲ区でも攪乱による削平が著しいため、失われたものと考えられる。仮にSB02を中心にして南辺と西辺を折り返すと適当な範囲に復元できるのである(図95)。そのばあい、敷地の範囲は東西

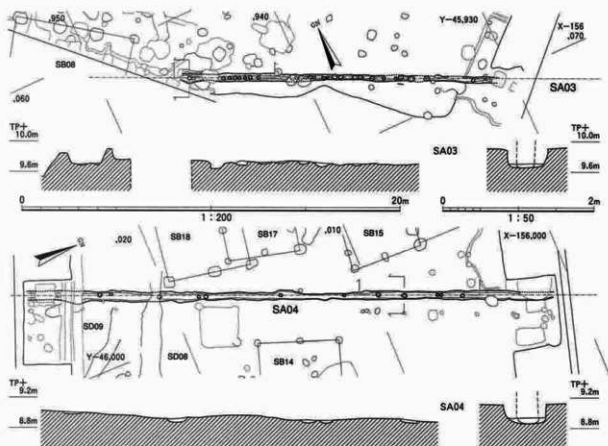


図93 SA03・04実測図

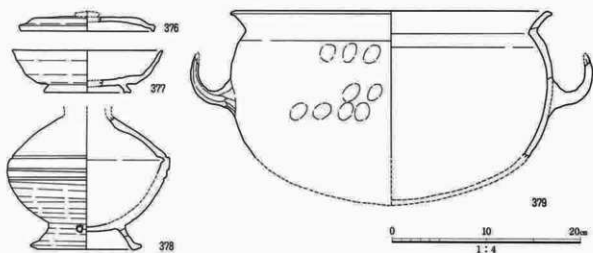


図94 SD05・包含層出土土器
SD05(376・378・379)・包含層(377)

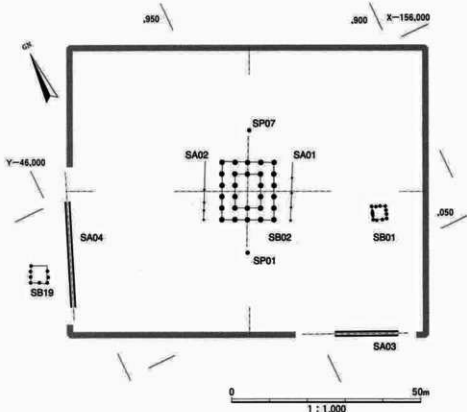


図95 II期の敷地推定復元図

約94m、南北約76mに復元される。なお、SB02の東西中心線とSA04の延長線が交差する地点はⅠ区とⅢ区の間にある道路に当る。この場所を調査したOR89-16次では、SA04の続きは検出されなかった。該当部付近は攪乱でかなり壊されていたが、一部に残った遺構検出面の標高は、高い個所でTP+9.0mであった。SA04の基底はⅠ区の北端付近でTP+8.9mであるため、SA04はこの部分で途切れていた可能性が高いと考えられる。SB02は南北に梁行が当たるため、建物の正面を東西の一方に想定でき、櫓が途切れた個所に門のような施設を考えることができるであろう。

d. 溝(図83・94、図版25・32)

SD05はSB02の南側で南東-北西に直線的に延びる溝である。途中で途切れた状態で検出されたが、全長36.6m、幅0.3~1.1m、深さ0.3m以内であった。方位はN55~59°Wである。東端3.5mは北に屈曲しており、西端は攪乱によって壊されている。埋土はいずれも褐~暗褐色含砂シルトである。出土遺物には土師器・須恵器・土鍾がある。379は土師器、376・378は須恵器である。379は把手付鍋である。内外面はナデており、ユビオサエの痕が残っている。378は台付長頸壺である。底部と高台の境に1個の穿孔がある。これらは飛鳥Ⅲ~Ⅳのものである。376は奈良時代後半以降の混入品の可能性もあるが、平城宮土器Ⅰから出現する器形であるため、ここでは供伴する遺物と扱っておく。SB02や敷地を区画する櫓とは方位がずれているが、Ⅰ期の掘立柱建物でこの時期以降に降ることが明らかな遺構がないため、Ⅱ期の遺構と考えるべきであろう。SB02の位置する北側は、遺構の検出面でみて下がつており、当時の地表面の勾配を反映しているならば、建物側に雨水などが流れ込まない

ような排水を目的とした施設である可能性が考えられる。

以上のほかにⅡ期に属する遺物として、包含層から出土した須恵器杯B377がある。飛鳥Ⅳに属するものであろう。

先述したように、Ⅱ期の遺構は前後の時期に比べて際だった特徴をもっている。第一に、非常に大型の掘立柱建物であるSB02が建設されたこと、SB02は南北に独立した柱や、梁の長さに一致すると考えられる欄を付属させた特殊なものであること。第二に、SB01やSB19のような小規模な建物以外に、SB02に付属する建物がないこと。第三に、欄によってSB02を囲み、長方形に敷地を区画した施設であった可能性が高いことなどである。

iii) Ⅲ期の遺構と遺物

掘立柱建物15棟、井戸1基、溝9条、土壇6基が見つかった。以前の遺構と比較して、最大の変化は、おもな遺構の方がおおむね正方位に合致してくることである。そのため、出土遺物からでは判断しきれない遺構でも、Ⅲ期に想定したものがある。なお、方位には若干の振れ幅があるため、Ⅲ期で扱う遺構群の時期をさらに細分し得る可能性もあるが、十分に検証できなかった。

a. 掘立柱建物(図96～101、表8、図版26・28・33)

I区のSB04・11～13・15・16・20、Ⅳ区のSB22～27・29・30の15棟である。

SB04は調査区の南東部に位置し、桁行3間(6.6m)、梁行2間(4.0m)の南北棟である。棟方位はN19°Eで、Ⅲ期のほかの建物に比べ、北で東に振っている。柱間寸法は桁行で約2.2m、梁行で2.0mとなる。柱穴は円形に近いものが多く、深さ0.3m前後である。埋土は掘形が暗褐色含礫シルトが主体である。柱痕跡が認められたものは直径0.15m以内で、埋土は褐～ぶい黄褐色シルトを主体に、黄褐色粘土質シルトの偽礫を含む。出土遺物には土師器・須恵器がある。388のように、飛鳥Ⅰの須

表8 Ⅲ期の掘立柱建物一覧表

遺構名	桁×梁	構造	桁長	梁長	面積	棟方位	出土遺物	型式・時期	掲載遺物
SB04	3×2	総柱	6.6	4.0	26.4	N19°E	土師器・須恵器	飛鳥Ⅰ～平城末葉	388
SB11	*3×2		*4.9	3.9	?	N1°E	土師器・須恵器	飛鳥Ⅲ～	
SB12	5×2		9.0	4.9	44.1	N4°E	土師器・須恵器	平城Ⅲ～	390
SB13	3×2	総柱	6.8	4.2	28.6	N3°E	土師器・須恵器	?	
SB15	*2×*2		*3.9	*2.7	?	N8°E	土師器・須恵器	?	
SB16	2×2	総柱	4.0	3.8	15.2	N8°E	土師器・須恵器	平城Ⅲ	380・382
SB20	3×3	総柱	5.0	3.8	19.0	N8°E	土師器・須恵器・飯碗	平城Ⅲ～	381・384・391
SB22	2×2		3.5	3.3	11.6	N1°W	土師器・須恵器	?	
SB23	3×2		7.0	3.9	27.3	N9°W	土師器・須恵器	?	
SB24	*1×*2		*3.2	*3.1	?	N9°W	土師器・須恵器	?	
SB25	*2×*2		*3.5	*3.4	?	N9°W	土師器・須恵器	?	
SB26	3×2		5.2	3.5	18.2	N8°W	土師器・須恵器	?	
SB27	3×2	総柱	6.0	3.5	21.0	N85°E	土師器・須恵器・土壇	平城Ⅲ～	383・385～387・389
SB29	2×2		3.6	3.4	12.2	N3°E	土師器・須恵器	?	
SB30	*1×2		*2.4	3.0	?	N3°E	土師器・須恵器	?	

長さの単位：m、面積の単位：㎡、*は現存値を示す。

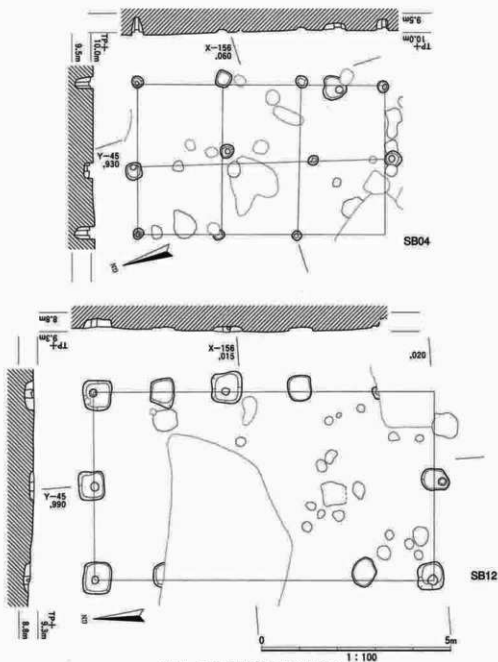


図96 Ⅲ期の掘立柱建物実測図(1)

恵器杯Hも出土しているが、ほかに細片のため図化しなかった奈良時代後～末葉の土師器もあることから、遺構の時期はⅢ期と思われる。

SB11はⅠ区中央西側の北端に位置している。北側が調査区外に続く可能性があるため、桁行3間以上(4.9m)、梁行2間(3.9m)の南北建物となる。棟方位はN11°Eで、ほぼ東西南北に合わせている。柱間寸法は桁行が約1.6m、梁行が1.6～2.3mとなる。柱穴は方形から円形で、南側柱列でみる限り、隅柱の柱穴が大きくなっている。深さは0.3m前後である。埋土は褐～よい黄褐色シルトである。柱痕跡が認められたものは直径0.1～0.15mである。出土遺物には土師器や飛鳥Ⅲの須恵器杯G蓋があるが、棟方位からⅢ期に想定した。

SB12はⅠ区西部にあり、SB11の西側14mの位置にある。

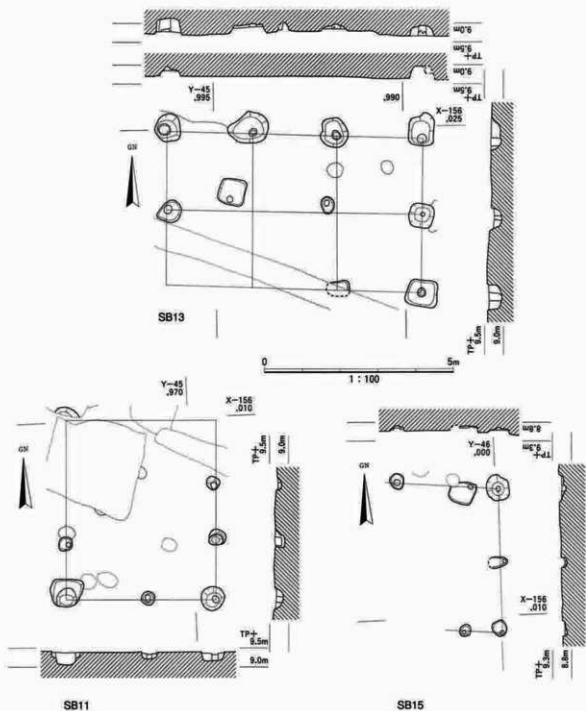


図97 Ⅲ期の掘立柱建物実測図(2)

桁行5間(9.0m)、梁行2間(4.9m)の南北建物である。全体の判明した建物では、Ⅲ期で最大の規模をもつ。棟方位はN4°Eである。柱間寸法は桁行が1.8m、梁行で約2.45mとなる。柱穴は方形のものが主体で、深さは0.3m以内である。埋土は褐色砂質シルトを主体とする。柱痕跡が認められたものは直径0.2m前後である。柱痕跡の埋土は褐～にぶい黄褐色砂質シルトで、黄褐色粘土質シルトの偽礫を含む。出土遺物には土師器・須恵器があり、奈良時代中葉以降と思われる須恵器杯B390がある。

SB13はSB12の南5mに位置し、桁行3間(6.8m)、梁行2間(4.2m)の東西建物で、柱筋が通らないが束柱が付随した総柱建物である。棟方位はN3°Eである。柱間寸法は桁行が約2.25m、梁行で約2.1mとなる。柱穴は方形から楕円形で、深さは0.3~0.4m前後である。埋土は褐色砂質シルトである。柱痕跡が認められたものは直径0.2m前後で、埋土は黄褐色砂質シルトで、黄褐色粘土質シルトの偽礫を含んでいる。出土遺物には土師器・須恵器があるが、いずれも細片のため図化していない。土師器には杯Aないし皿Aがあり、暗文がないため平城宮土器Ⅲ以降の可能性が高い。また、北側柱列の柱穴が平城宮土器ⅢからⅣにかかる遺物が出土したSD08を切るため、遺構の時期は奈良時代末葉に降ると考えられる。

SB15はSB12の西7mに位置し、南北2間(3.9m)、東西2間(2.7m)以上の南北棟である。ただし、東西方向の柱列で、東側の隅柱とその西隣の柱穴が近接しすぎており、建物にならない可能性もある。棟方位はN8°Eである。柱穴の平面形は円形から楕円形のものが多く、深さ0.2m以内である。埋土は掘形が褐色砂質シルトである。柱痕跡が認められたものは直径0.15m以内で、埋土は褐色ない

し黄褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色粘土質シルトの偽礫を含む。出土遺物には奈良時代の土師器や須恵器があるが、いずれも細片のため図化していない。

SB16はSB12の西14m弱に位置し、桁行2間(4.0m)、梁行2間(3.8m)の正方形に近い総柱建物である。北西の隅柱は調査区外となる。棟方位はN8°Eである。柱間寸法は桁行が2.0m、梁行で約2.1mとなる。柱穴は方形から楕円形で、隅柱の深さは0.3~0.45m、ほかは0.2m前後である。柱痕跡が認められたものは直径0.15m前後である。埋土は掘形が褐~暗褐色砂質シルト、柱痕跡は褐色砂質シ

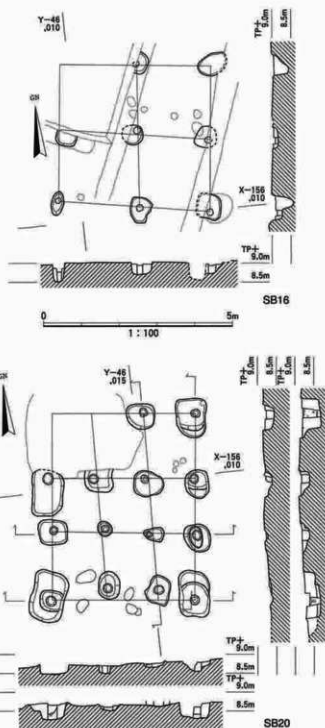


図98 Ⅲ期の掘立柱建物実測図(3)

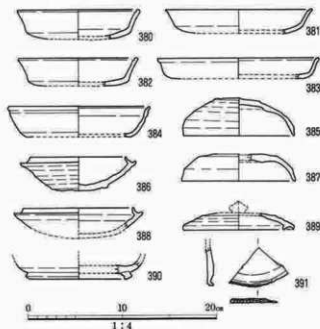


図99 Ⅲ期の掘立柱建物出土土器

SB04(388)、SB12(390)、SB16(380・382)、SB20(381・384・391)、SB27(383・385・387・389)

ルトを主体とする。出土遺物には土師器・須恵器がある。380・382は土師器杯Aで、内・外面には暗文がない。奈良時代中葉ころのものであろう。

SB20はSB16の西約3mに位置し、桁行3間(5.0m)、梁行3間(3.8m)のやや南北に長い竪柱建物である。棟方位はN8°Eである。柱間寸法は桁行が約2.1m、梁行が約2.25mとなる。柱穴の平面形は方形から楕円形で、深さは0.5m前後以内である。埋土は褐色砂質シルトを主体とする。柱痕跡が認められたものは直径0.2m前後で、黄褐色砂質シルトを主体とし、にぶい黄褐色粘土質シルトの偽鏝を含んでいる。出土遺物には土師器・須恵器・飯蛸壺がある。381・384は土師器である。381・384は杯Aである。どちら

も、内・外面には暗文が施されていない。391は平城宮土器Ⅲ以降の杯B蓋であるが、幅約6.5cmの破片を利用し、外縁部を裏面側から細かく打ち欠いて、あたかも石器のような刃部を作り出している。刃部には、蓋の外表面側に磨滅した部分があり、使用痕と考えられる。対象物にこすりつけるように使用したのであろう。

SB22・27・29・30はⅣ区の遺構である。

SB22は調査区の北西端付近に位置する。南北2間(3.3m)、東西2間(3.5m)の正方形に近い建物である。棟方位はN1°Wで、ほぼ、東西南北に合致させている。柱間寸法は南北が1.65m、東西で1.75mである。建物の平面形からみて倉庫の可能性も考えられるが、東柱は見つからなかった。柱穴の平面形は円形のものが多い。深さは0.25m以内である。柱痕跡が認められたものは直径0.1m前後で、細めである。埋土は、掘形が褐色砂質シルトで、柱痕跡は黄褐色砂質シルトを主体とし、にぶい黄褐色粘土質シルトの偽鏝を含むものである。出土遺物には土師器・須恵器の細片が認められたが時期を示す資料はなかった。ただし、後述する飛鳥時代後半から奈良時代初頭にかけての土器が出土したSD12より新しい点と、棟方位とからⅢ期の遺構とする。

SB23は調査区の西北部に位置する。桁行3間(7.0m)、梁行2間(3.9m)の南北棟である。棟方位はN9°Wである。柱間寸法は桁行が約2.3m、梁行で1.95mとなる。柱穴は楕円形から方形で、深さは0.7m以内で、特に隅柱が深い。柱痕跡が認められたものは直径0.2～0.3mである。埋土は、掘形が褐色砂質シルトで、柱痕跡はにぶい黄褐色粘土質シルトの偽鏝を含む黄褐色砂質シルトである。出土遺物には遺構の時期を示すものはないが、SB22と同様の理由で、Ⅲ期の遺構と考えた。

SB24・25はSB23の南東側にある。ともに掘立柱建物と考えたが、SB23に付属する施設とも考え

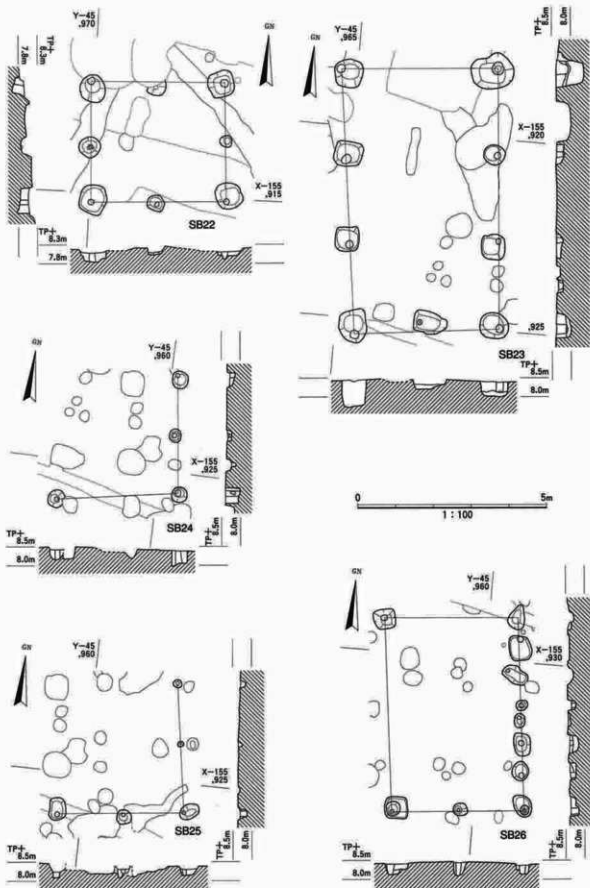


図100 Ⅲ期の掘立柱建物実測図(4)

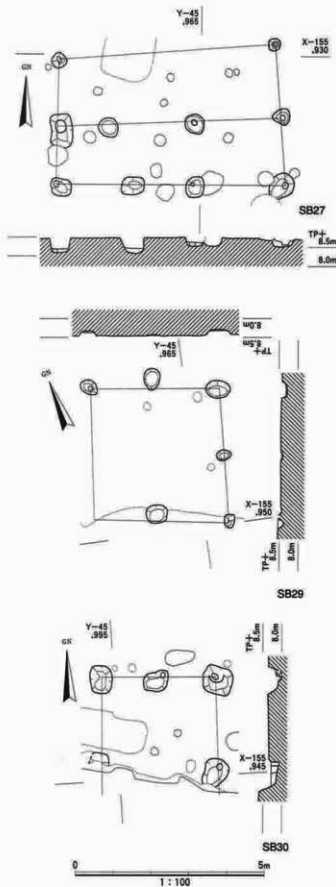


図101 Ⅲ期の掘立柱建物実測図(5)

られる。SB24は南北2間(3.1m)、東西1間(3.2m)に直角に柱穴が並ぶ。なお、東西の柱列の中心にもう1個の柱穴が存在していた可能性があるが、未検出である。方位はN9°Wである。柱穴は円形で、深さは0.5m以内である。埋土は褐色砂質シルトを主体とする。柱痕跡が認められたものは直径0.2mである。埋土は黄褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色粘土質シルトの偽礫を含んでいる。出土遺物には遺構の時期を示すものはないが、SB23と同方位であるため、Ⅲ期の遺構とする。

SB25はSB24と同方位である。南北2間(3.5m)、東西2間(3.4m)に直角に柱穴が並ぶ。柱穴は円形から楕円形のを主体とする。深さは0.35m以内である。柱痕跡が認められたものは直径0.15m以下である。埋土は、掘形が褐色砂質シルトで、柱痕跡は褐色シルトを主体に、にぶい黄褐色粘土質シルトの偽礫を含んでいる。遺構の時期を示す出土遺物はなかった。

SB26はSB23の南4mに位置する。桁行3間以上(5.2m)、梁行2間(3.5m)の南北棟で、棟方位はN8°Wである。西側柱列には、ほかに4個の柱穴が同一ライン上に位置し、補助的な柱が据えられたものと考えられる。柱間寸法は桁行で2.6m、梁行で1.75mとなる。柱穴の平面形は方形から楕円形で、深さは0.35m以内である。柱痕跡が認められたものは直径0.15m以内である。埋土は、掘形が褐色砂質シルトで、柱痕跡はにぶい黄褐色粘土質シルトの偽礫を含む黄褐色砂質シルトである。出土遺物には古代の土師器・須恵器の細片があるが詳細な時期は不明である。

SB27はSB26の西に接する建物である。桁行3間(6.0m)、梁行2間(3.5m)になる東西棟の総柱建物である。棟方位はN85°Eである。柱間寸法は平均して桁行が2.0m、梁行で1.75mになるが、桁行中央の柱列では柱間の粗密が著しい。また、北側の平の寸法がやや短めで、建物の平面形は台形ぎみである。柱穴は方形のものもあるが、多くは円形である。柱痕跡が残るものは直径0.15m以内である。埋土は掘形が褐色砂質シルトで、柱痕跡は黄褐色砂質シルトに、にぶい黄褐色粘土質シルトの偽礫を含むものである。出土遺物には奈良時代の土師器・須恵器・土錘がある。383は土師器皿ないし杯Aで平城宮土器Ⅲ以降のものである。ほかに、飛鳥時代前～中葉の須恵器杯H385～387と、杯G蓋389が出土した。385は完形、386は1/2程度が残存するが、混入品である。Ⅲ期に含めたⅣ区の掘立柱建物のうち、出土遺物から時期が特定できるのはSB28のみである。

SB29は調査区の西南部に位置する。南北2間(3.6m)、東西2間(3.4m)でほぼ正方形に近い。棟方位はN3°Eである。柱間寸法は南北1.8m、東西1.7mである。倉庫の可能性も考えられるが、東柱の柱穴は見つからなかった。柱穴は長径0.6m以内の楕円形のものが多く、深さは0.15m以内である。柱痕跡は北東隅柱のみで見られ、直径0.15mである。埋土は、掘形が褐色砂質シルトで、柱痕跡は褐色ないし黄褐色砂質シルトを主体に、にぶい黄褐色粘土質シルトの偽礫を含んでいる。出土遺物には古代に属すると思われる土師器・須恵器があるが、細片で時期の判別できるものはない。

SB30は調査区南西端付近に位置する。桁行1間以上(2.4m)、梁行2間(3.0m)で、南側は調査区外に続いている可能性が高い。棟方位はN3°Eである。柱間寸法は桁行が2.4m、梁行で1.5mとなる。また、東側柱列の北側延長上に類似した形状の柱穴があり、この建物の柱穴である可能性があるが、柱間寸法が異なる。柱穴は隅丸方形に近い。深さは0.55m以内である。柱痕跡が認められたものは直径0.15m以内である。埋土は、掘形が褐色砂質シルト、柱痕跡は黄褐色砂質シルトを主体に、にぶい黄褐色粘土質シルトの偽礫を含んでいる。出土遺物には土師器・須恵器の細片があるが古代と思われるものの詳細な時期は不明である。

b. 井戸(図102～106、写真4、図版26～28・33・34)

SE02は横板積に側板を組んだ正方形の井戸である。近現代に上部が数m削平されている。柱穴はおおむね円形で、直径は2.6m、深さは2.1mである。掘形の壁は垂直に近いが、基底付近では一部がテラス状に高くなっている。掘形の基底に長径10cm以下の円礫を敷き、その上に側板を載せていた。側板は長さ約1mの板4枚を正方形に組んで1段とし、5段分のみが遺存していた。側板の最下段では、その内側に1段の水溜めが設けられていた。検出面付近では側板が認められなかったが、埋土の違いから井筒の内外を認識することができたため、本来は旧地表面まですべて積み上げられていたものと推定される。側板はほぼ東西南北に方位を合わせている。井筒の内部は基底から1m強がシルトと極細粒砂からなる水漬きの堆積物で、その上位は暗褐色砂質シルトを主体とする埋戻し土である。掘形内は暗褐色砂質シルトで埋戻してあった。水漬きの堆積物は、井戸が廃絶した後に、埋戻されるまでの間に堆積した自然堆積物である。

側板は断面が扁平な五角形に加工された長さ117cmと108cmの板で、幅はどちらも34cmである。板の合わせ目は、長いほうの両端を2cm薄くして段を作り、短い方の板を当てている。板の凸面側は風

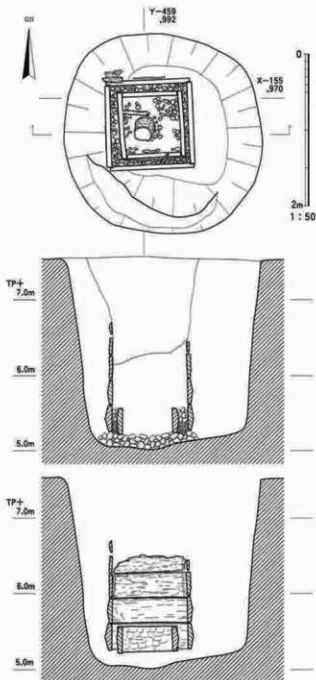


図102 SE02実測図

化して割れ目が生じたりしているが、対する平面側には、加工痕が良好に遺存している。

井筒の最下段の内部には、水溜めが1段作られている。板の長さは88cmで、幅は井筒の銅板と同じである。板の両端を凸凹に切り出し、組み合わせている。井筒の最下段と水溜めの外周を巻いた縄が確認され(写真4)、おそらく、全体が1段ごとに縄で巻かれていたと考えられる。井筒と水溜めの間には円礫が詰めてあった。

出土遺物は掘形の埋戻し土内・基底の水溜め内・井筒内部の水成層内・井筒内部の埋戻し土内に分けられ、土師器・須恵器・土鍾がある。井戸の使用時期を反映しているのは基底の水溜め内から出土した土器で、土師器397～400、須恵器401・402が該当する。

397～399は皿Aで、内・外面ともにナデで調整しており、暗文は施さない。400は杯Cで、底部内面にわずかながら弧線の暗文が施されている。これらは平城宮土器Ⅲ～Ⅳに属する。401は杯B蓋で奈良時代前葉のもの、402は杯Aで奈良時代後葉のものであろう。

須恵器杯B蓋403・鉢404は井戸が廃絶されてから埋戻されるまでの間に混入したもので、奈良時代中～後葉に属するものである。

井戸を埋戻した地層に含まれていた遺物には、土師器405・406・408・411・414や須

恵器407・409・410・412・413などがある。405・406は杯Aで奈良時代後葉に属するものであろう。408・411・414は甕で、奈良時代後葉の範疇に収まるものであろう。407は皿で、内・外面とも全体を回転ナデで仕上げている。409は杯Bの口縁部片と思われる。412・413は杯Bの底部片である。410は高台をもつ壺の底部片の可能性が高い。412は口径に比べて高台径が小さく、飛鳥時代にさかのぼる可能性があるが、ほかは平城宮土器Ⅲ～Ⅳに属するものである。

また、掘形からは飛鳥～奈良時代前葉の土器が出土した。土師器高杯415、須恵器壺416～418などである。415は杯部の口縁部下がやや上方に屈曲してから外方に広げられて口縁部にいたるものである。口縁端面は強いナデによりわずかに凹んでいる。416～418は各種の壺である。

以上の土器のほか、水溜めの内部から出土した遺物として籠・植物種子などがある。籠392は水溜めの基底付近に口縁部を上にして傾いた状態で出土した。土圧により変形していたが、口径21.7cm、高さ21.3cmに復元できる。平均して幅0.35cmの竹か葦のようなものを用いた籠で編んでいる。編み方は底部と体部で異なっている。底部は直径15cm程度が網代編みで、体部は松葉編みと呼ばれる手法である。口縁部には径0.6cmの植物質の芯が用いられている。芯の外方に体・底部と同じ籠を沿わせ、体部との結合は、その籠と芯との間に体部からのびる籠を折り込んで、同様の籠を全体に巻き付けることによって行っている。

種子は初穀・マクワウリの仲間・ヒョウタン・ウキヤガラ？(水草)である。

なお、遺存状況のよい側板のうち、4枚を対象に年輪年代法による年代測定を行った。その詳細は本章第6節に述べているが、1枚に原木の辺材部が残っていたため(393)、伐採年代を西暦694年と

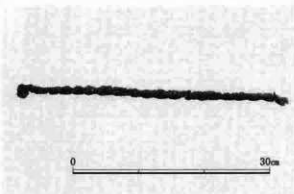


写真4 側板を巻いた縄

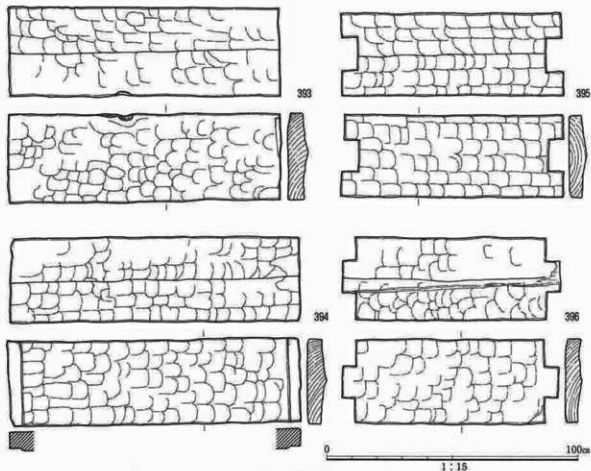


図103 SE02側板

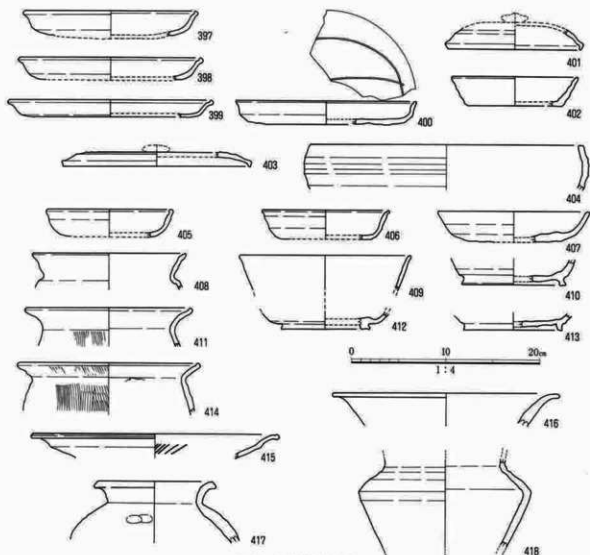


図104 SE02出土土器

掘形縄文土(415~418)、水溜め(397~402)、井筒内水成層(403・404)、井筒内埋戻し土(405~414)

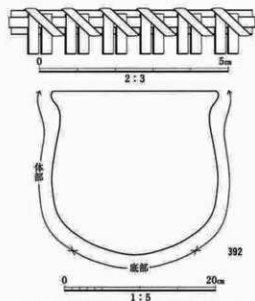


図105 籠の形状と口縁部の作り方模式図

測定することができた。そこで、SE02の造られた年代は、側板の伐採年である西暦694年を上限とするが、出土した土器はⅢ期の建物群のそれと一致し、8世紀中葉ころと想定されるものである。また、側板がほぼ正方位に合わせて造られていることも、Ⅲ期の集落の地割に合致させたことを意味していると考えられる。したがって、この井戸はⅢ期の集落が始まるところに造られ、8世紀後葉ころに廃絶されたと考えられる。

c. 溝(図107~110、図版22・28・33・34)

I区でⅢ期に該当する溝は少ない。調査区西部でⅡ期のSA04を切るSD08と、西北端にあるSD11がある。Ⅳ区では調査区北西部のSD12のほか、南西部に集中して

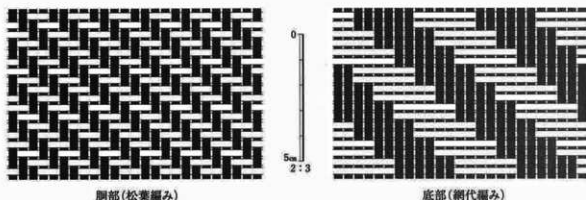


図106 籠の編み方模式図

SD14～20が存在する。

SD08は長さ11.2m、幅0.4～0.7m、深さ約0.3m以内である。方位はN64°Wで、西北西側が深くなっている。細片のため図化していないが、平城宮土器Ⅲ～Ⅳの土師器・須恵器が出土した。

SD11はSB20の北西約2mに位置している。長さ4.1m、幅0.4～0.8m、深さ約0.2m以内である。北端は調査区外に続いているが、Ⅲ区の削平が著しいため、全体は不明である。方位はN12°Eで、北側が深くなっている。出土遺物には土師器・須恵器がある。土師器ⅢB426は底部内面に密な放射状の暗文が施されている。須恵器杯B431とともに奈良時代前～中葉のものである。時期の判明した資料はSB20よりやや古い様相を示すが、SB20に付属する溝と想定することも可能である。

SD12は長さ13.1m、幅0.5～0.9m、深さ0.2m以内である。北端は調査区外に続いている。方位はN25°Wで北西側が深くなっている。出土した土器は飛鳥時代前葉から奈良時代初頭にかけてであるが、古い時期のものが多く、奈良時代に降る遺物は図化し得なかった。土師器には419・422、須恵器には427・428がある。419は杯Aで、口縁部下の外面に横方向のヘラミガキが施されている。内面は放射状の暗文が施されている。もとは2段の暗文であったと思われるが、下段の暗文は表面が摩耗しているため確認できなかった。422は鍋などにつく把手である。平面形は三角形で、やや薄い作りである。これらは飛鳥Ⅱ～Ⅲに属するものである。須恵器で図示した427はTK209型式に、428は飛鳥Ⅱに属する杯Hである。ほかに鉾津も出土している。切合い関係ではⅢ期のSB23より古い段階の遺構であるが、Ⅱ期の遺構として扱うとその敷地からかなりはずれてしまうため、Ⅲ期の遺構と考えておく。

SD14・15は調査区の西端に位置し、南北に平行する2条の溝である。SD14は長さ5.4m、幅0.3～0.5m、深さ0.2m以内である。方位はN4°Wで北側が深い。古墳時代のSK15を切っている。土師器甕423などが出土した。423の頸部は直立ぎみで、上半が外方に広がって口縁部にいたる。口縁端面はナデによりやや上方につまみ上げている。口縁部の内面にはヨコハケが施されており、頸部はヨコハケのあとナデている。体部は外面にハケを施し、内面はユビオサエで調整している。時期が判明した遺物は飛鳥時代後半ころの土師器・須恵器であるが、後述するようなⅣ区の溝群のうち、方位を北で若干西に振っているものはⅢ期の掘立柱建物と一致する方位にあり、本期の地割に合致させたものと考えられる。SD15は長さ6.1m、幅0.4～0.5m、深さ0.1m以内である。方位はSD14と同一で、北

側が深くなっている。時期不詳だが古代の土師器・須恵器・土鍾が出土した。

SD16はSD14の東3mに位置する。長さ3.1m、幅0.4～0.9m、深さ0.1m以内で、溝底はほぼ平坦であるが、中央付近が若干深くなっている。方位はN10°Wである。須恵器壺底片434が出土した。奈良時代後～末葉のものであろう。

SD17はSD14・15の南に位置し、これらにほぼ平行するが南側は直角に折れて東に延びている。長さ9.3m、幅0.3～0.6m、深さ0.15m以内である。北側部分の方位はN2°Wである。須恵器杯G蓋429のように飛鳥時代の土器細片が出土したが、ほかには遺構の時期を示す遺物はない。前述のように、溝の方位に着目してⅢ期の遺構と想定しておく。

SD18～20は調査区南西部に位置し、埋土から同時期に埋没したと考えられる3条の溝である。南北溝であるSD18の西側に東西溝のSD19・20が接している。SD18は長さ7.5m、幅0.5m、深さ0.14

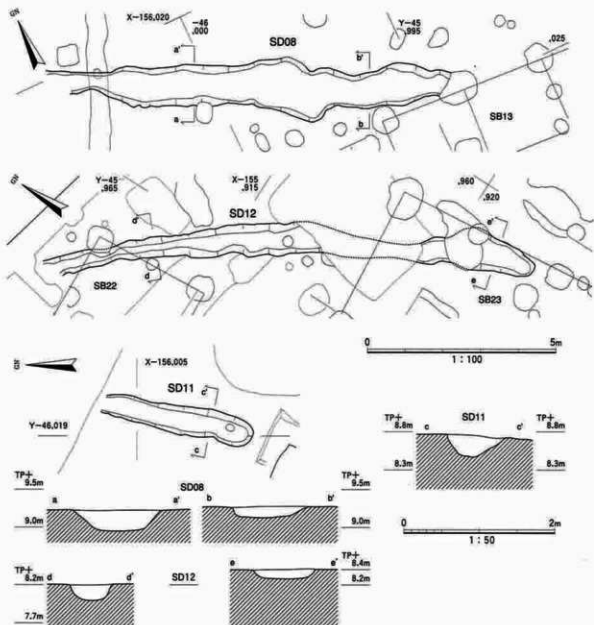


図107 Ⅲ期の溝実測図

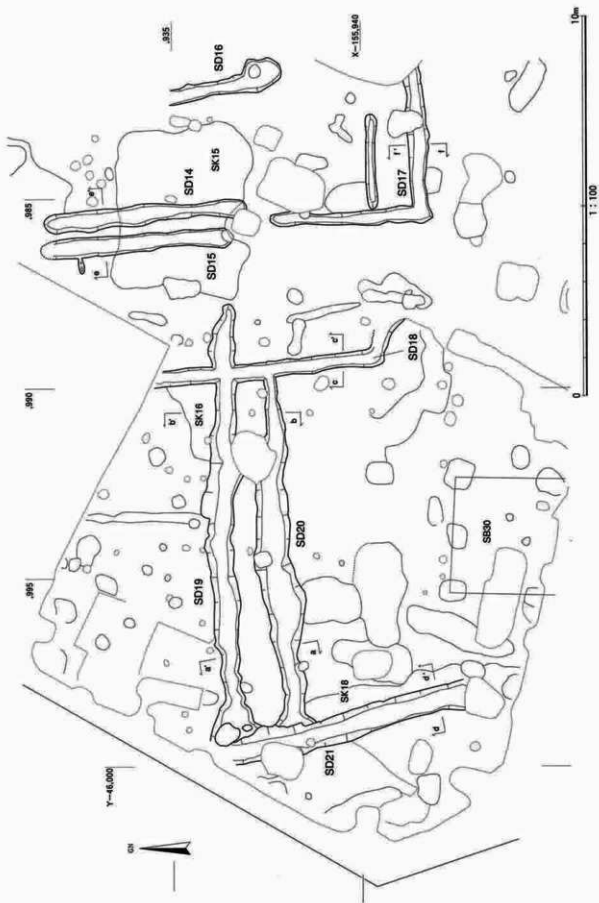


図108 III期の遺平面図

m以内である。方位はN 6°Wだが、南端は東に屈曲している。北側が深くなっている。SD19は長さ11.7m、幅0.4~0.7m、深さ0.16m以内である。大部分はSD18の西側に当るが、長さ1.5m前後が東側にも延びている。方位は東西に合致し、西側が深くなっている。土師器・須恵器・土鍾が出土した。430は須恵器杯Bで、飛鳥Ⅳ~平城宮土器Ⅱのころのものである。時期不詳の土壙SK16を切っている。SD20はSD19の南に平行する溝で、長さ9.7m、幅0.3~1.1m、深さ0.25m以内である。方位は

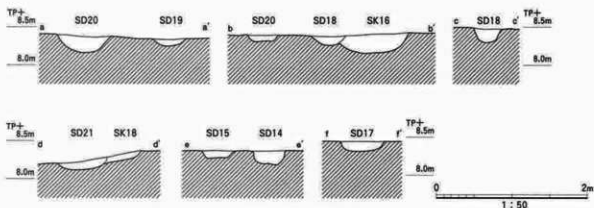


図109 III期の溝断面図

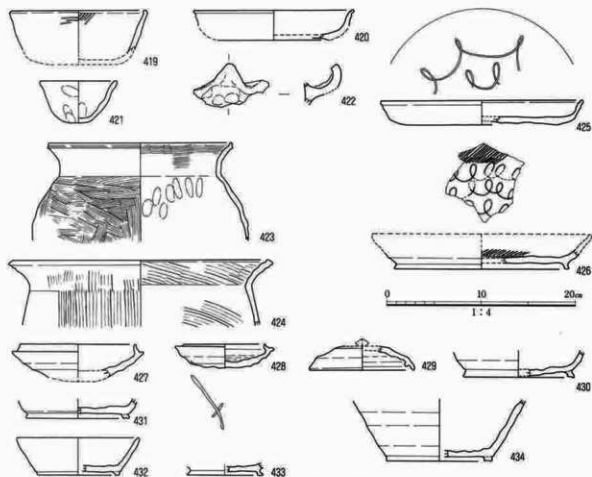


図110 III期の溝出土土器

SD11(426・431・433)、SD12(419・422・427・428)、SD14(423)、SD16(434)、SD17(429)、SD19(430)、SD20(420・421・424・425・432)

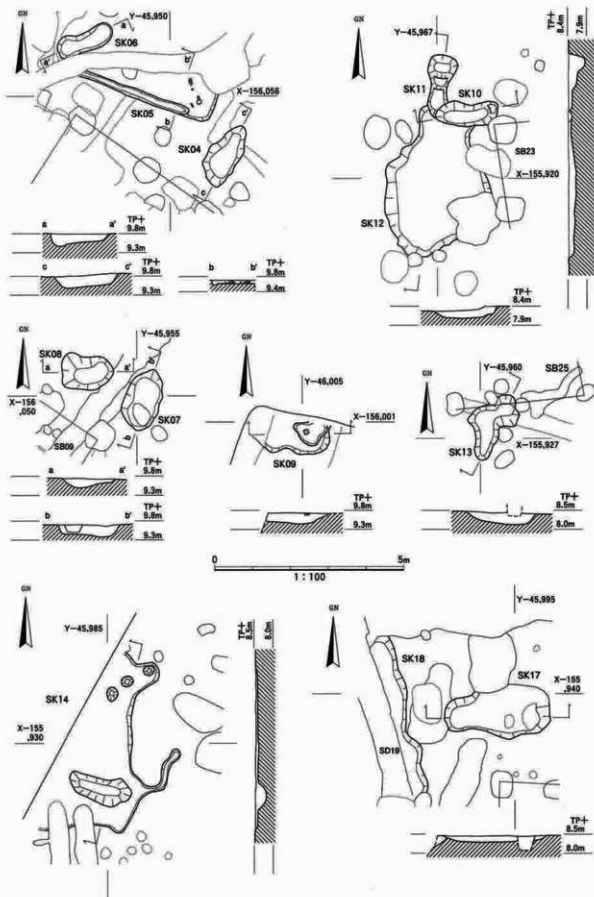


図111 I・Ⅲ期の土坑実測図

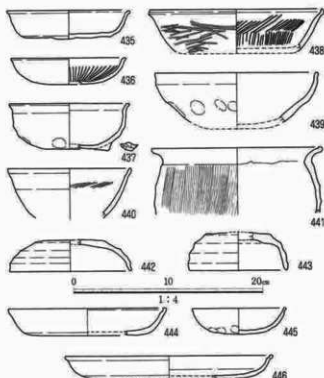


図112 Ⅲ期の土壌・包含層出土土器

SK04(440)、SK07(439)、SK09(435)、SK13(437)、SK18(438・441～443)、包含層(444～446)

N9°Eで、西側が深くなっている。SD19とともに、西端はSD21に切られているが、それ以上西側には続いている。奈良時代後半の土師器・須恵器のほか、古墳時代の埴輪片が出土している。420・421・424・425は土師器である。420は杯Aで器高は低く、内・外面にナデを施しているが暗文は見られない。421は手捏ねの碗である。425は皿Aで、底部内面に螺旋状の暗文を2重に施している。432は須恵器杯Bで、器高は3.9cmと低い。以上は平城宮土器Ⅲ～Ⅳに属するものである。SD20から出土した土器がもっとも新しい様相のものであるため、同時期に埋没したほかの2条の溝も奈良時代後半以降に降る遺構と考えられる。

SD21は調査区の南西隅にあり、長さ6.7m、幅0.7～1.4m、深さ0.24m以内である。方位はN16°Wで、北側が深くなっている。

方位がほかの溝に比べて北で西に振っており、遺物もTK209型式の須恵器などが散見されるのみであるが、遺構の切合い関係から奈良時代末葉以降の溝とみられる。

d. 土壌(図111・112、図版28・34)

Ⅲ期に属する土壌はⅠ区で3基、Ⅳ区で3基ある。Ⅰ区の土壌にはSK04・07・09がある。

SK04は調査区の南東部にあり、飛鳥時代のSK05の南東に位置している。平面形は楕円形で、長径1.75m、幅0.85m、深さ0.3mである。埋土は褐色砂質シルトで、奈良時代後葉の土師器碗440や、飯蛸壺などが出土した。

SK07はSK04の北西約10mに位置している。平面形は楕円形で、長径1.7m、幅0.9m、深さ0.25mである。埋土は褐色砂質シルトで、奈良時代の土師器碗439などが出土した。

SK09は調査区の北西隅に位置し、北西側が調査区外に続いている。長さ1.6m、深さ0.2mを調査した。埋土は褐色含礫砂質シルトで、土師器杯A435などが出土した。435は検出面付近で正置した状態で出土したが、意図的なものか否かは不明である。底部外面はユビオサエを、ほかはナデを施している。暗文は見られない。奈良時代中葉以降のものである。

Ⅳ区の土壌はSK13・14・18である。

SK13はSB25の南側柱中央の柱穴に切られている。長さ1.9m、幅0.9m、深さ0.3mの不定形な土壌である。出土遺物には時期不詳なものが多いが、土師器碗437が奈良時代に降る可能性があることから、Ⅲ期に含めておく。437はやや平底さみの底部で、口縁部は直立する体部の上半から短く開く。

調整は剥落が著しく不明であるが、底部付近はユビオサエのようである。なお、底部に1箇所1cm程度の粘土塊が貼り付いている。表面をナデて形を整えていることから、意図的につけたものと考えられる。土器を置いた際に安定を図る一種の脚のような機能が考えられるが、断定はしがたい。

SK14はSD14・15の北にあり、両者よりも古い遺構である。図化していないが奈良時代前葉ころの椀が出土していることからⅢ期の遺構とする。

SK18は調査区の南西隅付近にあり、西側をSD21に、北側をSD20に切られている。長さ4.4m、深さ0.2m以内で、溝と考えることもできるが、これ以上南北に続かないと思われるので、土壌としておく。436・438・441～443などの遺物が出土した。いずれも飛鳥時代から降っても奈良時代前葉の土器で、Ⅲ期の遺構群より古相を示しているが、土壌の長軸方向がSD21と一致していることからⅢ期のうちでも初期の遺構と考えられる。436・438・441は土師器である。436は杯Cで、内面に放射状の暗文を施している。438は杯Aで口縁端部を内側に曲げている。外面に横方向の暗文を、内面に上下2段の放射状の暗文を施している。441は外面にタテハケを施した甕である。438は飛鳥Ⅳ～平城宮土器Ⅱの範疇に収まるものである。442は須恵器杯H蓋で、443は器高が高いため、身の可能性もあるものである。飛鳥Ⅰ～Ⅱに属するが混入品であろう。ほかに土鍾が出土している。

e. その他の出土遺物(図112、図版34)

包含層からⅢ期の遺物が出土している。444は土師器杯A、445は杯C、446は土師器皿でいずれも暗文を施さないことから奈良時代後葉以降のものと考えられる。

Ⅲ期の遺構の多くは各調査区の西側に分布している。また、掘立柱建物・溝ともに方位を東西南北に合わせることを意識して造られている。このことは、Ⅱ期の遺構の廃絶後に当該地域に計画的な地割が施行されたことを想定させ、集落およびその周辺の土地利用を考える上で、大きな画期といえるであろう。

iv) 時期不詳の遺構

時期の判明する遺物がなく、記載できなかった土壌・柱穴は多数あるが、遺物の多くは古代の土師器・須恵器であることから、大部分は飛鳥～奈良時代に属する遺構であろう。また、棟方位でも時期を推定しえなかった掘立柱建物が6棟ある(図113・114、表9、図版29)。SB03・06・14・17・18はⅠ区、SB28はⅣ区にある。

SB03は調査区の東部で、SB01の南西に位置する。桁行は推定4間(6.5m)、梁行は推定2間(3.8m)であるが、未検出の柱穴が多く、表9では2×1間とした。棟方位はN12°Eである。柱穴は方形や円形のものが多く、深さは0.5m前後である。柱痕跡が認められたものは直径0.1～0.2mである。

SB06は調査区の南東部にあり、Ⅲ期に属するSB04の西側約9mに位置している。桁行2間(4.2m)、梁行1間(2.2m)で、棟方位はN13°Eである。柱穴は円形で、深さは0.3m前後である。柱痕跡が認められたものは直径0.1～0.2mである。

SB14は調査区の西部にあり、東側柱列がⅡ期の遺構の敷地を区画するSA04の東2mに位置している。桁行3間(6.4m)、梁行2間(4.3m)の東西棟で、棟方位はN19～20°Eである。柱穴は円形で、深さは0.15m前後である。柱痕跡があるものは直径約0.1mである。出土遺物には土師器・須恵器の

細片があり、飛鳥～奈良時代のもと思われるが、詳細は不明である。なお、棟方位がN23°25'Eで造られたⅡ期の遺構と近いが、SB01やSB19に比べて柱穴も小さく、出土遺物による年代観も検証できないため、同期の掘立柱建物には含めていない。

SB17・18は調査区西部にあり、SA04の西側で南北に重なり合って位置している。SB17は桁行2間(3.8m)、梁行2間(3.3m)で、棟方位はN12°Eである。柱穴の平面形は円形のものが多く、深さは0.3m前後である。柱痕跡があるものは直径0.1～0.15mである。SB18は桁行2間(4.4m)、梁行1間(3.9m)である。梁行は本来2間であった可能性がある。棟方位はN13°Eである。柱穴は円形で、深さは約0.35mである。柱痕跡があるものは直径約0.1mである。

SB28はⅣ期の北西部にある。南北3間(3.7m)、東西3間(3.5m)のほぼ正方形の建物である。側柱列の柱穴に比べて、極端に小さな東柱の柱穴をもつ総柱建物である。棟方位はN11°Eで、周辺のⅢ期に含めた建物群に対して、大きく北で東に振っている。柱穴の平面形は円形や、方形を意識した

表9 時期不詳の掘立柱建物一覧表

遺構名	桁×梁	構造	桁長	梁長	面積	棟方位	出土遺物	型式・時期	掲載遺物
SB03	*1×2		6.5	3.8	24.7	N12°E	土師器・須恵器	?	なし
SB06	2×1		4.2	2.2	9.2	N13°E	土師器・須恵器	?	なし
SB14	3×2		6.4	4.3	27.5	N19°E	土師器・須恵器	?	なし
SB17	2×2	総柱	3.8	3.3	12.5	N12°E	土師器・須恵器	?	なし
SB18	2×*1		4.4	3.9	17.1	N13°E	土師器・須恵器	?	なし
SB28	3×3	総柱	3.7	3.5	13.0	N11°E	土師器・須恵器	?	なし

長さの単位：m、面積の単位：㎡、*は現存値を示す。

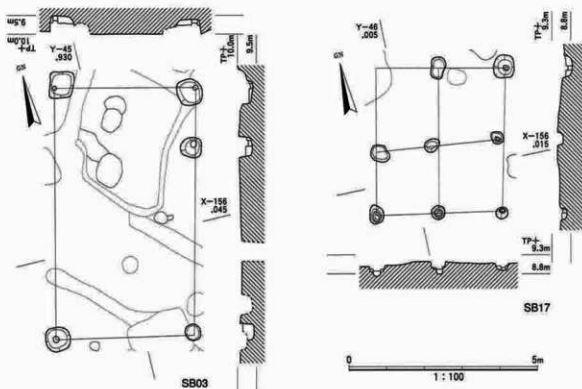


図113 時期不詳の掘立柱建物実測図(1)

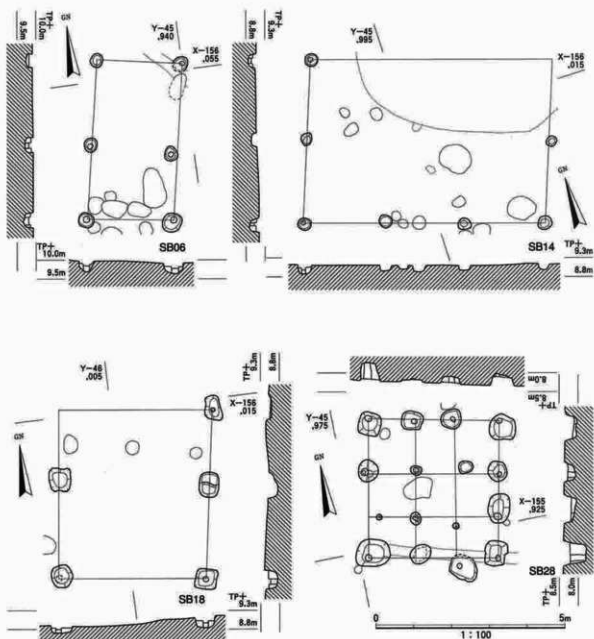


図114 時期不詳の掘立柱建物実測図(2)

と思われるものが多い。深さは0.55m以内である。柱痕跡があるものは直径約0.15mである。出土遺物には須恵器の細片があり、飛鳥～奈良時代のものと思われるが、詳細は不明である。

第4節 平安時代の調査

平安時代の遺構は数少ないが、掘立柱建物1棟・井戸1基・溝3条・土壇1基・柱穴2個が確認された。

SB21はI区の西北端に位置する。柱穴3個が東西に並び、ほかは調査区外に続く掘立柱建物の側柱列と考えられる(図115)。方位はN3°Eで、奈良時代の掘立柱建物に近い。側柱列はさらに東西に

続いている可能性がある。また、直交する柱列は南北どちらかの調査区外にあると考えられる。柱穴の平面形は隅丸方形に近く、深さ0.3m以内である。埋土は褐色粘土質シルトである。柱痕跡は直径0.2mで、埋土は褐色粘土質シルトである。柱穴から出土した遺物は瓦器碗などで、細片であるが12世紀代に属するものである。

SE01はI区東部に位置する。直径1.8~1.9mで、検出面からの深さはおおよそ3mある。堀形がほぼ直立する素掘りの井戸である(図115)。基底から約1mに黒褐色含礫・砂シルト質粘土が堆積し、井戸の廃絶後、埋戻されるまでの間にたまった地層で

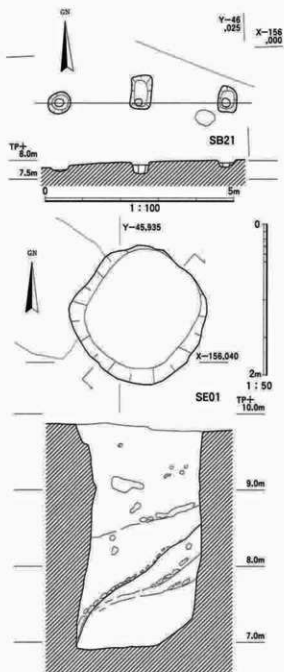


図115 SB21・SE01実測図

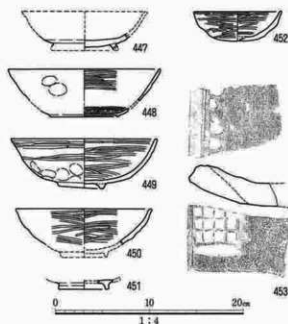


図116 平安時代の遺構出土遺物

SE01(449・450・452)、SD02(447)、SD23(451・453)、SP09(448)

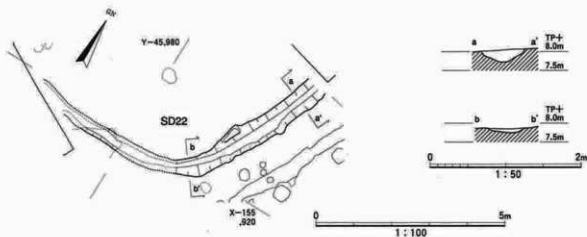


図117 SD22実測図

ある。それより上位は検出面までが井戸を埋戻した地層で、段丘構成層の偽礫を多量に含むにぶい黄褐色シルトである。瓦器・土鍾・飯蛸壺をはじめとする遺物が出土した(図116)。449・450は瓦器碗である。外面をユビオサエで仕上げ、内・外面ともにやや粗い暗文を横方向に施している。449の高台は低く小ぶり、断面形が三角形に近いものである。452は小型の碗で、調整は449・450と同様である。これらは平安京V期のものであるが、ほかにやや古い要素を残すものもあるため、井戸の使用は11世紀末葉にさかのぼる可能性がある。

溝は時期の異なるものがあり、I区の中央付近に位置するSD02は9世紀代、II区のSD23とIV区のSD22は12世紀代の遺構である。

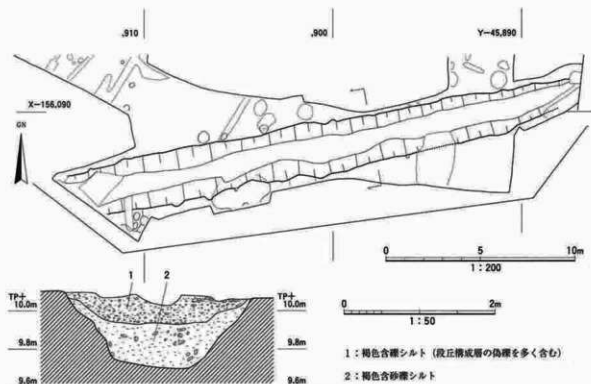


図118 SD23実測図

SD02は長さ7.8m、幅0.4～1.1m、深さ0.1m前後を確認した(図78)。方位はN48°Wで、溝の基底はほぼ平坦である。埋土は褐色砂質シルトを主体とする。出土遺物には灰釉陶器447のほかに、奈良時代後葉の須恵器や古代の布目瓦片などがある。447は内面の底部を除いて施釉が認められる。9世紀代のものである。

SD22はⅣ区北西端に位置する。溝の両端は調査区外に続いているが、確認できた範囲では東西方向から北北東に向って屈曲している(図117)。長さ17m、幅0.7～1.5m、深さ0.1～0.4mで、基底は北北東に向って深くなっている。出土遺物には瓦器をはじめ、土師器・須恵器・飯蛸壺・土鍾・瓦などがある。瓦器はSB21・SE01と同時期のものである。

SD23はⅡ区の南部に位置する。長さ28.8mで、両端は調査区外に続いている。方位はN78°Eで、南西側の幅は2.9m、北東側の幅は1.3m前後である(図118)。深さは0.4～1.0mで、南西の方が低くなっている。埋土は下層が褐色含砂礫シルト、上層は段丘構成層の礫を多く含む褐色含礫シルトである。ともに瓦器をはじめ、土師器・須恵器・飯蛸壺・土鍾・瓦などが出土した。瓦器は碗451のほか細片が多いが、SB21・SE01と同時期のものである。瓦453は須恵質の布目瓦で、凸面に格子タタキを施している。このような格子タタキは山之内遺跡でも見つかっており、白鳳期のものとして「榎津廃寺」との関連が注目されている。SD23からは、特に上層で飛鳥・奈良時代の遺物が数多く出土したが、瓦をはじめとするこれらの遺物は、溝を埋める際に混入したものである。

ほかに、黒色土器が出土した土壌・小穴があり、Ⅳ区SP09からは内黒の碗448をはじめ、Ⅰ区SK02およびそれを切るSP03からも細片ながら高台のある内黒の碗が出土している。448は外面にユビオサエ、内面に密な暗文が施された低い高台のあるもので、森隆氏の畿内系Ⅲ類Ⅴ段階[森隆1995]に相当する。10世紀のものである。

以上のように、本調査地では奈良時代以降にも引き続き集落が営まれたようであるが、その規模ははるかに小さくなっているようで、調査区内では9～12世紀にかけてわずかな遺構が散見されるにすぎない。

第5節 土鍾と蛸壺

遠里小野遺跡は従来より漁撈具の出土がめだつ遺跡として注目されてきた。金属器や骨角器は遺存状況が悪く、本来、当地で生産・使用されたかを明確にすることはできないが、土鍾・蛸壺の出土量は大阪市内の他遺跡に比較しても多い。両者の年代については、多くが古代の遺物包含層や中近世の作土層、攪乱などの各種地層から出土しているため、供伴する遺物で推定することが困難である。しかし、一部に遺構に伴って出土した資料があり、そこから推測するとほとんどの資料が飛鳥～奈良時代に属するものと考えられる。以下に、本調査で出土した土鍾と蛸壺についてまとめ、若干の考察を行いたい。

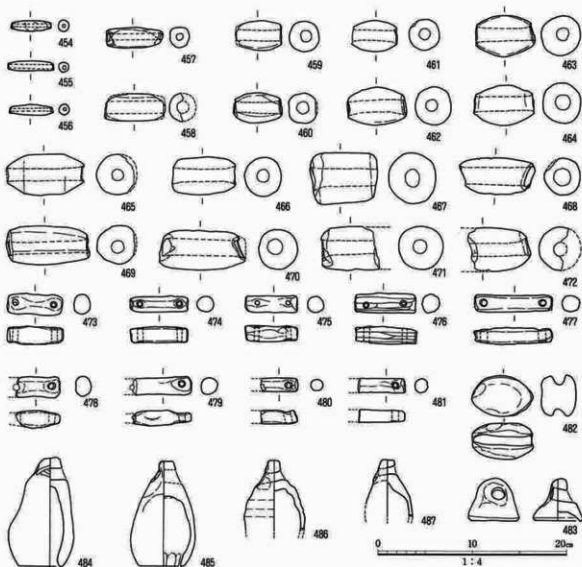


図119 土鍾・蛸壺

土鍾／Ⅰ類：A1類(454～456)、A2類(457)、A3類(458)、B1類(459～461)、B2類(462～464)、B3類(465)、C1類(466)、C2類(467)、C3類(468)、C4類(469～472)、C5類(470)、C類(471)、Ⅱ類：(473～481)、Ⅲ類：(482)、Ⅳ類：(483)

蛸壺(484～487)

1) 土鍾

土鍾は全部で83点が出土した。2点が須恵質で、ほかは土師質である。管状土鍾(I型:54点)、棒状土鍾(瀬戸内型土鍾=II型:21点)、有溝土鍾(III型:5点)、蛸壺を再利用した土鍾(IV型:3点)に大別できる。管状土鍾は形態から以下の3類に分けられ、さらにそれぞれで大きさの違いから細分が可能である。なお、煩雑を避けるため、I型A類ならばI A類のように略称する。

I A類:全体に細身で、直径が3cm以下であるもの。

I B類:全体が太い紡錘形で、直径は4.5cm前後である。

I C類:直径が全体であまり変わらないもの。

表10 土鍾一覧表(1)

番号	層位・遺構	遺構の時期	焼成 土師質 須恵質	種類	類型	長さ (cm)	直径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
455	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I A1	4.8	1.0	0.3	4.9	
456	焼乱	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I A1	4.6	1.1	0.3	4.7	
—	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I A1	*3.9	1.3	0.3	*5.0	
454	焼乱	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I A1	4.2	1.1	0.3	4.3	
457	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I A2	6.0	2.2	0.6	25.7	
458	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I A3	6.3	2.9	1.2	*27.1	1/2?欠損
—	SE02(堀形)	奈良	○	管状土鍾	I A3	*3.9	2.8	1.1	*21.2	欠損大
—	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I A3	*5.0	3.2	—	*20.2	欠損大
461	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B1	4.7	3.3	1.1	43.4	
—	古代柱穴	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B1	5.0	3.2	1.0	*42.5	欠損小
—	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B1	5.0	*2.5	1.3	*14.3	約半分以下
—	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B1	4.5	3.0	1.2	36.0	
459	SD14	奈良	○	管状土鍾	I B1	4.9	3.1	1.1	41.7	
—	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B1	5.6	3.0	1.0	39.6	
—	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B1	3.9	*2.9	1.2	*13.6	1/2以上欠損
—	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B1	4.6	3.2	1.1	37.9	
460	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B1	5.1	3.1	1.1	43.1	
—	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B1	4.5	3.1	1.2	36.6	
462	焼乱	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B2	6.2	5.0	1.2	80.5	
464	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B2	6.4	4.3	1.5	97.9	
—	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B2	6.5	4.2	1.2	88.4	
463	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B2	6.1	4.3	1.3	97.2	
—	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B2	*5.7	4.1	1.3	*79.0	
—	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B2	5.7	*3.5	1.3	*36.7	1/2以上欠損
—	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B2	6.4	*3.3	—	*32.5	1/2以上欠損
465	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B3	8.1	4.4	1.1	128.6	
—	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B3	7.6	4.5	1.1	*114.0	1/3欠損
—	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B3	7.0	4.5	1.1	*112.5	
—	SK18	奈良	○	管状土鍾	I B3	*5.5	3.9	1.2	*47.9	欠損大
—	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B	—	—	—	*30.0	欠損大
—	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I B	*2.8	*3.1	1.1	*13.2	欠損大
466	SD23	平安	○	管状土鍾	I C1	6.7	4.0	1.2	97.4	
467	SD18	奈良	○	管状土鍾	I C2	7.1	5.3	1.7	185.5	
468	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C3	7.8	3.8	1.8	86.4	孔口にすり減り
—	焼乱	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C3	7.4	3.2	1.2	*45.1	1/2?欠損
—	焼乱	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C3?	*4.6	3.2	1.3	*33.8	欠損大
469	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C4	8.5	4.0	1.1	144.4	
472	焼乱	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C4	*7.1	4.6	1.3	*99.8	1/2?欠損
—	古代土環	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C4?	8.8	4.5	1.1	172.5	1/2?欠損
—	SB27	奈良	○	管状土鍾	I C4?	*5.6	3.6	1.0	*73.8	1/2?欠損
470	SD23	平安	○	管状土鍾	I C5	9.1	4.0	1.5	137.7	
471	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C	*5.9	4.7	1.1	*122.6	
—	焼乱	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C	*3.2	4.4	0.7	*42.1	欠損大
—	焼乱	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C	*4.4	3.8	1.2	*46.4	欠損大
—	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C	*5.4	3.0	1.0	*43.2	欠損大
—	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C	*7.5	3.1	0.9	*51.4	欠損大
—	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C	*5.9	3.6	1.3	*32.8	欠損大
—	SK18	奈良	○	管状土鍾	I C	*6.1	3.6	1.1	*43.7	孔口にすり減り
—	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C	*5.3	3.1	1.2	*26.4	欠損大
—	表土	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C	*7.5	*3.5	—	*53.6	欠損大
—	焼乱	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I C	*5.7	*4.0	—	*50.6	欠損大
—	SE02(堀形)	奈良	○	管状土鍾	I C	*4.9	4.2	1.2	*40.4	欠損大
—	包含層	飛鳥~奈良	○	管状土鍾	I ?	*3.5	*3.2	1.5	*18.7	欠損大
—	SD23	平安	○	管状土鍾	I ?	—	—	—	*10.0	破片

表11 土鍾一覧表(2)

番号	部位・遺構	遺構の時期	造成		種類	類型	長さ (cm)	直径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
			土師質	須恵質							
473	SK05	飛鳥	○		棒状土鍾	Ⅱ	6.0	2.2	0.4	28.0	
476	SB08	飛鳥	○		棒状土鍾	Ⅱ	6.4	2.1	0.4	30.7	
480	SB01	飛鳥	○		棒状土鍾	Ⅱ	*4.8	1.5	0.5	*9.2	
478	SD23	平安	○		棒状土鍾	Ⅱ	*4.7	2.2	0.5	*18.6	
—	SD23	平安	○		棒状土鍾	Ⅱ	*5.5	1.5	—	*11.5	
474	平安柱穴	平安	○		棒状土鍾	Ⅱ	6.1	1.7	0.5	22.1	
475	SB08	飛鳥	○		棒状土鍾	Ⅱ	5.5	1.7	0.4	22.7	
479	SB10	飛鳥	○		棒状土鍾	Ⅱ	*6.2	1.7	0.4	*23.6	
477	SB08	飛鳥	○		棒状土鍾	Ⅱ	8.2	1.7	0.5	35.3	
481	SE01	平安	○		棒状土鍾	Ⅱ	*4.9	1.5	0.4	*14.7	
—	包含層	飛鳥～奈良	○		棒状土鍾	Ⅱ	*6.5	1.3	0.5	*13.6	頭部溝状を呈す
—	SK18	奈良	○		棒状土鍾	Ⅱ	*4.1	1.8	0.5	*11.6	
—	SD23	平安	○		棒状土鍾	Ⅱ	*3.8	1.9	0.4	*13.2	
—	包含層	飛鳥～奈良	○		棒状土鍾	Ⅱ	*6.4	2.0	0.4	*26.1	
—	SE01	平安	○		棒状土鍾	Ⅱ	*4.1	1.4	—	*9.1	
—	古代柱穴	飛鳥～奈良	○		棒状土鍾	Ⅱ	*5.4	1.7	—	*13.7	
—	SE01	平安	○		棒状土鍾	Ⅱ	*4.9	1.9	0.5	*18.6	
—	表土		○		棒状土鍾	Ⅱ	*4.8	1.3	0.5	*11.6	
—	包含層	飛鳥～奈良	○		棒状土鍾	Ⅱ	6.5	1.9	0.4	25.1	
—	溝底		○		棒状土鍾	Ⅱ	*4.4	1.8	0.5	*19.0	
—	包含層	飛鳥～奈良	○		棒状土鍾	Ⅱ	*4.4	1.6	0.5	*10.6	欠損大
482	表土		○		古溝土鍾	Ⅲ	6.4	3.7	—	102.1	
—	溝底		○		古溝土鍾	Ⅲ	7.3	*4.1	—	*98.3	欠損は僅か
—	表土		○		古溝土鍾	Ⅲ	7.1	4.1	—	95.0	
—	表土		○		古溝土鍾	Ⅲ	*6.3	*3.8	—	*50.7	表・裏面に溝
—	SD23	平安	○		古溝土鍾	Ⅲ	5.1	2.5	—	*22.5	
—	包含層	飛鳥～奈良	○		新壺再利用	Ⅳ	*3.1	5.8	1.4	*45.6	欠損大
—	包含層	飛鳥～奈良	○		新壺再利用	Ⅳ	4.4	*5.7	1.2	*49.8	欠損大
483	SP06	飛鳥	○		新壺再利用	Ⅳ	4.5	4.8	1.1	75.1	

a. I型土鍾

全て土師質のものである。以下に、形態によって3類に分け、さらに、それぞれを大きさ・重量にしたがって細分した。綱紐をとすための孔の直径は、土鍾表面でなく孔全体の中での最小部分を計測している。

I A類 全部で8点が出土した。そのうち、もっとも小型のA1類は4点、A2類は1点、もっとも大きいA3類は3点である。A1類は長さ4.2～4.8cm、直径1.0～1.3cm、孔径は0.3cm、重量は5g前後である。454～456が該当する。A2類は長さ6.0cm、直径2.2cm、孔径0.6cm、重量は25.7gである。457が該当する。A3類は完形のものがなく、大きさは不明であるが、長さ8～10cm、直径は2.8～3.2cm、孔径は1.1～1.2cmで、重量は40～50gであろう。458が該当する。

I B類 該当23点で、もっとも小型のB1類は10点、B2類は7点、もっとも大きいB3類は4点で、詳細不明なもの2点である。B1類は長さ3.9～5.6cmで、5cm付近がもっとも多い。直径3.0～3.3cm、孔径1.0～1.3cm、重量36.0～43.4gである。459～461が該当する。B2類は長さ5.7～6.5cm、直径4.1～5.0cm、孔径1.2～1.5cm、重量は完形品の範囲では80.5～97.9gであるが、もう少し軽い製品も含まれている可能性がある。462～464が該当する。B3類は長さ7.0～8.1cm、直径4.4～4.5cm、孔径1.1cm、重量は100gを越えるものばかりである。465が該当する。

I C類 該当21点で各製品によって大きさ・重量にばらつきがあり、本項では大きさから5種類に区分したものの、明確なグループ化はなしていない。特に、C3～5類は大きさや重量に違いがあるものの、3類に区分するのが適当であるかは不明であることを断っておく。C1類は1点で、長さ6.7cm、直径4.0cm、孔径1.2cm、重量97.4gである。466が該当する。C2類は長さ7.1cmで、C1類とさ

ほど変わらないが、直径5.3cm、孔径1.7cmと太く、重量も183.5gある。467が該当する。C3類は長さが7.4～7.8cmで、C1・2類に比べ長い。直径は3.2～3.8cm、孔径は1.2～1.8cm、重量は86.4gのものがある。468が該当する。C4類は長さ8.5cm、直径4.0cm、孔径1.1cm、重量144.4g、もっとも大型のC5類は長さ9.1cm、直径4.0cm、孔径1.5cm、重量137.7gである。C4類には469・472が該当し、C5類には470が該当する。そのほかに、I C類としたものの中には全体の大きさが不明なため細分できなかった製品11点(471ほか)がある。

各類のI型土鍾が使用された時期について考えてみると、A類のばあい、A3類が奈良時代中葉に作られたSE02の掘形から出土しているため、少なくともその時期には使用されていたことがわかる。A1・A2類は飛鳥～奈良時代の遺物包含層から出土しているため、やはり、その時期には使用されていたものである。B類では、B1類が奈良時代のSD14から、B3類が奈良時代のSK18から、B2類が飛鳥～奈良時代の遺物包含層から出土しているため、これらもほぼ同時期の遺物と考えられる。C類では、C2類が奈良時代のSD18から、C4類が飛鳥～奈良時代の土壌ないし遺物包含層から出土している。C1・C5類は平安時代のSD23から出土しているものの、この溝からは飛鳥～奈良時代の遺物も数多く出土しているため、やはりC類の多くはA・B類と同時期に使用されていたものと考えられる。

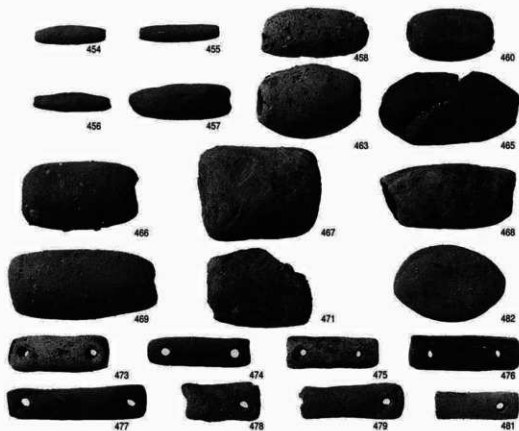


写真5 各種の土鍾

I類：A1類(454～456)、A2類(457)、A3類(458)、B1類(460)、B2類(463)、B3類(465)、C1類(466)、C2類(467)、C3類(468)、C4類(469)、C類(471)、II類：(473～479・481)、III類：(482)

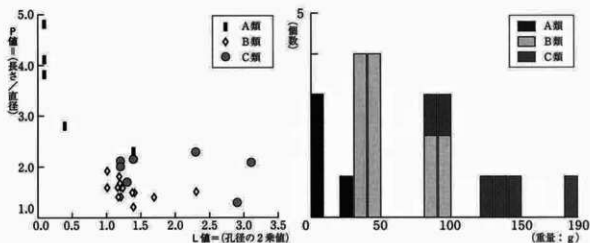


図120 I型土錘の形態別法量統計と重量比較

また、これらの土錘の胎土は数種類以上があるが、時期差を反映したものとはいいがたい。そこで、平安時代の遺構や中近世の作土層、攪乱から出土した例があるものの、I型の多くは飛鳥～奈良時代の資料と想定する。

以上を前提に、I型については真鍋篤行氏の方法[真鍋篤行1995]に従って、各類型の法量計測と重量の比較を図120に示した(註1)。完形品のみを対象にしたため、扱えた資料は26点であり、I型の総個体数54点からすると統計上不十分であるが、一定の傾向は示されていると考えられる。

I A類はA3類としたものを除き、 $0 < L < 0.5$ で、 $2.5 < P < 5.0$ に収まる。I B類は $1.0 < L < 2.5$ で、 $1.0 < P < 2.0$ に収まる。I C類は $1.0 < L < 3.5$ で、 $1.0 < P < 2.5$ に収まる。また、重量も一部重複する部分もあるが、I A類、I B類、I C類の順に重くなる。このような各類の特徴は、土錘の機能差と使用された網漁の種類の違いを示していると考えられる。真鍋氏の考察や市内阿倍野区の阿倍野筋遺跡での検討[寺井誠1999]を参考にすると、I A類は投網・刺網などに、I B・I C類は地曳網や底曳網などに使用されたことが想定される。重量の面でも、軽いI A類は作業に敏捷性が求められる刺網漁に、重いI B・I C類は網の安定性が求められる曳網に適していると考えられていることによく一致している。

b. II型土錘

須恵質1点(480)、土師質20点が出土した。棒状土錘のばあいも、大きさに各種あり、それに基づいて細分することが適当であろうが、完形のものが少ないため、ここでは一括して扱っておく。また、土錘の直径が全体で変わらず両端の断面が円形のもの(473～477・480・481)と、両端を薄くして断面が扁円になるよう仕上げたもの(478・479)とがある。これは、土錘の機能面よりも製作者(集団)の差異を示している可能性があるが、それ以上は言及できない。また、難波宮跡の出土例で注目された土錘両端の小口面に溝が施されたものは認められなかった[久保和士1992]。これらの棒状土錘は計測できた範囲で長さ6.1～8.2cm、直径1.4～2.0cm、孔径0.4～0.5cm、重量22.1～35.3gである。なお、2個所にある孔の直径は、製品によって前後0.1cmの違いがあるものもみられたが、大きい方を



写真6 飯蛸壺と土鍾に再利用したもの

表示している。民俗例ではこのような棒状土鍾は刺網に使用されているという[真鍋1995]。

c. III型土鍾

平面形は両端の尖った楕円形で、側面2個所ないし、表裏面を含めた4個所に綱紐を通すための溝を設けたもので、482ほか、すべて土師質である。長さ5.1~7.3cm、厚さ2.5~4.1cm、溝の幅は土鍾表面で計測して1.5cm、重量は数10~100g前後である。民俗例によると、このような有溝土鍾は曳網に使用されているという[真鍋1995]。

d. IV型土鍾

飯蛸壺の縄を通す紐の部分を残し、割れ口をすって仕上げているものが3点ある。体部が破砕した蛸壺を再利用したものであるが、その目的は、一種の土鍾として使用することにあつたと考える。1点は須恵器483で、ほかは土師器である。長さ4~5cm、高さ5~6cm、孔径は1.1~1.4cm、重量は70~100g前後である。土鍾とすれば、大型管状土鍾に匹敵する重量である。

表12 飯蛸壺一覧表

番号	層位・遺構	遺構の時期	種類	器形 (cm)	器高 (cm)	直径 (cm)	口径 (cm)	番号	層位・遺構	遺構の時期	種類	器形 (cm)	器高 (cm)	直径 (cm)	口径 (cm)
485	SK04	奈良時代	土師器	釣鐘	11.1	6.8	*4.2	—	古代柱穴		土師器	釣鐘	*3.7	—	—
484	SD06	飛鳥時代	土師器	釣鐘	11.6	6.9	4.0	—	SD08	奈良時代	土師器	釣鐘	*5.0	—	—
—	飛鳥		土師器	釣鐘	*5.2	—	—	—	—	—	土師器	釣鐘	*6.5	—	—
—	表土		土師器	釣鐘	*4.7	—	—	—	—	—	土師器	釣鐘	*8.0	—	—
—	SD23	平安時代	土師器	釣鐘	*4.4	—	—	—	—	—	土師器	釣鐘	*5.1	—	—
—	表土		土師器	釣鐘	*5.0	—	—	—	—	—	土師器	釣鐘	12.0	7.6	6.0
—	SK08	奈良時代	土師器	釣鐘	*5.4	—	—	—	—	—	土師器	釣鐘	*8.1	6.3	*5.2
—	SD06	飛鳥時代	土師器	釣鐘	*7.2	—	—	—	SD08	奈良時代	土師器	釣鐘	*9.0	—	—
—	SK06	飛鳥時代	土師器	釣鐘	*4.6	—	—	—	—	—	須恵器	釣鐘	9.7	4.6	3.0
—	SK06	飛鳥時代	土師器	釣鐘	*6.1	—	—	—	486	古代土壇	須恵器	釣鐘	*8.4	*6.5	—
—	包含層		土師器	釣鐘	*10.9	6.7	4.7	—	—	—	須恵器	釣鐘	*9.3	7.2	—
—	包含層		土師器	釣鐘	*5.6	—	—	—	487	表土	須恵器	釣鐘	*6.6	*5.5	—
—	SD23	平安時代	土師器	釣鐘	*5.7	—	—	—	—	—	須恵器	釣鐘	*5.6	6.0	—
—	SK12	飛鳥時代	土師器	釣鐘	*5.4	—	—	—	—	—	須恵器	釣鐘	*6.4	—	—
—	SD13	飛鳥時代	土師器	釣鐘	*6.4	—	—	—	—	—	須恵器	釣鐘	*4.3	—	—
—	土壇		土師器	釣鐘	*5.4	—	—	—	—	—	須恵器	釣鐘	*4.5	—	—
—	SB20	奈良時代	土師器	釣鐘	*5.5	—	—	—	—	—	須恵器	釣鐘	*5.8	—	—
—	SE01	平安時代	土師器	釣鐘	*5.7	—	—	—	—	—	須恵器	釣鐘	*6.5	—	—

2) 蛸壺

蛸壺は全部で36点が出土した。すべて鈕をもつ釣鐘型で、小型の飯蛸壺と呼ばれるものである。うち、土師器が26点、須恵器が10点である。破片資料が多く、分量が計測できないものがほとんどであるが、土師器のばあい、大きいもので器高10～12cm、口径4～5cm(484・485)、より小型のものも見られる。須恵器では小型のもの(486・487)の方が多いようである。

飯蛸壺は飛鳥から平安時代にかけての遺構から出土しているが、時代によって胎土・焼成などに明確な差異は見られず、あまり時期差を感じさせない。表土・攪乱・包含層から出土した分も含めて基本的に飛鳥～奈良時代の資料と考えてよからう。

3) まとめ

以上のように、遠里小野遺跡で見つかった土鍾は多種多様で、さまざまな網漁が行われていたことを想定させる。小型・中型の土鍾は投網・刺網漁に、大型管状土鍾や有溝土鍾は曳網漁に使用されたと考えられ、それぞれに応じた漁場と水産資源が存在したと思われる。特に、遠里小野遺跡では大型のB3類やC類の出土した割合が大きく、あまり時期の異なる難波宮下層遺跡[久保1992]では、刺網漁での使用が想定されている小型の土鍾が主体を占めていることと対照的で、本遺跡では飛鳥・奈良時代において、これらの曳網漁を操業の柱としていたと考えられる。曳網漁は集団での操業が必要となり、また、水産資源の大量捕獲に結実する漁法である。遠里小野遺跡の南側を西流する現大和川は、元来谷地形であった場所であり、西数100m以内に想定される古代の大阪湾に続いていたと考えられる。このような立地条件を生かし、積極的に水産資源を確保するための漁法として曳網漁を採用していたと考えらる。

ここで想定した曳網漁のより具体的な作業の復元や、漁を行った場所などの検討は今後の課題である。さらに、捕獲した水産資源の消費が一集落内で完結していたとは考えがたく、流通の問題も今後検討して行かねばならないであろう。

註)

- (1) 真鍋篤行氏によれば、L値は、土鍾の孔径が、装着される網の網(沈子網)の径と関連するため、網の2乗値が網の強度(抗張力)に比例するという水産学の定式に当てはめられるという数値である。すなわち、L値の大きい土鍾ほど抗張力の大きい網に使用されたという考え方である。P値は土鍾の側面形の違いを表し、相対的に、値の大きいものは細長く、小さいものは太く短いものとなる。ただし、この値は土鍾の絶対長・絶対幅を示すものではない。民俗例からは、細長い土鍾は投網や網の湾曲を防ぐ必要のある刺網に用いられ、太く短い土鍾は網罟を水底に密着させる必要のある曳網や底曳網などの袋網系に用いられたと想定されている。

第6節 井戸側材の年輪年代測定

奈良国立文化財研究所 光谷拓実

1) 試料と方法

遠里小野遺跡から出土した井戸の側材には、ヒノキの屋根材が転用されていた。この中から4点を選び、年輪年代法による年代測定を行った。これらの中には1点だけ辺材部が完存しているものがあった。このような形状のものは原木の伐採年代を確定することができる。

通常、産地が近ければ近いほど年輪パターンの照合が成立しやすい傾向があるため、ここではまず最初に4点相互の年輪パターンを個別に照合し、それぞれの成立位置で総平均し、つぎにこれとヒノキの暦年標準パターン(37B.C.~845A.D.)とを照合することとした。こうすることによって、暦年標準パターンとの照合が成立しやすくなるからである。

2) 結果

4点の計測年輪層数は、No1(図103-393)が225層、No2が152層、No3が457層、No4が209層であった。これら4点の年輪パターンの照合はいずれも成立し、497年分の平均値パターンを作成した。これと上記の暦年標準パターンとの照合は成立し、4点の年輪年代を求めることができた。この中でもっとも新しい年輪年代を示したのは辺材部の完存するNo1の694年であった。

この井戸からは土師器・須恵器が出土しており、8世紀中ごろから後半にかけての年代が推定されている。年輪年代は半世紀近く古い。推定どおりに転用材であるのか、古く7世紀末葉から使用していた井戸に、8世紀に土器が投棄されたかの可能性がある。転用材とすると、半世紀も経過していない建物の部材を使用していることになる。

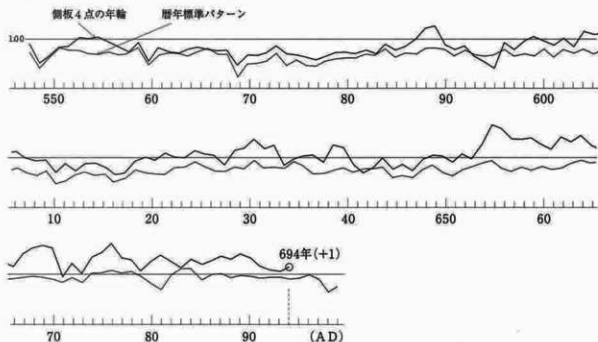


図121 側板4点の年輪パターングラフ(平均化されたもの)と暦年標準パターングラフ

第Ⅳ章 遠里小野遺跡の検討

第Ⅱ章で記したとおり、本調査は遠里小野遺跡における初めての大規模な発掘調査であった。その結果、従来部分的にしか判明していなかった本遺跡における古代の遺構と遺物の様相を明らかにすることができた。その詳細は、すでに第Ⅲ章で述べたとおりであるが、ここで各時代について得られた成果をまとめ、あわせて今後の課題を挙げておきたい。

第Ⅰ節 古代以前の遺構と遺物

1) 旧石器～弥生時代

大阪市内では、後期旧石器時代の遺構と遺物が見つかったいるが、その場所は、相当層準である沖積層最下部から低位段丘構成層が良好に遺存している沖積平野部に集中しており、平野区長原遺跡がその一例である。一方、上町台地はおもに中位段丘構成層で形成されており、後期旧石器時代の調査は低調である。その原因は、低位段丘構成層が流失しているからであるが、一部の低湿地に相当層準が遺存しているばあいがある。山之内遺跡東部もその一つで、わずかな点数であるが、低位段丘構成層上部から旧石器遺物が出土している[大阪市文化財協会1998]。しかし、平安神宮火山灰層より下位層に当るため、いわゆる瀬戸内技法の成立よりさかのぼる資料である。山之内遺跡では遺跡西部からもナイフ形石器が出土している。遊離資料ながら、横形の有底剥片を素材としたものであり、板状の剥片を石核として用いる点で瀬戸内技法との関連を想起させるものである。本調査で出土した3点のナイフ形石器のうち、1点(302)はほぼ同じ技法で製作されたものであり、さらに、1点は縦長の剥片を素材としながらも、石核は同様のものと推定される(301)。また、板状剥片を素材とした石核そのものも、当地域では初めて確認されたものである。これらの資料は瀬戸内技法の存在なくしては製作されえないものと考えられる。ただし、典型的な瀬戸内技法によるものではなく、ナイフ形石器が小型化したものであること、石核の作業面を固定せず、多方向から剥片剥離を行った痕跡が認められることなどは、同技法より後出する要素と考えられよう。したがって、沖積層最下部付近に本来の層準を求めることができ、長原遺跡と同様に、山之内・遠里小野遺跡一帯に2つの旧石器層準が存在していると考えられる。

縄文時代の遠里小野遺跡に関しては石器が数点出土しているのみである。山之内遺跡でも縄文時代前期と晩期の土器片や石器が見つかったいるが、集落が展開していたことを予想させるまでにはいたらない。

弥生時代では遺構を確認できず、山之内遺跡に比べて、遺物の量も少ない。前期末葉から中期にかけて山之内遺跡で展開した弥生集落は、遠里小野遺跡より東に西限があったと考えられよう。

2) 古墳時代

本調査地では、古墳時代の遺構・遺物は多くないが、遠里小野遺跡の中では当該期の遺構・遺物に特徴的なものがある。

古墳時代前期の遺構はないが、古式土師器が出土している。また、中期では、山之内遺跡のばあい、5世紀後葉以降の遺構・遺物が豊富であるが、本調査地では埴輪片がそのころまでさかのぼる可能性があるものの、ほかには見つからなかった。遠里小野遺跡から埴輪が出土することは早くから注目されているが[横山1982]、本調査地でも少量が出土したものの、古墳の存在を確認することはできなかった。

後期になると、第II章で記したとおり、本調査地の西側200m付近で、6世紀後半の溝状の遺構や落込みから土器や製塩土器・漁撈具に混って多量の滑石製模造品が出土し、一帯には祭祀に係わる製品の工房址が存在したと推定されている。滑石製の遺物には、勾玉・管玉・白玉などの完成品のほか、製作段階の各過程を示す柱状ないし板状の未成品や剥片に刻みを入れたものがある。現在までのところ、このような滑石製品は本遺跡内のほかの調査地点からは出土していない。東に接する山之内遺跡では83-18次調査で子持ち勾玉1点、管玉2点、白玉1点が、86-42次調査で剣形石製品1点が出土している[大阪市文化財協会1998]。子持ち勾玉と管玉は擾乱から出土したもので、時期は不詳である。白玉は古墳時代以降の小穴から、剣形石製品は6世紀後葉に埋没した溝から出土している。山之内・遠里小野遺跡一帯で出土する滑石製品は、遠里小野遺跡で製作されたものの可能性が考えられる。

遠里小野遺跡での玉造りの開始時期は、まだ明らかにされていないが、南側の堺市浅香山遺跡では5世紀末葉～6世紀前葉の溝から150点近くの白玉が出土しており[堺市教育委員会1997]、遠里小野遺跡との関係が注目される。

滑石製品を製作した集団は、遺構内から煮炊具や供膳具などの土器が多量に供伴するため、同一地点に居住していた可能性が高い。その中で、特に注意すべきなのは土師器の模倣杯・杯蓋、甕などで、器形や製作手法、胎土などが関東地方の鬼高式の特徴をもっており、搬入品と思われる。

また、滑石製品が出土した地点は本遺跡内でも西端に当り、製塩土器や漁撈具の存在からも西に近い海との関わりが強い地点と考えられる。このような地点で玉造りが営まれたことは、石材の入手や製品の搬出に海上交通が利用されたことを想定させるものである。

第2節 古代の建物群の変遷と性格

1) 建物群の変遷

本調査で確認された掘立柱建物は、全部で30棟ある。そのうち、平安時代の建物が1棟あり、ほかは、奈良時代以前にさかのぼるものである。時期が推定されたものを3期に区分した。Ⅰ期には5棟あり、古墳時代後期末葉～飛鳥時代後葉に属する。Ⅱ期には3棟あり、飛鳥時代末葉～奈良時代前葉ころに属する。Ⅲ期には15棟あり、奈良時代中～末葉に属する。残る6棟は時期不詳であるが、後述する建物方位の検討からは奈良時代より古い遺構と考えている。

Ⅰ期の遺構

Ⅰ期の掘立柱建物は調査地の南端付近に集中している。棟方位はSB05・08・09がN55～57°Wに、SB07・10がN45～48°Eに分布している。狭い範囲に分布する建物で、2種類の棟方位が認められることから、それぞれ若干の時期差があるのかもしれない。調査地から南東200m付近のOR87-6・90-4次調査(図72-10・12)でも、古墳時代後期末葉(TK209型式の時期)の建物や溝が確認されており、少なくとも、本調査地のⅠ期の建物群はそのあたりまでは分布していたと思われる。Ⅰ期の遺構は調査地北部にも分布しているが、溝・土壌のみで、建物を確認することができなかった。Ⅰ期の集落の存続時期は、SB09から飛鳥Ⅲの遺物が出土したことによったが、この建物が飛鳥Ⅱの遺物が出土したSD06より切合い関係でも新しいことも矛盾しない。

Ⅱ期の遺構

Ⅱ期の建物群はⅠ・Ⅲ期と大きく状況が異なる。SB02を中心に、東西94m、南北76mの範囲を楕円で囲んでいたと推定される。同時期の建物として、楕内にSB01が、楕外にSB19がある。Ⅱ期の施設の方位はN23～25°Eないし、それと直交する方位でまともまっている。SB01・19は規模が小さく、正方形に近い平面形であり、東柱は検出できなかったが倉庫の可能性もある。さらに、SB02を含む施設全体の建設には、一定の期間を要したと考えられ、その作業のために作られた建物という解釈も成立しよう。そう考えたばあいは、この施設が完成した後はSB01・19はすでに撤去され、建物はSB02のみであったことになる。いずれにしても、居住用の建物がこの敷地内にはないといえる。なお、楕の中で、門にあたる遺構は見つからなかったがSB02の西側正面が開口していた可能性はある。

Ⅱ期の時期を示す遺物は少なく、SA03の飛鳥時代末葉～奈良時代の遺物(375)と、SD05の飛鳥時代後葉～奈良時代初頭の遺物(うち、平城宮土器である376は混入の可能性もある)などにすぎない。さらに、375の出土位置が堀形か柱痕跡か未確認であるなどから、遺物から想定されるⅡ期の上限は飛鳥時代後～末葉であろう。ただし、SB02の建立時期を考える上で、手がかりとなるのがⅢ期のSE02で井戸側に転用された板材の伐採年代である。この板材は断面が扁平な五角形になっており、法隆寺の五重塔・金堂の裳階に使用された例からも明らかのように、板葺き建物の屋根材である。このような屋根板は、ほかに平城京の長屋王邸跡地や東二坊坊間路西側溝にかかる斜行溝[奈良国立文化財研究所1995]、「百濟尼寺」が隣接して存在したことを明らかにした市内天王寺区細工谷遺跡[大阪市文

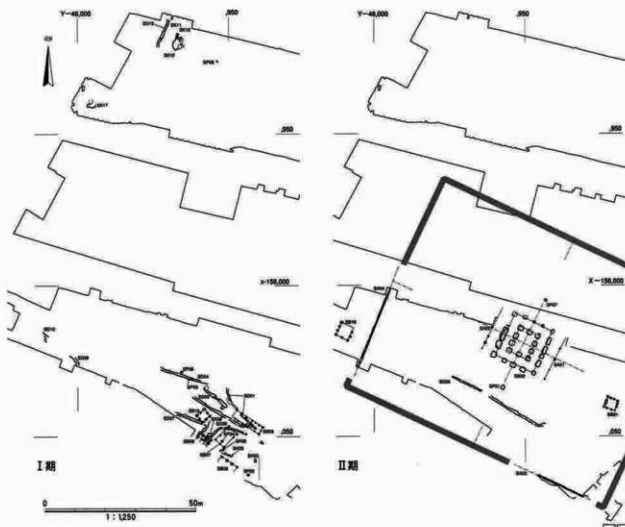


図122 I・II期の遺構配置図

化財協会1999]でも見つかり(註1)、いずれも寺院(かその可能性のある遺跡)ないし上級貴族の邸宅で使用されたものと考えられる。このことから、SE02に転用された屋根板も、一般的な建物ではなく、寺院や邸宅内の建物に匹敵するような建造物に使用されていたと推定する。この屋根板は年輪年代測定の結果、西暦694年の伐採年代が明らかにされている(第三章第6節)。遠隔地からの持ち込みの可能性を除外すると、屋根板が葺かれていた建物としては、その伐採年代と建物の規模から鑑みて、本期のSB02がもっとも有力な候補となる。断定はできないものの、以上の点からSB02で使用された屋根板が、その廃絶後に奈良時代のⅢ期の井戸に転用されたと考え、本書ではⅡ期を飛鳥時代末葉からとした。なお、SB02の柱痕跡には焼土や炭化物が認められた。この建物の火災を示すも

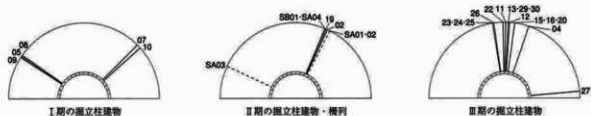


図123 掘立柱建物の棟方位

のとすれば、井戸に転用できる程度の量の屋根板は罹災を免れたと解釈できよう。

後述するⅢ期の建物群の成立年代は、時期の判明したもので平城宮土器Ⅲ以降の土器が共伴し、SE02の使用時期も同時期であることから、奈良時代中葉に求められる。Ⅱ期の施設はそれより前に廃絶したことになり、したがって、Ⅱ期の存続時期を飛鳥時代末葉～奈良時代前葉と想定する。

Ⅲ期の遺構

Ⅲ期の掘立柱建物は調査地の南北に分かれて分布している。東側は削平のため失われていると考えられる。Ⅲ区は擾乱によってほとんどの遺構が失われていたが、井戸が見つかったため、建物群は、本来、調査地全体に分布していたものと考えられる。

棟方位は一部を除き、おおむね正方位を意識して建てられたようで、SE02や溝の多くもそれに合致している。ただし、場所ごとで細かくみると、東端のSB04を除いたⅠ区の建物群とⅣ区の南端に位置するSB29・30がN1～8°Eに収まり、それより北側の5棟(SB22～27)はN1～9°Wないしその直交方向に収まっている。両者間を区画するような施設は認められないが、場所によっては若干の方位のずれがありそうなことには注意を要する。

本期では総柱建物が5棟あり、倉庫と考えられる。ほかに平面形がほぼ方形のもの2棟もその可能性があり、調査した範囲に限って言えば、倉庫の割合が高い状況である。

本調査地の古代の建物群の変遷は以上のとおりである。時期からみた棟方位は、飛鳥時代には北で東に大きく振り、奈良時代中葉には正方位を意識するように変化している。飛鳥時代では、北西へ緩やかに低くなっている地形の傾斜方向に合わせたものであろう。Ⅰ・Ⅱ期で棟方位が異なっているのは、一定の基準となる地割が存在していなかったためと考えられる。奈良時代中葉では、ある程度の地割が設定されたようである。山之内遺跡でも、奈良時代に属する建物は正方位を意識する傾向があり、地割の範囲は山之内・遠里小野遺跡一帯に広がるものであった可能性もある。また、平安時代の建物も正方位に合わせているため、奈良時代に成立した地割はその後継襲されていくと考えられる。本調査地では6棟の時期不詳の建物があるが、いずれも方位を北で東に振っているため、少なくとも奈良時代中葉以降に降ることはないと考えられる。

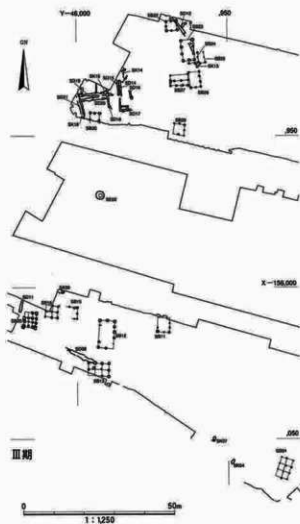


図124 Ⅲ期の遺構配置図

2) SB02を中心とする施設の性格

最後に、Ⅱ期の施設の性格について考えたい。本期の施設の出現は、遠里小野遺跡の歴史の変遷を考える上でもっとも画期的な出来事であろう。前後の時期の建物群とは明確に異なるものである。中心建物であるSB02の規模(平面形: 13.8×15.4m)や柱の太さ(0.4~0.45m)は、近くに例を求めれば、前期難波宮の掘立柱建物しかない。また、Ⅰ・Ⅲ期の建物群が居住用の建物と倉庫が建ち並ぶ状況であるのに対し、Ⅱ期の施設は、櫓によって区画された明確な敷地が設けられ、その内には居住用と考えられるような建物が存在していない。このような特徴から、在地集落が発展したものでなく、従来の集落が排除され、外的な要因によって建設された施設であると推定する。Ⅱ期の施設が廃絶された後には、ふたたび在地的な集落が展開し、後継するような施設が作られないことも、この施設が在地集落の自発的な要求で成立したのではないことを意味しよう。

Ⅱ期の建物の性格を考える手がかりは、建物群の構成とそれを取巻く地理的環境にある。

地理的環境では、第一に西側にすぐ大阪湾を控えていることが重要であろう。古代においては、敷地の南西にある谷筋をとおれば数100mで海にでられたと考えられる(図71)。調査地一帯は律令制下の摂津国住吉郡榎津郷に当たると考えられ、『万葉集』にある「墨吉の得名津」や『住吉大社神代記』にいう「朴津」から、付近に古代の港が想定されている[千田稔1974]。第二に、遺跡周辺は北に「磯津津路」、南に「大津道」・「丹比道」、東に「難波大道」などの古道が想定されている地域である。港や古道の開設時期と場所の比定には、なお、考古学的検証が必要であるが、一定の承認を得られているものであろう。こうした地理的環境からは、上町台地に展開した前期難波宮(「京」)や大和国への交通路を控え、それと港湾施設を結ぶ交通の要衝に、SB02を中心とする施設が建設されたと考えることができる。

また、繰り返し述べたように、居住用の建物がなく、中心建物に付属する大小各種の建物もないため、豪族居館や官衙施設とは考えがたい。さらに、大規模な掘形と柱で建築されたSB02は四面廂の構造で、平面形が正方形に近いことから、相当の高さのある建物と考えられる。

以上の点から、SB02を中心とする施設は古代の港との関連が推測されるが、その管理を担う行政施設と考えるよりは、SB02の規模や付属建物の少なさなどからも儀式など特定の用途にのみ使われる特殊な性格ではないかと考えられる。SB02の南北に1個ずつ設けられた柱穴も、規模から相当に高い柱を据えていたと考えられ、その用途は不明であるものの何らかの儀礼的な目的を想定させるものである。これ以上の推測を重ねることは避けるが、いずれにしても、何らかの国家的な施設としてこの地域が選定され、建設されたものであろう。飛鳥時代末葉ころとした築造年代からは、古代国家の黎明期に、主要な港湾施設である難波津・住吉津に「榎津」を加えようとした古代の湾岸開発の一環ととらえることができる。

註)

- (1) 平城京からは2例あり、奈良時代中～末葉のSE4116と、後葉の溝SX5034から出土した。幅は22~24cmである。細工谷遺跡の例は奈良時代後半の溝から出土した。幅は30cmである。いずれも、遠里小野遺跡出土例より小さい。

引用・参考文献

- 植木久1991、「豪族居館と建物構造」：『季刊考古学』第36号、雄山閣、pp.54-57
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1984、「山之内遺跡(YM82-31)発掘調査略報」：『昭和57年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.85-90
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1988、「松田邸建築工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM86-60)略報」：『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.85-87
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1989、「稲谷邸新築工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM87-9)」：『昭和62年度大阪市内埋蔵文化財発掘調査報告書』、pp.153-158
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1994、「北村邸建設工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM93-33)略報」：『平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.87-95
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「御中東組による建築工事に伴う発掘調査(YM97-1)」：『平成9年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.77-83
- 大阪市文化財協会1982、「小松邸建替に伴う山之内遺跡発掘調査(YM82-30)略報」
- 大阪市文化財協会1983、「若野氏による共同住宅建設に伴う山之内遺跡発掘調査(YM83-41)略報」
- 大阪市文化財協会1987、「橋邸建て替え工事に伴う遠里小野遺跡発掘調査(OR87-6)略報」
- 大阪市文化財協会1988a、「中野基一氏による建築工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM88-21)略報」
- 大阪市文化財協会1988b、「萬木邸新築工事に伴う遠里小野遺跡発掘調査(OR88-18)略報」
- 大阪市文化財協会1990、「嶋田邸新築工事に伴う遠里小野遺跡発掘調査(OR90-4)略報」
- 大阪市文化財協会1992、「久保田邸建設に伴う遠里小野遺跡発掘調査(OR92-1)略報」
- 大阪市文化財協会1997、「大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅹ
- 大阪市文化財協会1998、「大阪市住吉区山之内遺跡発掘調査報告」
- 大阪市文化財協会1999、「大阪市天王寺区細工谷遺跡発掘調査報告」Ⅰ
- 大阪市立大学考古学研究会1982、「史峯」—遠里小野・山之内遺跡の研究—第6号
- 小田木富慈美1998、「弥生時代の山之内遺跡」：大阪市文化財協会編『山之内遺跡発掘調査報告』、pp.475-478
- 梶山彦太郎1986、「小林寺町西遺跡の貝層」：『堺環濠都市遺跡発掘調査報告』、堺市文化財調査報告第30集、pp.1-15
- 川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64巻2号、日本考古学会、pp.95-164
- 木原克司1994、「摂津・河内の条里地割施行と直線古道」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財論集』、pp.217-260
- 久保和士1992、「土鍾」：『難波宮址の研究』第九、pp.70-75
- 久保和士1998、「MN85-37次調査建物群の検討」：大阪市文化財協会編『南住古遺跡発掘調査報告』、pp.83-90
- 古代の土器研究会編1992、『古代の土器1 都城の土器集成』
- 古代の土器研究会編1993、『古代の土器2 都城の土器集成』Ⅱ
- 古代の土器研究会編1994、『古代の土器3 都城の土器集成』Ⅲ
- 堺市教育委員会1997、「浅香山遺跡発掘調査概要報告—堺市今池町3丁 ASK-1地点」：『堺市文化財調査概要報告』第63冊、pp.27-30

- 佐原真1968、「近畿地方」：『弥生土器集成』本編2 東京堂出版、pp.53-72
- 瀬川芳則1959、「住吉区の上代遺跡」：大阪市立中学校教育研究会社会部編『社会科と教育』1、pp.1-8
- 積山洋1982、「古環境の復元」：『史事』第6号、大阪市立大学考古学研究会、pp.49-71
- 千田稔1974、『埋もれた港』、学生社
- 田辺昭三1966、『陶邑古墳址群』I、平安学園考古学クラブ
- 寺井誠1999、「管状土師からみた作業形態の復元」：大阪市文化財協会編『大阪市阿倍野区阿倍野筋遺跡発掘調査報告』、pp.32-34
- 直木孝次郎1988、「『肥紀』にみえる難波と水路」：大阪市史編纂室編『大阪市史』第一巻、pp.542-573
- 奈良国立文化財研究所1976、「平城宮発掘調査報告」Ⅵ
- 奈良国立文化財研究所1978、「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」Ⅱ、pp.92-100
- 奈良国立文化財研究所1995、「平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告—長屋王邸・藤原麻呂邸の調査—」、pp.337-338
- 藤井直正1956、「陶質円面硯資料—河内船橋・摂津杉本町採集」：『古代学研究』第13号 古代学研究会、pp.26-29
- 藤岡謙次郎1942、「大阪市住吉区遠里小野町弥生式遺跡」：『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告』第12輯
- 前田長三郎1930、「遠里小野石器時代遺跡に就いて」：『考古学雑誌』第20巻9号、p.52
- 真鍋篤行1995、「弥生・古墳時代の瀬戸内地方の漁業」：『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要Ⅵ』別冊、pp.59-148
- 森隆1995、「黒色土器」：中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』、pp.245-255

あ　と　が　き

山之内遺跡発掘調査報告の第二冊をここに上梓する。前冊とあわせ、以前に調査した山之内町における市営住宅関連の報告は、これですべて終了した。昭和初期以来、さまざまな意味で注目されてきた本遺跡であるが、大阪市文化財協会がもてる資料のほとんどが、この二冊に凝縮されているといって過言ではないであろう。もちろん、紙数の制約からも、意を尽くせなかった部分や、今後検討を重ねなければならない課題は少なくない。広く両書が活用され、遺跡の検討に役立つよう切に望む次第である。

また、付篇とした遠里小野遺跡は、かつて山之内遺跡の一部として捉えられてきた経緯もあり、もともとその性格からは山之内遺跡と境界を引きにくい遺跡である。したがって、両遺跡の調査成果をまとめる作業が必要であるが、今回の報告では十分に行えたとは言いがたい。今後の大きな課題であろう。さらに、同遺跡で見つかった飛鳥時代の大型建物 は古代の国家的プロジェクトであったと思われるだけに、さらに検討を加えていく必要があろう。

(田中清美)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- | | | | |
|------------|--|----------|---|
| い 飯焼壺 | 4, 22, 31, 57, 65, 73,
82, 83, 92, 97, 99~101,
104, 112, 124, 129~132,
136, 137 | つ 束柱 | 37, 40, 45, 69, 92, 96,
103, 105, 111, 112, 115,
127, 141 |
| 生駒西麓産 | 16, 18, 20~24 | と 砥石 | 32 |
| 石庵丁 | 4, 27, 73 | 東部瀬戸内地域 | 21 |
| 井戸 | 80, 91, 108, 115, 116,
118, 128, 129, 138, 141
~143 | 土鍾 | 4, 61, 73, 82, 83, 92,
95~97, 100, 101, 104,
107, 115, 116, 120,
122, 125, 129~137 |
| か 灰釉陶器 | 130 | な ナイフ形石器 | 5, 86, 88, 139 |
| 瓦器 | 54, 59, 128~130 | 縄 | 116, 136 |
| 籠 | 80, 117 | は 埴輪 | 4, 84, 91, 124, 140 |
| 甕 | 6, 29, 32, 49, 57 | ふ 大型蛤刃石斧 | 27 |
| 瓦 | 4, 52, 54, 56, 57, 74,
78, 84, 130 | ほ 方形周溝墓 | 2, 4~6, 8, 10, 12, 17,
18, 23, 24, 26~28, 58,
71, 73 |
| 環状石斧 | 27, 28 | 掘立柱建物 | 2, 4, 6, 10, 29, 32~41,
43, 66, 67, 69, 70, 74,
79, 80, 84, 92, 97, 101,
105, 107, 108, 112, 115,
120, 125, 126, 128, 141,
143, 144 |
| こ 格子タタキ | 52, 54, 56, 130 | み 溝 | 2, 4, 6, 7, 23, 50, 52~
54, 56~58, 61, 66, 67,
70, 74, 79, 80, 84, 92,
97, 99~101, 105, 107,
108, 119, 120, 122, 124,
125, 128~130, 134~136,
140, 141, 143, 144 |
| 黒色土器 | 45, 53, 130 | む 横持柱 | 37, 39 |
| 古墳 | 4, 84, 91, 140 | も 身舎 | 101, 102 |
| さ 櫓 | 6, 34, 35, 49, 50, 52,
66, 67, 70, 74, 80, 92,
101, 105~108, 141, 144 | り 緑釉陶器 | 65 |
| し 四面廂 | 101, 144 | | |
| せ 石鐘 | 17 | | |
| 石楯 | 17, 26, 73 | | |
| 石眼 | 3, 5, 12, 24, 26, 73, 89 | | |
| そ 総柱 | 37~40, 96, 111, 112,
115, 127, 143 | | |
| 素弁八葉蓮華文軒丸瓦 | 54 | | |
| た 竪穴住居 | 2, 4~6, 8, 10, 23, 27,
29, 69, 71, 74, 100 | | |
| ち 柱状片刃石斧 | 27 | | |

〈地名・遺跡名など〉

- | | | | |
|--------|-------------------------|-------|------------|
| う 上町台地 | 3, 81, 82, 85, 139, 144 | は 狭間川 | 3, 82 |
| え 榎津廃寺 | 4, 78, 84, 130 | や 大和川 | 4, 82, 137 |

**Archaeological Reports
of
Yamanouchi Site in Osaka, Japan**

Volume II

**A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in 1988 and 1990**

Appendix: Orion Site

October 1999

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SA : Palisade or Fence

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Posthole

CONTENTS

Excavation reports of the Yamanouchi Site

Foreword

Explanatory notes

Acknowledgement

Chapter I Background and progress of research	1
S.1 Background of research	1
S.2 Progress of research	2
Chapter II Outline and current investigation of the Yamanouchi site	3
S.1 Outline of the Yamanouchi site	3
S.2 Current investigation prior to development of Municipal apartmenthouse	5
Chapter III Investigation results	7
S.1 Stratigraphy	7
S.2 Features and remains of the Yayoi period	8
1) Pit dwellings	8
2) Square shaped moated tombs	10
3) Pits	18
4) Other remains	24
5) Conclusion	27
S.3 Features and remains of the Kofun period and later	29
1) Pit dwellings	29
2) Hottatebashira structures	32
3) Palisade	49
4) Ditches	52
5) Pits	58
6) Other remains	65
7) Structures of the Kofun to Nara periods	66
i) Evolution of the buildings	66
ii) Components of the buildings	69
8) Conclusion	70
Chapter IV Report Conclusion	71
S.1 Settlement of the Yayoi period	71
S.2 Settlement of the the Kofun to Nara periods	74
Appendix	
Excavation reports of the Oriono Site	
Chapter I Background and progress of research	79

Chapter II Outline of the site	81
S.1 Site location and historical setting	81
S.2 Current investigation	83
Chapter III Investigation results	85
S.1 Stratigraphy	85
S.2 Features and remains of the Palaeolithic to Yayoi periods	86
1) Palaeolithic period	86
2) Jomon period	89
3) Yayoi period	89
S.3 Features and remains of the Kofun to Nara periods	91
1) Kofun period	91
2) Final phase of the Late Kofun to Nara periods	92
i) Features and remains of the phase I	92
ii) Features and remains of the phase II	101
iii) Features and remains of the phase III	108
iv) Other features	125
S.4 Features and remains of the Heian period	128
S.5 Clay net weights and octopus traps	131
1) Clay net weights	132
2) Octopus traps	137
3) Conclusion	137
S.6 Dendrochronological study of well boards	138
1) Sampling and methodology	138
2) Results	138
Chapter IV Consideration of the Oriono site	139
S.1 Features and remains of the Palaeolithic to Kofun periods	139
1) Palaeolithic to Yayoi periods	139
2) Kofun period	140
S.2 Changes and characteristics of the Kofun to Nara periods structures	141
1) Changes of the structures	141
2) Characteristics of SB02	144
Bibliography	145
Postscript and Index	
Contents and Summary	
Reference Card	

SUMMARY

This volume details the investigations at the Yamanouchi and Oriono sites. The main results are as follows.

Yamanouchi site

The Yamanouchi site is located in Sumiyoshi Ward of Osaka City, on the southern base of the Uemachi plateau. Investigation of the site has revealed remains dating from the Palaeolithic to the Edo period. The most significant of these are the remains of an Early to Middle Yayoi period square-shaped, moated tombs and village, and a Kofun to Nara period village.

Investigation of Yayoi period uncovered the remains of settlement dating to final phase of Early to latter half of the Middle Yayoi periods. Excavation also detected square-shaped, moated tombs of the latter half of the Middle Yayoi period. In addition to these, the remains of three pit dwellings and a large number of pits were found.

Kofun period features and remains include early 6th century pit dwellings. The remains bear evidence of the structures being rebuilt in the past. In addition to this, a large number of pits were uncovered. Bellows, tuyeres, slag and salt making pottery vessels and other goods related to black-smithing were recovered from the pits.

A cluster of at least 40 hottatebashira structures and associated pits and ditches were found dating to the Kofun to Nara periods. Until the mid-7th century the buildings appear to have been laid out following natural topography, however in the late-7th and 8th centuries, they were more regularly arranged. The change was gradual. One of the structures of this cluster was constructed on a greater scale than the others buildings. With the evidence of a barrier and ditch enclosing this structure, we have assumed that these structures had been the main, central building of this village.

Oriono Site

The Oriono site is located on the southern end of the Uemachi plateau, in Sumiyoshi Ward, Osaka. In 1930's, a surface investigation of the area revealed evidence of material from the Yayoi to Heian periods. On several occasions after this, additional, small-scale investigations were conducted in this area.

The report in this volume details the first large-scale investigation of this site. As a result of the investigation, the original range of material deposition has been expanded to include all periods from the Palaeolithic to the Heian period. Only a small number of features and remains were found dating to between the Palaeolithic and the Yayoi period however. From the Kofun period onwards, many features were found.

In this volume, we detail the investigations on material from the end of the Kofun to the Nara period. For the purpose of this report, this period of time has been divided into three phases. Phase 1 covers the Late Kofun to Late Asuka period, Phase 2 the end of the Asuka to the Early Nara period and Phase 3 the Mid-Nara to end of Nara period.

Features of Phases 1 and 3 include the remains of between ten and twenty structures, pits and ditches. Accompanying the features were a large amount of fishing equipment, including clay net weights and octopus traps. The weights are heavy and large in scale. This kind of weights were used

in seine fishing nets and usually this method require a large number of people, and so we assume that this village relied heavily on sea products.

Phase 2 remains include a large-scale hottatebashira structure featuring pillar holes of a size usually associated with palace structures. In addition, this structure appears to have had no other structures near by and may also have been separated from the rest of the village by a wall. These features have been interpreted as a public building, established in this area for the development and maintenance of a port facility, which may be found to the west of the site. This material also will help to clarify the development of ancient harbour systems.

報告書抄録

ふりがな	やまのうちいせきはつくつちょうさほうこく2							
書名	山之内遺跡発掘調査報告Ⅱ							
副書名	市営住宅建設工事に伴う発掘調査報告書その2							
編著者名	清水和明・平田洋司・田中清美・宮本康治・Robert Condon・光谷拓実							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-6943-6833							
発行年月日	西暦 1999年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やまのうちいせき 山之内遺跡	おおさかし、やまのうち 大阪市住吉区山之 内4丁目	27120	—	34°35'18"	135°30'30"	19881226-19890512	5,200㎡	市営山之内住宅 建設え2件
とどろきのいせき 遠里小野遺跡	とどろきの 同遠里小野2丁目	27120	—	34°53'33"	135°29'57"	19880806-19900221	12,846㎡	市営遠里小野住 宅建設え2件
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
山之内遺跡	集落	縄文時代				石礫		
		弥生時代		建物・土塋・墓		弥生土器・漁具・石器類		
		古墳～奈良時代		建物・橋・溝・土塋		土師器・須恵器・漁具・瓦・羽口・鉾澤		
		平安時代		溝・土塋		黒色土器・瓦器		
遠里小野遺跡	集落	旧石器時代				ナイフ形石器・石核ほか		
		縄文時代				石礫		
		弥生時代				弥生土器・石礫		
		古墳～奈良時代		建物・橋・井戸・溝・土塋		土師器・須恵器・漁具・瓦		
		平安時代		建物・井戸・溝・土塋		黒色土器・瓦器		

原 色 図 版

遠里小野遺跡土鍾・敲蛸器



山之内遺跡方形溝・竪穴住居



圖 版



北より調査地を望む



東より調査地を望む



I区全景
(西から)



II区全景
(南から)



III区全景
(南東から)

Ⅳ区方形周溝墓1・2
(南から)



Ⅲ区方形周溝墓3・4
(南から)



Ⅳ区方形周溝墓2
埋葬施設2
(南から)





IV区方形周溝墓2 遺物出土状況(1) (北から)



IV区方形周溝墓2 遺物出土状況(2) (東から)

Ⅳ区方形周溝墓2
遺物出土状況(3)
(西から)



Ⅳ区方形周溝墓2
遺物出土状況(4)
(北から)



Ⅲ区方形周溝墓3
遺物出土状況
(北から)





I 区SK103
(南から)



I 区SK104
(西から)



II 区SK111
(南から)

Ⅳ区SB201・202
（西から）

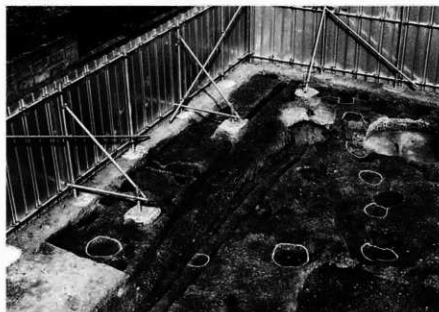


Ⅳ区SB201竈周辺
（西から）



Ⅳ区SB201竈支脚に
転用された土器
（西から）

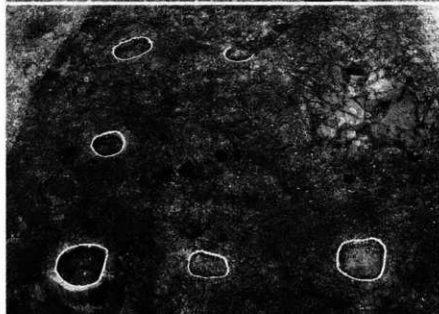




I 区SB209
(西から)



II 区SB210
(南から)



II 区SB213
(南から)

Ⅱ区SB214
(南西から)



Ⅱ区SB215
(南から)



Ⅱ区SB218
(南東から)





II 区SB222
(南から)



II 区SB223
(南から)



II 区SB224
(南から)

Ⅲ区SB230
(北から)



Ⅲ区SB232
(北から)



Ⅲ区SB233～235
(北から)





Ⅱ区SA202と周辺の遺構
(南から)



Ⅱ区SA206(西から)



Ⅱ区SK214(南から)



Ⅱ区SK216(南から)



3



5



6



4



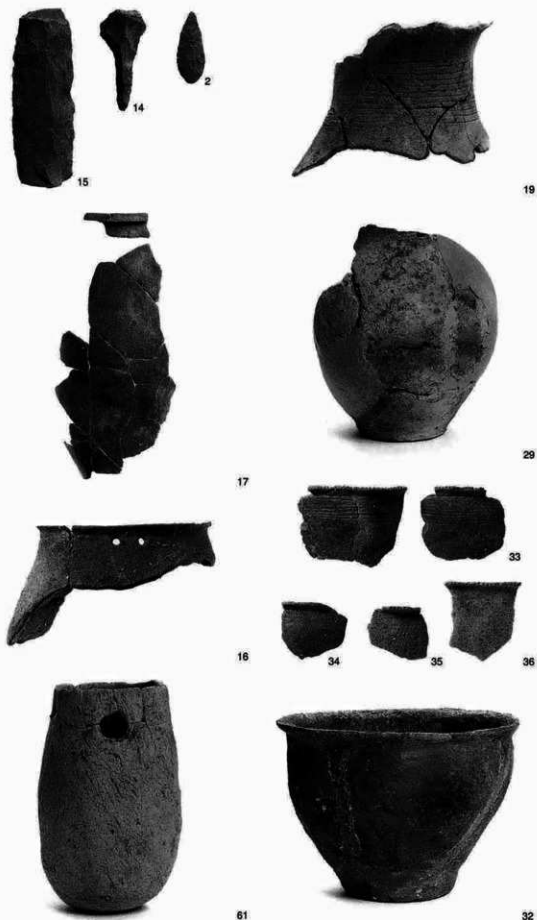
7



11



12



方形周溝墓1(2)、方形周溝墓2(14・15)、方形周溝墓3(16・17)、SK101(19)、SK103(29・32~36)、SK112(61)



90



92



91



94



95



96



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



89



89



93



93

石鏃(73~87)、石槍(89)、環状石斧(90)、太型蛤刃石斧(91・92)、柱状片刃石斧(93)、石庖丁(94~96)



100



101



104



98



144



145



146



147



110



113



115



111



126



116



121



127



123



122



133



130



137



132



140



129



148

SB201(98・100・101・104), SB219(110・113・115), SB221(111・126), SB223(129), SB224
(116・121・127), SB225(122・123), SB230(130・132・133・137・140), SA202(144~147),
SA203(148)



217



216



223



222



230



237



229



238



234



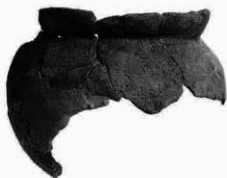
239



241



193



220



202



248



251



252



250



253



254



204



243



203



244



209

SK209(193・202)、SK213(204)、SK214(220)、SK215(209)、SK216(241・243・244・248・250~254)、SK217(203)



188



189



183



159



261



256



265



257



259



264

調査地から
大阪湾を望む



I区遺構検出状況
(西から)



III区完掘状況
(東から)

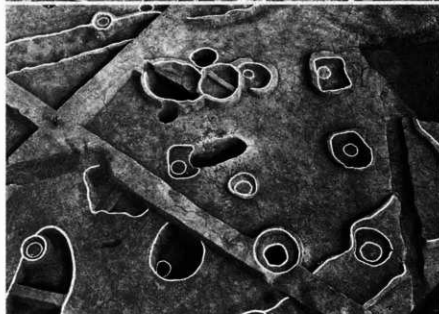




IV区北部完掘状況
(西から)



IV区南部完掘状況
(北から)



I区SB10完掘状況
(北から)

I区南東部完掘状況
(西から)



I区中央部溝群完掘
状況(西から)



I区SK05土器出土
状況(北東から)





I区SB02検出状況
(南から)

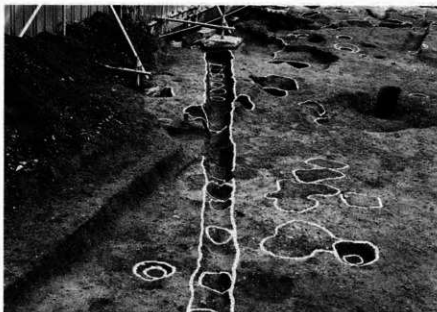


SB02柱穴断面
(南から)



I区SB01完掘状況
(東から)

I区SA03完掘状況
(東から)



III区SP07とその周辺
(東から)



I区SD05土器出土
状況(南から)





I区SB20周辺検出
状況(西から)



Ⅳ区SB26・27周辺
完掘状況(北から)



Ⅲ区SE02上部断面
(北から)

SE02水溜め・籠
検出状況(北から)



SE02基底の板の結合
状況(北から)



SE02基底の側板を巻く
縄出土状況(北から)

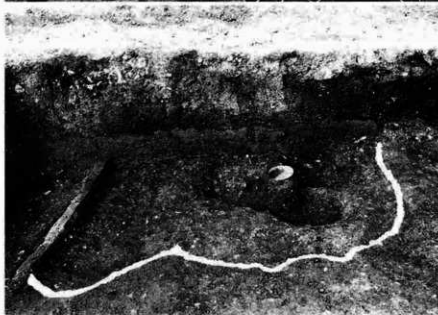




SE02龍取上げ状況
(北から)



Ⅳ区SB22・23・SD12
完掘状況(北から)



Ⅰ区SK09完掘状況
(北から)

IV区SB28完掘状況
（南から）

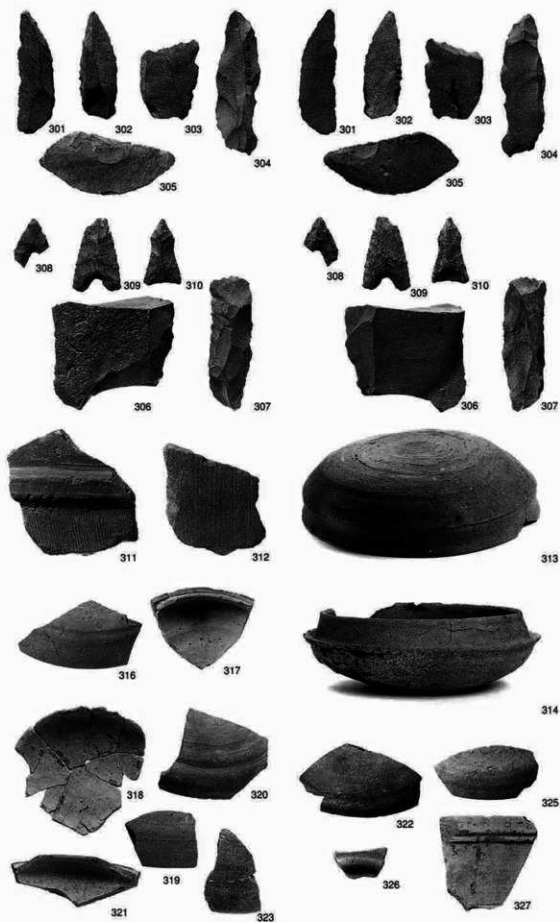


I区SE01断面
（南東から）

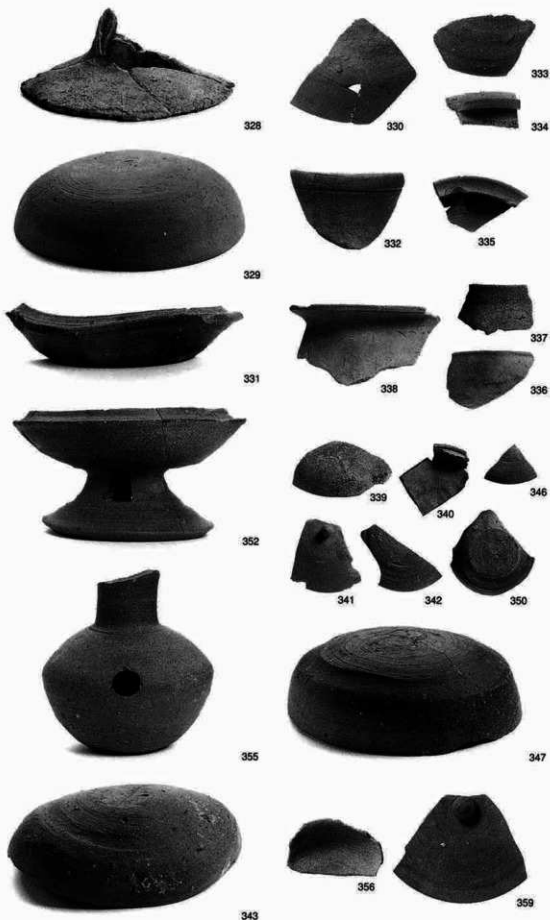


II区SD23完掘状況
（北西から）





ナイフ形石器(301～303)、スクレイパー(305)、細部調整のある剥片(304)、石核(306・307)、石鏃(308～310)、埴輪(311・312)、SK15(313・314)、包含層(古墳時代：316・317)、SB05(322・323)、SB07(325・327)、SB09(319～321・326)、SB10(318)



SD03(333)、SD04(328・331)、SD06(329・330・332・334・335)、SK01(341)、SK05(339・343・347・352)、SK06(340)、SK08(355)、SK10(338)、SK11(342・350)、SK12(336・337)、SK17(346)、SP06(356)、SP08(359)



357



361



358



362



364



363



366



365



367



368



369



373



371



375



379



372



374



376



377



378

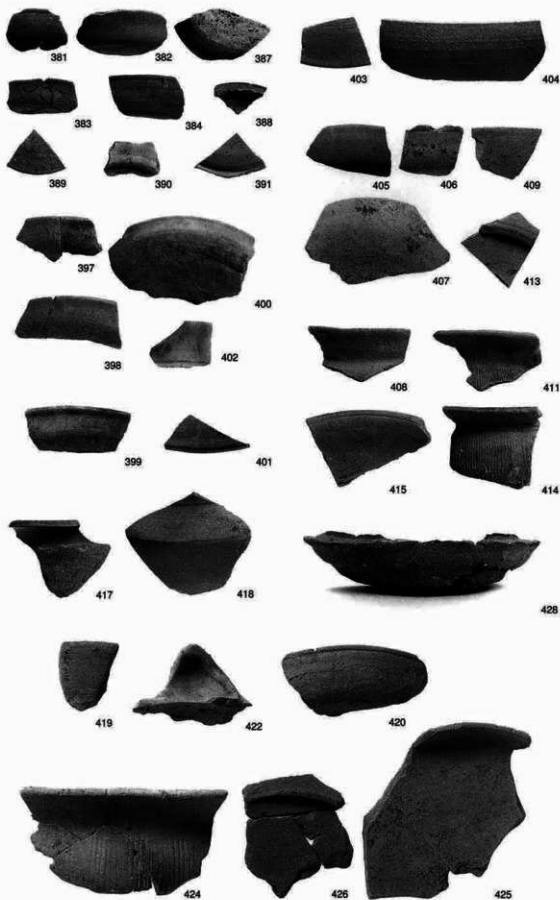


385

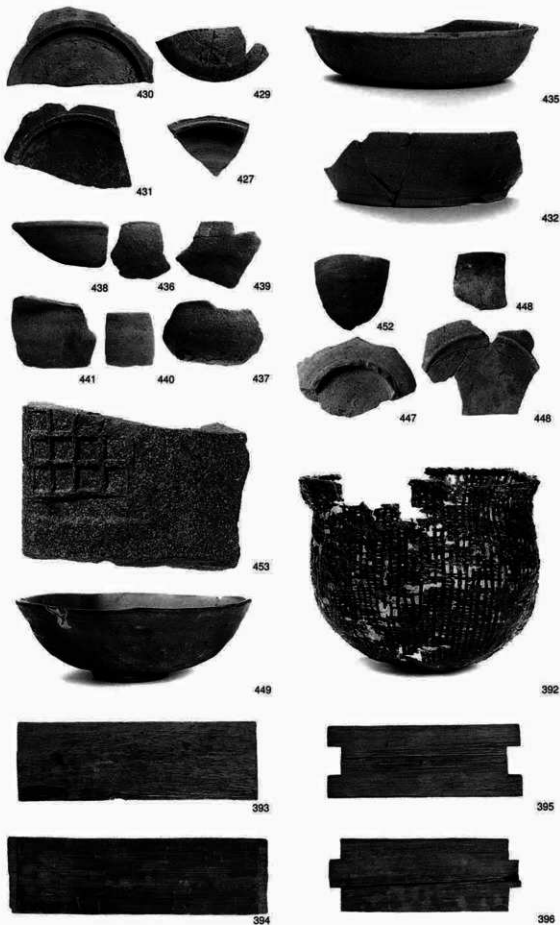


386

SP04(358・361)、SP08(357)、包含層(I期: 362~368)、SB01(369・371~374)、SA03(375)、SD05(376・378・379)、包含層(II期: 377)、SB27(385・386)



SB04(388)、SB12(390)、SB16(382)、SB20(381・384・391)、SB27(383・387・389)、SE02(397
 ~409・411・413~415・417・418)、SD11(426)、SD12(419・422・428)、SD20(420・424・425)



SD11(431)、SD12(427)、SD17(429)、SD19(430)、SD20(432)、SK04(440)、SK07(439)、SK09(435)、SK13(437)、SK18(436・438・441)、SE01(449・452)、SD02(447)、SD23(453)、SP09(448)、SE02(392~396)

大阪市住吉区 山之内遺跡発掘調査報告Ⅱ

付篇 遠里小野遺跡

市営住宅建設工事に伴う発掘調査報告書 その2

ISBN 4-900687-41-3

1999年10月31日 発行©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2-6-8

**Archaeological Reports
of
Yamanouchi Site in Osaka, Japan**

Volume II

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in 1988 and 1990

Appendix: Oriono Site

October 1999

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Reports
of
Yamanouchi Site in Osaka, Japan**

Volume II

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in 1988 and 1990

Appendix: Oriono Site

October 1999

Osaka City Cultural Properties Association